

# Oracle® Application Server 10g

リリース・ノート

10g (9.0.4) for AIX Based Systems

2007 年 5 月

部品番号 : B13901-08

---

Oracle Application Server 10g リリース・ノート, 10g (9.0.4) for AIX Based Systems

部品番号: B13901-08

原本名: Oracle Application Server 10g Release Notes, 10g (9.0.4) for AIX Based Systems

原本部品番号: B13666-11

Copyright © 2003, 2007, Oracle Corporation. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software-Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムにかかる目的で使用する場合、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、および Siebel は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任となります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

---

# 目次

はじめに .....	xix
マニュアルでの記載内容について .....	xx
最新情報の入手について .....	xx
対象読者 .....	xx
このマニュアルの構成 .....	xxi
関連文書 .....	xxii
表記規則 .....	xxiii
<b>1 概要</b>	
リリースに関する最新の情報 .....	1-2
このドキュメントの目的 .....	1-2
オペレーティング・システムの要件 .....	1-2
動作要件 .....	1-2
ライセンス情報 .....	1-2
『Best Practices』 .....	1-2
<b>第 I 部</b>	
<b>2 全体</b>	
本リリースでサポートされない機能 .....	2-2
Oracle Content Management SDK リリース・ノート .....	2-2
<b>3 日本語環境での使用上の注意</b>	
既知の障害および注意事項 .....	3-2
一般的な問題 .....	3-2
Oracle Wallet Manager (OWM) 付属の VeriSign のルート証明書について .....	3-2
Oracle Application Server 10g (9.0.4) Admin and Development Client インストールの表示上の問題 .....	3-3
DataDirect JDBC ドライバの使用について .....	3-3
日本語環境で printlog が使用できない (Bug 3286252) .....	3-3
コンポーネントに関する問題 .....	3-3
Oracle HTTP Server .....	3-3
OracleAS Forms Services .....	3-3
OracleAS Toplink .....	3-4
OracleAS Discoverer .....	3-5
Oracle Reports .....	3-5
OracleAS Personalization .....	3-5

Oracle Application Server ProcessConnect .....	3-5
Oracle Application Server Single Sign-On .....	3-6
<b>CD Pack に同梱されるパッチの適用について</b> .....	3-6
Oracle Application Server Patch Set Release の適用に関して .....	3-6
Application Server のクローニング機能について .....	3-6
OracleAS Single Sign-On のアップグレードのためのパッチ .....	3-6
<b>ドキュメントの修正および補足事項</b> .....	3-7
ExcelVersion 作業環境に記載される不要な設定値 .....	3-7
Metadata Repository のインストールについて .....	3-7

## 第 II 部 Oracle Application Server に関する一般的な問題

### 4 インストール、移行およびアップグレードに関する問題

<b>インストール開始前の問題</b> .....	4-2
ホスト名の制限 .....	4-2
ドメイン名の制限 .....	4-2
RepCA Metadata Repository を使用するための Identity Management インストール時のハングの防止 .....	4-2
OracleAS アクティブ・フェイルオーバー・クラスタの全ノードの起動が必要となる中間層インストール .....	4-2
Oracle Application Server 10g (9.0.4) と Oracle <i>9i</i> Application Server リリース 1 (1.0.2.2.x) の共存に 関する制限 .....	4-3
OC4J インスタンスと J2EE アプリケーションのネーミング .....	4-3
AIX に対する Java Cryptography Extension (JCE) の要件 .....	4-3
スペイン語ロケールで制限されるインストール・タイプ .....	4-3
MRCA の起動前に NLS_LANG 環境変数を設定しない .....	4-4
AIX で使用できるポート範囲の確認 .....	4-4
<b>インストールに関する問題</b> .....	4-4
インスタンス名の制限 .....	4-5
アクティブ・フェイルオーバー・クラスタでの OracleAS Infrastructure 10g インストールによる 不正なホスト名の値 .....	4-5
emracutil スクリプトに含まれている不正なホスト名の値 .....	4-6
リモート・ホストの targets.xml に含まれている不正な ConnectDescriptor 情報 .....	4-6
インストール・ホスト上でのみ有効な DAS .....	4-6
OracleAS Infrastructure 10g の Net リスナーのバージョン .....	4-6
コマンドライン変数値に関する問題 .....	4-7
「OPMN Configuration Assistant - Start Oracle Certificate Authority」での障害 .....	4-7
アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに対する Oracle Net Listener 相互登録の使用禁止 .....	4-7
repca.log ファイルのスタック・トレース .....	4-7
Oracle Internet Directory からの登録エントリの削除 .....	4-7
既存のデータベースでの OracleAS RepCA の使用に関する問題 .....	4-8
ポートが使用できないことによるインストールの障害 .....	4-8
OracleAS Metadata Repository のみのインストールに関する問題 .....	4-8
query_rewrite_integrity を「trusted」または「enforced」に設定する必要がある RepCA の実行 .....	4-8
Oracle Internet Directory インストールでの Middle-Tier に関する制限 .....	4-8
複数インストール時における同じ OracleAS Metadata Repository の使用の回避 .....	4-9
cleanMR スクリプトを使用する前のデータベースからの切断 .....	4-9
IME のあるシステムでのインストール動作のエラー .....	4-9
システム・パラメータのコメント・アウトの回避 .....	4-9
再関連付けを実行する前に必要なデータの移行 .....	4-9

サイレントまたは非対話型インストール時のセキュリティ実践 .....	4-10
OracleAS Metadata Repository の登録不要のケース .....	4-10
「構成オプションの選択」画面の一覧が不適切 .....	4-10
非対話型またはサイレント・インストールでの .bak ファイルの使用 .....	4-10
OracleAS Metadata Repository のネーミング制限 .....	4-11
Oracle Internet Directory リリース 1.0.2.2.x と OracleAS Infrastructure 10g の共存 .....	4-11
OracleAS RepCA により作成される自動拡張がオンの表領域 .....	4-11
データベース登録の前のパッチの適用 .....	4-11
RepCA を使用してカスタム・データベースに Application Server Metadata Repository を インストールした後の追加手動構成 .....	4-11
Oracle Database 10g のインストールでナレッジ・ベースを手動でインストールする必要がある場合 .....	4-12
RAC データベースへのパッチの適用 .....	4-12
OracleAS Repository Creation Assistant によって、「エラー : ORA-30036: UNDO 表領域 'UNDOTBS2' 内で 8 セグメントを拡張できません」が返される .....	4-12
エラー・メッセージのヘルプ情報が表示されない .....	4-12
Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーとしてログインするとレルム値が使用されない .....	4-12
Oracle Application Server のコンポーネントで動作確認されている Intel Xeon プロセッサ .....	4-13
Oracle Certificate Authority Configuration Assistant .....	4-13
<b>削除に関する問題</b> .....	4-13
Identity Management インストール・タイプ削除中のエラー・メッセージ .....	4-13
OracleAS Developer Kits 10g 削除後のエラー・メッセージおよび実行プロセス .....	4-13
<b>インストール完了後の問題</b> .....	4-14
構成終了後のエラー・メッセージ .....	4-14
Oracle Application Server コンポーネントのパスワードのリセット .....	4-14
HTTP SSL ポートの構成には staticport.ini ファイルを使用しない .....	4-14
OracleAS Infrastructure 10g home インスタンスでの手動による OC4J の起動 .....	4-15
XServer および DISPLAY の設定の指定は必要ない .....	4-15
ディスクキャッシュ・サイズの増加 .....	4-15
<b>アップグレードに関する問題</b> .....	4-15
アップグレード実行前の ORACLE_HOME 値の確認 .....	4-16
Identity Management アップグレード実行前のログイン .....	4-16
OracleAS Metadata Repository アップグレードのための Oracle Workflow スキーマの アップグレード手順 .....	4-16
アップグレード後に一部の DAS 依存アプリケーションが実行できなくなる現象について .....	4-17
Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層のアップグレード .....	4-20
Metadata Repository アップグレード時の mrc.pl の実行の検証 .....	4-20
OracleAS Infrastructure 9.0.2 を 9.0.4 にアップグレードするための前提条件 .....	4-21
データ・ソースの構成に関する情報の誤り .....	4-21
既存の Reports サーバー (インプロセス・サーバーを含む) のアップグレード .....	4-21
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	4-22
トラブルシューティングの章での OTN へのリンクの誤り .....	4-22
『Oracle Application Server 10g アップグレード』内の本文の誤り .....	4-22
『Oracle Application Server 10g アップグレード』内の構文の誤り .....	4-23
非対話型レスポンス・ファイルの例のパラメータの誤り .....	4-23
アンインストール手順: 中間層のアンインストール時には Oracle Ultra Search エントリを削除しない .....	4-23
データ・ソースの構成に関する情報の誤り .....	4-23
『Oracle Application Server 10g アップグレード』の項名の誤り .....	4-23
『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の管理者 (ias_admin) リセット・パスワード参照の誤り .....	4-24

## 5 管理およびセキュリティに関する一般的な問題

サポートされるネットワーク機能 .....	5-2
<b>OPMN に関する問題</b> .....	5-2
opmnctl コマンド実行時のエラー・メッセージ .....	5-2
Application Server Control のポート・ページに関する問題 .....	5-2
ドキュメントの誤り .....	5-2
<b>DCM に関する問題</b> .....	5-3
システム・パフォーマンスを改善する DCM 自動アーカイブ機能のチューニング .....	5-3
dcmctl コマンドに関するエラー・メッセージの出力 .....	5-3
ファイル・ベースのリポジトリがファイアウォールの外側で動作しない .....	5-3
<b>管理に関するその他の問題</b> .....	5-3
複数インストールに関するエラー・メッセージ .....	5-4
Oracle Wallet Manager のオンライン・ヘルプが使用できない .....	5-4
STDOUT への Wallet のオープン障害メッセージ .....	5-4
Alter Database Open Resetlogs での ORA-01194 の発生 .....	5-4
chgiphost.sh スクリプトの実行時に無視できる warn.log ファイルの警告 .....	5-4
スタンドアロン J2EE および Web Cache インストール時に無視できる chgiphost.sh スクリプトからの エラー・メッセージ .....	5-5
OracleAS Backup and Recovery Tool 使用時のエラー・メッセージ .....	5-5
データベース・リスナーに対する ORACLE_HOME の設定 .....	5-5
高可用性 Identity Management の構成 .....	5-5
ホスト名の変更前に削除する必要があるファイル・ベースのクラスタおよびファームのインスタンス .....	5-6
アクティブな Application Server Control の再起動と結果検証 .....	5-6
Infrastructure インストールの手順の検証 .....	5-6
中間層インストールの手順の検証 .....	5-7
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	5-7
OPMN ポート (ONS ローカル、リクエストおよびリモート) の変更 .....	5-7
ランタイム JServ ポートの間合せ .....	5-8
Metadata Repository を保存した後の Infrastructure プロセスの再起動 .....	5-9
OracleAS Portal ユーザーのパスワードに関する指針 .....	5-9
インストール後の DAS の構成での手順の欠落 .....	5-9
「Metadata Repository リスナーの停止」手順のスペルの誤り .....	5-9
「Infrastructure サービスの変更」のコマンドの誤り .....	5-9
LDAP ベースのレプリカのステップの誤り .....	5-10

## 6 コア・ドキュメント

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	6-2
使用可能なキャラクタ・セット .....	6-2
httpd.conf ファイルの ORACLE_HOME 値を置換しないこと .....	6-2
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	6-2
『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の画面ダイアログの誤り .....	6-2
Oracle Application Server 10g でサポートされない手順 .....	6-2
JServ サブレット・エンジンのポート変更手順の誤り .....	6-2
Identity Management の Oracle HTTP Server (SSO) ポートの変更 .....	6-3
サポートされないレプリケーション・ベースの Identity Management トポロジ .....	6-3

## 7 Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに関する問題

一般的な問題と回避策 .....	7-2
AFC の全ノードの起動が必要となる中間層インストール .....	7-2
Oracle Ultra Search クローラを使用するためのデータベース・インスタンスの構成 .....	7-2
ロード・バランサのフェイルオーバー .....	7-3
リスナーのリモート登録に起因するロード・バランシングの失敗 .....	7-3
AFC と併用可能になっていない Oracle Enterprise Manager .....	7-3
インストール・ホスト上でのみ有効な DAS .....	7-3
OracleAS Single Sign-On での障害を防止するための JDBC パッチのインストール .....	7-4
手動によるファイルの同期 .....	7-4
同期を妨げるベースライン構成ファイルの破損 .....	7-4
アクティブ・フェイルオーバー・クラスタのバックアップ / リカバリに関する考慮事項 .....	7-5
ローカルでない RAC インスタンスのアーカイブ・ログへのアクセス .....	7-5
RAC インスタンスでのアーカイブ・ログの有効化 .....	7-6
AFC ホストでの OPMN 管理プロセスの起動と停止 .....	7-6

## 第 III 部 J2EE、Web Services およびインターネット・アプリケーションに関する問題

### 8 Oracle Application Server Web Services

ドキュメントの誤り .....	8-2
WSDL Analyzer についての参照部分の無視 .....	8-2
デモのリンクの誤った記載 .....	8-2

### 9 Oracle Application Server Forms Services

一般的な問題と回避策 .....	9-2
事前起動の Forms プロセス使用時における Enterprise Manager に関する既知の問題 .....	9-2
904 BI-Forms で同じマシンの 902 インフラストラクチャを使用すると SSO 動的リソース作成に失敗する問題 .....	9-2
Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題 .....	9-2
ドキュメントの誤り .....	9-3
Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ .....	9-3

### 10 Oracle Application Server Containers for J2EE の問題

構成に関する問題と回避策 .....	10-2
OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当てが適切に行われない .....	10-2
ライブラリの共有と使用 .....	10-2
ライブラリの共有 .....	10-2
無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下 .....	10-2
EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ .....	10-3
起動クラスと停止クラスに関する考慮事項 .....	10-3
OC4J での JDK の使用 .....	10-3
サポートされる JDK バージョン .....	10-3
JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行 .....	10-4
JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行 .....	10-4
IBM JDK 1.4.1 を使用した OC4J インスタンスのパフォーマンス・チューニング .....	10-4
OC4J デモのダウンロード .....	10-5
OC4J 構成ファイルの編集後に表示される警告メッセージ .....	10-5

OC4J オブジェクト名にはシングルバイトの英数字のみ使用可能 .....	10-5
Application Server のパスワードをリセットした後は OC4J の再起動が必要 .....	10-5
Oracle Application Server 10g には JDK 1.3.1.05 以上が必要 .....	10-5
<b>JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート .....</b>	<b>10-6</b>
パッケージに含まれないクラスを起動できない .....	10-6
OC4J 起動時における SAX ドライバの設定 .....	10-7
JSP ojspc の問題 .....	10-7
debug オプションは ojspc の出力に影響を与えない .....	10-7
/WEB-INF/lib や /WEB-INF/classes ディレクトリには .java ファイルを含めない .....	10-7
JESI タグに関するリリース・ノート .....	10-7
JESI タグに対する条件付き処理が不要 .....	10-7
JESI personalize タグで一重引用符を追加 .....	10-8
インクルードされたページ内に fragment タグを配置可能 .....	10-8
複数の control タグまたは template タグが使用可能 .....	10-8
template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない .....	10-8
明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない .....	10-8
タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置 .....	10-8
OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加 .....	10-8
ローカル・クラスを最初に検索 .....	10-9
java.lang.ClassFormatError: (切り捨てられたクラス・ファイル) .....	10-9
タグ・ライブラリ・ディスクリプタのキャッシュおよび非ルート相対の taglib ディレクティブの uri 属性 .....	10-9
<b>サーブレットに関するリリース・ノート .....</b>	<b>10-10</b>
パッケージに含まれないクラスを起動できない .....	10-10
開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能 .....	10-10
<orion-web-app> の一部の属性が使用不可 .....	10-10
<b>EJB に関するリリース・ノート .....</b>	<b>10-11</b>
クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性 .....	10-11
MDB トランザクション・タイムアウト .....	10-11
MDB onMessage() メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放 .....	10-11
orion-ejb-jar.xml ファイル変更時の考慮事項 .....	10-11
EJB の静的ブロック .....	10-12
ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了 .....	10-12
EJB に関するその他のリリース・ノート .....	10-13
<b>OC4J サービスに関するリリース・ノート .....</b>	<b>10-13</b>
JNDI に関するリリース・ノート .....	10-13
JNDI クラスタリング: サポート外のクライアントからのバインド値 .....	10-14
IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させない .....	10-14
Java Object Cache (JOC) に関するリリース・ノート .....	10-14
JOC 構成で javacache.xml を使用 .....	10-14
OC4J データソースに関するリリース・ノート .....	10-14
エミュレートされていないデータソースに必要な Java 対応データベース .....	10-14
<b>OracleAS JAAS Provider に関するリリース・ノート .....</b>	<b>10-14</b>
OracleAS JAAS Provider での 9.0.4 Oracle Internet Directory Server の使用 .....	10-15
<b>ドキュメントの誤り .....</b>	<b>10-15</b>
『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』の誤り .....	10-15
『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の誤り .....	10-16
『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の誤り .....	10-16
『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の誤り .....	10-17

ssoInfo デモのログイン・ユーザー名の変更 .....	10-17
SSL 構成に関する訂正 .....	10-17
LDAP の location 属性を jazn.xml または orion-application.xml に設定しない .....	10-17
「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の構成例の訂正 .....	10-18
「キャッシングの構成 (LDAP ベース・プロバイダのみ)」の構成例の訂正 .....	10-18
Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK1.4 .....	10-18
サード・パーティ製データベースに対して修正された JDBC 接続文字列 .....	10-18

## 11 Oracle HTTP Server

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	11-2
OC4J プラグインのスタンドアロンとコア・インストールでの使用方法 .....	11-2
mod_oc4j と mod_jserv を同時に使用する際の制限 .....	11-2
AIX での Oracle Application Server Proxy Plug-in の使用 .....	11-2
mod_oprocmgr の有効化 .....	11-2
<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	11-3
Oracle HTTP Server (1.0.2.2.x) を Oracle Application Server (9.0.4.x) で使用できない問題 .....	11-3
mod_plsql 構成ファイルの手動による編集 .....	11-3
無効な mod_plsql 構成ファイルが Oracle Enterprise Manager インタフェースに表示されない問題 .....	11-3
FastCGI ソケット・パスの長さエラー .....	11-3
ポート・トンネリングまたは mod_oc4j での SSL を使用可能にした後に Oracle HTTP Server が 起動しない問題 .....	11-4
mod_jserv を使用可能にする場合の ApJServManual 設定情報 .....	11-4
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	11-4
メトリック・ベースのロード・バランシングに関する追加情報 .....	11-4
IIS 用の匿名アクセスの構成 .....	11-4
Sun ONE での OC4J プラグインの構成の手順における誤り .....	11-5
プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成の手順における誤り .....	11-5
Oracle ではサポートされていないモジュールの記述の誤り .....	11-6

## 12 Oracle Application Server TopLink

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	12-2
新しいパッケージ名 .....	12-2
API の変更 .....	12-2
OracleAS TopLink の例 .....	12-3
BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 での EJB QL 解析と JSP 実行 .....	12-3
EJB QL 解析 .....	12-3
JSP 実行 .....	12-3
XML パーサーの依存性 .....	12-3
OC4JXML パーサーの依存性 .....	12-3
Crimson XML パーサーの問題 .....	12-4
UTF-8 エンコードの例外 .....	12-4
SAXParseException のエラー・メッセージ .....	12-4
OracleAS TopLink の使用 : 右から左へ記述する言語を使用する Web クライアント .....	12-4
データベースとの通信が失われた後はプリコンパイルされた SQL 文の実行に失敗する問題 .....	12-4
OracleAS TopLink を IBM WebSphere 5.1 とともに使用 .....	12-4
クラスタリングを使用した検出機能の使用 .....	12-5
OracleAS TopLink Mapping Workbench .....	12-5
Oracle Database の指定 .....	12-5

以前のバージョンからのプロジェクトの移行 .....	12-5
Microsoft Windows と ATI ビデオ・カードでの JDK の問題 .....	12-6
マッピングされたネットワーク・ドライブの Windows XP での使用 .....	12-6
JAWS の使用 .....	12-6
アイコン・サイズ .....	12-6
大規模なクラスパスの参照 .....	12-6
ソース・コードの生成 .....	12-6
複数レベルの結合 .....	12-6
サポートされない JRE .....	12-7
無効な警告メッセージ .....	12-7
配列型属性の不適切な set メソッド .....	12-7
式ビルダーでの取消しによって問合せが変更される問題 .....	12-7
主キー・フィールドへの複数のマッピングが OracleAS TopLink Mapping Workbench での ejb-jar.xml ファイルの生成方法に影響を与える問題 .....	12-7
コード生成されたプロジェクト・クラスでは式のすべての型の文字列値を使用 .....	12-7
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	12-8
OracleAS TopLink の Web クライアントの構成 .....	12-8
OracleAS TopLink Mapping Workbench のチュートリアル .....	12-8

## 第 IV 部 Oracle Application Server Portal の問題

### 13 Oracle Application Server Portal

<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	13-2
「Portal サービスの監視」リンクが動作しない .....	13-2
「Portal の Web Cache 設定」ページが正しく動作しない .....	13-3
oc4j.properties に手で設定する必要がある oracle.http.configfile プロパティ .....	13-3
Federated Portal Adapter を SSL に関連付けるリライト規則の誤り .....	13-3
同一ホスト上の 2 つの Oracle HTTP Server にログインする際の問題 .....	13-4
OracleAS Web Cache の SSL を使用可能にしているサイトでの OracleAS Portal ターゲットの監視 .....	13-4
<b>UI に関する問題と回避策</b> .....	13-5
相対リンクが絶対リンクに変換される .....	13-6
ポートレットをページに追加するときの問題 - プロバイダの登録の失敗 .....	13-6
Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 からアップグレードした場合の余分なパースペクティブ・ページ・ テンプレート .....	13-6
新しいバージョンの作成時にカスタム属性がデフォルト値に戻る .....	13-7
<b>OmniPortlet、シンプル・パラメータ・フォーム、Web クリッピング・ポートレットに関する問題と 回避策</b> .....	13-7
ブラウザ要件 .....	13-7
(OmniPortlet) インストール後に OmniPortlet プロバイダの更新が必要 .....	13-7
(OmniPortlet) 「ニュース・レイアウト・スクロール」タイプが Netscape 4.79 でサポートされていない .....	13-8
(OmniPortlet) 書式化された数値がチャートで表示されない .....	13-8
<b>検索に関する問題と回避策</b> .....	13-8
検索エラー - 「ページ・グループ ID が存在しません。」 (WWS-30641) .....	13-8
最大戻り値が機能しない .....	13-8
Netscape 4.79 を使用した検索結果の保存に関する問題 .....	13-8
結果属性が表示されない .....	13-9
Oracle Text の有効化 / 無効化によるパースペクティブ選択への影響 .....	13-9
検索結果ページに複数の検索ポートレットが配置されている場合の問題 .....	13-9
パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した場合の検索結果への影響 .....	13-9

ページ・グループまたは検索属性が多数選択された場合に発生する問題 .....	13-9
<b>PDK に関する問題と回避策</b> .....	13-9
OracleAS PDK の最新バージョン .....	13-10
WSRP および JSR 168 のサポート .....	13-10
<b>NLS に関する問題と回避策</b> .....	13-10
Oracle Text の検索の制限 (テキスト・ファイルおよび HTML ファイル) .....	13-10
Netscape 7.0 を使用した場合の BiDi の配置に関する問題 .....	13-11
Excel/SYLK 形式のレポートを Microsoft Excel で開く場合の問題 .....	13-11
ダブルバイトの空白キーで検索キーワードを区切れない .....	13-11
BiDi 言語ではテキスト入力が常に右から左に行われる .....	13-11
URL アイテムに関する ISO-8859 以外の Web ページの制限 .....	13-11
ASCII 以外の文字に関する制限 .....	13-11
共有タイプ・オブジェクトが英語以外のページ・グループに表示されない .....	13-12
Oracle Ultra Search ポートレットのヘルプ・ページに関する問題 .....	13-12
OracleAS Portal でサポートされない一部のデータベース・キャラクタ・セット .....	13-12
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	13-12
ドキュメントの誤り .....	13-12
アイテム / ポートレットのプロパティの編集 .....	13-13
保留中のアイテムの編集 .....	13-13
最新バージョンのイメージの参照 .....	13-13
リスト・ビューでの作業 .....	13-13
非公開アイテムのセクションに関する記述の誤り .....	13-14
アイテム・レベルのセキュリティとページ・キャッシュ .....	13-14
ユーザー・プロファイルのヘルプの誤り .....	13-14
カスタム検索結果の表示スタイルの定義 .....	13-14
ページ・ポートレットへの背景色または背景イメージの適用 .....	13-14
エラー・メッセージ WWC-40018 が誤って WWC-40019 と記述されている .....	13-14
JSR 168 ポートレットの登録 .....	13-15
追加文書 .....	13-15
パブリック・ユーザーはアイテム・レベルのセキュリティが有効であるページを検索できない .....	13-15
ログ・レジストリ・レコードのデータが不正確 .....	13-15
新規プロバイダへの権限付与 .....	13-15
カスタム属性に対する一意な名前の使用 .....	13-15
WebDAV クライアントで期限切れアイテムが期限切れ後も表示される .....	13-16
Portal スマート・テキストおよび Portal スマート・リンク・アイテム .....	13-16
検索設定の変更を有効にするためにキャッシュの失効が必要 .....	13-16

## 14 Oracle Ultra Search

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	14-2
Oracle Ultra Search URL ステータス・コード .....	14-2
Oracle Application Server 10g へのアップグレード .....	14-3
Oracle Ultra Search および OracleAS Portal .....	14-3
データ・ソースに制限アクセスを使用する場合のセキュリティに関する考慮事項 .....	14-3
データベース・キャラクタ・セット変更後の Oracle Ultra Search の再構成 .....	14-4
マルチバイト名を使用したデータソースのクロールが失敗する .....	14-4
ISO-2022-JP キャラクタ・セットのクロールが失敗する .....	14-4
すべてのデータベース・キャラクタ・セットが Oracle Ultra Search でサポートされていない .....	14-5
Oracle Ultra Search Configuration Assistant が Oracle Identity Management のアップグレード中に 失敗する問題 .....	14-5

OracleAS RepCA のインストール .....	14-5
不具合 .....	14-6
Oracle Ultra Search のアップグレード・メッセージ .....	14-7
<b>Oracle Ultra Search バックエンドのカスタマ・データベース・インストール .....</b>	<b>14-7</b>
Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用したインストール .....	14-7
wk0setup を使用した手動インストール .....	14-8
データベース・キャラクタ・セット変更後のバックエンドの再構成 .....	14-9
<b>ドキュメントの誤り .....</b>	<b>14-9</b>
一般的な訂正 .....	14-9
セキュア検索 .....	14-9
セキュアな Oracle Ultra Search インストールの構成 .....	14-10
Oracle Application Server による Oracle Ultra Search Middle-Tier のインストール .....	14-10
Oracle HTTP Server および OC4J とともに Oracle Ultra Search Middle-Tier を構成する場合 .....	14-10
ultrashell.properties ファイルの編集 .....	14-11
Oracle Ultra Search のバックエンドをリモート・クローラ・ホストで構成する場合 .....	14-12
Oracle Ultra Search セキュリティ・モデル .....	14-12
リモート・クローラ・プロファイル .....	14-12

## 15 Oracle Application Server Syndication Services

<b>ドキュメントの誤り .....</b>	<b>15-2</b>
ファイルおよび WebDAV コネクタの増分更新に関する注意 .....	15-2

## 第 V 部 Oracle Application Server Wireless の問題

### 16 Oracle Application Server Wireless

<b>一般的な問題と回避策 .....</b>	<b>16-2</b>
マルチチャネル・ゲートウェイの使用 .....	16-2
パフォーマンスの最適化と JSP ファイルの変更 .....	16-3
メッセージのトランスポート .....	16-5
マルチバイトのユーザー名は Jabber ではサポートされない .....	16-5
ドライバ名の変更 .....	16-5
プッシュ SOAP の URL .....	16-5
一部の MXML メッセージでのイメージの破損 .....	16-5
通知の早期配信 .....	16-6
XHTML および XForms .....	16-6
XHTML/XForms の非同期サポート .....	16-6
XForms で「戻る」ボタンを使用する際のエラー .....	16-6
XForms を使用したラジオ・ボタン、チェック・ボックスおよび選択リストの表示 .....	16-6
XForms を使用したフォーム送信 .....	16-6
Customization Portal でのデバイス妥当性チェック用にローカライズされた音声メッセージのエラー .....	16-6
再作成された SSO ユーザーが使用できない機能 .....	16-7
シグネチャ獲得フォーム・コントロールの使用 .....	16-7
Oracle Application Server Wireless と Web Cache の統合 .....	16-7
Oracle Application Server Wireless と Oracle Portal の統合 .....	16-7
Oracle Application Server Wireless の log.xml ファイルは NLS をサポートしない .....	16-7
POST メソッドはすべての言語でサポートされているわけではない .....	16-7
Web クリッピングのヘルプ・ページの制限 .....	16-7
無効なユーザー・アカウント .....	16-7

Web クリッピングの出力が異なる言語で表示される場合がある .....	16-8
日本語文字列によるショート・メッセージの送信を避ける .....	16-8
韓国語文字でメッセージを保存できない .....	16-8
リポジトリ・オブジェクトのアップロードに関するオンライン・ヘルプ .....	16-8
<b>構成に関する問題と回避策 .....</b>	<b>16-8</b>
10g の 64 ビット・データベースで Configuration Assistant が Wireless に対してハングする .....	16-9
Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名にはシングルバイトの英数字のみ使用 .....	16-9
Oracle Internet Directory に基づくアプリケーション・エンティティでの潜在的な競合 .....	16-9
OC4J_Wireless .....	16-10
Oracle Application Server Wireless ホスト名の更新 .....	16-10
Oracle Application Server Workflow の統合 .....	16-10
OracleAS Wireless の不正なサイト URL .....	16-11
Openwave プラグインを使用した新規デバイスまたはシミュレータの検出 .....	16-11
Oracle Application Server Wireless と Oracle Internet Directory の統合 .....	16-11
Studio ツールおよび Customization ツールにログインできない .....	16-11
AIX における Wireless Fax PIM モジュールの追加の構成手順 .....	16-11
AIX における Wireless Instant Messaging PIM モジュールの追加の構成手順 .....	16-12
<b>ドキュメントの誤り .....</b>	<b>16-13</b>
ユーザーのロケールの決定 .....	16-13
UNIX ポートの記述 .....	16-13
Oracle Application Server Wireless Tool でのアカウント番号 .....	16-13
MXML タグの用語集 .....	16-14
音声アプリケーション用の Oracle Application Server Wireless の構成 .....	16-14
オーディオ・パラメータの場所 .....	16-14
Grammar.jsp .....	16-14
ドライバ属性 .....	16-14
Jabber の例 .....	16-15
チューニングに関する追加情報 .....	16-15
更新された URL .....	16-15
Web サービスの使用 .....	16-15
カスタマイズにおいてユーザー・パスワードを変更できない .....	16-15
既存のユーザーを追加してもエラーが発生しない .....	16-16
ユーザー・グループ更新時のエラー・メッセージ .....	16-16
デバイスの検索結果が更新されない .....	16-16
ロケーション検索でロケーション名が返されない .....	16-16

## 第 VI 部 キャッシュに関する問題

### 17 Oracle Application Server Web Cache

<b>一般的な問題と回避策 .....</b>	<b>17-2</b>
セキュリティ .....	17-2
圧縮されたコンテンツが現在はブラウザに表示されない .....	17-2
エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって監視されるページの Cookie および JavaScript .....	17-2
パフォーマンスの低下とメモリー .....	17-2
ディスク領域とサービスの中断 .....	17-3
HTTP 通信の変更の影響 .....	17-3
範囲リクエストに対するレスポンス動作の変更 .....	17-3

<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	17-4
設定の開始方法 .....	17-4
構成に関する一般的な誤り .....	17-5
ポートの競合 .....	17-5
ラージ・オブジェクトのキャッシュ .....	17-6
chghost.sh 実行前にキャッシュをクラスタから削除する .....	17-6
アップグレード時におけるキャッシュ・クラスタ・メンバー間での失効リクエストの送信 .....	17-6
セッションと複数の Cookie のバインド .....	17-7
Internet Explorer ブラウザにおけるキャッシュ操作の成功メッセージに関する再ロードの問題 .....	17-7

## 第 VII 部 ビジネス・インテリジェンスに関する問題

### 18 Oracle Application Server Discoverer

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	18-2
動作要件 .....	18-2
Discoverer Plus 終了時の内部エラー (Bug 3168973) .....	18-2
OracleAS Discoverer Plus とインターネット・ブラウザの組合せによってポップアップを使用できない (Bug 2932434) .....	18-3
Netscape v7.0 ブラウザでの OracleAS Discoverer Plus の起動 (Bug 2916131) .....	18-3
Excel にエクスポートする際の Microsoft Internet Explorer v6.0 の起動エラー (Bug 3114083) .....	18-3
NT での OracleAS Discoverer Plus と Sun Java Plug-In 1.4.1 の実行に関する障害 (Bug 2917867) .....	18-3
Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データの問題 (Bug 3106890) .....	18-3
Netscape 4.7 ブラウザを使用する OracleAS Discoverer Viewer に有効なフォント・サイズ (Bug 3113325) .....	18-4
Netscape 4.x での OracleAS Discoverer の使用に関する制限事項 (Bug 3182331) .....	18-4
Web キャッシュ接続をオープンできないエラー (WWC-40019) (Bug 2960099) .....	18-4
Jinitiator 1.3 でトルコ語ロケールの OracleAS Discoverer Java Plus を起動できない (Bug 3231114) .....	18-5
英語以外のロケールで OracleAS Discoverer からエクスポートしたファイルを Microsoft Excel で再オープンするとハングまたはエラーが発生する (Bug 2878213) .....	18-5
ボタンが表示されない、または英語のテキストで表示される (Bug 3083171) .....	18-5
英語以外の環境において英語テキストが表示される (Bug 3229690) .....	18-5
ワークブック名、フォルダやアイテム名が正しく表示されない (Bug 3509929) .....	18-5
<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	18-6
Plus のトランスポートが HTTPS の場合は常に HTTPS URL の使用が必要 (Bug 3024208) .....	18-6
インストール後の OracleAS Discoverer の構成でのエラー (Bug 3206792) .....	18-6
<b>有用な情報</b> .....	18-6
Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード .....	18-7
End User Layer 表の手動による編集 .....	18-7
スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーによる問合せのリフレッシュ .....	18-7
HWOnline ファイルの利用 .....	18-7
書式設定 : 軸ラベルのフォント・サイズ .....	18-7
スケジューリングと集計 .....	18-8
パフォーマンスを改善する OracleAS Discoverer Portlet Provider の追加構成パラメータ .....	18-8
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドによる Oracle Discoverer レジストリ変数の設定 .....	18-9
Oracle Discoverer のその他のレジストリ変数 .....	18-10
OracleAS Discoverer Viewer のカスタマイズの移行 .....	18-10
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行 (UNIX のみ) .....	18-10

OracleAS Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF) .....	18-11
不要になった XWindow ディスプレイ .....	18-11
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	18-12
Discoverer Portlet Provider を OracleAS Portal に登録するときに必要な追加手順 .....	18-12
configuration.xml ファイルの構成設定の訂正 .....	18-12
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンド実行に関する構文例での '-jar' の欠落 .....	18-12
規定されている EUL のリリース要件 5.1 は正しくは 5.0.2 .....	18-12
ShowExpiredRunsOnExit 作業環境に表示される誤ったデフォルト設定 .....	18-13
ユーザー・レベルの作業環境を 1.0.2.2 から 9.0.4 へアップグレードするためのコマンドの誤り .....	18-13

## 19 Oracle Reports

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	19-2
Oracle Application Server での rwconverter ヘルプの表示 .....	19-2
Express Server 問合せの作成 .....	19-2
Matrix-with-Group レポートの Paper Design ビューへのグラフの挿入 .....	19-2
OracleAS Portal での DelimitedData へのレポートの実行 .....	19-3
Web への簡単なマトリックス・レポートの実行 .....	19-3
JServ が構成されていると OracleAS Reports Services のデモが機能しない .....	19-3
Reports サーバーに対する Graphics6i 使用のための構成 .....	19-3
<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	19-3
DISPLAY とプリンタ依存性の実装廃止 .....	19-4
負荷の高いマシンに対する Reports Server の構成 .....	19-4
Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更 .....	19-5
PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善 .....	19-5
Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定 .....	19-6
OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決 .....	19-6
reports.sh ファイルへの REPORTS_DEFAULT_DISPLAY と LDR_CNTRL の設定 .....	19-7
<b>管理に関する問題と回避策</b> .....	19-7
Reports Server 情報に対する Enterprise Manager のアクセスの認証 .....	19-7
OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行 .....	19-8
<b>NLS 固有の問題と回避策</b> .....	19-9
マルチバイト・エンコーディングの JSP レポートのオープン / 実行 .....	19-9
マルチバイトのオブジェクト型データにアクセスするレポートの実行 .....	19-9
キャラクタ・セット固有の Tk2Motif.rgb ファイルの位置の規定 .....	19-9
ヨーロッパ言語以外による Oracle Enterprise Manager 画面の表示 .....	19-10
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	19-10

## 20 Oracle Application Server Personalization

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	20-2
正確な製品名 .....	20-2
「拡張」ボタンで「404 ファイル未検出」メッセージが表示される .....	20-2
ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しない .....	20-2
パフォーマンスとデータ・サイジング .....	20-2
SSL モード .....	20-3
MTR 参照が異なる場合に発生する RE パッケージの配布での障害 .....	20-3
RE セッションがアクティブな場合に発生する RE パッケージの配布での障害 .....	20-3
<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	20-5

OracleAS Personalization に対する SSL の構成 .....	20-5
ネイティブ・キャラクタ・セットの制限 .....	20-6
未選択の Personalization がコンポーネント構成オプションに表示されない .....	20-6
RAC での作業には SID ではなく SERVICE_NAME の使用が必要 .....	20-7
<b>管理に関する問題と回避策 .....</b>	<b>20-7</b>
JDBC ドライバ .....	20-7
顧客データベース .....	20-7
パスワードの制限 .....	20-7
混在できないデータベース言語とブラウザ言語 .....	20-8
OracleAS Personalization のホーム・ディレクトリ .....	20-8
変更された OP MTR の列 .....	20-8
OracleAS Personalization の高可用性 .....	20-8
<b>ドキュメントの誤り .....</b>	<b>20-8</b>
『Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド』の誤り .....	20-8
『Oracle Application Server Personalization プログラマーズ・ガイド』の誤り .....	20-9
プログラマーズ・ガイドの 9.1.1 ～ 9.1.2 項のコード・サンプルの欠落 .....	20-10
プログラマーズ・ガイドの B.3.2 項のコード・サンプルの欠落 .....	20-10

## 第 VIII 部 E-Business 統合の問題

### 21 Oracle Application Server ProcessConnect

<b>テクノロジー・アダプタに関する問題と回避策 .....</b>	<b>21-2</b>
Oracle Database アダプタ : ポートの値 .....	21-2
Oracle Database アダプタ : 表定義の変更 .....	21-2
Oracle Database アダプタ : ネイティブ・イベント作成時の XML 解析エラー .....	21-2
Oracle Database アダプタ : 同じ表名のスキーマを使用した相互作用の作成 .....	21-3
Web サービス・アダプタと HTTP アダプタ : プロキシのホスト名 .....	21-3
Web サービス・アダプタ : Web Services Description Language .....	21-3
ファイル /FTP アダプタ : Microsoft FTP サーバーがサポートされていない .....	21-4
Advanced Queuing アダプタの交換プロトコル .....	21-4
Advanced Queuing アダプタと 8.1.7 アプリケーション (スポーク) データベース .....	21-4
アダプタおよび変換時の NullPointerException エラー .....	21-4
Oracle HTTP アダプタおよび Internet Information Server .....	21-5
<b>アプリケーション・アダプタに関する問題と回避策 .....</b>	<b>21-5</b>
インストール時のライセンス登録 .....	21-5
インストーラで CLASSPATH が正しく設定されない .....	21-5
<b>Tuxedo 用の統合アダプタに関する問題と回避策 .....</b>	<b>21-7</b>
Oracle Connect の問題 .....	21-7
Oracle Connect へのメタデータのインポート .....	21-7
<b>スキーマ・パスワードに関する問題と回避策 .....</b>	<b>21-7</b>
<b>モデリング・ツールとユーザー・インタフェースに関する問題と回避策 .....</b>	<b>21-7</b>
管理タブのハング .....	21-8
OC4J_ProcessConnect インスタンスの起動、停止および再起動 .....	21-8
セッション・タイムアウト .....	21-8
Netscape のポップアップ・ウィンドウに関する問題 .....	21-9
サポートされる Web ブラウザ .....	21-9
ユーザー・インタフェース操作の速度が遅い .....	21-9
複数ユーザーによる同一オブジェクトの更新 .....	21-9

D3L 使用時の契約の検証に関する問題と回避策 .....	21-10
エクスポート/インポートに関する問題 .....	21-10
構成の作成とデプロイに関する問題と回避策 .....	21-10
デプロイに関する問題と回避策 .....	21-10
Oracle Wallet Manager ユーティリティに関する問題 .....	21-11
別のメタデータ・リポジトリへの ProcessConnect 中間層の再関連付け .....	21-11
サポートされていない XSD 構成メンバーに関する問題と回避策 .....	21-11
ワイルドカード要素を含む complexType .....	21-12
ネストされた置換グループ .....	21-13
匿名メンバーのカーディナリティ .....	21-14
type="xs:anySimpleType" のメンバー .....	21-15
OracleAS ProcessConnect の削除 .....	21-16
その他の既知の問題 .....	21-16
ドキュメントの誤り .....	21-16
Datatype Transformation Map リストからのルールを選択に関する修正 (チュートリアル) .....	21-16
ネイティブ・イベントの削除に関する修正 (チュートリアル) .....	21-17
HTTP アダプタのインストール後のタスクに関する修正 .....	21-17
表 8-4、Advanced Queuing アダプタのネーミング規則に対する修正 .....	21-18
maxOccurs が無制限の匿名選択グループに関する修正 .....	21-18

## 22 Oracle Workflow

構成に関する問題と回避策 .....	22-2
Oracle Application Server および Oracle E-Business Suite の Oracle Workflow .....	22-2
Oracle Workflow コンポーネントのバージョン .....	22-2
Oracle Workflow Manager の構成 .....	22-3
Workflow Configuration Assistant のサイレント・モードでの実行 .....	22-4
LDAP ポート .....	22-6
ecxutils.jar に関するエラー .....	22-6
インストール後に行う Workflow ディレクトリ・サービス実装の変更 .....	22-7
Oracle Database ユーザーから Oracle Internet Directory への変換 .....	22-7
Oracle Internet Directory から Oracle Database ユーザーへの変換 .....	22-8
管理に関する問題と回避策 .....	22-9
Java ベースの Workflow Notification Mailer .....	22-9
ドキュメントの誤り .....	22-10
データベース・アクセス記述子 .....	22-10
DBMS_LDAP パッケージ .....	22-10

## 第 IX 部 管理とセキュリティに関する問題

### 23 Oracle Internet Directory

一般的な問題と回避策 .....	23-2
Oracle Internet Directory データベースのシャットダウン時または接続に失敗した場合の OIDMON の動作 .....	23-2
SSL 対応および非 SSL 対応の両 LDAP ポートでリスニングできる Oracle ディレクトリ・サーバー・インスタンス .....	23-2
不完全なバルク・ロード操作からの回復 .....	23-2
Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでプラグイン機能がサポートされない .....	23-3
ref 属性に値が設定されていると ROOT DSE を変更できない .....	23-3

中断されたバルク・ロード操作のロールバック .....	23-3
<b>構成に関する問題と回避策 .....</b>	<b>23-3</b>
リリース 9.0.2 からのアップグレード後に必要なグループ・コンテナに対する ACL ポリシーの設定 .....	23-3
Oracle Internet Directory が重複した authpassword ベリファイアを生成する .....	23-4
インストール時にルート DSE 直下の DN をデフォルトの識別管理レルム DN として選択しないこと .....	23-4
部分レプリケーションでは依存しているネーミング・コンテキストを変更できない .....	23-4
ファンアウト・レプリカに対する Oracle Application Server Single Sign-On のデプロイ .....	23-4
LDAP ポートを割り当てるために Oracle Internet Directory のインストール後にファイル portlist.ini を参照 .....	23-5
パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する .....	23-5
部分レプリケーションから除外できない必須属性 .....	23-5
完全に指定されていないアクセス権が「アクセス権付与」になる .....	23-5
ファンアウト・インストールで Oracle Internet Directory を起動する手順 .....	23-6
<b>管理に関する問題と回避策 .....</b>	<b>23-6</b>
部分レプリケーションでネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更する ldapmoddn を処理できない .....	23-6
特権ユーザー・アカウントのロック解除 .....	23-6
Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動 .....	23-7
Oracle Internet Directory のサーバーを起動できるのは Oracle Internet Directory ソフトウェアをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみ .....	23-7
ODS データベースのユーザー・パスワードは oidpasswd ツールによってのみ変更可能 .....	23-7
Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用すると Application Server Control でポート・ステータス情報が表示されない .....	23-7
oidctl フラグ引数が原因でレプリケーション・サーバーが起動に失敗することがある .....	23-7
<b>ドキュメントの誤り .....</b>	<b>23-8</b>
init\$ORACLE_SID.ora のパラメータは、データベース起動時に自動的にロードされない .....	23-8
Oracle Internet Directory による 1 つのサーバー・インスタンスでの SSL モードと非 SSL モードのサポート .....	23-8
属性を除外するためのコンテンツ・ルールがこのリリースではサポートされていない .....	23-8
StopOdiServer.sh ツールの構文 .....	23-8
自動ブートストラップ用のレプリカの構成についての追加情報 .....	23-9
表 A-37 「プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ」の誤り .....	23-9
『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の補足事項 .....	23-9
『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』の「Oracle Internet Directory サーバー・プラグインの開発」の章の誤り .....	23-10
レプリケーションの章は『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の付録を参照すること .....	23-10

## 24 Oracle Delegated Administration Services

<b>一般的な問題と回避策 .....</b>	<b>24-2</b>
パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する .....	24-2
リリース 9.0.2 および 9.0.4 で Oracle Delegated Administration Services の構成権限でレルムの値を編集できない .....	24-2
メンバーが指定されていないロールが「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」の「ロールの割り当て」セクションに表示されない .....	24-2
グループ所有者が同じセッションで作成されたグループを編集できない .....	24-2
Oracle Internet Directory を再起動すると DAS セッション・エラーが返される .....	24-3

<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	24-3
個別のホストへの Oracle Delegated Administration Services のデプロイ .....	24-3
デフォルトのレルム管理者に必要な構成権限がない .....	24-3
Oracle Delegated Administration Services を構成して 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードされた Oracle Internet Directory のインストールに対して実行 .....	24-3
<b>管理に関する問題と回避策</b> .....	24-4
Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「Unified Messaging Voicemail PIN」 フィールドのラベルの誤り .....	24-4
特権ユーザー・アカウントのロック解除 .....	24-4
1 つの DNS ドメインで Oracle Delegated Administration Services を、別の DNS ドメインで OracleAS Portal を実行 .....	24-4
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	24-5
オンライン・ヘルプに誤って記載されている識別管理レルムの編集方法 .....	24-5
「ロールの構成」画面のオンライン・ヘルプが表示されない .....	24-5

## 25 Oracle Directory Integration and Provisioning

<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	25-2
Directory Integration and Provisioning Assistant を使用する前にプロパティ・ファイルにエンコードを 指定 .....	25-2
Oracle Directory Manager による Directory Integration プロファイルの作成時に ACI が正しく 設定されない .....	25-2
デフォルトの識別管理レルムの位置をサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインにあわせる .....	25-3
Directory Integration and Provisioning Server のインストール後のステータス .....	25-3
2 つの Oracle Internet Directory プラグイン機能が、Oracle Internet Directory リリース 9.2 から アップグレードした後サポートされない .....	25-3
<b>管理に関する問題と回避策</b> .....	25-4
Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動 .....	25-4
Real Application Clusters および Directory Integration and Provisioning Service の使用 .....	25-4
Windows 同期化レルムに必要なユーザー・スキーマ .....	25-4
選択したオブジェクト・タイプの Active Directory から Oracle Internet Directory への同期化 .....	25-5
Oracle Internet Directory から Active Directory へのパスワードの同期化 .....	25-5
特殊文字を含むグループ名を Microsoft Active Directory と同期化できない .....	25-5

## 26 Oracle Application Server Certificate Authority

<b>構成に関する問題と回避策</b> .....	26-2
OCA Web Administrative 証明書を DC 値で登録しない .....	26-2
Netscape ブラウザを使用する場合のエラー・メッセージ .....	26-2

## 27 Oracle Enterprise Manager

<b>一般的な問題と回避策</b> .....	27-2
同一ホスト上での複数のアプリケーション・サーバーの管理時に複数のブラウザ・ウィンドウを使用 .....	27-3
OC4J メトリックを収集するための Oracle HTTP Server の実行 .....	27-3
仮想ホストに IP とポートの複数の組合せは入力できない .....	27-3
OracleAS Web Cache 管理ポート用プロトコルと統計ポート用プロトコルの一致 .....	27-3
JAZN 構成時にサポートされないパス情報 .....	27-3
OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー .....	27-4
OC4J の「セキュリティ」ページでユーザーを追加した後は OC4J の再起動が必要 .....	27-4

ブラウザ・ウィンドウに表示される「SMISession has been invalidated」エラー .....	27-5
管理プロセスの実行前に定義する必要がある NLS_LANG および LC_ALL (オペレーティング・システムのデフォルト・ロケール) .....	27-5
オペレーティング・システム・ロケールの確認 .....	27-5
NLS_LANG 設定の確認 .....	27-5
新規作成した仮想ホストのアクセス・ログがログ・ビューアで使用できない .....	27-5
ログ・ビューアでの XML ログ・ファイルの表示に関する問題 .....	27-6
Oracle Application Server 9.0.2 または 9.0.3 の削除後に発生する Oracle Application Server 10g Application Server Control に関する問題 .....	27-6
Application Server Control のパフォーマンス・ノート .....	27-6
Internet Explorer および Netscape Navigator 7.0 でのデプロイ・パフォーマンス .....	27-6
大規模な OC4J アプリケーションのデプロイの問題 .....	27-7
エージェントのメモリー・エラー .....	27-7
追加のパフォーマンス・ノート .....	27-7
Linux および HP-UX でのヒープ使用量メトリックの誤り .....	27-7
Oracle HTTP Server リスナー・ポートが重複してリストされる .....	27-8
プロパティを Oracle Application Server クラスタ内の OC4J インスタンスに適用した際の誤解を招く おそれのあるエラー・メッセージ .....	27-8
アプリケーション・サーバー・インスタンスの Metadata Repository を変更した際の不明な Oracle ホーム・エラー .....	27-8
コマンドラインから実行した管理タスクが Application Server Control のページに反映されない .....	27-8
Internet Explorer 5.5 を SSL モードで使用した場合の問題 .....	27-9
OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow コンポーネント用のスキーマ・パスワードの変更は サポートされない .....	27-9
Infrastructure のインストールで Home インスタンスはデフォルトで使用不可 .....	27-9
スタンドアロン・バージョンの OracleAS Forms Services および OracleAS Reports Services の 「Infrastructure」 ページの使用 .....	27-9
HTTP Server の拡張プロパティを Netscape Navigator で編集するときのエラーと制限 .....	27-9
Enterprise Manager を使用して WAR アプリケーションを再デプロイする際の回避策 .....	27-10
「Web Cache 管理」 ページへのリンク時にページが表示されないエラー .....	27-10
Oracle Application Server 10g (9.0.4) を使用するコンピュータでの Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent の削除 .....	27-11
Application Server Control において OracleAS Web Cache を管理および機能監視するための Cookie の有効化 .....	27-11
Macintosh ブラウザを使用してパフォーマンス・チャートを表示する際および Identity Management を 構成する際の問題 .....	27-11
Macintosh ブラウザを使用する際の進捗ページの問題 .....	27-12
ログ・ページからのデータのポスト .....	27-12
<b>ドキュメントの誤り</b> .....	27-13
setupinfo.txt ファイルの位置の誤り .....	27-13
Oracle Application Server 10g でサポートされない手順 .....	27-13

---

---

# はじめに

この章には次の項目があります。

- マニュアルでの記載内容について
- 最新情報の入手について
- 対象読者
- このマニュアルの構成
- 関連文書
- 表記規則

---

## マニュアルでの記載内容について

Oracle Application Server 関連マニュアルは、英語版を翻訳しているため、マニュアル内で参照されている情報には、日本では提供されていないものも含まれます。また、操作手順などを示すスクリーンショットは英語版と日本語版が混在します。

- インターネット URL
- マニュアル名
- ソフトウェア名

## 最新情報の入手について

日本オラクルでは、インターネット開発者向けのあらゆる技術リソースを、24 時間 365 日提供するコミュニティ・サイト OTN-J (Oracle Technology Network Japan) を運営しています。

OTN-J では、最新の技術情報、オンライン・マニュアル、ソフトウェア・コンポーネントなどを、無料で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/>

また、最新のセキュリティ情報については、以下のサイトを参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/security/>

## 対象読者

『Oracle Application Server 10g リリース・ノート』は、Oracle Application Server 10g のすべての利用者向けに書かれています。

**マニュアル内にある外部 Web サイトへのリンクの利用について** このマニュアルには、オラクル社が所有または管理していない他の企業や組織の Web サイトへのリンクが記載されている場合があります。オラクル社では、このような Web サイトの利用に関する評価も代弁も行いません。

---

## このマニュアルの構成

このドキュメントには次の章があります。

### 第 1 章「概要」

#### 第 I 部

### 第 2 章「全体」

### 第 3 章「日本語環境での使用上の注意」

#### 第 II 部「Oracle Application Server に関する一般的な問題」

### 第 4 章「インストール、移行およびアップグレードに関する問題」

### 第 5 章「管理およびセキュリティに関する一般的な問題」

### 第 6 章「コア・ドキュメント」

### 第 7 章「Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに関する問題」

#### 第 III 部「J2EE、Web Services およびインターネット・アプリケーションに関する問題」

### 第 8 章「Oracle Application Server Web Services」

### 第 9 章「Oracle Application Server Forms Services」

### 第 10 章「Oracle Application Server Containers for J2EE の問題」

### 第 11 章「Oracle HTTP Server」

### 第 12 章「Oracle Application Server TopLink」

#### 第 IV 部「Oracle Application Server Portal の問題」

### 第 13 章「Oracle Application Server Portal」

### 第 14 章「Oracle Ultra Search」

### 第 15 章「Oracle Application Server Syndication Services」

#### 第 V 部「Oracle Application Server Wireless の問題」

### 第 16 章「Oracle Application Server Wireless」

#### 第 VI 部「キャッシュに関する問題」

### 第 17 章「Oracle Application Server Web Cache」

---

**第 VII 部「ビジネス・インテリジェンスに関する問題」**

**第 18 章「Oracle Application Server Discoverer」**

**第 19 章「Oracle Reports」**

**第 20 章「Oracle Application Server Personalization」**

**第 VIII 部「E-Business 統合の問題」**

**第 21 章「Oracle Application Server ProcessConnect」**

**第 22 章「Oracle Workflow」**

**第 IX 部「管理とセキュリティに関する問題」**

**第 23 章「Oracle Internet Directory」**

**第 24 章「Oracle Delegated Administration Services」**

**第 25 章「Oracle Directory Integration and Provisioning」**

**第 26 章「Oracle Application Server Certificate Authority」**

**第 27 章「Oracle Enterprise Manager」**

## 関連文書

リリース・ノート、インストール・マニュアル、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連文書は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の Web サイトから無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。次の URL で登録できます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership>

OTN-J のユーザー名とパスワードをすでに取得している場合は、次の OTN-J Web サイトの文書セッションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

# 表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例に使用されている表記規則について説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 本文の表記規則
- コード例の表記規則

## 本文の表記規則

本文中には、特別な用語が一目でわかるように、様々な表記規則が使用されています。次の表に、本文の表記規則と使用例を示します。

表記規則	意味	例
太字	太字は、操作に関連するユーザー・インターフェイス、またはテキスト内で定義されている用語や用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定することにより、 <b>索引構成表</b> が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システムによって指定される要素を示します。この要素には、パラメータ、権限、データ型、 <b>Recovery Manager</b> キーワード、 <b>SQL</b> キーワード、 <b>SQL*Plus</b> またはユーティリティ・コマンド、パッケージとメソッド、システム指定の列名、データベース・オブジェクトおよび構造体、ユーザー名およびロールが含まれます。	この句は、 <b>NUMBER</b> 列にのみ指定可能です。 データベースをバックアップするには、 <b>BACKUP</b> コマンドを使用します。 <b>USER_TABLES</b> データのディクショナリ・ビューの <b>TABLE_NAME</b> 列を問い合わせます。 <b>DBMS_STATS.GENERATE_STATS</b> プロシージャを使用します。
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザー指定要素のサンプルを示します。これらの要素には、コンピュータ名、データベース名、ネット・サービス名および接続識別子、さらにユーザー指定のデータベース・オブジェクトおよび構造体、列名、パッケージおよびクラス、ユーザー名およびロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値が含まれます。 <b>注意</b> ：プログラム要素の中には、大文字と小文字が混在して使用されているものもあります。これらの要素については、表示されているとおりに入力してください。	<b>sqlplus</b> と入力し、 <b>SQL*Plus</b> を開きます。 パスワードは、 <b>orapwd</b> ファイルに指定されています。 データファイルおよび制御ファイルを <b>/disk1/oracle/dbs</b> ディレクトリにバックアップします。 <b>department_id</b> 、 <b>department_name</b> および <b>location_id</b> 列は、 <b>hr.departments</b> 表内に存在します。 <b>QUERY_REWRITE_ENABLED</b> 初期化パラメータを <b>true</b> に設定します。 <b>oe</b> ユーザーで接続します。 <b>JRepUtil</b> クラスによってこれらのメソッドが実装されます。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	<b>parallel_clause</b> を指定できます。 <b>Uold_release.SQL</b> を実行します。 <b>old_release</b> は、アップグレード前にインストール済みのリリースを示します。

## コード例の表記規則

コード例では、SQL、PL/SQL、SQL\*Plus またはその他のコマンドライン構文が示されます。この中では、次の例のように、固定幅フォントが使用され、通常の本文とは区別して表示されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例に使用される表記規則と使用例を示します。

表記規則	意味	例
[ ]	大カッコはオプションの項目を示します。大カッコ自体は入力しないでください。	DECIMAL ( <i>digits</i> [ , <i>precision</i> ])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうちの1つを指定する必要があることを示します。中カッコ自体は入力しないでください。	{ENABLE   DISABLE}
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の選択肢を示します。これらのオプションのうちの1つを入力します。縦線自体は入力しないでください。	{ENABLE   DISABLE} [COMPRESS   NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のどちらかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コード中で、例に直接関係のない部分が省略されていること。</li> <li>■ コードの一部が繰り返し可能であること。</li> </ul>	CREATE TABLE ... AS <i>subquery</i> ;  SELECT <i>col1</i> , <i>col2</i> , ... , <i>coln</i> FROM employees;
.	縦方向の省略記号は、コード中で、例に直接関係のない行が何行か省略されていることを示します。	
その他の表記	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、表示されているとおりに入力してください。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体のテキストは、特定の値を指定する必要があるプレースホルダまたは変数を示します。	CONNECT SYSTEM/ <i>system_password</i> DB_NAME = <i>database_name</i>
大文字	大文字で表記されている部分は、システムによって指定される要素を示します。ユーザーが定義する用語と区別するために、これらの用語は大文字で表記されます。用語が大カッコで囲まれている場合を除いて、表示されている順序およびスペルのおりに入力します。ただし、これらの用語には大文字・小文字の区別がないため、小文字で入力しても構いません。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字で表記されている部分は、ユーザーが指定するプログラム要素を示します。たとえば、表、列またはファイルの名前を示します。 <b>注意:</b> プログラム要素の中には、大文字と小文字が混在して使用されているものもあります。これらの要素については、表示されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees;  sqlplus hr/hr  CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

# 1

---

## 概要

この章では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) のリリース・ノートの概要について説明します。  
この章の内容は次のとおりです。

- リリースに関する最新の情報
- このドキュメントの目的
- オペレーティング・システムの要件
- 動作要件
- ライセンス情報
- 『Best Practices』

## リリースに関する最新の情報

このドキュメントの内容は発行時点での正確な情報です。オラクル社では、ソフトウェアをリリースした後、リリース・ノートを定期的に更新します。リリース・ノートの最新情報および補足情報は、次の Oracle Technology Network Japan (OTN-J) の Web サイトからアクセスできます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

## このドキュメントの目的

このドキュメントには、Oracle Application Server 10g (9.0.4) のリリース情報が記載されています。Oracle Application Server 10g (9.0.4) とそのドキュメントに記載された機能との違いについて説明しています。

このドキュメントは次の各部に分かれています。

- [Oracle Application Server に関する一般的な問題](#)
- [J2EE、Web Services およびインターネット・アプリケーションに関する問題](#)
- [Oracle Application Server Portal の問題](#)
- [Oracle Application Server Wireless の問題](#)
- [キャッシュに関する問題](#)
- [ビジネス・インテリジェンスに関する問題](#)
- [E-Business 統合の問題](#)
- [管理とセキュリティに関する問題](#)

製品をインストールする前、または製品を使用して作業を行う前に、このドキュメントの内容に目を通しておくことをお勧めします。

## オペレーティング・システムの要件

Oracle Application Server のインストールおよび構成を正しく行うためには、インストールを開始する前に必要なハードウェアおよびソフトウェアを揃えておく必要があります。オペレーティング・システム要件の詳細は、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』を参照してください。

## 動作要件

Oracle Application Server 10g (9.0.4) の動作要件に関する最新情報は、次のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

## ライセンス情報

Oracle Application Server 10g (9.0.4) のライセンスに関する情報は、次のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/price/index.html>

## 『Best Practices』

オラクル社では、『Best Practices』というホワイト・ペーパーを提供しています。このドキュメントには、Oracle Application Server の開発およびデブロイに関する一般的な手法、一般的な誤り、製品の使用例などが記載されています。

このホワイト・ペーパーは、OTN-J の Web サイトで入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

# 第 I 部

---



2

---

全体

## 本リリースでサポートされない機能

本リリースでは、以下の機能はサポートされません。よって、以下の機能に関するドキュメント上の関連記述も一切無効です。インストールされる関連ファイルやツールのご利用もサポートされません。

- Oracle Application Server InterConnect
- Oracle Application Server ProcessConnect
- OC4J スタンドアロン
- Oracle Enterprise Manager を使用したパッチのダウンロード
- Oracle Application Server の Oracle ホームのクローニング
- Oracle Application Server Portal における仮想プライベート Portal の設定と管理

## Oracle Content Management SDK リリース・ノート

Oracle Content Management SDK に関する追加情報は『Oracle Content Management SDK リリース・ノート』を参照してください。

# 3

---

## 日本語環境での使用上の注意

## 既知の障害および注意事項

### 一般的な問題

#### Oracle Wallet Manager (OWM) 付属の VeriSign のルート証明書について

Oracle Wallet Manager (OWM) にはあらかじめ VeriSign のルート証明書が「信頼できる証明書」としてはっています。以下の証明書の有効期限は、2004 年 1 月 8 日 8:59:59 (日本時間) までになっております。

信頼できる証明書	有効期限
Class 2 Public Primary Certification Authority	2004 年 1 月 8 日 8:59:59 (日本時間)
Class 3 Public Primary Certification Authority	2004 年 1 月 8 日 8:59:59 (日本時間)

これらの証明書を使用する場合は、有効期限の新しい証明書に置き換える必要があります。

#### [置き換え方法]

以下は、有効期限の新しい上記、ルート証明書を Oracle Wallet へ設定する手順になります。

- 以下の VeriSign サイトにアクセスをしてルート証明書を取得します。  
<http://www.verisign.com/support/roots.html>
- 取得された roots.zip ファイルを展開し、以下の 2 つのファイルを取り出し、Oracle Wallet のあるマシンに配置します。  

```
"VeriSign - Thawte Combined Roots/VeriSign_Roots/Pca2ss_v4.b64"
"VeriSign - Thawte Combined Roots/VeriSign_Roots/Pca3ss_v4.b64"
```
- Oracle Wallet Manager を起動します。
- メニューの「Wallet」->「開く」から使用している Oracle Wallet を開きます。
- 「操作」->「信頼できる証明書のインポート」を実行し、「証明書の貼り付け」か「証明書を含むファイルを選択」のどちらかを選択します。
  - 「証明書の貼り付け」の場合はテキストエディタで 2. で取り出したファイルをそれぞれ開き、カットアンドペーストで画面上に貼り付けます。
  - 「証明書を含むファイルを選択」の場合は 2. で配置したファイルの位置を指定します。
- 2004 年 1 月 8 日 8:59:59 (日本時間) で有効期限の切れる「Class 2 Public Primary Certification Authority」と「Class 3 Public Primary Certification Authority」を「操作」->「信頼できる証明書を削除」を選択して削除します。
- 追加された 2 つの証明書を確認し、以下のように有効期限が設定されていれば設定完了です。この Oracle Wallet をメニューの「Wallet」->「保存」により元の位置で保存してください。
  - Class 3 Public Primary Certification Authority  
有効期限：  
2028 年 8 月 2 日 8:59:59 (日本時間)  
証明書 MD5 メッセージ・ダイジェスト：  
10:FC:63:5D:F6:26:3E:0D:F3:25:BE:5F:79:CD:67:67  
証明書 SHA1 メッセージ・ダイジェスト：  
74:2C:31:92:E6:07:E4:24:EB:45:49:54:2B:E1:BB:C5:3E:61:74:E2

- Class 2 Public Primary Certification Authority

有効期限 :

2028 年 8 月 2 日 8:59:59 (日本時間)

証明書 MD5 メッセージ・ダイジェスト :

B3:9C:25:B1:C3:2E:32:53:80:15:30:9D:4D:02:77:3E

証明書 SHA1 メッセージ・ダイジェスト :

67:82:AA:E0:ED:EE:E2:1A:58:39:D3:C0:CD:14:68:0A:4F:60:14:2A

## Oracle Application Server 10g (9.0.4) Admin and Development Client インストールの表示上の問題

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Admin and Development Client をインストールする際に、Oracle Universal Installer の「インストールする製品選択」画面では、「Oracle10g Database Client」という項目が表示されます。これは表示上の誤りであり、正しくは「Oracle Database Client」です。

インストール作業では、Oracle Database Client と読み替えて進めてください。

## DataDirect JDBC ドライバの使用について

DataDirect JDBC ドライバは製品メディアには含まれていません。Oracle Technology Network Japan からダウンロードしてください。

<http://otn.oracle.co.jp/software/index.html>

使用方法については、『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』を参照してください。

## 日本語環境で printlog が使用できない (Bug 3286252)

環境変数に LANG=ja が設定されている状態で printlog コマンドライン・ユーティリティを使用すると、エラー・メッセージが表示されます。

この問題を回避するには、LANG 環境変数を無効にしてください。

## コンポーネントに関する問題

### Oracle HTTP Server

#### メトリックベース・ロードバランシング利用時のエラーメッセージ (Bug 3329306)

mod\_oc4j のロードバランス・アルゴリズムとしてメトリックベースを選択した場合、Oracle HTTP Server のエラーログに以下のようなメッセージが出力されることがありますが、無視してください。機能には影響ありません。

```
[Thu Dec 18 09:14:56 2003] [error] MOD_OC4J_0220: Failed to modify local_proc_weight for oc4j process opmnid=1125318665.
```

### OracleAS Forms Services

#### Forms で正しく処理できないマルチバイト CLOB データ

(3148851 および 1480307) Forms アプリケーションからマルチバイトの CLOB データのレコードをフェッチすると、FRM-40505 エラー・メッセージが表示されます。

### Forms Developer の埋込みフォント

(2972738) Forms アプリケーション上のテキストで、Builder からフォント設定ができないものがあります。

たとえば、次のような場所があります。

- ウィンドウのタイトル
- コンソール行
- 「問合せ取消」ダイアログ
- LOV ウィンドウの検索ボックス
- フィールドのヘルプ・ダイアログ

これらのオブジェクトに使用されるフォントは明確ではなく、場合によっては（たとえばコンソール行やヘルプ・ダイアログ）、値が Forms アプレットにハードコード化されていることもあります。コンソールやフィールド・ヘルプ・ダイアログでハードコード化されるフォントは 12pt Sans Serif です。

### 右マウス・クリック時に起動しない When-Mouse-Click トリガー

(3208500) ユーザーがアイテムを右クリック（Windows の第 2 ボタンまたは UNIX の第 3 ボタンでクリック）すると、when-mouse-click トリガーが起動しません。

### TK90\_UNKNOWN の使用

(3193143) UNIX 環境では、Forms は、`$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/<language>` 以下の `Tk2Motif.rgb` ファイルを参照します（`<language>` は、`NLS_LANG` の言語設定より導出）。このため、`NLS_LANG` が `AMERICAN_AMERICA.JA16EUC` の場合、`$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/Tk2Motif.rgb` が参照されます。しかし、`$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/Tk2Motif.rgb` は `JA16EUC` キャラクタ・セットに対応していないため、エラーが発生します。

`Tk2Motif.rgb` ファイルの位置を指定したい場合は、`TK90_UNKNOWN` 環境変数を使用します。

例えば、上記例の場合、`TK90_UNKNOWN` に `$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/JA` を指定することで正しく動作するようになります。

### マルチバイト環境における構成

マルチバイト環境では、以下の設定を行うことをお勧めします。

- `NLS_LANG` 環境変数の設定  
通常、`default.env` 環境ファイルまたはユーザー個別の環境ファイルで指定します。ユーザー個別の環境ファイルを使用する場合は、その環境ファイル名を `envFile` パラメータで指定する必要があります。
- `defaultcharset` (Forms 構成パラメータ) の設定  
Forms 構成ファイル (`formsweb.cfg`) で指定します。

これらに関する詳細は、『Oracle Application Server Forms Services 利用ガイド』第 4 章 4.3 および 4.10 を参照してください。

## OracleAS Toplink

### クラスパスへの JDBC ドライバの設定について

`<ORACLE_HOME>/toplink/bin/setenv.sh` に `JDBC_CLASSPATH` 環境変数として設定した JDBC ドライバへのパス情報を Mapping Workbench で有効にするためには、Mapping Workbench の起動コマンドのクラスパスに `JDBC_CLASSPATH` を追加する必要があります。Mapping Workbench の起動スクリプトである `<ORACLE_HOME>/toplink/bin/workbench.sh` を開き、Mapping Workbench を起動する Java コマンドのクラスパスエントリに `$JDBC_CLASSPATH` を追加してください。

## OracleAS Discoverer

### ユーザー定義テンプレート・ダイアログの日本語表記に関する問題

ユーザー定義関数作成時にテンプレートを利用される場合、ユーザー定義関数テンプレート・ダイアログにおいて、適切でない日本語表記が、複数存在しています。ユーザー定義関数テンプレート利用時は、ヘルプおよびドキュメント『Oracle Application Server Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照の上ご利用ください。

なお、ダイアログの日本語表記に関する修正は、次回 OracleAS Discoverer パッチ・リリースにおいて、反映される予定です。

### Discoverer Plus/Viewer エクスポートされたファイルの文字エンコーディングに関して

Discoverer Plus/Viewer にて外部ファイル形式（Excel 形式を除く）にてエクスポートした場合、文字エンコーディングとして [UTF-8] が指定されていることに、注意してください。

日本語（マルチバイト・キャラクタ）を適切に表示するには、対応アプリケーション側の文字コードの指定として、[UTF-8] が指定されている必要があります。

### OracleAS Discoverer Plus でエクスポートした ASCII 以外の名前のワークシートが Microsoft Internet Explorer v6.0 で自動的にオープンされない (Bug 3231091)

OracleAS Discoverer Plus でエクスポートした ASCII 以外の名前（日本語名など）のワークシートは、Microsoft Internet Explorer v6.0 で自動的にオープンされません。

エクスポートしたシートを保存してからオープンする必要があります。

## Oracle Reports

### マルチバイト環境における構成

マルチバイト環境で Reports を動作させるためには以下の構成が必要になります。

- PDF 出力のための設定

『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』第 6 章 6.5 の記述に従い、uifont.ali ファイルの設定を変更します。

### Enterprise Manager によるジョブ表示のステータス情報の文字化け

Enterprise Manager から Reports Server の過去のジョブ・リストを参照できますが、ジョブのリストのステータス部分が文字化けして表示されます。同様の情報は、Reports Servlet の showjobs コマンドからも参照できます。

## OracleAS Personalization

### スケジュールの作成およびデプロイが終了しない (Bug 3335423、3346563)

Oracle Application Server Personalization において、Oracle Database 10g (10.1.0) を使用する場合、スケジュールの作成およびデプロイが終了できません。これは、パッチを適用することで回避できます。

インストール方法については、Oracle Application Server 10g (9.0.4) JP Update CD の  
<CD-ROM>/personalization/3335423/README.txt  
<CD-ROM>/personalization/3346563/README.txt  
を参照してください。

## Oracle Application Server ProcessConnect

### アウトバウンドメッセージのエンコーディングについて

アウトバウンドメッセージのエンコーディングは、常に UTF-8 となります。

#### HTTP アダプタでのマルチバイトの扱いについて (Bug 3263237)

マルチバイト文字を扱う相互作用を定義する際は、content-type を「application/xml」または「application/octet」と指定してください。content-type を「text/plain」と指定した場合、データが正常に扱われないことがあります。

#### 電子メールアダプタでのマルチバイトの扱いについて (Bug 3260786)

マルチバイト文字を扱う相互作用を定義する際は、content-type を「xml attachment」または「binary attachment」と指定してください。content-type を「regular」または「text attachment」と指定した場合、データが正常に扱われないことがあります。

#### 電子メールアダプタで添付ファイルがある際の注意点 (Bug 3215714)

添付ファイルがある場合、ヘッダーの文字コード情報が失われます。

### Oracle Application Server Single Sign-On

#### ユーザー名が日本語の場合、Windows ネイティブ認証が使用できない (Bug 3291014)

Active Directory のユーザー名に日本語を使用している場合、Windows ネイティブ認証を使用することはできません。

## CD Pack に同梱されるパッチの適用について

### Oracle Application Server Patch Set Release の適用に関して

Oracle Application Server Patch Set Release はほとんどすべてのコンポーネントに対する修正を含みます。

Patch Set Release の適用に関しては、Oracle Application Server Patch Set Release CD-ROM に含まれるリリース・ノートを参照してください。

### Application Server のクローニング機能について

クローニング機能を使用して、既存の Application Server インスタンスをコピーし、同じ構成を持つクローン・インスタンスを作成することができます。クローニング可能な Application Server のインストールタイプは、「J2EE and Web Cache」のみです。クローニングのためのパッチは Oracle Application Server 10g (9.0.4) JP Update CD の <CD-ROM>/cloning/3734931 にあります。クローニング機能の詳細については、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) にある次のホワイト・ペーパーを参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/products/index.html>

『Oracle Application Server 10g (9.0.4) クローニングホワイト・ペーパー』

クローニング機能についての補足情報は、KROWN#87370 「[OracleAS9.0.4] クローニング・パッチ適用についての補足情報」を参照してください。ブラウザで以下の URL へアクセスして確認することができます。

[http://support.oracle.co.jp/open/owa/external\\_krown2.show\\_text?c\\_document\\_id=87370&c\\_criterion=](http://support.oracle.co.jp/open/owa/external_krown2.show_text?c_document_id=87370&c_criterion=)

クローニング・パッチの適用には OPatch を使用します。OPatch は Oracle Application Server 10g (9.0.4) JP Update CD の <CD-ROM>/opatch にあります。OPatch のインストールについては、<CD-ROM>/opatch/README.txt を参照してください。

### OracleAS Single Sign-On のアップグレードのためのパッチ

『Oracle Application Server 10g リリース 1 (1.0.2.2.x) から 10g (9.0.4) へのアップグレード』で記述されているパッチ (3498669) は JP Update CD の <CD-ROM>/sso/3498669 に含まれています。

アップグレードの詳細は、パッチの中に含まれるドキュメント ssoupg\_1022-904.pdf を参照してください。

## ドキュメントの修正および補足事項

### ExcelVersion 作業環境に記載される不要な設定値

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 8.8 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」では、ExcelVersion の有効な値として、"Excel2000" と説明が記載されていますが、有効な値は、"Excel97" になります。

なお、この設定値は、1 シートにエクスポートされる行数を指定するもので、特定の Excel バージョンに関する情報を含んでいるわけではありません。

- Excel95 では、1 シート 16384 行に制限されています。
- Excel97 では、1 シート 65536 行に制限されています。

### Metadata Repository のインストールについて

『Oracle Application Server Repository Creation Assistant 既存のデータベースへの Oracle Application Server Metadata Repository のインストール』の 1.2.1 項「データベースのリリース」において、サポートされるリリースとして 9.0.1.5 以上とありますが、AIX 上ではサポートされません。



# 第II部

---

## Oracle Application Server に関する一般的な問題

第II部では、Oracle Application Server に関する一般的な問題について説明します。ここでは、複数のコンポーネントに共通する問題などについて説明します。内容は次のとおりです。

- 第4章「インストール、移行およびアップグレードに関する問題」
- 第5章「管理およびセキュリティに関する一般的な問題」
- 第6章「コア・ドキュメント」
- 第7章「Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに関する問題」



---

## インストール、移行およびアップグレードに関する問題

この章では、Oracle Application Server のインストール、移行およびアップグレードに関する問題とその回避策について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- インストール開始前の問題
- インストールに関する問題
- 削除に関する問題
- インストール完了後の問題
- アップグレードに関する問題
- ドキュメントの誤り

## インストール開始前の問題

この項では、インストール開始前の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- ホスト名の制限
- ドメイン名の制限
- RepCA Metadata Repository を使用するための Identity Management インストール時のハングの防止
- OracleAS アクティブ・フェイルオーバー・クラスタの全ノードの起動が必要となる中間層インストール
- Oracle Application Server 10g (9.0.4) と Oracle9i Application Server リリース 1 (1.0.2.2.x) の共存に関する制限
- OC4J インスタンスと J2EE アプリケーションのネーミング
- AIX に対する Java Cryptography Extension (JCE) の要件
- スペイン語ロケールで制限されるインストール・タイプ
- MRCA の起動前に NLS\_LANG 環境変数を設定しない
- AIX で使用できるポート範囲の確認

### ホスト名の制限

ホスト名は 255 文字以下に制限されます。

### ドメイン名の制限

OracleAS Metadata Repository をインストールする際、リポジトリのグローバル・データベース名の入力を求められます。通常の形式は `sid.domainname` です。グローバル・データベース名の `domainname` の部分には - 文字を含めることはできません。

データベース・ドメイン名は、ホスト・ネットワーク・ドメイン名と一致する必要はありません。したがって、ホスト・ネットワーク・ドメイン名には "-" 文字を含めることができます。

### RepCA Metadata Repository を使用するための Identity Management インストール時のハングの防止

Oracle9i リリース 1 (9.0.1.5) データベースで OracleAS RepCA を実行して Metadata Repository を作成した後、Identity Management をインストールして Metadata Repository を使用するように構成するときに、一部の Configuration Assistant がハングすることがあります。この問題は通常、システムの負荷が高いときに Oracle Ultra Search Configuration Assistant と `mod_osso` Configuration Assistant で発生します。

この問題を防ぐには、Metadata Repository のリソース・マネージャを使用禁止にしてから、Identity Management のインストールを開始します。リソース・マネージャを使用禁止にするには、`ORACLE_HOME/admin/SID/pfile` にある `init.ora` ファイルの `resource_manager_plan` エントリをコメントアウトします。

### OracleAS アクティブ・フェイルオーバー・クラスタの全ノードの起動が必要となる中間層インストール

Identity Management に登録されている Metadata Repository に対して OracleAS アクティブ・フェイルオーバー・クラスタを使用する場合は、中間層インスタンスをインストールして Identity Management と AFC Metadata Repository を使用する前に、すべての AFC ノードでデータベースと Net リスナーが実行されていることを確認します。実行されていない場合、データベースが無効またはデータベースが実行されていないことを示すエラーが発生し、中間層インストールが失敗となります。

## Oracle Application Server 10g (9.0.4) と Oracle9i Application Server リリース 1 (1.0.2.2.x) の共存に関する制限

Oracle Application Server 10g (9.0.4) と Oracle9i Application Server リリース 1 (1.0.2.2.x) の次のインスタンスは、同一のコンピュータ上に共存できます。

- 1.0.2.2.x Minimal Edition と 9.0.4 J2EE および Web Cache
- 1.0.2.2.x Minimal Edition と 9.0.4 Portal および Wireless
- 1.0.2.2.x Minimal Edition と 9.0.4 Business Intelligence および Forms
- 1.0.2.2.x Standard Edition と 9.0.4 J2EE および Web Cache
- 1.0.2.2.x Standard Edition と 9.0.4 Portal および Wireless
- 1.0.2.2.x Enterprise Edition と 9.0.4 J2EE および Web Cache
- 1.0.2.2.x Enterprise Edition と 9.0.4 Portal および Wireless

Oracle Application Server 10g (9.0.4) と Oracle9i Application Server リリース 1 (1.0.2.2.x) の次のインスタンスは、Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2.x) の Oracle ホームで Oracle9iAS Discoverer を停止した後、このみ、同じコンピュータ上に共存できます。

- 1.0.2.2.x Standard Edition と 9.0.4 Business Intelligence および Forms
- 1.0.2.2.x Enterprise Edition と 9.0.4 Business Intelligence および Forms
- 1.0.2.2.x Standard Edition と 9.0.4 Forms Service および Reports Service
- 1.0.2.2.x Enterprise Edition と 9.0.4 Forms Service および Reports Service

## OC4J インスタンスと J2EE アプリケーションのネーミング

OC4J インスタンス名と J2EE アプリケーション名に、Oracle Application Server がインストールされているコンピュータのホスト名、Oracle ホームまたは IP アドレスを指定することはできません。クラスタ環境の場合、この制限はクラスタ内のすべての Oracle Application Server インストールのホスト名、Oracle ホーム、IP アドレスに対して適用されます。

たとえば、使用しているコンピュータのホスト名が `foo.company.com` の場合、新しい OC4J インスタンス名または新しい J2EE アプリケーション名には、`foo.company.com` という名前または `foo.company.com` が含まれる名前は指定しないでください。このルールは、コンピュータの Oracle ホーム・ディレクトリ・パスまたは IP アドレスに対しても適用されます。

## AIX に対する Java Cryptography Extension (JCE) の要件

AIX に Oracle Application Server をインストールする場合は、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の 5.14 項の説明に従って Java Cryptography Extension (JCE) をダウンロードし、同じ『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の 5.15 項の説明に従って JCE ファイルの位置を指定する必要があります。最新の JCE サーフティファイ情報については、リリース・ノート今後のバージョンでこの項に記載される予定です。

## スペイン語ロケールで制限されるインストール・タイプ

サーバー・ロケールがスペイン語に設定されている場合、次の Oracle Application Server インストール・タイプが正常にインストールできません。

- J2EE and Web Cache
- Portal and Wireless

これらのインストール・タイプのいずれかをスペイン語ロケールにインストールするように選択した場合、Oracle Universal Installer に障害が発生します。Java Security Configuration Assistant に失敗して、`jaznca.log` に `java.lang.reflect.InvocationTargetException` が挿入されます。

これらのインストール・タイプをスペイン語ロケールにインストールする必要がある場合は、jaznca.log に例外が挿入された後に次の手順を実行してください。

1. `ORACLE_HOME/config/ias.properties` ファイルのバックアップを取ります。
2. `ORACLE_HOME/config/ias.properties` ファイルを編集して、「コンポーネント」フィールドの `Caché de Web` を `WebCache` に変更します。
3. ファイルを保存します。
4. Oracle Universal Installer セッションから、Configuration Assistant を再試行します。

## MRCA の起動前に NLS\_LANG 環境変数を設定しない

Metadata Repository Configuration Assistant (MRCA) の起動前に `NLS_LANG` 環境変数が英語以外のロケールに設定されている場合、Oracle Workflow スキーマのロードで次の PL/SQL エラーが返されま

ORA-01403: データが見つかりません

MRCA の起動前には、`NLS_LANG` を設定しないでください。MRCA の起動前に `NLS_LANG` を設定したい場合は、`american_america.us7ascii` に設定してください。

## AIX で使用できるポート範囲の確認

`/etc/services` ファイルをチェックして、次に指定したポート範囲が使用できるかどうかを確認します。

- Oracle Internet Directory - ポート 3060-3129
- Oracle Internet Directory (SSL) - ポート 3130-3199
- Oracle Enterprise Manager (コンソール) - ポート 1812-1829
- Oracle Enterprise Manager (エージェント) - ポート 1830-1849
- Oracle Enterprise Manager (RMI) - ポート 1850-1869

必要に応じて、`/etc/services` ファイルからエントリーを削除してシステムを再起動します。エントリーを削除するには、パッチ 3167528 に含まれている `perl` スクリプトを使用します。

これらのポートが使用できない場合、インストール時に、関連する Configuration Assistant に障害が発生する可能性があります。

## インストールに関する問題

この項では、インストールに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [インスタンス名の制限](#)
- [アクティブ・フェイルオーバー・クラスタでの OracleAS Infrastructure 10g インストールによる不正なホスト名の値](#)
- [emracutil スクリプトに含まれている不正なホスト名の値](#)
- [リモート・ホストの targets.xml に含まれている不正な ConnectDescriptor 情報](#)
- [インストール・ホスト上でのみ有効な DAS](#)
- [OracleAS Infrastructure 10g の Net リスナーのバージョン](#)
- [コマンドライン変数値に関する問題](#)
- [「OPMN Configuration Assistant - Start Oracle Certificate Authority」での障害](#)
- [アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに対する Oracle Net Listener 相互登録の使用禁止](#)
- [repca.log ファイルのスタック・トレース](#)
- [Oracle Internet Directory からの登録エントリーの削除](#)

- 既存のデータベースでの OracleAS RepCA の使用に関する問題
- ポートが使用できないことによるインストールの障害
- OracleAS Metadata Repository のみのインストールに関する問題
- query\_rewrite\_integrity を「trusted」または「enforced」に設定する必要がある RepCA の実行
- Oracle Internet Directory インストールでの Middle-Tier に関する制限
- 複数インストール時における同じ OracleAS Metadata Repository の使用の回避
- cleanMR スクリプトを使用する前のデータベースからの切断
- IME のあるシステムでのインストール動作のエラー
- システム・パラメータのコメント・アウトの回避
- 再関連付けを実行する前に必要なデータの移行
- サイレントまたは非対話型インストール時のセキュリティ実践
- OracleAS Metadata Repository の登録不要のケース
- 「構成オプションの選択」画面の一覧が不適切
- 非対話型またはサイレント・インストールでの .bak ファイルの使用
- OracleAS Metadata Repository のネーミング制限
- Oracle Internet Directory リリース 1.0.2.2.x と OracleAS Infrastructure 10g の共存
- OracleAS RepCA により作成される自動拡張がオンの表領域
- データベース登録の前のパッチの適用
- RepCA を使用してカスタム・データベースに Application Server Metadata Repository をインストールした後の追加手動構成
- Oracle Database 10g のインストールでナレッジ・ベースを手動でインストールする必要がある場合
- RAC データベースへのパッチの適用
- OracleAS Repository Creation Assistant によって、「エラー : ORA-30036: UNDO 表領域 'UNDOTBS2' 内で 8 セグメントを拡張できません」が返される
- エラー・メッセージのヘルプ情報が表示されない
- Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーとしてログインするとレلم値が使用されない
- Oracle Application Server のコンポーネントで動作確認されている Intel Xeon プロセッサ
- Oracle Certificate Authority Configuration Assistant

## インスタンス名の制限

Oracle Application Server のインスタンス名には、次の文字を使用できません。

#、@、|、&、"、:、? および空白

## アクティブ・フェイルオーバー・クラスタでの OracleAS Infrastructure 10g インストールによる不正なホスト名の値

この問題は、アクティブ・フェイルオーバー・クラスタ (AFC) 環境で OracleAS Infrastructure 10g をインストールする場合にのみ発生します。

AFC のリモート・ノード上の \$ORACLE\_HOME/sysman/config/emd.properties ファイルの EMD\_URL エントリに誤ったホスト名の値が入力されます。この問題を回避するには、ORACLE\_HOME/bin/emracutil コマンドを実行し、クラスタ内のすべてのホストを対象として emd.properties ファイルのホスト名を更新します。コマンドは、インストーラを実行したホストで実行します。

```
prompt> cd $ORACLE_HOME/bin
prompt> emracutil synchronize $ORACLE_HOME/sysman/config/emd.properties
```

このコマンドは、ローカル・ホストの `emd.properties` ファイルをテンプレートとして使用して、ファイル内のクラスタのホスト名を置換し、ファイルをそれぞれのホストにコピーします。クラスタ内のすべてのホストにファイルをコピーした後は、エージェントが最新のファイルを読み取るように、ファイルをリモート・ホスト上のエージェントに再度ロードしてください。

## emracutil スクリプトに含まれている不正なホスト名の値

この問題は、AFC 環境で OracleAS Infrastructure をインストールする場合にのみ発生します。

`$ORACLE_HOME/bin/emracutil` スクリプトには、AFC のリモート・ホストの `HOST_NAME` 変数に対する不正な値が含まれています。

`$ORACLE_HOME/bin/emracutil` スクリプトの `HOST_NAME` 変数を現行のホスト名に更新してください。

## リモート・ホストの targets.xml に含まれている不正な ConnectDescriptor 情報

この問題は、AFC 環境で OracleAS Infrastructure をインストールする場合にのみ発生します。

AFC のリモート・ホスト上の `$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml` には、`$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml` ファイルの `oracle_ldap` ターゲットに対して誤った `ConnectDescriptor` 情報が含まれています。`ConnectDescriptor` の `ADDRESS_LIST` には、リモート・ホストを指し示す `ADDRESSES` が指定されています。

この問題を回避するには、`ConnectDescriptor` が AFC のすべてのホストを参照する必要があります。

AFC のリモート・ホストの `$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml` で、`ADDRESS_LIST` 属性を正しい `HOST` 情報に更新してください。

## インストール・ホスト上でのみ有効な DAS

AFC インフラストラクチャのインストールでは、Oracle Delegated Administration Service (DAS) はインストール・ホスト上でのみ有効になります。

他のホスト上で DAS を有効にするには、追加ホストごとに次の回避策を実行します。

1. 次のエントリを使用して、`ldif (das_enable.ldif)` ファイルを作成します。

```
--- BEGIN LDIF file contents---
dn: cn=Associated Mid-tiers,orclApplicationCommonName=DASApp, cn=DAS,
cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
add: uniquemember
uniquemember: orclApplicationCommonName=InstanceName.node,cn=IAS
Instances, cn=IAS,cn=Products, cn=OracleContext
---END LDIF file contents-----
```

2. 次の `ldapmodify` コマンドを実行します。

```
ldapmodify -p OIDPort -h Load Balancer Name -D cn=orcladmin -w
Instance Password -v -f das_enable.ldif
```

DAS が追加ホスト上に構成されます。

## OracleAS Infrastructure 10g の Net リスナーのバージョン

OracleAS Infrastructure 10g を、Oracle データベース 64 ビット版リリースの Net リスナーを使用するように構成する場合は、リリース 9.0.1.4 以上 (リリース 9.0.1.x のデータベースの場合) または 9.2.0.3 以上 (リリース 9.2.0.x のデータベースの場合) のリスナーが必要です。

## コマンドライン変数値に関する問題

Oracle Universal Installer の起動時にコマンドラインで変数の値を宣言し、その後でインストール・セッションを破棄すると、その変数の値は保持されません。

たとえば、パブリック変数 `s_staticPorts` にファイル名とその位置を指定し、「インストールする製品の選択」画面に戻ってインストールに同じまたは別のインストール・タイプを選択すると、この値は NULL にリセットされます。

Oracle Universal Installer は、別の製品に変更されて変数の値が不正または不適切になることを予想して、すべてのコマンドライン変数を NULL にリセットします。これらの値を保持する場合は、Oracle Universal Installer セッションを取り消し、適切なコマンドライン・パラメータを指定して再度セッションを起動してください。

## 「OPMN Configuration Assistant - Start Oracle Certificate Authority」での障害

Oracle Certificate Authority のインスタンスの稼働中に「OPMN Configuration Assistant - Start Oracle Certificate Authority」を再実行すると、失敗となる可能性があります。

障害を防ぐには、次のコマンドを使用して Oracle Certificate Authority のインスタンスを停止します。

```
ORACLE_HOME/opmnctl/bin/opmnctl stopproc ias-component=OC4J instancename=oca
```

その後、「OPMN Configuration Assistant - start Oracle Certificate Authority」を再実行してください。

## アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに対する Oracle Net Listener 相互登録の使用禁止

AFC のインスタンス間で Oracle Net Listener の相互登録を使用すると、サーバー側のロード・バランシングがオンになります。ただし、これは OracleAS Metadata Repository では無効になり、クラスタ内の Oracle Application Server インスタンス間の新しい接続のロード・バランシングは均一になりません。

一方、クライアント側のロード・バランシングは、AFC インフラストラクチャに予想される通信には十分です。

OracleAS Metadata Repository ではリスナーの相互登録がデフォルトで使用可能になるため、インストールの後にオフに切り替える必要があります。

OracleAS Metadata Repository のアクティブ・フェイルオーバー・インスタンスのリスナー相互登録を使用禁止にするには、次のコマンドを実行します。

1. AFC インストールの一部としてデプロイされるインフラストラクチャ・データベース・インスタンスのいずれかの `sysdba` で `sqlplus` にログインします。
2. 次の SQL コマンドを実行します。

```
SQL> alter system set remote_listener='' scope=spfile;
```
3. すべての Oracle Application Server インスタンスを再起動します。

## repca.log ファイルのスタック・トレース

OracleAS RepCA によるインストールで `runRepca -Register` オプションを使用して、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録すると、`repca.log` ファイルにスタック・トレースが作成されます。

生成されるスタック・トレースは、エラーを示す記録ではないため無視してかまいません。

## Oracle Internet Directory からの登録エントリの削除

OracleAS Metadata Repository の登録に OracleAS RepCA を使用し、その後データベース・リポジトリが削除された場合は、データベース・リポジトリに関連付けられている Oracle Internet Directory から登録エントリを削除する必要があります。

同じ Oracle Internet Directory を使用している同じ名前のデータベース・リポジトリに対してその後 OracleAS RepCA を実行しても失敗します。

Oracle Internet Directory から登録エントリを削除した後、-REGISTER オプションを指定して OracleAS RepCA を再実行してください。

## 既存のデータベースでの OracleAS RepCA の使用に関する問題

既存のデータベース上で OracleAS RepCA を使用している場合は、インストール時に「Oracle Internet Directory への登録」画面が表示されます。次のいずれかに該当する場合は、登録の妥当性チェックでハングすることがあります。

- 「SSL」チェック・ボックスを選択して、登録に非 SSL ポートを指定した場合。
- 「SSL」チェック・ボックスの選択を解除して、登録に SSL ポートを指定した場合。

この問題を回避するには、ビジー・バー・ダイアログが表示されたときに「取消」ボタンを押します。その後、次のいずれかの方法で問題を修正する必要があります。

- 「SSL」チェック・ボックスを選択して、登録に SSL ポートを指定。
- 「SSL」チェック・ボックスの選択を解除して、登録に非 SSL ポートを指定。

## ポートが使用できないことによるインストールの障害

指定された範囲のポートを使用できないコンピュータに Oracle Application Server をインストールすると、構成フェーズでインストールが失敗となります。

Oracle Application Server をインストールする前に、Oracle Application Server の各コンポーネントについて、推奨範囲内のポートを 1 つ以上使用できることを確認します。

詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

## OracleAS Metadata Repository のみのインストールに関する問題

Oracle Internet Directory に登録せずに OracleAS Metadata Repository のみのインストールを実行すると、既存の Oracle Internet Directory に OracleAS Metadata Repository を登録するかを尋ねるインストール画面が表示されます。誤って OracleAS Metadata Repository の登録を選択した場合、登録画面に戻ることができず、登録を省略するオプションに切り替えることができません。現在のインストールを終了し、Oracle Universal Installer を再起動する必要があります。

これを行わずに続行すると、OracleAS Metadata Repository のみのインストールの最後で mod\_osso Configuration Assistant が失敗します。

## query\_rewrite\_integrity を「trusted」または「enforced」に設定する必要がある RepCA の実行

データベース初期化パラメータの query\_rewrite\_integrity が正しく設定されていないと、このパラメータを「trusted」に設定する必要があることを示すエラーが OracleAS RepCA で発生します。ただし、このパラメータが「trusted」または「enforced」のいずれかに設定されていれば、OracleAS RepCA は正しく機能します。

## Oracle Internet Directory インストールでの Middle-Tier に関する制限

Oracle Application Server Middle-Tier のインストールを実行し、SSL 接続のみを介してコンポーネントが Oracle Internet Directory に接続するように指定した場合、後で Middle-Tier のインストールを拡張することはできません。

たとえば、「J2EE and Web Cache」インストール・タイプから「Portal and Wireless」インストール・タイプへの拡張はできません。

## 複数インストール時における同じ OracleAS Metadata Repository の使用の回避

同じ OracleAS Metadata Repository を使用して、「Portal and Wireless」または「Business Intelligence and Forms」のインストール・タイプを同時に複数、つまり 2 つ以上インストールすると、OracleAS Portal ホーム・ページで次のようなエラー・メッセージが表示されます。

```
wwsec_app_priv.process_signon で予期しないエラーが発生 (User-Defined @ Exception) (WWC-41417)
Oracle Internet Directory にアクセス中に例外が発生しました : 49:
資格証明が無効です。
詳細
Operation: dbms_ldap.simple_bind_s
```

インストールは同時には行わず、1 つずつ実行してください。

## cleanMR スクリプトを使用する前のデータベースからの切断

OracleAS RepCA/Utilities CD の repCA/repca/clean/cleanMR スクリプトは、OracleAS Configuration Assistant が失敗した場合に、データベースを元の状態に戻すためのスクリプトです。cleanMR スクリプトは、各種のユーザー・スキーマを削除します。そのため、このスクリプトを実行する前に、すべてのユーザーがデータベースから切断されていることを確認してください。

## IME のあるシステムでのインストール動作のエラー

IME (Input Method Editor) プロセスが稼動している状態で Oracle Application Server をインストールすると、Oracle Universal Installer が正常に起動しなかったり、失敗したりする場合があります (IME は通常、マルチバイトのアジア言語での入力で使用されます)。

この問題が発生した場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターから Bug 3293516 に対するパッチを入手してください。インストール手順は、パッチに付属する readme ファイルを参照してください。

## システム・パラメータのコメント・アウトの回避

Oracle Universal Installer は最小限のオペレーティング・システム要件が満たされているかどうかを調べます。システム・パラメータは要件の一部です。異なる値を使用するようにシステム・パラメータを設定している場合は、現在の値をシステム・パラメータ・ファイルの値と置き換えてください。システム・パラメータ・ファイルは /etc/system にあります。

システム・パラメータ・ファイルでは、システム・パラメータの既存の行をコメント・アウトせず、新しい行を追加してください。Oracle Universal Installer は既存の行をコメント行として認識せずにそのままの値を使用するため、Oracle Universal Installer が最小限のオペレーティング・システム要件を調べるときに、エラーが発生します。

## 再関連付けを実行する前に必要なデータの移行

インストールに次の作業が含まれている場合を考えてみます。

- コンピュータ 1 に OracleAS Metadata Repository をインストールします。
- コンピュータ 2 に Oracle9iAS Infrastructure Identity Management コンポーネントをインストールし、コンピュータ 1 の OracleAS Metadata Repository に関連付けます。
- コンピュータ 3 に Oracle Application Server Middle-Tier をインストールし、コンピュータ 2 の Identity Management インストールとコンピュータ 1 の OracleAS Metadata Repository に関連付けます。
- コンピュータ 4 に OracleAS Metadata Repository を追加インストールします。

このインストール構成に従うことで、Oracle Enterprise Manager を使用して、コンピュータ 2 の Identity Management コンポーネントとコンピュータ 3 の Oracle Application Server Middle-Tier を、コンピュータ 4 の OracleAS Metadata Repository に再関連付けできます。

ただし、Oracle Enterprise Manager で再関連付けを実行する前に、コンピュータ 2 とコンピュータ 3 のデータをコンピュータ 4 に移行する必要があります。

## サイレントまたは非対話型インストール時のセキュリティ実践

サイレントまたは非対話型モードで Oracle Application Server をインストールする際は、Oracle Universal Installer に対してテキスト形式のレスポンス・ファイルを用意する必要があります。レスポンス・ファイルはインストールに必要な入力を提供します。レスポンス・ファイルに必要な入力項目の 1 つにインストール・パスワードがあります。このパスワード情報はクリア・テキストでなければなりません。

レスポンス・ファイルのパスワードに関するセキュリティ上の問題に対応するため、レスポンス・ファイルをインストールに使用するときには次を実践することをお勧めします。

- サイレントまたは非対話型インストールを実行するオペレーティング・システムのユーザーのみがレスポンス・ファイルを読めるように、レスポンス・ファイルのアクセス権を設定します。
- 可能な場合は、サイレントまたは非対話型インストールが完了したら、システムからレスポンス・ファイルを削除します。

OracleAS Metadata Repository インストールをサイレントまたは非対話型モードでインストールする場合は、インストールによって次の 2 つのログ・ファイルが作成されます。

- ORACLE\_HOME/admin/ORACLE\_SID/create/ORACLE\_SID.log
- ORACLE\_HOME/cfgtoollogs/ORACLE\_SID.log

ただし、ORACLE\_SID は ORACLE\_SID の値です。

この 2 つのログ・ファイルにはデータベース・パスワード情報が含まれています。これらの内容を確認したら、可能であればシステムからこれらのファイルを削除してください。

この 2 つのログ・ファイルは、OracleAS Metadata Repository を運用する上で必要なものではありません。

## OracleAS Metadata Repository の登録不要のケース

OracleAS RepCA を使用して作成した OracleAS Metadata Repository を、Oracle Application Server クラスタまたは Central Management のためのみに使用する場合、OracleAS Metadata Repository の登録は必要ありません。

## 「構成オプションの選択」画面の一覧が不適切

OracleAS Metadata Repository のインストール中に表示される「構成オプションの選択」画面には、「High Availability Addressing」を選択できるようになっています。これは適切ではなく、「High Availability Addressing」は OracleAS Metadata Repository インストールからは利用できません。

## 非対話型またはサイレント・インストールでの .bak ファイルの使用

Oracle Application Server の非対話型またはサイレント・インストールでは、Oracle Application Server CD-ROM Disk1 の stage/Response ディレクトリにある .bak ファイルのテンプレートを使用する必要があります。この .bak レスポンス・ファイルのテンプレートは、次のインストール・タイプに使用できません。

- 「Portal and Wireless」 (oracle.iappserver.iapptop.Portals.bak)
- 「Business Intelligence and Forms」 (oracle.iappserver.iapptop.Business.bak)
- OracleAS Infrastructure 10g: 「Identity Management and OracleAS Metadata Repository」 (oracle.iappserver.infrastructure.Infrastructure.bak)
- OracleAS Infrastructure 10g: 「Identity Management」 (oracle.iappserver.infrastructure.Infrastructure\_ID.bak)
- OracleAS Infrastructure 10g: 「OracleAS Metadata Repository」 (oracle.iappserver.infrastructure.Infrastructure\_Meta.bak)
- OracleAS Developer Kits 10g (oracle.iappserver.devcorner.DevKit.bak)

## OracleAS Metadata Repository のネーミング制限

OracleAS Metadata Repository に使用するデータベース名には、大文字の PORT または HOST を名前の一部として使用できません。使用すると、Oracle Application Server Middle-Tier のインストールに失敗し、次のメッセージが表示されます。

Error:\*\*\* Alert: Error validating repository on multiple hosts and ports. A database hostname or port is missing. \*\*\*.

## Oracle Internet Directory リリース 1.0.2.2.x と OracleAS Infrastructure 10g の共存

Oracle Internet Directory リリース 1.0.2.2.x は、同じコンピュータに OracleAS Infrastructure 10g の次のインストールを実行すると、動作しなくなる可能性があります。OracleAS Infrastructure 10g をインストールしているコンピュータで、Oracle 8.1.7 データベースと Oracle Internet Directory リリース 1.0.2.2.x を実行する場合、Oracle 8.1.7 のリスナーと Oracle Application Server リリース 9.0.4 のリスナーは共存できません。OracleAS Infrastructure 10g のインストール時に、Oracle 8.1.7 リスナーを停止するか、または Oracle 8.1.7 のリスナー・ポートを 1521 以外のポートに変更することを指示する Oracle Universal Installer のプロンプトが表示されます。Oracle 8.1.7 のリスナー・ポートを変更した場合は、OracleAS Infrastructure 10g のインストール後に、Oracle Internet Directory リリース 1.0.2.2.x を起動できない場合があります。

この問題を回避するには、OracleAS Infrastructure 10g のインストール時に Oracle 8.1.7 のリスナーを停止してください。

## OracleAS RepCA により作成される自動拡張がオンの表領域

Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) により作成される表領域は自動拡張がオンに設定されます。必要に応じて、表領域のサイズは自動的に拡張されます。

表領域のサイズを自動的に拡張しないようにする場合は、OracleAS RepCA により作成された表領域の自動拡張をオフにできます。

## データベース登録の前のパッチの適用

OracleAS RepCA を使用して SSL モードで Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する場合は、最初にパッチ 3143899 をデータベースに適用する必要があります。データベースのリリースが 9.2.0.4 の場合はこのパッチが必要です。

パッチのインストール手順については、パッチに付属する README を参照してください。

## RepCA を使用してカスタマ・データベースに Application Server Metadata Repository をインストールした後の追加手動構成

Repository Creation Assistant (RepCA) を使用して、OracleAS Portal リポジトリなどの Application Server Metadata Repository をカスタマ・データベースにインストールした場合は、ORASSO\_PS スキーマ用のインフラストラクチャ・データベースに接続できるように、SQL\*Net の設定を手動で構成する必要があります。

この構成を実行しないと、OracleAS Single Sign-On (SSO) 管理ポータルレットの使用時に OracleAS Portal でエラーが表示されます。

エラーの原因は、外部アプリケーション機能用の ORASSO\_PS スキーマに接続するために OracleAS Portal で使用される DB リンクです。DB リンクは、Application Server Metadata Repository の格納先のデータベース・ホームに構成されている SQL\*Net の設定を使用して解決されます（この場合、ポータル・スキーマ (Application Server Metadata Repository の一部) は別のスタンドアロン・データベースにインストールされます)。

回避策として、次の場所にある sqlnet.ora ファイルを手動で更新してください。

```
$ORACLE_HOME/network/admin/
```

これは、Application Server Metadata Repository がインストールされているデータベース・ホームにあります。次のように NAMES.DIRECTORY\_PATH エントリに LDAP を追加します。

```
NAMES.DIRECTORY_PATH= (LDAP, TNSNAMES, ONAMES, HOSTNAME)
```

## Oracle Database 10g のインストールでナレッジ・ベースを手動でインストールする必要がある場合

次の状況では、ナレッジ・ベースを Companion CD から手動でインストールする必要があります。

- 新規 Oracle Database 10g に OracleAS Portal をインストールする前
- Oracle Database 10g で実行されるように既存の OracleAS Portal リポジトリをアップグレードした後ナレッジ・ベースがインストールされていない場合は、Oracle Text の「テーマと要旨を使用可能にする」オプションを選択して OracleAS Portal を検索したときに、次のエラーが表示されます。

Error: The file could be not filtered. (WWS-32024)

ナレッジ・ベースの手動インストールの必要性は、メッセージの原因と処置には記述されていません。

## RAC データベースへのパッチの適用

Oracle 9.0.1.x RAC データベースを使用する場合は、ARU パッチ 5147755 を適用する必要があります。

## OracleAS Repository Creation Assistant によって、「エラー : ORA-30036: UNDO 表領域 'UNDOTBS2' 内で 8 セグメントを拡張できません」が返される

ロー・デバイスを使用する Real Application Clusters リリース 2 (9.2.0.4) に OracleAS Metadata Repository をインストールする際に、次のエラー・メッセージが返されます。

エラー : ORA-30036: UNDO 表領域 'UNDOTBS2' 内で 8 セグメントを拡張できません

この場合、次の手順を実行してください。

1. 次のいずれかのパッチをデータベースに適用します。
  - パッチ 3229141
  - 9.2.0.5 パッチ・セット (パッチ番号 3501955)
2. UNDO 表領域の領域管理が AUTO に設定されていることを確認します。  
これを行うには、次の SQL 文を実行します。  

```
SQL> select tablespace_name, status, segment_space_management from dba_tablespaces;
```
3. OracleAS Repository Creation Assistant を再実行してメタデータ・リポジトリをデータベースにロードします。

## エラー・メッセージのヘルプ情報が表示されない

OracleAS RepCA のインストールの際に、Oracle Managed Files ディレクトリの画面でディスク・グループを選択せずに「次へ」をクリックすると、エラー・メッセージが表示されます。このエラー・メッセージの表示で「ヘルプ」をクリックしても、ヘルプ情報は表示されず、Java エラーが生成されません。

## Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーとしてログインするとレルム値が使用されない

OracleAS RepCA で、複数レルムを含む Oracle Internet Directory にスーパー・ユーザー (cn=orcladmin) としてログインすると、レルム値が使用されません。これは、スーパー・ユーザーがレルムに属さないためです。レルム値が使用されるのは、単純名を使用してログインする場合のみです。

## Oracle Application Server のコンポーネントで動作確認されている Intel Xeon プロセッサ

Intel Xeon プロセッサは、Oracle Application Server で動作確認されています。ただし、インストール時の前提条件チェックが、Xeon プロセッサを使用するコンピュータで失敗します。この前提条件チェックの失敗は無視して、Oracle Application Server のインストールを続行してください。

## Oracle Certificate Authority Configuration Assistant

『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の表 B-1 には、Oracle Certificate Authority (OCA) Configuration Assistant についての説明がありません。

OCA Configuration Assistant は、認証の目的で Oracle Single Sign-On に統合されている、自己署名された認証局を構成します。

OCA Configuration Assistant を使用するには、まず Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository、Repository API、OracleAS Single Sign-On を構成しなければなりません。

OCA Configuration Assistant のログ・ファイルは次の場所にあります。

```
ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstime.stamp.log
```

## 削除に関する問題

この項では、削除に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Identity Management インストール・タイプ削除中のエラー・メッセージ](#)
- [OracleAS Developer Kits 10g 削除後のエラー・メッセージおよび実行プロセス](#)

## Identity Management インストール・タイプ削除中のエラー・メッセージ

OracleAS Infrastructure 10g の Identity Management インストール・タイプを削除する場合に、次のエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
"Error: can not remove, there is no ias component with that ID :OID"
```

このエラー・メッセージは深刻なものではなく、削除を続行しても問題ありません。

## OracleAS Developer Kits 10g 削除後のエラー・メッセージおよび実行プロセス

OracleAS Developer Kits 10g の削除後、InstallActions.log ファイルに次のエラー・メッセージが記録される場合があります。

```
The following error messages were seen in the InstallActions log file:
```

```
-----  
Exception in thread "main" java.util.zip.ZipException: No such file or directory  
at java.util.zip.ZipFile.open(Native Method)  
at java.util.zip.ZipFile.<init>(ZipFile.java:112)  
at java.util.jar.JarFile.<init>(JarFile.java:117)  
at java.util.jar.JarFile.<init>(JarFile.java:55)  
-----
```

```
ADMN-100999
```

```
See base exception for details.
```

```
Base Exception:
```

```
java.lang.ClassNotFoundException: oracle.sysman.emSDK.emd.dtd.TargetInstance .
```

```
See base exception for details.
```

```
java.lang.ClassNotFoundException: oracle.sysman.emSDK.emd.dtd.TargetInstance
```

```
at java.net.URLClassLoader$1.run(URLClassLoader.java:198)
```

```
at java.security.AccessController.doPrivileged(Native Method)
```

```
at java.net.URLClassLoader.findClass(URLClassLoader.java:186)
```

```
at java.lang.ClassLoader.loadClass(ClassLoader.java:299)
```

```
-----  
Exception in thread "main" java.lang.NoClassDefFoundError:  
oracle/ias/opmn/smipugin/CompDeInst .
```

さらに、次の Oracle Application Server プロセスが実行中のままになります。

- OPMN
- EMWD
- \$ORACLE\_HOME/jdk/bin/java -Xmx256m -DORACLE\_HOME=/private1/iasins

このエラー・メッセージおよび Oracle Application Server プロセスの実行は深刻なものではなく、OracleAS Developer Kits 10g は正常に削除されています。

実行中の Oracle Application Server は、次のコマンドで停止できます。

```
kill -9 <process_id>
```

## インストール完了後の問題

この項では、インストール完了後の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 構成終了後のエラー・メッセージ
- Oracle Application Server コンポーネントのパスワードのリセット
- HTTP SSL ポートの構成には staticport.ini ファイルを使用しない
- OracleAS Infrastructure 10g home インスタンスでの手動による OC4J の起動
- XServer および DISPLAY の設定の指定は必要ない
- ディスクキャッシュ・サイズの増加

### 構成終了後のエラー・メッセージ

Oracle Enterprise Manager を使用して Oracle Application Server のコンポーネントを構成した後、Oracle Application Server のコンポーネント・ページから起動または停止コマンドを実行すると、エラー・メッセージが表示されます。

この問題を回避するには、Oracle Application Server のコンポーネントを構成した後、次のコマンドを使用して Application Server Control を起動し、次に停止します。

```
emctl stop iasconsole  
emctl start iasconsole
```

### Oracle Application Server コンポーネントのパスワードのリセット

デフォルトでは、OracleAS Metadata Repository のパスワードを除き、Oracle Application Server 10g のパスワードはいずれも Oracle Application Server インスタンスのパスワードと同じに設定されています。セキュリティ上の理由から、オラクルでは Oracle Application Server 管理者に対し、インストールが完了したら各種サーバー・コンポーネントのパスワードをリセットし、異なる値に設定することをお勧めします。

インストールした Oracle Application Server コンポーネントのパスワードを適切に変更する方法については、Oracle Application Server Documentation Library を参照してください。

### HTTP SSL ポートの構成には staticport.ini ファイルを使用しない

HTTP SSL ポートの構成には staticport.ini ファイルを使用しないでください。Apache は、初期状態では SSL 用に構成されていません。

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の手順に従って、staticports.ini ファイルを介してポート 443 を使用できます。

## OracleAS Infrastructure 10g home インスタンスでの手動による OC4J の起動

OracleAS Infrastructure 10g home インスタンスの OC4J インスタンスは、`opmnctl startall` や Oracle Enterprise Manager Central Console の `startall` コマンドでは起動しません。OC4J インスタンスは手動で起動する必要があります。

## XServer および DISPLAY の設定の指定は必要ない

Oracle Application Server 10g で、`opmn.xml` ファイルの XServer および DISPLAY の設定を指定する必要はありません。

XServer または DISPLAY の設定を指定する場合は、次のファイル要素をコメント・アウトします。

```
-Djava.awt.headless=true
```

## ディスクキャッシュ・サイズの増加

デフォルトの FBR ディスクキャッシュ・サイズは、`ORACLE_HOME/dcm/config/dcmCache.xml` ファイルにおいて 32MB に設定されています。デフォルト・サイズは、たとえば 10MB を超えるような大きいサイズの EAR ファイルをデプロイする場合に十分ではない可能性があります。

FBR ディスクキャッシュ・サイズが十分でない場合、アプリケーションのデプロイは次のエラー・メッセージが表示されて失敗する場合があります。

```
<SUPPL_DETAIL><![CDATA[oracle.ias.sysmgmt.exception.CachePersistenceException: The exception
202001, has occurred in the cache layer of the persistence manager
"Persistence operation failed.
Root Cause: The exception 202500, has occurred in the cache layer of the persistence manager
"An exception occurred in the method CacheAccess.get CacheAddress". Resolution: check the
details of the base exception.". Resolution: Please, refer to the base exception for the
details:
at oracle.ias.sysmgmt.persistence.cache.CacheTxnManager.commitTx(Unknown Source)
at oracle.ias.sysmgmt.persistence.cache.CachePersistence.commitTx(Unknown Source)
at oracle.ias.sysmgmt.persistence.PersistenceManager.commitTx(Unknown Source)
at oracle.ias.sysmgmt.task.TaskMaster.sync_evaluate(Unknown Source)
at oracle.ias.sysmgmt.task.TaskMaster.internal_evaluate(Unknown Source)
at oracle.ias.sysmgmt.task.RemoteEvaluate.execCommand(Unknown Source)
at oracle.ias.sysmgmt.task.DaemonWorker.run(Unknown Source)
```

回避策は次のとおりです。

1. Application Server Control、`dcmctl` シェルおよび `dcm-daemon` をシャットダウンします。
2. `rm -rf $ORACLE_HOME/dcm/diskcache/*` に移動します。
3. `ORACLE_HOME/dcm/config/dcmCache.xml` ファイルを更新して、`diskcache` 要素のデフォルト値を 32 から 256 に増やします。
4. `dcm-daemon`、`dcmctl` シェルおよび Application Server Control を起動します。
5. 他の Oracle Application Server インスタンスについて手順を繰り返します。

## アップグレードに関する問題

この項では、アップグレードに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [アップグレード実行前の ORACLE\\_HOME 値の確認](#)
- [Identity Management アップグレード実行前のログイン](#)
- [OracleAS Metadata Repository アップグレードのための Oracle Workflow スキーマのアップグレード手順](#)
- [アップグレード後に一部の DAS 依存アプリケーションが実行できなくなる現象について](#)
- [Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層のアップグレード](#)
- [Metadata Repository アップグレード時の `mrc.pl` の実行の検証](#)

- OracleAS Infrastructure 9.0.2 を 9.0.4 にアップグレードするための前提条件
- データ・ソースの構成に関する情報の誤り
- 既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）のアップグレード

## アップグレード実行前の ORACLE\_HOME 値の確認

Oracle*9i*AS Infrastructure 9.0.2 から OracleAS Infrastructure 10g Identity Management へのアップグレード時に、アップグレードが行われなかった場合でも Oracle Data Migration Assistant が「成功」というメッセージを表示する場合があります。

アップグレードを正常に完了させるには、データベースのディレクトリに含まれている ORACLE\_HOME 値が、/var/opt/oracle/oratab ファイルに示されている値と同じであることを確認してください。

## Identity Management アップグレード実行前のログイン

Oracle*9i*AS Infrastructure 9.0.2 データベースの Identity Management のアップグレードを実行する際は、そのデータベースの DBA グループのメンバーとしてログインする必要があります。

ログインしない場合、\$904\_ORACLE\_HOME/assistants/dbma/logs/trace.log ファイルに次のエラー・メッセージが記録される場合があります。

```
oracle.sysman.assistants.util.sqlEngine.SQLFatalErrorException: ORA-01031: 権限が不足しています。
```

## OracleAS Metadata Repository アップグレードのための Oracle Workflow スキーマのアップグレード手順

OracleAS Metadata Repository のために Oracle Workflow スキーマをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して、Workflow (OWF\_MGR) スキーマのパスワードを確定します。

```
ldapsearch -h oidhostname -p oidport -D cn=orcladmin -w passwd -b  
"orclReferenceName=globalDatabaseName,cn=IAS Infrastructure Databases,  
cn=IAS,cn=Products,cn=oraclecontext" "orclresourcename=OWF_MGR"  
orclpasswordattribute
```

コマンドでは次の値を使用します。

- **oidhostname:** Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前。  
(例: dbmachine.mydomain.com)
  - **oidport:** Oracle Internet Directory がリスニングしているポート番号。(例: 389)
  - **passwd:** orcladmin に対するパスワード。(例: welcome1)
  - **globalDatabaseName:** Oracle*9i*AS 9.0.2 の Single Sign-On が使用する Oracle*9i*AS Metadata Repository のグローバル・データベース名。この値は、ORACLE\_HOME/config/ias.properties ファイルの InfrastructureDBCommonName フィールドに格納されます。ORACLE\_HOME は、Oracle*9i*AS Infrastructure 9.0.2 の Oracle ホーム・ディレクトリです。
2. OracleAS RepCA/Utilities CD の repCA/wf/install/wfupg.csh から、Workflow のアップグレード・スクリプトを実行します。このスクリプトの構文は、次のとおりです。

```
wfupg.csh sys_password repca_home ORACLE_HOME "connect_descriptor"  
log_directory owf_mgr_password
```

パラメータは次のとおりです。

- **sys\_password:** データベースの SYS ユーザーのパスワード。
- **repca home:** OracleAS RepCA/Utilities CD の repCA ディレクトリ (mount point/repCA)。
- **ORACLE\_HOME:** Oracle*9i*AS 9.0.2 Infrastructure の ORACLE\_HOME。

- **connect\_descriptor:** Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure データベースのための Oracle Net 接続記述子。これには完全なネット記述子か、\$ORACLE\_HOME/network/admin/tnsnames.ora ファイルにある、データベースをポイントする別名のいずれかを使用できます。
  - **log\_directory:** workflow.log ファイルが書き込まれるディレクトリ。
  - **owf\_mgr\_password:** 手順 1 で得られた OWF\_MGR スキーマに対するパスワード。
3. \$ORACLE\_HOME/rdbms/admin/utlpr.sql にあるスクリプトを SYS ユーザーとして実行し、データベース内のすべての PL/SQL プロシージャを再コンパイルします。

## アップグレード後に一部の DAS 依存アプリケーションが実行できなくなる現象について

Oracle Internet Directory をリリース 9.0.2 から Identity Management リリース 9.0.4 にアップグレードし、中間層に存在する DAS がリリース 9.0.2 である場合、OracleAS Portal などの一部の DAS 依存アプリケーションのユーザーおよびグループ管理機能が動作しなくなる場合があります。この問題は、リリース 9.0.4 の DAS をインストールし、リリース 9.0.2 の DAS を置き換えることで解決します。

この問題は、リリース 9.0.2 の DAS をリリース 9.0.4 の DAS に置き換えるまでにタイム・ラグがある場合に、Oracle Internet Directory をリリース 9.0.4 にアップグレードすると発生します。

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. 次のデータを持つ ldif ファイルを das904\_to\_902.ldif という名前で作成します。

```
dn: cn=Create User, cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppCreateUserInfoAdmin
```

```
dn: cn=Edit User, cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppEditUserSpecifyAdmin
```

```
dn: cn=Edit Group, cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppEditGroupSpecifyAdmin
```

```
dn: cn=Create Group, cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppCreateGroupInfoAdmin
```

```
dn: cn=DeleteUserGivenGUID,
cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppDeleteUserAdmin
```

```
dn: cn=User Privilege Given GUID,
cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppUserPrivAdmin
```

```
dn: cn=Group Privilege Given GUID,
cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppGroupPrivAdmin
```

```
dn: cn=DeleteGroupGivenGUID,
cn=OperationURLs, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext
```

```

changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppDeleteGroupAdmin

dn: cn=Edit GroupGivenGUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppEditGroupAdmin

dn: cn=DeleteUser, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppDeleteUserSpecifyAdmin

dn: cn=User Privilege, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppUserPrivSpecifyAdmin

dn: cn=DeleteGroup, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppDeleteGroupSpecifyAdmin

dn: cn=Edit UserGivenGUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppEditUserAdmin

dn: cn=Group Privilege, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/admin/AppGroupPrivSpecifyAdmin

dn: cn=DAS Application, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/mypage/ViewMyPage

```

2. 次の ldapmodify コマンドを実行します。

```

$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h OID host -p OID port
@ -D OID superuser -w OID superuser password -v -f das904_to_902.ldif

```

3. リリース 9.0.2 の DAS をリリース 9.0.4 の DAS に置き換えた後 (Oracle Internet Directory もリリース 9.0.4)、次のデータを持つ ldif ファイルを、das902\_to\_904.ldif という名前で作成します。

```

dn: cn=Create User, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/user/AppCreateUserInfoAdmin

dn: cn=Edit User, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/user/AppEditUserSpecifyAdmin

dn: cn=Edit Group, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppEditGroupSpecifyAdmin

dn: cn=Create Group, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext

```

```
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppCreateGroupInfoAdmin

dn: cn=DeleteUserGivenGUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/user/AppDeleteUserAdmin

dn: cn=User Privilege Given GUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/user/AppUserPrivAdmin

dn: cn=Group Privilege Given GUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppGroupPrivAdmin

dn: cn=DeleteGroupGivenGUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppDeleteGroupAdmin

dn: cn=Edit GroupGivenGUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppEditGroupAdmin

dn: cn=DeleteUser, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/user/AppDeleteUserSpecifyAdmin

dn: cn=User Privilege, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/user/AppUserPrivSpecifyAdmin

dn: cn=DeleteGroup, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppDeleteGroupSpecifyAdmin

dn: cn=Edit UserGivenGUID,
cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/user/AppEditUserAdmin

dn: cn=Group Privilege, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppGroupPrivSpecifyAdmin

dn: cn=DAS Application, cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
replace: orcldasurl
orcldasurl: oiddas/ui/oiddashome
```

4. 次の ldapmodify コマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h OID host -p OID port
@ -D OID superuser -w OID superuser password -v -f das902_to_904.ldif
```

## Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層のアップグレード

Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 を Oracle Application Server 10g (9.0.4) へアップグレードする場合、ソース・インスタンス内の Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 Oracle Enterprise Manager (Enterprise Manager) ではなく、デフォルトの管理用の Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 Oracle Enterprise Manager のプロセスを停止する必要があります。

たとえば、同じホストに Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure および Oracle9iAS 9.0.2 中間層がある場合、9.0.2 Infrastructure の Oracle Enterprise Manager が管理用 Enterprise Manager になります。この場合、アップグレード時に Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure Enterprise Manager を停止します。

## Metadata Repository アップグレード時の mrc.pl の実行の検証

Oracle Application Server 10g (9.0.4.0.1) では、mrc.pl スクリプト用に新しい検証引数が追加されました。このスクリプトは、Metadata Repository Container を 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードするために使用します。

mrc.pl スクリプトについては、『Oracle Application Server 10g アップグレード』の Windows 版と UNIX 版のどちらでも説明されています。ただし、mrc.pl スクリプトの実行の検証手順は、Windows 版のみに記載されています。

UNIX 版の『Oracle Application Server 10g アップグレード』を使用している場合は、4.2.3 項「Metadata Repository Container のアップグレード」を読み、その後は次の手順を使用して、mrc.pl が正常に実行されたか、または以前に実行されていたかを確認します。

1. データベース、リスナーおよび Oracle Internet Directory サーバーが実行されていることを確認します。
2. ORACLE\_HOME 環境変数が Infra\_OH、ORACLE\_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。このように設定されていない場合、『Oracle Application Server 10g アップグレード』の 4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の設定」の説明に従います。
3. repCA\_CD¥repCA¥mrc¥upgrade に移動します。
4. 次のコマンドのいずれかを使用して、mrc.pl が正常に実行されたか、または以前に実行されていたかを確認します。
  - 新規スキーマの作成に対してのみ mrc.pl を実行する場合、次のコマンドを入力します。

```
Infra_OH¥perl¥5.6.1¥bin¥MSWin32-x86¥perl mrc.pl dv -dbpwd SYS user password
-ousr oid admin user name -opwd oid admin user password -connstring database connect
string
```

- 新規スキーマの作成および Oracle Internet Directory エントリの更新に対して mrc.pl を実行する場合、次のコマンドを入力します。

```
Infra_OH/perl/bin/perl mrc.pl duv -dbpwd SYS user password -dspace
tablespace directory -ousr oid admin user name -opwd oid admin user
password -connstring database connect string
```

mrc.pl スクリプトの d または du の引数の直後に v 引数が付いています。v 引数を含めることにより、mrc.pl スクリプトが以前に実行されていたか、また、正常に実行されたかを示す情報が提供されます。

## OracleAS Infrastructure 9.0.2 を 9.0.4 にアップグレードするための前提条件

コンピュータ上に複数の Oracle9iAS インスタンス (9.0.2x または 9.0.3) が存在する場合、インスタンスを 9.0.4 にアップグレードする際は、そのコンピュータ上のすべてのインスタンスが同じアクティブな Oracle Enterprise Manager を共有するため、注意が必要です。

アクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれるインスタンスをアンインストールしないようにする必要があります。

複数の Oracle9iAS インスタンスが存在するマシンでインスタンスをアップグレードする前に、次の手順を実行します。

1. アクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれる Oracle9iAS インスタンスを判別します。

```
/var/opt/oracle/emtab ファイルの ACTIVE_EMD_HOME エントリを確認します。
```

2. アップグレードするインスタンスにアクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれる場合、アクティブな Oracle Enterprise Manager を残りのインスタンスに切り替えます。

残りのインスタンスに Oracle9iAS 9.0.3 のインスタンスがある場合、アクティブな Oracle Enterprise Manager をそのインスタンスに切り替えます。そうでない場合は、次のコマンドを使用して Oracle9iAS 9.0.2x のインスタンスに切り替えます。

```
prompt> ORACLE_HOME/bin/emctl switch home
```

これによって、アクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれる別の Oracle9iAS インスタンスを選択するためのダイアログが表示されます。

もう 1 つの方法として、`-silent` 引数を使用して、新しいアクティブな Enterprise Manager Web サイトが常駐する Oracle ホームのパスを指定することもできます。

```
prompt> ORACLE_HOME/bin/emctl switch home - silent remaining_oracle_home
```

これでインスタンスを 9.0.4 にアップグレードできます。

## データ・ソースの構成に関する情報の誤り

『Oracle Application Server 10g WebLogic からの移行』の、「アプリケーション・サーバーでのデータソースの構成」の項には、`pooled-location` パラメータの説明がありますが、これは誤りです。正しくは `ejb-location` パラメータとなります。

『Oracle Application Server 10g WebSphere からの移行』の第 6 章「JDBC アプリケーションの移行」には、`pooled-location` パラメータの説明がありますが、これは誤りです。正しくは `ejb-location` パラメータとなります。

## 既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）のアップグレード

この手順は、Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）を OPMN で管理している場合のみ必要です。

OracleAS Upgrade Assistant によって、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の構成が Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードされます。ただし、OracleAS Upgrade Assistant では既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）の識別子要素はアップグレードされません。

したがって、OracleAS Upgrade Assistant を使用して既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）をアップグレードした後、次の手順を実行します。

1. 次のアップグレード先 10g (9.0.4) Oracle ホームで `rwserver.template` ファイルを探します。

```
DESTINATION_ORACLE_HOME/reports/conf/rwserver.template
```

2. `rwserver.template` ファイルをテキスト・エディタで開き、識別子要素をコピーします。
3. 識別子要素を対応する Reports サーバー構成ファイルにコピーします。

既存の識別子要素が `<server>.conf` ファイル（インプロセス・サーバーを含む）に存在する場合は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の `rwserver.template` ファイルにおいて `<identifier>` 要素でこれらのエントリを置き換えます。

たとえば、アップグレードした後 <server>.conf とインプロセス・サーバーの内容は次のようになる場合があります。

```
<identifier confidential="yes" encrypted="no">scott/tiger</identifier>
```

Oracle Application Server 10g (9.0.4) の `rwserver.template` ファイルにおいて識別子要素でファイルの内容を置き換えた後、<server>.conf とインプロセス・サーバーの内容は次のようになります。

```
<identifier confidential="yes" encrypted="yes">
EDB1Kn+HEmSn5v/74CckOGN3MAkctPxzTuPZW/AWQAPb1sOPEb0tQKeS/PlyXkqnkQ==
</identifier>
```

---

**注意：**ここに記載した内容は例です。必ず、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の `rwserver.template` ファイルから識別子要素をコピーしてください。ここに記載した内容を入力しないでください。

---

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [トラブルシューティングの章での OTN へのリンクの誤り](#)
- [『Oracle Application Server 10g アップグレード』内の本文の誤り](#)
- [『Oracle Application Server 10g アップグレード』内の構文の誤り](#)
- [非対話型レスポンス・ファイルの例のパラメータの誤り](#)
- [アンインストール手順：中間層のアンインストール時には Oracle Ultra Search エントリを削除しない](#)
- [データ・ソースの構成に関する情報の誤り](#)
- [『Oracle Application Server 10g アップグレード』の項名の誤り](#)
- [『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の管理者 \(ias\\_admin\) リセット・パスワード参照の誤り](#)

## トラブルシューティングの章での OTN へのリンクの誤り

『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』のトラブルシューティングの章で、OTN へのリンクの記載に誤りがあります。正しいリンクは次のとおりです。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

## 『Oracle Application Server 10g アップグレード』内の本文の誤り

3.5.3 項「複数の Oracle Universal Installer インベントリを使用するための OracleAS Upgrade Assistant の起動」に記載されている次の段落は正しくありません。

「Oracle Universal Installer は、Oracle 製品のインストール時に、インベントリ・ファイル `/var/opt/oracle/oraInst.loc` を作成します。このファイルには、Oracle Application Server インスタンスの場所（フルパス）およびインストールしたユーザーのグループ名が含まれます。OracleAS Upgrade Assistant は、このデフォルト・インベントリ・ファイルからソース Oracle ホームのドロップダウン・リストを情報とともに移入します（図 3-2 「OracleAS Upgrade Assistant 「Oracle ホーム」画面」を参照）。Oracle ホームを個別に管理する目的で（その結果すべての Oracle ホームを単一インベントリでトラッキングする Oracle Universal Installer 機能を回避します）、インストール後に追加のインベントリ・ファイルを作成している場合もあります。」

正しくは、次のとおりです。

「Oracle Universal Installer は、Oracle 製品のインストール時に、インベントリ・ファイル /var/opt/oracle/oraInst.loc (Linux および AIX の場合は etc/orainst.loc) を作成します。このファイルには、Oracle Universal Installer のディレクトリの場所 (フルパス) およびインストールしたユーザーのグループ名が含まれます。OracleAS Upgrade Assistant は、このディレクトリ (デフォルト・インベントリ) からソース Oracle ホームのドロップダウン・リストを情報とともに移入します (図 3-2 「OracleAS Upgrade Assistant 「Oracle ホーム」 画面」を参照)。Oracle ホームを個別に管理する目的で (その結果すべての Oracle ホームを単一インベントリでトラッキングする Oracle Universal Installer 機能を回避します)、インストール後に追加のインベントリ・ファイルを作成している場合もあります。」

## 『Oracle Application Server 10g アップグレード』内の構文の誤り

『Oracle Application Server 10g アップグレード』の 4.4.3.3.1 項「Java Runtime Environment (JRE) 1.4 のインストールと、JRE 1.4 を使用する Oracle Ultra Search の構成」には、new java execution path に関する次の構文が誤って記載されています。

```
<JRE 1.4 directory>/jre/1.4.1/bin/java -ms16m -mx256m -Djava.library.path=<destination_Infra_OH>/lib
```

正しい構文は、次のとおりです。

```
<JRE 1.4 directory>/jre/1.4.1/bin/java -ms16m -mx256m -Djava.library.path=source_Infra_OH/lib
```

## 非対話型レスポンス・ファイルの例のパラメータの誤り

『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の D.5.1.3 項「Portal and Wireless」に示したファイルの、次のファイル・パラメータは誤りです。

```
szl_RepositoryUserInput={"domain.com:1521:iasdb:iasdb.domain.com"}
```

正しくは次のとおりです。

```
szl_RepositoryUserInput={"hostname.domain:1521:iasdb:iasdb.domain"}
```

## アンインストール手順：中間層のアンインストール時には Oracle Ultra Search エントリを削除しない

『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の C.1.8 項「Oracle Internet Directory からの Oracle Ultra Search エントリの削除」に示されている手順は、OracleAS Infrastructure をアンインストールする場合にのみ実行してください。この手順は、中間層をアンインストールする際には実行しません。

## データ・ソースの構成に関する情報の誤り

『Oracle Application Server 10g WebLogic からの移行』の、「アプリケーション・サーバーでのデータソースの構成」の項には、pooled-location パラメータの説明がありますが、これは誤りです。正しくは ejb-location パラメータとなります。

『Oracle Application Server 10g WebSphere からの移行』の第 6 章「JDBC アプリケーションの移行」には、pooled-location パラメータの説明がありますが、これは誤りです。正しくは ejb-location パラメータとなります。

## 『Oracle Application Server 10g アップグレード』の項名の誤り

『Oracle Application Server 10g アップグレード』の 5.4.1.4 項「推奨されるパフォーマンス拡張タスク」の項名には誤りがあります。5.4.1.4 項は、正しくは「アップグレード・タスクの要件」となります。5.4.1.4 項に記載された手順は最後まで完了しなければなりません。完了しないと、Oracle Identity Management のインスタンスは正常に動作しません。

## 『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の管理者 (ias\_admin) リセット・パスワード参照の誤り

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の第5章、5.8項「ias\_admin ユーザーとそのパスワードの制限」で、管理者 (ias\_admin) パスワードのリセット手順について『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照するようにとの指示がありますが、これは誤りです。

ias\_admin パスワードのリセット手順は次のとおりです。

1. Oracle Application Server インスタンスをインストールしたユーザーとしてログインします。
2. Application Server Control を停止します。

UNIX システムの場合、アプリケーション・サーバー・インスタンスの Oracle ホームに次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
```

Windows システムの場合、「サービス」コントロール・パネルを使用して Application Server Control サービスを停止します。

3. 次のファイルを見つけてテキスト・エディタで開きます。

```
ORACLE_HOME/sysman/j2ee/config/jazn-data.xml
```

4. ias\_admin ユーザーに対する資格証明プロパティを定義する行を見つけます。

jazn-data.xml のセクションの例を次に示します。暗号化された credentials エントリは太字で示されています。

```
<realm>
  <name>enterprise-manager</name>
  <users>
    <user>
      <name>ias_admin</name>
      <credentials>{903}buG0lUsQqTq0nQjdaKQRECL1kbs192mP</credentials>
    </user>
    .
  </users>
</realm>
```

5. 暗号化されている既存のパスワードを新しいパスワードと置き換えます。

パスワードは、次に示すように感嘆符で始めてください。

```
<credentials>!mynewpassword123</credentials>
```

ias\_admin ユーザーのパスワードは次の規則に従う必要があります。

- 英数字 5 文字以上。
- 少なくとも 1 文字は数字。
- 30 文字未満。
- データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア ( \_ )、ドル記号 ( \$ )、またはシャープ記号 ( # ) のみを使用。
- アルファベット文字で始め、数字、アンダースコア ( \_ )、ドル記号 ( \$ ) またはシャープ記号 ( # ) は使用不可。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の「ias\_admin ユーザーとそのパスワードの制限」

6. Application Server Control を開始します。

再起動後、Application Server Control は新しい管理者 (ias\_admin) パスワードを使用します。このパスワードは、暗号化形式で jazn-data.xml ファイル内に格納されます。

---

## 管理およびセキュリティに関する一般的な問題

この章では、Oracle Application Server の管理およびセキュリティに関する問題について説明します。  
この章の内容は次のとおりです。

- サポートされるネットワーク機能
- OPMN に関する問題
- DCM に関する問題
- 管理に関するその他の問題
- ドキュメントの誤り

## サポートされるネットワーク機能

表 5-1 に、このリリースでサポートされるネットワーク機能を示します。

表 5-1 サポートされるネットワーク手続き

機能	サポート
DHCP を使用したホストでの Oracle Application Server のインストール	不可
ネットワークから切り離されたホストでの Oracle Application Server のインストール	不可
Oracle Application Server Middle-Tier インスタンスを含んでいるホストに対するホスト名の変更	可能 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。
Oracle Application Server Middle-Tier インスタンスを含んでいるホストに対する IP アドレスの変更	可能 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。
Oracle Application Server Infrastructure を含んでいるホストに対するホスト名の変更	不可
Oracle Application Server Infrastructure を含んでいるホストに対する IP アドレスの変更	可能 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

## OPMN に関する問題

この項では、OPMN の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [opmnctl コマンド実行時のエラー・メッセージ](#)
- [Application Server Control のポート・ページに関する問題](#)
- [ドキュメントの誤り](#)

### opmnctl コマンド実行時のエラー・メッセージ

opmnctl stopall または opmnctl startall コマンドを実行すると、oidctl ログ・ファイルに次のエラー・メッセージが記録されます。

```
*** Instance Number already in use. ***
*** Please try a different Instance number. ***
```

これはエラーを示すメッセージではないため、無視してかまいません。

通常、このエラー・メッセージは OracleAS Infrastructure 10g とともに Oracle Internet Directory をインストールすると表示されます。

### Application Server Control のポート・ページに関する問題

Application Server Control のポート・ページに移動すると、Oracle HTTP Server リスナーに対する Oracle HTTP Server 診断ポートが表示されます。OPMN を再起動すると、この診断ポートは表示されなくなります。

### ドキュメントの誤り

『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』の第 4 章「opmn.xml の一般的な構成」では ipaddr の説明に local 属性が記載されています。ipaddr に local 属性は使用できません。

『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』の第 5 章「Oracle HTTP Server の構成」には、opmn.xml のための id="start-mode" のデフォルト値は ssl-enabled と記載されていますが、これは誤りです。デフォルト値は ssl-disabled になります。

## DCM に関する問題

この項では、DCM の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- システム・パフォーマンスを改善する DCM 自動アーカイブ機能のチューニング
- dcmctl コマンドに関するエラー・メッセージの出力
- ファイル・ベースのリポジトリがファイアウォールの外側で動作しない

### システム・パフォーマンスを改善する DCM 自動アーカイブ機能のチューニング

Oracle Application Server をインストールすると、DCM 自動アーカイブ機能が構成され、15 種類のバックアップ・アーカイブがメンテナンスされるようになります。アーカイブ数を減らすか、または自動アーカイブ機能をオフにすることで、システム・パフォーマンスを改善できます。

アーカイブ数を減らす（たとえばアーカイブ数を 5 にする）には、次にコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl set -arch 5
```

自動アーカイブをオフに切り替えるには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl set -arch 0
```

DCM 自動アーカイブの詳細は、『Distributed Configuration Management リファレンス・ガイド』を参照してください。

---

**注意：** DCM 自動アーカイブを制限または使用禁止にすると、システム障害のリカバリ機能に影響することがあります。

---

### dcmctl コマンドに関するエラー・メッセージの出力

デフォルトでは、dcmctl コマンドはトラブルシューティング・モードで実行されます。エラーまたは警告となったすべての dcmctl コマンドについて、詳細なスタック・トレースとトレース・メッセージが出力されます。

これらのエラー・メッセージを記録しない場合は、**set -d off** オプションを使用し、dcmctl シェル内で dcmctl コマンドを実行してください。dcmctl set コマンドの詳細は、『Distributed Configuration Management リファレンス・ガイド』を参照してください。

### ファイル・ベースのリポジトリがファイアウォールの外側で動作しない

ファイル・ベースのリポジトリ（FBR）を使用しているファームがある場合は、ファーム内のファイアウォールの外側には Oracle Application Server インスタンスを挿入できません。

ファイアウォールを超えて Oracle Application Server クラスタを作成する場合は、データベース・ベースのリポジトリ（DBR）を使用するか、または非管理クラスタを構成してください。

## 管理に関するその他の問題

この項では、管理に関するその他の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 複数インストールに関するエラー・メッセージ
- Oracle Wallet Manager のオンライン・ヘルプが使用できない
- STDOUT への Wallet のオープン障害メッセージ
- Alter Database Open Resetlogs での ORA-01194 の発生
- chgiphost.sh スクリプトの実行時に無視できる warn.log ファイルの警告
- スタンドアロン J2EE および Web Cache インストール時に無視できる chgiphost.sh スクリプトからのエラー・メッセージ

- [OracleAS Backup and Recovery Tool 使用時のエラー・メッセージ](#)
- [データベース・リスナーに対する ORACLE\\_HOME の設定](#)
- [高可用性 Identity Management の構成](#)
- [ホスト名の変更前に削除する必要があるファイル・ベースのクラスタおよびファームのインスタンス](#)
- [アクティブな Application Server Control の再起動と結果検証](#)

## 複数インストールに関するエラー・メッセージ

複数の Oracle Application Server インストールがシステム上で実行されている場合に、Oracle Enterprise Manager ホーム・ページから stopall を実行すると、次のエラーが表示されることがあります。

```
OC4J:OC4J_Portal- time out while waiting for a managed process to stop
OC4J:OC4J_BI_Forms- time out while waiting for a managed process to stop
```

これはエラーを示すメッセージではありません。Oracle Application Server コンポーネントは実際には停止しています。

## Oracle Wallet Manager のオンライン・ヘルプが使用できない

Oracle Wallet Manager のオンライン・ヘルプは使用できません。オンライン・ヘルプを使用しようとすると、エラー・コードが表示されます。

Oracle Wallet Manager に関する情報は、『Oracle Application Server 10g セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## STDOUT への Wallet のオープン障害メッセージ

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しているときに、DBCA から「OPEN WALLET FAILED」メッセージが出力されます。このエラー・メッセージは、Oracle Universal Installer への DBCA の出力画面に表示されるか、または `ORACLE_HOME/oraInventory/logs/installActionstime.stamp.log` ファイルに記録されます。

このメッセージは、エラーを示すメッセージではなく、登録プロセスにも影響しません。

## Alter Database Open Resetlogs での ORA-01194 の発生

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「バックアップとリカバリ」の項では、OracleAS Metadata Repository の新しいホストへのリストア時に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して point-in-time リカバリを実行するように指示しています。これは、リカバリ実行中にエラーが発生した場合には alter database open resetlogs を使用することを示すアドバイスです。

まれに、alter database open resetlogs コマンドで ORA-01194 エラーが発生することがあります。このエラーが発生した場合は、OracleAS Backup and Recovery Tool によって生成されるリストア・ログをチェックしてください。このログによって、1つ以上のデータファイルがリストアされていないことがわかります。この場合は、最初に行ったときと同じオプションを使用して OracleAS Backup and Recovery Tool を再度実行します。その後、alter database open resetlogs コマンドを使用すると、エラーは表示されなくなります。

## chgiphost.sh スクリプトの実行時に無視できる warn.log ファイルの警告

Oracle Application Server のすべてのインストール・タイプについて、インストールの後に chgiphost.sh スクリプトを実行すると、warn.log ファイルに警告メッセージが生成されます。これは警告を示すメッセージではないため、無視してかまいません。

## スタンドアロン J2EE および Web Cache インストール時に無視できる chgiphost.sh スクリプトからのエラー・メッセージ

OracleAS Infrastructure 10g のサービスを使用しない J2EE および Web Cache のインストールで、chgiphost.sh スクリプトを実行すると、actions.log および error.log ファイルに次のようなエラー・メッセージが記録されることがあります。

- actions.log ファイル:
 

```
main::ias_instance_oid::372**      Error while executing
main::update_modosso::372**      Error while executing
```
- error.log ファイル:
 

```
Exception: Unable to establish connection to the Oracle Internet Directory
Server ldap://:/. Base Exception : javax.naming.CommunicationException:
localhost:389 [Root exception is java.net.ConnectException: Connection refused]

oracle.ias.repository.schema.SchemaException: Unable to establish connection to
the Oracle Internet Directory Server ldap://:/. Base Exception :
javax.naming.CommunicationException: localhost:389 [Root exception is
java.net.ConnectException: Connection refused]
main::ias_instance_oid::371**      Error while executing ....
main::update_modosso::371**      Error while executing ....
```

これはエラーを示すメッセージではないため、無視してかまいません。

## OracleAS Backup and Recovery Tool 使用時のエラー・メッセージ

OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して OracleAS Metadata Repository のバックアップを実行すると、RMAN から、アーカイブ・ログとカタログとの同期がとれていないことを示す RMAN-06089 エラー・メッセージが戻ります。このエラーは、アーカイブ・ログのいずれかが消失すると発生します。

OracleAS Backup and Recovery Tool を再試行する前に、RMAN で次のコマンドを実行します。

```
change archivelog all validate;
```

次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を再度実行して OracleAS Metadata Repository のバックアップを実行します。

## データベース・リスナーに対する ORACLE\_HOME の設定

OracleAS Infrastructure 10g データベース・リスナーを起動または停止する前に、環境変数 ORACLE\_HOME を設定する必要があります。この環境変数を設定しないと、コア・ダンプが発生します。

## 高可用性 Identity Management の構成

ラックマウント / マルチコンピュータの高可用性 Identity Management の構成の概念および実装に関するドキュメントが、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』および『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』で参照できます。

ラックマウントの Identity Management のインストールおよび構成に関しては、ホワイト・ペーパー『ID 管理の可用性を高める配置例: ラックマウント型の ID 管理』に単一ソースとしてまとめられています。これを参照するには、次の URL にアクセスしてください。

<http://otn.oracle.co.jp/products/index.html>

このホワイト・ペーパーには、ラックマウント / マルチコンピュータ構成を実装するために必要な手順に関する更新された詳細情報が含まれています。

将来のリリースでは、ラックマウント / マルチコンピュータ構成がインストール・オプションとしてサポートされる予定です。

## ホスト名の変更前に削除する必要があるファイル・ベースのクラスタおよびファームのインスタンス

ファイル・ベースのクラスタの一部である中間層インスタンスのホスト名または IP アドレスを変更する前に、次のコマンドを使用してクラスタおよびファームからインスタンスを削除する必要があります。

```
dcmctl leaveCluster
dcmctl leaveFarm
```

ホスト名または IP アドレスを変更した後で、インスタンスをクラスタおよびファームに戻します。インスタンスをクラスタに戻すには、次のコマンドを使用します。

```
dcmctl joinCluster -cl <clustername>
```

インスタンスをファームに戻すには、次の手順を実行してください。

- ファーム内にすでに存在するインスタンス内で次のコマンドを実行します。

```
dcmctl getRepositoryID
```

- ファームに戻したいインスタンス内で次のコマンドを実行します。

```
dcmctl joinFarm -r <repositoryID>
```

## アクティブな Application Server Control の再起動と結果検証

この手順の結果を検証する方法は、構成によって異なります。詳細は、次の項目を参照してください。

- [Infrastructure インストールの手順の検証](#)
- [中間層インストールの手順の検証](#)

### Infrastructure インストールの手順の検証

1 つの Application Server Control で管理しているアプリケーション・サーバー・インスタンスの 1 つが、Oracle Identity Management を使用する OracleAS Infrastructure インストールである場合は、次の検証手順を実行します。

1. **identity Management** インストールのホーム・ディレクトリにナビゲートし、次のコマンドを入力して Oracle Internet Directory を起動します。

```
(UNIX) INACTIVE_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startproc ias-component=oid
(Windows) INACTIVE_ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl startproc ias-component=oid
```

2. アクティブな Application Server Control を起動します。

UNIX システムの場合、次のコマンドを使用します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```

Windows システムの場合、「コントロールパネル」の「サービス」を使用して Application Server Control サービスを起動します。

Oracle Application Server の他の非アクティブなホーム・ディレクトリにある Application Server Control を起動する必要はありません。

3. ブラウザを開いて、アクティブな Application Server Control のホスト名とポートを入力します。

Enterprise Manager により「ファーム」ページが表示され、現在この OracleAS Metadata Repository を使用しているアプリケーション・サーバー・インスタンスが一覧表示されます。

「ファーム」ページでアプリケーション・サーバーの名前をクリックすると、同じポート番号が常に使用される点に注意してください。また、ホスト上で実行されている 1 つの Application Server Control がすべての管理機能を提供します。

## 中間層インストールの手順の検証

2つの J2EE and Web Cache インスタンスを管理する場合は、次の手順を実行して、アクティブな Application Server Control の構成が正しいかどうかを検証します。

1. アクティブな Application Server Control を起動します。

UNIX システムの場合、次のコマンドを使用します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```

Windows システムの場合、「コントロールパネル」の「サービス」を使用して Application Server Control サービスを起動します。

Oracle Application Server の他の非アクティブなホーム・ディレクトリにある Application Server Control を起動する必要はありません。

2. ブラウザを開いて、アクティブな Application Server Control のホスト名とポートを入力します。

管理対象のインスタンスが Oracle Application Server Farm の一部であるかどうかによって結果が異なります。

- インスタンスが OracleAS Farm の一部でない場合は、Enterprise Manager の「Application Server」ページにホスト上のアプリケーション・サーバーが一覧表示されます。アプリケーション・サーバーの名前をクリックして、そのインスタンスの Application Server ホーム・ページに移動します。
- インスタンスが OracleAS Farm の一部である場合は、Enterprise Manager の「OracleAS ファーム」ページに、この Farm リポジトリを使用するスタンドアロンのアプリケーション・サーバー・インスタンスおよび OracleAS Cluster がすべて表示されます。

いずれの場合も、アプリケーション・サーバー・インスタンスの名前をクリックすると、同じポート番号が常に使用される点に注意してください。また、ホスト上で実行されている 1 つの Application Server Control がすべての管理機能を提供します。

さらに、非アクティブなアプリケーション・サーバーの名前をクリックすると、「システム・コンポーネント」表に一覧表示した管理コンポーネントの「開始時間」列に開始時間が表示されないことに注意してください。これは、非アクティブな Application Server Control は稼働しておらず、起動されなかったためです。

## ドキュメントの誤り

この項では、管理およびセキュリティに関するドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- OPMN ポート（ONS ローカル、リクエストおよびリモート）の変更
- ランタイム JServ ポートの問合せ
- Metadata Repository を保存した後の Infrastructure プロセスの再起動
- OracleAS Portal ユーザーのパスワードに関する指針
- インストール後の DAS の構成での手順の欠落
- 「Metadata Repository リスナーの停止」手順のスペルの誤り
- 「Infrastructure サービスの変更」のコマンドの誤り
- LDAP ベースのレプリカのステップの誤り

## OPMN ポート（ONS ローカル、リクエストおよびリモート）の変更

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』に記載されている ONS ローカル・ポート、リクエスト・ポートおよびリモート・ポートの変更手順に次のような誤りがあります。

- ONS ローカル、リクエストおよびリモート・ポート番号の変更には、Application Server Control を使用できるように記載されています。これは誤りです。これらのポートの変更には Application Server Control を使用しないでください。

- ポートを手動で変更する手順に誤りがあります。次の手順を使用してください。
  1. すべてのプロセスをシャットダウンします。
 

```
emctl stop iasconsole
emctl stop agent
opmnctl stopall
```
  2. notification-server 要素の下にある port 要素の local、remote および request パラメータを必要に応じて変更します。次に例を示します。
 

```
<port local="6101" remote="6201" request="6004"/>
```
  3. 変更内容を保存し、ファイルを閉じます。
  4. OPMN を再ロードします。
 

```
opmnctl reload
```
  5. OPMN を起動します。
 

```
opmnctl start
```
  6. Oracle Internet Directory が付属している Infrastructure の場合は、Oracle Internet Directory を起動します。
 

```
opmnctl startproc ias-component=OID
```
  7. 残りのプロセスを起動します。
 

```
opmnctl startall
```
  8. DCM を更新します。
 

```
dcmctl updateConfig -ct opmn
```

## ランタイム JServ ポートの問合せ

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』に記載されているランタイム JServ ポートの問合せ手順に誤りがあります。

ランタイム JServ のポート番号を問い合わせるには、次の手順を実行します。

- mod\_oprocmgr を使用して JServ を管理する場合は、次のディレクティブを使用して `ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf` で `oprocmgr-status` ハンドラがアクティブ化されていることを確認します。

```
<ifModule mod_oprocmgr.c>
  <Location /oprocmgr-service>
    SetHandler oprocmgr-service
  </Location>
</ifModule>
```

ブラウザに次の URL を入力すると、JServ も含めて、プロセス・マネージャで現在管理されているすべてのプロセスのステータスを確認できます。

```
http://hostname:http_port/oprocmgr-status
```

- mod\_oprocmgr を使用せずに従来の JServ 構成を使用している場合は、次の URL でランタイム・ポートを問い合わせることができます。

```
http://hostname:http_port/jserv
```

この URL の jserv 部分は、localhost でのみ表示されるように保護されています。これは、`ORACLE_HOME/Apache/Jserv/etc/jserv.conf` に設定されています。他のホストで表示されるように権限を拡張するか、または同じホストから次の URL を指定できます。

```
http://localhost:port/jserv
```

## Metadata Repository を保存した後の Infrastructure プロセスの再起動

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』に記載されている Metadata Repository のリストア手順は不完全です。Metadata Repository のリストア後に、すべての Infrastructure プロセスを再起動する必要があります。

## OracleAS Portal ユーザーのパスワードに関する指針

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 7.2.3 項「インストール後の Portal の設定」では、OracleAS Portal ユーザーのパスワードに関する指針が誤って記述されています。次のように記載されています。

「Portal には、portal としてログインできます。この Portal のインスタンスが Metadata Repository を最初に使用するものである場合は、パスワードは portal10g になります。それ以外の場合のパスワードは、この Metadata Repository に関連付けられている最初の Portal インスタンスの元の ias\_admin パスワードになります。」

次の説明に置換してください。

「OracleAS Portal には portal としてログインできます。これが OracleAS Infrastructure 10g を使用する OracleAS Portal の最初のインスタンスである場合、OracleAS Portal ユーザー・パスワードは portal10g になります。ただし、Infrastructure に関連付けられている OracleAS Portal インスタンスがすでに存在している場合、OracleAS Portal ユーザー・パスワードは、この OracleAS Metadata Repository に関連付けられている最初の OracleAS Portal インスタンスの ias\_admin パスワードになります。」

## インストール後の DAS の構成での手順の欠落

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 7.2.9 項「インストール後の Delegated Administration Service (DAS) の設定」には、欠落している手順があります。DAS を構成する前に、最初に mod\_osso を構成する必要があります。mod\_osso の構成手順については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の 12.9.1 項「mod\_osso の構成 (Oracle Delegated Administration Services に必要)」を参照してください。

## 「Metadata Repository リスナーの停止」手順のスペルの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 5.6.1 項「Metadata Repository Net リスナー・ポートの変更」の「手順 2 : Metadata Repository リスナーの停止」は、次のコマンドになっていました。

```
lsnrctl stop
```

正しくは、次のようになります。

```
lsnrctl stop
```

## 「Infrastructure サービスの変更」のコマンドの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の第 8 章「Infrastructure サービスの変更」の 8.6.4 項「手順」に誤りがあります。

- 作業 2 の手順 6 のコマンドライン

```
ORACLE_HOME/bin/rman target cmdfile=BACKUP_DIR/cold_backup.rcv > BACKUP_DIR/log_files/backup.log
```

正しくは、次のようになります。

```
ORACLE_HOME/bin/rman target / cmdfile=BACKUP_DIR/cold_backup.rcv >BACKUP_DIR/log_files/backup.log
```

- 作業 3 の手順 5 のコマンドライン

```
prompt> ORACLE_HOME/bin/rman cmdfile=BACKUP_DIR/restore.rcv > BACKUP_DIR/log_files/restore.log
```

正しくは、次のようになります。

```
prompt> ORACLE_HOME/bin/rman / cmdfile=BACKUP_DIR/restore.rcv >BACKUP_DIR/log_
files/restore.log
```

- 作業 5 の手順 6 の末尾に次の説明が必要です。

その他の古い db\_name インスタンスはすべて (instance\_name を除いて) 新しい db\_name に更新してください。特に、古い db\_name を含むディレクトリ・パスを更新する必要があります。

## LDAP ベースのレプリカのステップの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の F.2 項「LDAP ベースのレプリカのインストールとセットアップ」で、作業 6 のステップ 19 に「検証手順: DIP が正しく設定されていることを確認します。」とあります。ステップ 19 では、Application Server Control コンソールで、「ディレクトリ統合」ページにナビゲートするように指示されています。

これは誤りで、実際には、Oracle Internet Directory のホームページに進み、「ディレクトリ統合」をクリックする必要があります。

# 6

---

---

## コア・ドキュメント

この章では、Oracle Application Server のコア・ドキュメントに関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 使用可能なキャラクタ・セット
- `httpd.conf` ファイルの `ORACLE_HOME` 値を置換しないこと

### 使用可能なキャラクタ・セット

Oracle Enterprise Manager でコンポーネント識別名を選択する場合、あるいは `dcmctl` では、次のキャラクタ・セットから選択してください。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZabcdefghijklmnopqrstuvwxyz\_

### `httpd.conf` ファイルの `ORACLE_HOME` 値を置換しないこと

`/home/your_directory/orahome` に Oracle Application Server をインストールし、`/private/your_directory` へのリンクがある場合、`ORACLE_HOME` の各ファイルは `/home/your_directory/orahome` または `/private/your_directory/orahome` からアクセス可能です。インストールに続いて、`ORACLE_HOME` が `/home/your_directory/orahome` に格納され、`httpd.conf` ファイルには次のコード行が挿入されます。

```
include /home/your_directory/orahome/Apache/Apache/conf/dms.conf
```

`ORACLE_HOME` の指定を別のリンクまたは絶対パスに置換しないでください。

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の画面ダイアログの誤り
- Oracle Application Server 10g でサポートされない手順
- JServ サブレット・エンジンのポート変更手順の誤り
- Identity Management の Oracle HTTP Server (SSO) ポートの変更
- サポートされないレプリケーション・ベースの Identity Management トポロジ

### 『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の画面ダイアログの誤り

『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の 7.16 項の表 7-12、5 行目で、「Run `oraInstRoot.sh`」メッセージ・ダイアログの指示が「OK」をクリックになっていましたが、正しくは「続行」です。

### Oracle Application Server 10g でサポートされない手順

『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の 4.1.2 項には、メモリー使用量を減らすために Oracle Enterprise Manager の複数のインスタンスを同じコンピュータ上に統合できると記述されています。この手順は、このリリースの Oracle Application Server 10g ではサポートされていません。

### JServ サブレット・エンジンのポート変更手順の誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 5.3.11 項「JServ サブレット・エンジンのポートの変更」に記載されている手順には誤りがあります。次の手順に従ってください。

1. Oracle HTTP Server を停止します。

```
> opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```
2. 次のファイルを編集します。

```
ORACLE_HOME/Apache/JServ/etc/jserv.properties
```

3. port パラメータを新しいポート番号で更新します。
4. ファイルを保存します。
5. Oracle HTTP Server を再起動します。

```
> opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server
```

## Identity Management の Oracle HTTP Server (SSO) ポートの変更

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 5.6.3.1 項「Identity Management の Oracle HTTP Server 非 SSL リスナー・ポートの変更」の手順 7 の mod\_osso の再登録についての記述が不適切です。mod\_osso の再登録のためのコマンド・パラメータに誤りがあります。

正しいコマンドは次のとおりです。

Oracle HTTP Server (SSO) 非 SSL ポートを変更するときは、Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行し、mod\_osso を再登録します。

```
ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar
-oracle_home_path identity_management_oracle_home
-site_name identity_management_hostname:new_http_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-u user
```

Oracle HTTP Server (SSO) SSL ポートを変更するときは、Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行し、mod\_osso を再登録します。

```
ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar
-oracle_home_path identity_management_oracle_home
-site_name identity_management_hostname:new_https_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-virtualhost
-u user
```

## サポートされないレプリケーション・ベースの Identity Management トポロジ

『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 9 章の「複数のシングル・サインオン中間層、レプリケートされた Oracle Internet Directory」の項で説明している Identity Management トポロジはサポートされていません。

レプリケーションを使用しない Identity Management トポロジについては、『Oracle Application Server 10g 高可用性ガイド』を参照してください。



---

# Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに関する問題

この章では、Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタ（AFC）に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [一般的な問題と回避策](#)

## 一般的な問題と回避策

この項では、一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- AFC の全ノードの起動が必要となる中間層インストール
- Oracle Ultra Search クローラを使用するためのデータベース・インスタンスの構成
- ロード・バランサのフェイルオーバー
- リスナーのリモート登録に起因するロード・バランシングの失敗
- AFC と併用可能になっていない Oracle Enterprise Manager
- インストール・ホスト上でのみ有効な DAS
- OracleAS Single Sign-On での障害を防止するための JDBC パッチのインストール
- 手動によるファイルの同期
- 同期を妨げるベースライン構成ファイルの破損
- アクティブ・フェイルオーバー・クラスタのバックアップ / リカバリに関する考慮事項

### AFC の全ノードの起動が必要となる中間層インストール

Identity Management に登録されている Metadata Repository に対して AFC を使用する場合は、中間層インスタンスをインストールして Identity Management と AFC Metadata Repository を使用する前に、すべての AFC ノードでデータベースと Net リスナーが実行されていることを確認します。実行されていない場合、データベースが無効またはデータベースが実行されていないことを示すエラーが発生し、中間層インストールが失敗となります。

### Oracle Ultra Search クローラを使用するためのデータベース・インスタンスの構成

AFC のインストールでは、データベース・インスタンスの 1 つで実行するための Oracle Ultra Search クローラが構成されます。データベース・インスタンスの反応がなくなった場合は、同じデータベースの別のインスタンスを構成して Oracle Ultra Search クローラを使用する必要があります。

Oracle Ultra Search クローラを使用するデータベース・インスタンスを変更するには、新しいデータベース・インスタンスで次のコマンドを実行します。

---

---

**注意：** この操作には、wksys スキーマのパスワードが必要です。

---

---

```
SQL> @?/ultrasearch/admin/wk0reconfig.sql instance_name connect_url
```

- instance\_name には、Oracle Ultra Search クローラが常駐することになる新しいデータベース・インスタンスの名前を指定します。instance\_name は、次のコマンドを新しいデータベース・インスタンスで実行すると取得できます。

```
SQL> select instance_name from v$instance
```

- connect\_url には、指定したインスタンスへの接続を保証する JDBC 接続文字列を指定します。次に例を示します。

```
(DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=nodename)(PORT=listener_port)))(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=service_name)))
```

## ロード・バランサのフェイルオーバー

AFC でホストまたはプロセスの反応がなくなった場合は、ロード・バランサの再構成が必要です。ロード・バランサを再構成して、反応しなくなったホスト、または Oracle Internet Directory や Oracle HTTP Server のプロセスがリスニングしている特定ポートへの通信を停止してください。ほとんどのロード・バランサには、この処理を自動的に実行するように構成できる機能があります。この機能がシステムで使用しているロード・バランサにない場合は、手動で再構成できます。ロード・バランサの構成手順は、使用しているロード・バランサのドキュメントを参照してください。

## リスナーのリモート登録に起因するロード・バランシングの失敗

AFC でリモートによるデータベース・リスナーの登録を使用可能にすると、ログオン・アクティビティが過度な場合に、データベース接続に対するロード・バランシングが失敗となります。

リモートによるデータベース・リスナーの登録を使用禁止にする手順については、「[アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに対する Oracle Net Listener 相互登録の使用禁止](#)」を参照してください。

## AFC と併用可能になっていない Oracle Enterprise Manager

Oracle Enterprise Manager は、AFC と併用できるようになっていません。

Oracle Enterprise Manager を AFC と併用するには、次の項を参照してください。

- アクティブ・フェイルオーバー・クラスタでの OracleAS Infrastructure 10g インストールによる不正なホスト名の値
- emracutil スクリプトに含まれている不正なホスト名の値
- リモート・ホストの targets.xml に含まれている不正な ConnectDescriptor 情報

## インストール・ホスト上でのみ有効な DAS

AFC インフラストラクチャのインストールでは、Oracle Delegated Administration Service (DAS) はインストール・ホスト上でのみ有効になります。

他のホスト上で DAS を有効にするには、追加ホストごとに次の回避策を実行します。

1. 次のエントリを使用して、ldif (das\_enable.ldif) ファイルを作成します。

```
--- BEGIN LDIF file contents---
dn: cn=Associated Mid-tiers,orclApplicationCommonName=DASApp, cn=DAS,
cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
add: uniquemember
uniquemember: orclApplicationCommonName=InstanceName.node,cn=IAS
Instances, cn=IAS,cn=Products, cn=OracleContext
---END LDIF file contents-----
```

2. 次の ldapmodify コマンドを実行します。

```
ldapmodify -p OIDPort -h Load Balancer Name -D cn=orcladmin -w
Instance Password -v -f das_enable.ldif
```

DAS が追加ホスト上に構成されます。

## OracleAS Single Sign-On での障害を防止するための JDBC パッチのインストール

データベース・インスタンスまたはホストが反応しなくなった場合は、OC4J\_SECURITY インスタンスの OracleAS Single Sign-On によって、既存のデータベース接続が残りのデータベース・インスタンスに自動的にフェイルオーバーされます。

障害を防止するために、JDBC パッチ 2513420 および 3444173 をインストールしてください。これらのパッチは、JP Update CD に含まれています。

## 手動によるファイルの同期

AFC では、`afcctl` ユーティリティを使用して、あるホストの構成ファイルに対するすべての変更を、クラスタ内の別のホストの構成ファイルと同期させます。`afcctl` ユーティリティのインストール、構成および使用方法については、『Oracle Application Server 10g 高可用性ガイド』を参照してください。

ただし、`afcctl` ユーティリティは、AFC のホストの構成ファイルすべてを同期させるわけではありません。次のファイルは手動で同期させる必要があります。

- ORACLE\_HOME/dcm/config/dcm.conf
- ORACLE\_HOME/dcm/repository/cluster.bom
- ORACLE\_HOME/sysman/config/emd.properties
- ORACLE\_HOME/sysman/config/emiasconsole.properties
- ORACLE\_HOME/sysman/config/emiasconsolelogging.properties
- ORACLE\_HOME/sysman/emd/targets.xml
- ORACLE\_HOME/sysman/j2ee/config/em-app.xml
- ORACLE\_HOME/j2ee/home/config/jazn-data.xml
- ORACLE\_HOME/j2ee/home/config/jazn.xml
- ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_SECURITY

次のファイルは `afcctl sync` ユーティリティが起動されたときに常に同期されます。

- ORACLE\_HOME/config/ias.properties
- ORACLE\_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf
- ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml

## 同期を妨げるベースライン構成ファイルの破損

クラスタ環境で、ホスト A と、ホスト A から作成されたベースラインを持つホスト B を考えてみます。ホスト A の構成ファイルにいくつかの変更が発生し、後で `afcctl` コマンドを使用してホスト B と同期すると仮定します。その後で、ホスト A のバックアップを取る前にホスト A の Oracle ホームが破損した場合は、`afcctl` コマンドを使用してホスト B からホスト A を同期させる試みが失敗となります。

この問題を回避する手順は、次のとおりです。

1. ベースライン構成ファイルに使用するコンピュータの Oracle ホームを解凍します。
2. ホスト B から ORACLE\_HOME/config/afcctl.tm ファイルを削除します。
3. `afcctl` コマンドを使用してホスト A とホスト B を同期します。

## アクティブ・フェイルオーバー・クラスタのバックアップ/リカバリに関する考慮事項

AFC のバックアップとリカバリに関する次の考慮事項について説明します。

- ローカルでない RAC インスタンスのアーカイブ・ログへのアクセス
- RAC インスタンスでのアーカイブ・ログの有効化
- AFC ホストでの OPMN 管理プロセスの起動と停止

### ローカルでない RAC インスタンスのアーカイブ・ログへのアクセス

Real Application Cluster (RAC) データベースの各インスタンスのアーカイブ・ログは、ローカル・ファイル・システム、Cluster File System (CFS) または NAS でアクセスできます。RMAN には、データベースをバックアップするためにアーカイブ・ログに対するアクセス権が必要です。

1. 次のディレクトリを RAC のホストの 1 つに作成します。たとえば、ホスト 1 に作成します。

```
$ARC_DEST_DIR/arc_dest1
$ARC_DEST_DIR/arc_dest2
```

次のアーカイブ・ログの位置に注意してください。

- a. RAC インスタンスのローカル・ファイル・システム内のアーカイブ・ログ

LAN の範囲内に複数のホストがあるため、ホスト 1 の arc\_dest2 をホスト 2 の \$ARC\_DEST\_DIR/arc\_dest2 の NFS マウントにできます。

- b. CFS アーカイブ・スキーマ内のアーカイブ・ログ

手順 1 で作成されたディレクトリには、CFS に対する読取り / 書込みアクセス権が必要です。CFS 記憶域の位置に移動できるのは、アーカイブ・ログ・ファイルのみです。CFS への AFC Oracle ホームの格納はサポートしていません。

- c. リモート・ネットワークを介してマウントされたファイル・システム内のアーカイブ・ログ

手順 1 にリストされているディレクトリは、両方のホストに対して読取り / 書込みアクセス権を持つ NFS マウントです。

2. ホスト 2 に次のディレクトリ構造を作成します。

```
$ARC_DEST_DIR/arc_dest1
$ARC_DEST_DIR/arc_dest2
```

3. NFS によって、ホスト 1 の arc\_dest1 がホスト 2 にマウントされます。

4. spfile パラメータにエントリを作成します。

次の SQL コマンドを使用して、ホスト 1 に log\_archive\_destination を設定します。

```
SQL> alter system set log_archive_dest='$ARC_DEST_DIR/arc_dest1' scope=spfile sid='<sid of node1>';
```

次に例を示します。

```
SQL> alter system set log_archive_dest='/mnt/afc/OraDB2/dbs/arch1' scope=spfile sid='bkdb1';
```

### RAC インスタンスでのアーカイブ・ログの有効化

AFC でアーカイブ機能を使用可能にする手順は、次のとおりです。

1. SQL> alter system set cluster\_database=false scope=spfile;
2. shutdown immediate (両方のホスト) ;
3. startup mount;
4. alter database archivelog;
5. alter database open;
6. alter system set cluster\_database=true scope=spfile;
7. shutdown immediate;
8. startup (両方のホスト) ;

---

**注意：** RAC インスタンスがオープンしている場合にこれらの手順を実行すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

```
ERROR at line 1: ORA-01126: database must be mounted EXCLUSIVE and not open for this operation
```

---

### AFC ホストでの OPMN 管理プロセスの起動と停止

1. RAC の各ホストの OPMN は、次のコマンドを使用して停止します。

```
> opmnctl @instance:instance_on_node1:instance_on_node2 stopproc
```

次に例を示します。

```
opmnctl @instance:bkinst.hasun41:bkinst.hasun42 stopproc
```

2. RAC の各ホストの OPMN は、次のコマンドを使用して起動します。

```
> opmnctl @instance:instance_on_node1:instance_on_node2 startproc
```

次に例を示します。

```
opmnctl @instance:bkinst.hasun41:bkinst.hasun42 startproc
```

# 第III部

---

## J2EE、Web Services およびインターネット・アプリケーションに関する問題

第III部では、J2EE、Web サービスおよびインターネット・アプリケーションのコンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- [第8章「Oracle Application Server Web Services」](#)
- [第9章「Oracle Application Server Forms Services」](#)
- [第10章「Oracle Application Server Containers for J2EE の問題」](#)
- [第11章「Oracle HTTP Server」](#)
- [第12章「Oracle Application Server TopLink」](#)



---

# Oracle Application Server Web Services

この章では、Oracle Application Server Web Services (OracleAS Web Services) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [ドキュメントの誤り](#)

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [WSDL Analyzer についての参照部分の無視](#)
- [デモのリンクの誤った記載](#)

### WSDL Analyzer についての参照部分の無視

『Oracle Application Server Web Services 開発者ガイド』に WSDL Analyzer についての記載がありますが、WSDL Analyzer はリリースされていません。

WSDL Analyzer についてのすべての参照部分は、無視してください。

### デモのリンクの誤った記載

『Oracle Application Server Web Services 開発者ガイド』全体にわたって、デモのリンクに誤りがあります。

リンクの記載が次のようになっています。

[http://otn.oracle.com/sample\\_code/tech/java/web\\_services/content.html](http://otn.oracle.com/sample_code/tech/java/web_services/content.html)

正しくは次のとおりです。

<http://www.oracle.com/technology/tech/java/oc4j/demos/904/index.html>

---

# Oracle Application Server Forms Services

この章では、Oracle Application Server Forms Services (OracleAS Forms Services) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Application Server Forms Services に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 事前起動の Forms プロセス使用時における Enterprise Manager に関する既知の問題
- 904 BI-Forms で同じマシンの 902 インフラストラクチャを使用すると SSO 動的リソース作成に失敗する問題
- Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題

Oracle Forms Developer については、『Oracle Developer Suite リリース・ノート』を参照してください。

### 事前起動の Forms プロセス使用時における Enterprise Manager に関する既知の問題

Enterprise Manager では、em\_mode が 1 に設定されていると、事前起動のプロセスが表示されますが、これに関して既知の問題がいくつかあります。

プロセスは存在するが、そのプロセスにクライアントが連結されていない場合は、「ユーザー・セッション」ページの IP アドレスが空白になります。プロセスが連結されると、接続したクライアントの実際の IP アドレスではなく NULL が表示されます。

「接続時間」や「ユーザー ID」など、その他の列はすでに適切に更新されています。

クライアントが連結されていない事前起動のプロセスがある場合は、「ユーザー・セッション」ページでの検索機能が正常に実行されず、プロセスを検索してもすべて失敗します。クライアントが連結されていないプロセスを停止すると、検索機能は正常に実行されるようになります。

クライアントが連結されていないプロセスがある場合でも、列ヘッダーをクリックして実行するソート操作は正常に機能するため、特定のプロセスを検索する際の次善策としてこのソート操作を使用できます。

### 904 BI-Forms で同じマシンの 902 インフラストラクチャを使用すると SSO 動的リソース作成に失敗する問題

BI-Forms とインフラストラクチャを同じコンピュータにインストールした場合、Forms が OID にリダイレクトすると URL リライティングが機能しない場合があります。この場合、次のエラー・メッセージが表示されます。

FRM-92102: ネットワーク・エラーが発生しました。Forms クライアントはサーバーと 5 回の接続を試みましたが、成功しませんでした。

このエラーが発生するのは、同じマシンにインストールされた 9.0.2 インフラストラクチャに対して 9.0.4 Forms を実行し、Internet Explorer を使用している場合のみです。

ただし、ユーザーが既存の Forms 構成を指定せずに Forms を実行しようとする、Forms が OID にリダイレクトして、ユーザーはこの構成のリソースを動的に作成できます。この場合、リソースは OID によって適切に作成されますが、OID が Forms サーブレットにリダイレクトした後、Forms では接続に失敗します。ユーザーがこの時点で同じ URL をコピーして、別のブラウザで実行する場合、問題は発生しません。この問題が発生するのは 1 回かぎり、管理者が OID リソースを正しく作成した場合は、ユーザーがこの問題に遭遇することはありません。

同様に、OID (インフラストラクチャのインストールの一部) と BI-Forms を同じマシン上にインストールしていない場合も、この問題が発生することはありません。

### Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題

8.0.6 RSF の制限によって、Windows 上の Oracle Graphics 6i は 64 ビット・データベースに接続できません。したがって、Oracle Forms 10g (9.0.4) を使用して 64 ビット・データベースに接続し、Oracle Graphics と統合する場合は、Oracle Graphics 6i Home (Graphics のインストール先) をアップグレードして、Bug 3088708 の修正を含む RSF バージョンを含める必要があります。この RSF については、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

## ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Forms Services ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ](#)

### Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ

Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ・トピック「Forms Services の構成」および「複数の環境ファイルの構成」に、中間層プロセスは次の順序にする必要があることが記述されています。

```
emctl stop agent
emctl stop em
dcctl stop
opmnctl stopall
opmnctl startall
dcctl start
emctl start agent
emctl start em
```

正しい順序は次のとおりです。

```
emctl stop em (Stops em and the agent)
opmnctl stopall
opmnctl startall
emctl start em
```



# 10

---

## Oracle Application Server Containers for J2EE の問題

この章では、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) に関する問題について説明します。  
この章の内容は次のとおりです。

- 構成に関する問題と回避策
- JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート
- サーブレットに関するリリース・ノート
- EJB に関するリリース・ノート
- OC4J サービスに関するリリース・ノート
- OracleAS JAAS Provider に関するリリース・ノート
- ドキュメントの誤り

## 構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当が適切に行われない](#)
- [ライブラリの共有と使用](#)
- [起動クラスと停止クラスに関する考慮事項](#)
- [OC4J での JDK の使用](#)
- [OC4J デモのダウンロード](#)
- [OC4J 構成ファイルの編集後に表示される警告メッセージ](#)
- [OC4J オブジェクト名にはシングルバイトの英数字のみ使用可能](#)
- [Application Server のパスワードをリセットした後は OC4J の再起動が必要](#)
- [Oracle Application Server 10g には JDK 1.3.1.05 以上が必要](#)

### OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当が適切に行われない

Oracle Application Server 環境では、iiops1 と iiops2 のポート範囲を opmn.xml ファイルに明示的に指定する必要があります。

### ライブラリの共有と使用

この項では、ライブラリの共有と使用に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [ライブラリの共有](#)
- [無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下](#)
- [EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ](#)

#### ライブラリの共有

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、グローバルな application.xml ファイルに特定の library 要素を作成して、アプリケーションに必要なライブラリをロードすることをお勧めします。この方法は、希望の順序でライブラリを効率的にロードする方法としてお勧めします (ライブラリは、library 要素が検出された順序でロードされます)。

以前のリリースでは、ライブラリを j2ee/home/lib ディレクトリに格納でき、このディレクトリには、デフォルトで library 要素が application.xml ファイルに存在していたことに注意してください。このリリースでは、このディレクトリは OC4J システム・ライブラリ用に予約され、このディレクトリを指し示す library 要素はデフォルトでは application.xml ファイルに存在しません。汎用的なライブラリ位置を使用する場合は、j2ee/home/applib を使用してください。このリリースでは、デフォルトで、この位置を指し示す library 要素が application.xml に存在します。

ライブラリの共有に関する一般情報は、『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

#### 無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下

実行中のメモリー不足 (Bug 3090617)

OC4J プロセス・メモリーがプログラム実行中に増加し続ける場合は、グローバルな application.xml ファイル内の無効なシンボリック・リンクへの参照がある可能性があります。通常、この問題は、従来の Java オブジェクト・メモリー・リークで見られるように、Java オブジェクト・メモリーの増加ではなく、C ヒープの増加に伴って発生します。OC4J では、application.xml ファイル内のリンクを使用して、すべてのリソースをロードします。このリンクが無効な場合、C ヒープは増加し続けるため、OC4J でメモリー不足が発生します。すべてのシンボリック・リンクが有効であることを確認して、OC4J を再起動してください。

さらに、OC4J でロード対象として構成する JAR ファイルは、最低限の数に抑えてください。使用しないすべての JAR ファイルは、構成および OC4J で検索対象として構成されたディレクトリから削除してください。OC4J では、クラスとリソースのすべての JAR ファイルを検索するため、ファイル・キャッシュによって余分なメモリーとプロセッサ時間が消費されます。

application.xml ファイルの library 要素が、常駐するディレクトリではなく、必要な JAR ファイルや ZIP ファイルを個別に指し示している場合は、ロードを適切に制御できます。

### EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ

Enterprise Java Beans (EJB) JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ・クラスは、アプリケーションの orion-application.xml ファイルに明示的な library 要素が存在しないかぎり、OC4J でロードできません。この library 要素は、カスタム・ユーザー・マネージャ・クラスが格納された JAR ファイルを指し示す必要があります。カスタム・ユーザー・マネージャの解決とインスタンス化を可能にするには、次の例に示すように、必要な library 要素を作成します。

```
<orion-application ....>
  ...
  <library path="applications¥XmlnewsEar¥XmlnewsEjb.jar"/>
  ...
</orion-application>
```

## 起動クラスと停止クラスに関する考慮事項

- 起動メソッドと停止メソッドには、引数として渡される JNDI コンテキストを使用する必要があります。独自に作成することはできません。
- 停止クラスは、停止前にアンデプロイされるアーカイブ・ファイル (WAR および EAR) と区別する必要があります。
- OC4J では、起動クラスのインスタンス、および停止クラスのインスタンスを作成します。これらは、個別のインスタンスです。同じクラスで起動インタフェースと停止インタフェースを実装すると、OC4J ではそのクラスのインスタンスを 2 つ作成します。この場合、起動クラスと停止クラスの間で非静的フィールドを共有することはできません。

## OC4J での JDK の使用

この項では、OC4J での JDK の使用に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [サポートされる JDK バージョン](#)
- [JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行](#)
- [JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行](#)
- [IBM JDK 1.4.1 を使用した OC4J インスタンスのパフォーマンス・チューニング](#)

### サポートされる JDK バージョン

システムにインストールできるのは、1 つの Java Developer's Kit (JDK) のみです。OC4J でサポートされている次のバージョンであることを確認してください。

- JDK 1.3.1
- JDK 1.4.2

スタンドアロン OC4J に JDK は含まれていません。スタンドアロン OC4J を使用する場合は、独自に JDK をインストールする必要があります。

サプライヤによっては、製品に JDK が含まれている場合があります。その場合は、必要に応じて、古いバージョンを削除してサポートされているバージョンに置換し、環境変数を適切に更新します。PATH、CLASSPATH および LD\_LIBRARY\_PATH (または Windows では LIB) の各変数が、公式にサポートされているバージョンの JDK に設定されていることを確認してください。

## JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行

Java では、Java コードの JDK 1.4 でのコンパイルと JDK 1.3 での実行をサポートしていません (Bug 2811379)。これを試行すると、Java では実行時に次のいずれかのエラー・メッセージがスローされます。

- 「Unsupported major.minor version 48.0.」
- 「The major.minor version '48.0' is too recent for this tool to understand.」

ただし、JDK 1.4 を使用して生成したクラス・ファイルを、JDK 1.3 を使用して実行する必要がある場合は、次のコマンドを使用すると、JDK 1.3 と互換性のあるクラス・ファイルを JDK 1.4 コンパイラで強制的に生成できます。

```
% javac -target 1.3 hello.java
```

## JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行

JDK 1.3 から JDK 1.4 へのアップグレード時には、すべてのクラスをパッケージに格納してください。

JDK 1.4 仕様では、パッケージ内のクラスがパッケージ外のクラスを起動するのを明示的に禁じています。このため、JDK 1.3 でコンパイルされた Java ソース・コードは、JDK 1.4 ではコンパイルされません。このエラーは、次のコンパイラ・メッセージで識別されます。

```
'.' expected import myClass
```

このメッセージは、Java コンパイラはパッケージとクラス名を検出するが、クラス名のみは解析できないことを意味します。

詳細は、JDK に同梱されている Sun 社の互換性に関するドキュメントを参照してください。

## IBM JDK 1.4.1 を使用した OC4J インスタンスのパフォーマンス・チューニング

OC4J インスタンスのサーバー側のパフォーマンスを改善するには、初期ヒープ・サイズ (-Xms オプションで指定) を最大ヒープ・サイズ (-Xmx オプションで指定) と同じ値に設定します。これらの Java パラメータは OC4J 起動時に設定し、システムに十分なメモリーがあることを確認してください。

たとえば、Business Intelligence と Forms のインストールで OC4J\_Portal インスタンス用にシステムをチューニングする手順は、次のとおりです。

1. エディタで \$ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルを開いて、次のセクションを検索します。

```
<category id="start-parameters">
  <data id="java-options "value="-Djava.security.policy=<OH>/j2ee/OC4J_Portal/config/java2.policy -Djava.awt.headless=true -Xmx256m"/>
</category>
```

XML タグ <module-data> で囲まれたこのセクションは、OC4J\_Portal のプロセス・タイプの下にあります。

2. 次に示すように、-Xms256m Java オプションを追加します。

```
<category id="start-parameters">
  <data id="java-options "value="-Djava.security.policy=<OH>/j2ee/OC4J_Portal/config/java2.policy -Djava.awt.headless=true -Xmx256m -Xms256m"/>
</category>
```

3. OC4J\_Portal インスタンスを停止します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc process-type=OC4J_Portal
```

4. 再ロードを実行して、新しい構成を読み取ります。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl reload
```

5. OC4J\_Portal インスタンスを起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startproc process-type=OC4J_Portal
```

OC4J\_BI\_Forms インスタンスおよび OC4J\_home インスタンスについても、同様に構成を変更します。

## OC4J デモのダウンロード

Oracle Application Server 10g (9.0.4) には、コンポーネントごとに 1 つのデモが用意されています。追加のデモは、次の URL で OTN からダウンロードできます。

<http://otn.oracle.co.jp/tech/java/index.html>

この索引ページから、必要な追加のデモがあるコンポーネント領域にドリルダウンします。

## OC4J 構成ファイルの編集後に表示される警告メッセージ

次の OC4J 構成ファイルの編集後、「拡張サーバー・プロパティ」ページに自動再起動に関する警告メッセージが表示される場合があります。

- server.xml
- global-web-application.xml
- jms.xml
- rmi.xml
- default-web-site.xml

OC4J は、server.xml ファイルが変更された場合にのみ、再起動します。他の OC4J 構成ファイルでは、再起動することはありません。

次の OC4J 構成ファイルを変更するたびに、手動で OC4J サーバーを再起動することをお勧めします。

- global-web-application.xml
- jms.xml
- rmi.xml
- default-web-site.xml

## OC4J オブジェクト名にはシングルバイトの英数字のみ使用可能

次のオブジェクト名には、シングルバイトの英数字のみ使用できます。

- OC4J インスタンス名
- OC4J プリケーション名
- OC4J アイランド名
- ファーム名
- OracleAS クラスタ名

## Application Server のパスワードをリセットした後は OC4J の再起動が必要

Oracle Enterprise Manager を使用してユーザーのパスワードをリセットした場合、新しいパスワードは OC4J ですぐには取得されません。これらのユーザーとしてログインする前に、サーバーを再起動する必要があります。

## Oracle Application Server 10g には JDK 1.3.1.05 以上が必要

Oracle Application Server 10g には JDK 1.3.1.05 以上が必要です。これより前のバージョンの JDK を使用すると、ほとんどすべてのアプリケーションのデプロイ後に OPMN が常に OC4J を再起動します。

## JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート

この項では、JavaServer Pages (JSP)、タグ・ライブラリおよび関連デモに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- パッケージに含まれないクラスを起動できない
- OC4J 起動時における SAX ドライバの設定
- JSP ojspc の問題
- JESI タグに関するリリース・ノート
- タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置
- OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加
- ローカル・クラスを最初に検索
- java.lang.ClassFormatError: (切り捨てられたクラス・ファイル)
- タグ・ライブラリ・ディスクリプタのキャッシュおよび非ルート相対の taglib ディレクティブの uri 属性

### パッケージに含まれないクラスを起動できない

この問題は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) に同梱されている Sun 社の JDK 1.4 環境に移行する際、サーブレット開発者と JSP 開発者にとって特に重要な考慮事項です。

Sun 社が述べているように、コンパイラでは、不特定の名前空間から型をインポートするインポート文は拒否されます。この変更は、JDK の以前のバージョンでのセキュリティ上の問題とあいまい性に対処するための措置です。これは、パッケージに含まれていないクラス (クラスの方法) は起動できないことを示します。パッケージに含まれていないクラスを起動しようとする、コンパイル時に致命的エラーが発生します。

この問題は、特に、JSP ページから JavaBeans を起動する JSP 開発者に影響を与えます。このような Bean は、パッケージに含まれないことが多いためです (JSP 仕様 2.0 では、新しいコンパイラの要件を満たすために、Bean はパッケージ内に存在していることが要求されます)。パッケージに含まれない JavaBeans が起動されると、OC4J 9.0.3 / JDK 1.3.1 環境で作成および実行された JSP アプリケーションは、OC4J 9.0.4 / JDK 1.4 環境では動作しなくなります。

すべての JavaBean と起動されたその他のクラスがパッケージ内に含まれるようにアプリケーションを更新するまでは、JDK 1.3.1 環境に戻ることでこの問題を回避できます。

---

#### 注意:

- `$ORACLE_HOME/jdk/bin/javac -source` コンパイラ・オプションを使用すると、JDK 1.4 コンパイラで JDK 1.3.1 コードをシームレスに処理できますが、クラスを起動するにはそのクラスをパッケージに含める必要があります。
  - OC4J では、JDK 1.3.1 と JDK 1.4 コンパイラのみがサポートおよび認証されています。server.xml ファイルに `java-compiler` 要素を追加することで、別のコンパイラを指定できます。これがパッケージに含まれないクラスの問題に対する回避策になることもあります。OC4J とともに使用する場合、Oracle では他のコンパイラは認証またはサポートされていません。また、Oracle Application Server 環境では、server.xml ファイルを直接更新しないでください。更新する場合は、Oracle Enterprise Manager を使用してください。
- 

この問題については、次のリリース・ノートでも説明しています。「[JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行](#)」。パッケージに含まれないクラスの問題と JDK 1.4 の互換性に関する他の問題に関する詳細は、次の Web サイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4/compatibility.html>

「[Java 2 Platform, Standard Edition, v1.4.0 と v1.3 における非互換性](#)」のリンクをクリックしてください。

## OC4J 起動時における SAX ドライバの設定

JavaServer Pages 標準タグ・ライブラリ (JSTL) の XML タグのフィルタ機能を OC4J で使用可能にするには、OC4J の起動時に SAX ドライバを設定する必要があります。

スタンドアロン OC4J の起動時に、コマンドラインで次のオプションを使用します。

```
-Dorg.xml.sax.driver=oracle.xml.parser.v2.SAXParser
```

この設定は、Oracle Application Server の起動時にシステム・プロパティを使用して指定できます。この指定方法の詳細は、Oracle Application Server のドキュメントを参照してください。

このプロパティを設定しないと、JSTL のデモ Filter.jsp で次の例外が発生します。

```
javax.servlet.jsp.JspException: System property org.xml.sax.driver not specified
```

## JSP ojspc の問題

この項では、ojspc に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- `debug` オプションは ojspc の出力に影響を与えない
- `/WEB-INF/lib` や `/WEB-INF/classes` ディレクトリには `.java` ファイルを含めない

### debug オプションは ojspc の出力に影響を与えない

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、`ojspc -debug` オプションは ojspc の出力に影響を与えません。`-debug` オプションを指定した場合、このオプションは受け入れられますが無視されます。

### /WEB-INF/lib や /WEB-INF/classes ディレクトリには .java ファイルを含めない

ojspc を使用する場合は、`/WEB-INF/lib` ディレクトリや `/WEB-INF/classes` ディレクトリ内、またはこれらのディレクトリの下に `.java` ファイルを配置しないでください。

`/WEB-INF/lib` や `/WEB-INF/classes` ディレクトリに `.java` ファイルが含まれていると、ojspc では、バッチ事前変換時にトップレベルのアーカイブで 1 つ以上の `.class` ファイルを重複して作成する場合があります。

## JESI タグに関するリリース・ノート

この項では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) における Java Edge Side Includes (JESI) タグの動作の変更と拡張について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- JESI タグに対する条件付き処理が不要
- JESI `personalize` タグで一重引用符を追加
- インクルードされたページ内に `fragment` タグを配置可能
- 複数の `control` タグまたは `template` タグが使用可能
- `template` タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない
- 明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない

### JESI タグに対する条件付き処理が不要

以前のバージョンの JESI タグ・ライブラリでは、リクエストがブラウザなどのクライアントから直接発行されたか、または Oracle Web Cache から発行されたかに関係なく、JESI タグは常に同じ出力を生成しました。したがって、以前のバージョンのタグ・ライブラリでは、Oracle Web Cache が停止または使用不可になった場合、インクルードされたページまたはフラグメントがレスポンスに挿入されないため、JESI タグで特別な条件付き処理が必要でした。

OC4J 9.0.4 実装では、標準 JSP のインクルード機能を使用してフラグメントを挿入するため、Oracle Web Cache が使用できない場合でも、JESI タグは完全なレスポンスを正しく生成します。詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE JSP タグ・ライブラリおよびユーティリティ・リファレンス』を参照してください。

## JESI personalize タグで一重引用符を追加

OC4J 9.0.4 実装では、JESI personalize タグの default 属性または value 属性（下位互換性のため）の文字列値が一重引用符で囲まれます。この動作は、ESI 構文に準拠しています。Oracle Application Server 10g (9.0.4) より前のバージョンでは、ユーザーが、属性の文字列値を一重引用符で囲む必要がありました。9.0.4 実装より前のバージョンで使用していた personalize タグがページに含まれている場合は、余分な一重引用符を削除するように編集する必要があります。

## インクルードされたページ内に fragment タグを配置可能

fragment タグは、template タグ（インクルードするページ内に配置可能）内で引用符で適切に囲まれている場合、jsp:include 標準アクションを介してインクルードされたページ内に配置できるようになりました。

## 複数の control タグまたは template タグが使用可能

OC4J は、複数の control タグを検出しても例外をスローせず、余分な control タグや template タグを無視します。OC4J は、検出した最初のタグのみ実行します。この機能によって、複数の control タグを JSP のインクルードされたページに配置できます。独自の control タグまたは template タグを含むページに別のページがインクルードされると、2 番目のタグは無視されます。この場合、インクルードされたページは個別に実行できます。

次の 4 つの組合せがあり、それぞれの動作は次のとおりです。

- control タグの後に control タグを使用できます。2 番目の control タグは無視されます。
- control タグの後に template タグを使用できます。template タグの属性は無視されます。
- template タグの後に control タグを使用できます。control タグは無視されます。
- template タグの後に template タグを使用すると、エラーが発生します。

## template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない

OC4J 9.0.4 および OC4J 9.0.3 の実装では、template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がないことが必要です。さらに、開始タグと終了タグの外側にレスポンスへのコンテンツ出力がない場合は、インクルードされたページに template タグを配置できます。

## 明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない

明示的な ESI マークアップを JESI タグで使用して HTTP レスポンスを生成した場合、JESI タグ・ライブラリの正しい動作は保証されません。

## タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置

開発者は、以前の OC4J 実装での JSP 仕様に関係なく、タグ・ライブラリ・ディスクリプタに関する JSP 仕様を注意して遵守する必要があります。

既存の仕様では、タグ・ライブラリ・ディスクリプタは特定のアプリケーションの `application_root/WEB-INF/` の下のみ配置できます。

しかし実際にはこの仕様の要件にかかわらず、OC4J 9.0.4 実装（以前の実装も含めて）では、`application_root` の下の任意の位置にタグ・ライブラリ・ディスクリプタが配置されていました。

開発時の実装では、この仕様が厳密に適用されます。タグ・ライブラリ・ディスクリプタを配置できるのは、`WEB-INF` の下のみです。

この警告は、この OC4J 実装用に開発するコードが、将来アップグレードする際に変更の必要性がないことを確認できるように表示されます。

## OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加

OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを `/WEB-INF/lib` ディレクトリに追加する場合は、`ClassCastException` を回避するために、`tags_reuse_default` を `none` または `completetime` に設定してください。

## ローカル・クラスを最初に検索

タグ・ライブラリ JAR ファイルを、予約済の場所（グローバル・レベル）にある JAR ファイルのかわりにアプリケーション・レベルで使用する場合は、ローカル・クラスを最初に検索するようにアプリケーション・ローダーを設定する必要があります。これを設定するには、アプリケーションの `orion-web.xml` ファイルに次の値を設定します。

```
<web-app-class-loader search-local-classes-first="true" />
```

## java.lang.ClassFormatError: (切り捨てられたクラス・ファイル)

次の例に示す JSP エラー・メッセージは、切り捨てられたクラス・ファイルを示します。

このエラー・メッセージは、次の状況で発生する可能性があります。

- ポータル環境で JSP を使用している場合
- システムの負荷がかなり大きい場合

次のいずれかの方法でこのエラーを修正します。

- JSP ファイルにアクセスして、JSP を再コンパイルします。
- 破損したクラス・ファイルを削除します。次のエラー・メッセージ例では、このクラス・ファイルは `/modules/location/bizdir/jsp/bizdir.jsp` と示されています。

### 切り捨てられたクラス・ファイルのエラー・メッセージ例

```
500 Internal Server Error
OracleJSP:
JSP Error:
-----
Request URI:/modules/location/bizdir/jsp/bizdir.jsp
Exception:
java.lang.ClassFormatError: _location/_bizdir/_jsp/_bizdir (Truncated class file)
at java.lang.ClassLoader.defineClass0(Native Method)
at java.lang.ClassLoader.defineClass(ClassLoader.java:493)
at java.security.SecureClassLoader.defineClass(SecureClassLoader.java:111)
at oracle.jsp.app.JspClassLoader.loadClass(JspClassLoader.java:682)
at java.lang.ClassLoader.loadClass(ClassLoader.java:255)
...
```

## タグ・ライブラリ・ディスクリプタのキャッシュおよび非ルート相対の taglib ディレクティブの uri 属性

非ルート相対の taglib ディレクティブの uri 属性を使用するフォールバック・メカニズムは、tldcache がオンの場合に正しくサポートされません (Bug 3315924)。次に例を示します。

```
<taglib uri="../../../WEB-INF/foo.tld" ... %>
```

これは、非ルート相対の uri 属性です。

JSP 1.2 仕様より: JSP.7.3.2 TLD リソース・パス

フォールバック解釈は、Web アプリケーションの開発サイクルなどで一時的に使用することを目的としたメカニズムです。この場合、URI が TLD へのダイレクト・パスとして解釈されます (JSP.7.3.6.2 項を参照)。

回避策:

1. これを回避するには、次の例に示すように、`global-web-application.xml` または `orion-web.xml` のいずれかに属性 `jsp-cache-tlds="false"` を含めることによって、tldcache をオフにします。

```
<orion-web-app
jsp-cache-directory="/.persistence"
jsp-cache-tlds="false"
...
>
```

2. または、パフォーマンス向上のため `tldcache` をオンのままにする場合は、次の例に示すように `web.xml` にマップを作成できます。

```
<taglib>
  <taglib-uri>../WEB-INF/foo.tld</taglib-uri>
  <taglib-location>/WEB-INF/foo.tld</taglib-location>
</taglib>
```

この方法を選択する場合は、非ルート相対の `uri` 属性を設定した JSP を含むすべてのサブディレクトリについてマップを作成する必要があります。ただし、`.jsp` を変更する必要はありません。

もう 1 つの解決策は、JSP でルート相対パスを使用するように `.jsp` を変更する方法です。

通常は、`.jsp` の移動に関連する問題が発生するため、非ルート相対パスを本番環境で使用することはお薦めしません。

```
<@taglib uri="/WEB-INF/foo.tld" ... %>
```

## サーブレットに関するリリース・ノート

この項では、サーブレットに関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- [パッケージに含まれないクラスを起動できない](#)
- [開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能](#)
- [<orion-web-app> の一部の属性が使用不可](#)

### パッケージに含まれないクラスを起動できない

JDK 1.4 では、パッケージにないクラスからコールする場合、パッケージに含まれないクラスは起動できません。この問題の詳細は、JSP に関するリリース・ノート「[パッケージに含まれないクラスを起動できない](#)」を参照してください。

### 開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能

OC4J では、開発時の便利な機能の 1 つとして、クラス名別にサーブレットを起動できます。

この機能は、`http.webdir.enable` システム・プロパティ、または `global-web-application.xml` ファイルか `orion-web.xml` ファイルのいずれかにある `orion-web-app` 要素の `servlet-webdir` 属性を使用して制御します。

この機能の詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』を参照してください。

OC4J 9.0.4 実装では、デフォルト設定の `http.webdir.enable=true` および `servlet-webdir="/servlet/"` によって、サーブレットをクラス名別にデフォルトで起動できます。

本番環境では、`http.webdir.enable=false` または `servlet-webdir=""` (空の引用符) のいずれかを設定して、この機能を無効にする必要があります。

### <orion-web-app> の一部の属性が使用不可

OC4J 9.0.4 実装では、`<orion-web-app>` の属性として `internationalize-resources` および `default-mime-type` が `orion-web.dtd` ファイルに表示されます。ただし、これらの属性に関する説明はありません。使用しないでください。

## EJB に関するリリース・ノート

この項では、EJB に関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性
- MDB トランザクション・タイムアウト
- MDB `onMessage()` メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放
- `orion-ejb-jar.xml` ファイル変更時の考慮事項
- EJB の静的ブロック
- ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了
- EJB に関するその他のリリース・ノート

### クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性

EJB にアクセスするため、次の形式を使用してクライアントで URL を指定する場合、常にポート番号を指定する必要があります。

```
opmn:ormi://host:port:oc4j_inst/application
```

ポート番号を指定しないと、`oc4j_inst` はデフォルトで常に **home** インスタンスに設定されます。(Bug 3234351)。

### MDB トランザクション・タイムアウト

`orion-ejb-jar.xml` ファイルの `transaction-timeout` 属性に定義されている Message-Driven Bean (MDB) トランザクション・タイムアウトは、オプション・パラメータです。この属性は、Oracle Java Message Service (JMS) を使用するコンテナ管理の MDB トランザクションに対するトランザクション・タイムアウト時間 (秒単位) を制御します。デフォルトは 1 日 (86,400 秒) です。MDB の `transaction-timeout` 属性の適用対象は、Oracle JMS を JMS プロバイダとして使用する CMT MDB のみです。この属性設定は、BMT MDB、または OC4J JMS を使用する MDB には影響を与えません (Bug 3079322)。

- Oracle Application Server での JMS の動作: この時間枠内で完了していないトランザクションはロールバックされ、メッセージが Destination オブジェクトに再配信されます。Oracle JMS によるメッセージ再配信の試行後 (デフォルトの試行回数は 5 回)、このメッセージは例外キューに移動します。詳細は、『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - アドバンスド・キューイング』を参照してください。
- OC4J での JMS の動作: `transaction-timeout` 設定は、OC4J JMS を使用する CMT MDB では機能しません。タイムアウトは常に 1 日で、変更することはできません。タイムアウトが発生すると、OC4J JMS は、配信が完了するまで無期限にメッセージを再配信し続けます。再配信の制限は設定できません。

さらに、`server.xml` ファイルに定義されているグローバルな `transaction-timeout` 属性は、MDB に影響を与えません。

### MDB `onMessage()` メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放

Oracle JMS 用の JMS 接続は、`ejbCreate()` メソッドではなく、MDB `onMessage()` メソッドで作成および解放する必要があります (Bug 2967949)。

### `orion-ejb-jar.xml` ファイル変更時の考慮事項

アプリケーションを OC4J にデプロイ後、アプリケーションの `orion-ejb-jar.xml` ファイルを Oracle Enterprise Manager GUI を使用して変更する場合は、変更内容をアプリケーションに適用するため、OC4J を再起動する必要があります。

アプリケーションをスタンドアロン OC4J にデプロイ後、アプリケーションの `orion-ejb-jar.xml` ファイル内の一部の要素をテキスト・エディタを使用して変更する場合は、アプリケーションを再パッケージ化して、そのファイルをスタンドアロン OC4J (再起動不要) に再デプロイする必要があります。(Bug 3001543)。

## EJB の静的ブロック

OC4J での EJB デプロイ時には、コンテナが Bean クラスをロードしてそのメソッドを検索し、EJB ラッパーが生成されます。クラスのロード中に静的ブロック内のコードが実行されるため、JNDI 環境のコンテキストはまだ設定されていません。実行時でも、Bean は存在していない段階です。ライフ・サイクルのこの段階では、JNDI 環境コンテキストは未定義であるため、Bean プロバイダではこれを使用可能とみなすことができません。

コンテキストを使用可能にするには、Bean の構成時に、`ejbCreate()` メソッドまたは `setSessionContext()` メソッドでコンテキストを設定してキャッシュする必要があります。

## ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了

特定の状況下では、Oracle Application Server の OPMN プロセス監視ソフトウェアが OC4J プロセスとの接続を失う場合があります。この状態は、OC4J インスタンスが適切に機能していることを検証するために OPMN と OC4J で使用するハートビート・プロトコルで、予期しない遅延が発生したことが原因の可能性があります。

この問題が散発的に発生する場合は、後述する指示に従って、ping タイムアウト・パラメータの値を増やしてください。

ただし、リソースが常に不足しているためにこの問題が常に発生する場合は、使用可能なハードウェア・リソースを増やす必要があります。

この問題は、次の状況で発生する可能性があります。

- ホスト・プロセッサがオーバーロードの場合。
- 1 つ以上の計算集中型アプリケーションが OC4J インスタンスで実行されている場合。
- 大量 (数百) の EJB を持つアプリケーションがデプロイされている場合。大量のヒープのガベージ・コレクションが原因で、ガベージ・コレクション・フェーズ時に OC4J プロセスのレスポンス速度が低下する場合があります。このような動作は通常の使用では発生しませんが、大量の EJB を持つ大規模アプリケーションを、メモリーに制約がある環境にデプロイすると発生する場合があります。

OPMN と OC4J の間の ping プロトコルの動作は、`opmn.xml` 構成ファイルで構成できます。

ping プロトコルで指定したタイムアウト時間を OC4J が超過すると、プロセス監視ソフトウェアは、OC4J プロセスがレスポンスを停止したと判断して、その OC4J プロセスを終了します。

このような動作が Oracle Application Server で発生している可能性がある場合は、次の手順に従ってトラブルシューティングを行い対処してください。

1. OC4J インスタンスが原因不明のまま終了する場合は、最初に診断ロギング・レベルを増やして、ping の障害が終了の原因かどうかを判断します。
  - a. OPMN のロギング・レベルを 5 に増やして ping を調べます。  
opmn/conf/opmn.xml で、次の行を編集します。  

```
log-file path="$ORACLE_HOME/opmn/logs/ipm.log" level="5" ...
```
2. デーモンを再ロードします。  
opmn/bin/opmnctl reload
3. opmn/logs/ipm.log で次の行を調べます。  

```
Process Ping Failed: OC4J-instance name-default_island~1 (opmnmid)
```
4. 前述の行は、現行ホストのメモリーと CPU リソースが不十分であるため、現在指定されている ping タイムアウト時間 (OC4J のレスポンス速度を判断するために OPMN で使用される) 内で操作を実行できない可能性があることを示しています。

次のように設定を変更してください。

- a. `timeout` と `interval` の値を増やします。

例:

```
<ping timeout="60" interval="60"/>
<data id="reverseping-failed-ping-limit" value="5" />
```

5. デーモンを再ロードします。  
`opmn/bin/opmnctl reload`
6. 適切な OC4J インスタンスを再起動します。
7. タイムアウトの障害が発生したトップレベル操作を繰り返します。

## EJB に関するその他のリリース・ノート

EJB に関するその他のリリース・ノートは次のとおりです。

- コンテナ管理の永続性 (CMP) を持つ Entity Bean は、読取り専用でない別の Entity Bean とのコンテナ管理の関連性 (CMR) がある場合、読取り専用としてマークできません。
- EJB コンテナ以外のアプリケーション・クライアントから EJB を起動すると、その EJB に対する Java Authentication and Authorization Service (JAAS) はサポートされません。ただし、OC4J インスタンス内のサーブレットから EJB をコールする場合、JAAS はサポートされます。
- Bean が複数のラッパーと関連付けられている場合、コンテナは `EJBActivate()` メソッドを複数回コールする場合があります (Bug 3107168)。
- アプリケーションの EJB から別のアプリケーションの EJB にアクセスする場合、`RMIInitialContextFactory` オブジェクトは使用できません。この場合は、2つのアプリケーション間の親子関係を使用し、デフォルトの初期コンテキスト・ファクトリ・オブジェクトを使用する必要があります (Bug 2812150)。
- JTA 2 フェーズ・コミット (2pc) 機能は Oracle9i リリース 2 (9.2) では機能しません。2pc 機能を使用可能にするには、Oracle Database リリース 9.2.0.4 以上を使用してください (Bug 2668460)。
- 現在、`orion-ejb-jar.xml` ファイルに定義する `finder` 問合せ文字列内では、インライン SQL 問合せがサポートされていません。`finder` 問合せを変更するときは、次のようなインライン SQL 問合せは使用しないでください。

```
SELECT * FROM
  (SELECT * FROM TEST1) A,
  (SELECT * FROM TEST2) B WHERE A.ID =B.ID
```

## OC4J サービスに関するリリース・ノート

この項では、OC4J サービスに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [JNDI に関するリリース・ノート](#)
- [Java Object Cache \(JOC\) に関するリリース・ノート](#)
- [OC4J データソースに関するリリース・ノート](#)

## JNDI に関するリリース・ノート

この項では、Java Naming and Directory Interface (JNDI) に関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- [JNDI クラスタリング: サポート外のクライアントからのバインド値](#)
- [IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させない](#)

### JNDI クラスタリング: サポート外のクライアントからのバインド値

JNDI クラスタリングでは、次の両方の条件に当てはまる場合を除き、クライアント（新規の InitialContext など）からバインドされたクラスタリング値をサポートしません。

- クライアントが、ルックアップ URL を使用して値を JNDI にバインドしていること。
- すべてのサーバーが起動していること。

### IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させない

この項では、Internet Inter-ORB Protocol (IIOP) に関するリリース・ノートを示します。

IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させないでください。Internet Inter-ORB Protocol (IIOP) を使用して OC4J が他の J2EE サーバーと通信中の場合は、すべてのサーバーで同じバージョンの JDK を使用する必要があります。

## Java Object Cache (JOC) に関するリリース・ノート

この項では、Java Object Cache (JOC) に関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- JOC 構成で `javacache.xml` を使用

### JOC 構成で `javacache.xml` を使用

OC4J 9.0.4 実装では、JOC 構成で `javacache.xml` ファイルを使用します。以前のバージョンの JOC では、`javacache.properties` ファイルを使用して構成を行っていました。

---

---

**注意：** 同じホスト上に 9.0.4 リリースと 9.0.4 以前のリリースをインストールしている場合は、`javacache.xml` `discovery-port` 属性と `javacache.properties` `discoveryAddress` 属性が同じポートに構成されていないことを確認してください。同じポートに構成されている場合は、いずれかの値を別のポート番号 (7000 ~ 7099) に手動で変更する必要があります。

---

---

## OC4J データソースに関するリリース・ノート

この項では、OC4J データソースに関するリリース・ノートについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- エミュレートされていないデータソースに必要な Java 対応データベース

### エミュレートされていないデータソースに必要な Java 対応データベース

エミュレートされていないデータソースを実行する場合は、Java 対応のデータベースを使用する必要があります。

エミュレートされていないデータソースと Java 非対応のデータベースを使用すると、MDB アプリケーション (AQJMS) をデプロイした場合に例外が発生します (OC4J `stdout` がスローされます)。エミュレートされているデータソースあるいは Java 対応のデータベースに切り替えると、デプロイが正常に行われます。

## OracleAS JAAS Provider に関するリリース・ノート

リリース 9.0.4 で OracleAS JAAS Provider を使用する場合は次の項に注意してください。

- OracleAS JAAS Provider での 9.0.4 Oracle Internet Directory Server の使用

## OracleAS JAAS Provider での 9.0.4 Oracle Internet Directory Server の使用

9.0.4 Oracle Internet Directory の実装においては、Access Control List (ACL) は JAZNAdminGroup に対して正しく設定されていません。OracleAS JAAS Provider で 9.0.4 Oracle Internet Directory の実装を使用するには、次のコンテンツをファイルに置き、`%s_MgmtRealmDN%` を適切な ID 管理レルム（たとえば `dc=us`、`dc=oracle`、`dc=com`）に置換し、後に続く手順を実行します。

```
dn: cn=JAZNContext,cn=Products,cn=OracleContext,%s_MgmtRealmDN%
changetype: modify
replace: orclaci
orclaci: access to entry
    by group= "cn=JAZNAdminGroup,cn=Groups,cn=JAZNContext,cn=Products,cn=OracleContext"
(browse, add, delete)
    by group= "cn=IASAdmins,cn=Groups,cn=OracleContext,%s_MgmtRealmDN%"
added_object_constraint=(objectclass=orclApplicationEntity) (add, delete, browse)
    by * (none)
orclaci: access to attr=(*)
    by group= "cn=JAZNAdminGroup,cn=Groups,cn=JAZNContext,cn=Products,cn=OracleContext"
(search, read, write, compare)
    by group= "cn=IASAdmins,cn=Groups,cn=OracleContext,%s_MgmtRealmDN%"
(read, search, write, compare)
    by * (none)
```

1. ファイルに `.ldif` 拡張子を付けます（たとえば `jaznacl.ldif`）。
2. 新規作成したファイルを入力として `ldapmodify` ユーティリティを実行し、`oidport`、`oidhost`、`adminuser_dn`、`password` および `filename` を指定します。

```
ldapmodify -a -p oidport -h oidhost -D adminuser_dn -w password \
-f filename.ldif
```

## ドキュメントの誤り

この項では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の OC4J ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 『Oracle Application Server Containers for J2EE サブレット開発者ガイド』の誤り
- 『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の誤り
- 『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の誤り
- 『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の誤り
- `ssoInfo` デモのログイン・ユーザー名の変更
- SSL 構成に関する訂正
- LDAP の `location` 属性を `jazn.xml` または `orion-application.xml` に設定しない
- Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK1.4
- サード・パーティ製データベースに対して修正された JDBC 接続文字列

## 『Oracle Application Server Containers for J2EE サブレット開発者ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE サブレット開発者ガイド』で、6-6 ページにある次の記述が誤っています。

「注意: OC4J JSP コンテナは `persistence-path` フラグを現在サポートしていません。このフラグはサブレット専用です。」

実際は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の JSP コンテナは、このフラグをサポートしています。

## 『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の第2章の「Oracle HTTP Server と mod\_oc4j」の項にある次の記述が誤っています。

「mod\_oc4j モジュールは、必要に応じて、OC4J インスタンスを自動的に再起動できます。」

実際は、OC4J プロセスがなんらかの理由で使用不可になったことが検出されると、mod\_oc4j ではなく OPMN が自動的に OC4J プロセスを再起動します。

## 『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の付録 A 「追加情報」には、次の情報がありません。「server.xml ファイルの <application-server> 内に含まれる要素」の項には、metric-collector 要素に関する次のテキストが含まれている必要があります。

metric-collector

この metric-collector 要素は、OC4J が 0 ~ 100 のメトリックを mod\_oc4j に送信するように指定します。これによって、mod\_oc4j はルーティングを決定して、使用可能な OC4J インスタンスへの受信リクエストのロード・バランシングを実行できます。送信されるメトリックは相対値のみで、0 (ゼロ) は OC4J インスタンスが非常にビジーであることを示し、100 は OC4J インスタンスが使用可能である (ビジーではない) ことを示します。mod\_oc4j は、メトリック・ロード・バランシング用に構成されている場合、値が大きい OC4J インスタンスに最初にルーティングします。

OC4J から mod\_oc4j に送信されたメトリックが使用されるのは、メトリック・ベースのロード・バランシングが mod\_oc4j で指定され、OC4J が Oracle Application Server 環境で稼働している場合のみです。

メトリック・ベースのロード・バランシングを mod\_oc4j で指定し、server.xml の metric-collector 要素を指定しないと、mod\_oc4j は OC4J がメトリックを送信すると想定しますが、OC4J はメトリックを送信しません。この場合、mod\_oc4j は次の警告メッセージをレポートします。

```
No run time metrics for oc4j(opmid=%s) in notification Oc4jSelectMethod is configured to use run time metrics, please make sure OC4J side is configured accordingly. Default to 50.
```

また、この場合、mod\_oc4j は、各 OC4J プロセスについてメトリック値 50 を使用して処理を継続します。

同様に、server.xml の metric-collector 要素を指定し、メトリック・ベースのロード・バランシングを mod\_oc4j で指定しないと、OC4J はメトリックを送信しますが、mod\_oc4j はメトリックを受信するように構成されていません。この場合、mod\_oc4j はメトリックを無視し、ロード・バランシング用に構成されたメソッドを使用します。Oc4jSelectMethod を使用して、ロード・バランシング用のメソッドを指定します。Oc4jSelectMethod を指定しないと、mod\_oc4j はデフォルトの roundrobin を使用します。

metric-collector 要素は、classname 属性を取ります。

classname 属性は、サーバー全体のメトリックを収集して計算するインタフェースを定義します。DMS 名詞ベースのメトリック・コレクタを使用する場合は、classname 属性の oracle.oc4j.server.DMSMetricCollector を使用してください。DMSMetricCollector インスタンスでは、いくつかのパラメータを取得します。使用可能なパラメータ値の詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

次に例を示します。

```
<metric-collector classname="oracle.oc4j.server.DMSMetricCollector">
  <init-param>
    <param-name>
      dms-noun
    </param-name>
    <param-value>
      /oc4j/default/WEBs/processRequest.time
    </param-value>
  </init-param>
  <init-param>
    <param-name>
```

```

        history-proportion
    </param-name>
    <param-value>
        0.2
    </param-value>
</init-param>
<init-param>
    <param-name>
        debug
    </param-name>
    <param-value>
        false
    </param-value>
</init-param>
</metric-collector>

```

metric-collector 要素の使用方法、および mod\_oc4j でのメトリック・ベースのロード・バランシングの使用方法については、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

## 『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の「JNDI クラスタリング」の項にある次の記述が誤っています。

「JNDI クラスタリングが有効化されている場合は、1つのサーバー上でシリアライズ可能な値をアプリケーション・コンテキストに（リモート・クライアント、EJB またはサーブレットを介して）バインドし、それを別のサーバー上で読み取ることができます。また、この方法でサブコンテキストを作成したり破棄することもできます。」

OC4J 10g (9.0.4) では、サブコンテキストの破棄はまだサポートされていません。

## ssolInfo デモのログイン・ユーザー名の変更

ssolInfo デモで認証に使用するユーザー名が「admin」から「adminuser」に変更されました。ユーザー名に「admin」を使用すると、認証に失敗します。

## SSL 構成に関する訂正

『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の第3章「JAAS Provider の構成とデプロイ」の「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の項で、ldap.protocol プロパティを ssl に設定する指示が誤っています。

SSL を介して OID と通信するかどうかを判断するために、Oracle JAAS は \$ORACLE\_HOME/config/ias.properties ファイルの SSLOnly プロパティを調べます。この情報は、インストール時または Oracle Enterprise Manager を介して、中間層がインフラストラクチャに関連付けられるときに ias.properties ファイルに設定されます。

## LDAP の location 属性を jazn.xml または orion-application.xml に設定しない

『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の第3章「JAAS Provider の構成とデプロイ」にある3つの構成例には不要な設定が含まれているため、削除する必要があります。

特に、ldap の location 属性は、\$ORACLE\_HOME/j2ee/home/config/jazn.xml ファイルまたは orion-application.xml ファイルに設定する必要はありません。

JAAS は、LDAP ベースのプロバイダの location プロパティを \$ORACLE\_HOME/config/ias.properties から読み込みます。この情報は、インストール時または Oracle Enterprise Manager を介して、中間層がインフラストラクチャに関連付けられるときに ias.properties ファイルに設定されます。

このため、jazn.xml ファイルまたは orion-application.xml ファイルの jazn タグに location プロパティは必要ありません。

『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の第3章「JAAS Provider の構成とデプロイ」にある次の構成例を訂正してください。

- 「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の構成例の訂正
- 「キャッシングの構成 (LDAP ベース・プロバイダのみ)」の構成例の訂正

### 「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の構成例の訂正

「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の項にある2つの構成例で、次のようにコードを変更してください。

次のコードを置き換えます。

```
< jazn provider="ldap" location="ldap://pixcn-sun.us.oracle.com:5000" >
```

正しい記述は次のとおりです。

```
<jazn provider="ldap"/>
```

### 「キャッシングの構成 (LDAP ベース・プロバイダのみ)」の構成例の訂正

「キャッシングの構成 (LDAP ベース・プロバイダのみ)」の項の最後にある構成例を次のように変更してください。次のコードを置き換えます。

```
< jazn provider="LDAP" location="ldap://example.com:389" >
```

正しい記述は次のとおりです。

```
<jazn provider="ldap"/>
```

## Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK1.4

『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の「OC4J の概要」の「OC4J の通信」の「要件」の項の次の文には誤りがあります。

最適なパフォーマンスのためには、Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2) とともにインストールされる JDK、つまり JDK 1.3.x を使用して OC4J を実行してください。

正しい記述は次のとおりです。

パフォーマンスを最適化するためには、Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK (JDK 1.4.x) で OC4J を実行する必要があります。

## サード・パーティ製データベースに対して修正された JDBC 接続文字列

『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の「データ・ソース」の章の「DataDirect のデータ・ソース・エントリ」で、例に記載された URL に誤りがあります。

現在、URL は次のように表記されています。

```
url="jdbc:ベンダー名://...
```

正しい URL は次のようになります。

```
url="jdbc:oracle:ベンダー名://..."
```

したがって、DataDirect のデータ・ソース・エントリは次のようになります。

### SQLServer

SQLServer データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```
<data-source
    class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
    name="OracleDS"
    location="jdbc/OracleCoreDS"
    xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
```

```

    ejb-location="jdbc/OracleDS"
    schema="database-schemas/ms-sql.xml"
    connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver"
    username="mssql"
    password="mssql"
    url="jdbc:oracle:sqlserver://PZWU-PC\WUPZIAS;User=mssql;Password=mssql"
    inactivity-timeout="30"
  />

```

## DB2

DB2 データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```

<data-source
  class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
  connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.db2.DB2Driver"
  name="OracleDS"
  location="jdbc/OracleCoreDS"
  xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
  ejb-location="jdbc/OracleDS"
  schema="database-schemas/db2.xml"
  username="db2admin"
  password="db2admin"
  url="jdbc:oracle:db2://
    ying.us.oracle.com:50000;DatabaseName=sample;CreateDefaultPackage=TRUE"
  inactivity-timeout="30"
/>

```

## Sybase

Sybase データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```

<data-source
  class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
  name="OracleDS"
  location="jdbc/OracleCoreDS"
  xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
  ejb-location="jdbc/OracleDS"
  schema="database-schemas/sybase.xml"
  connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.sybase.SybaseDriver"
  username="JDBC_TEST"
  password="JDBC_TEST"
  url="jdbc:oracle:sybase://dlsun150:4101"
  inactivity-timeout="30"
/>

```

## Informix

Informix データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```

<data-source
  class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
  name="OracleDS"
  location="jdbc/OracleCoreDS"
  xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
  ejb-location="jdbc/OracleDS"
  schema="database-schemas/informix.xml"
  connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.informix.InformixDriver"
  username="tg4odbc"
  password="tg4odbc"
  url="jdbc:oracle:informix://
    dlsun150:3900;informixServer=gtw93;DatabaseName=gatewaydb"
  inactivity-timeout="30"
/>

```



# 11

---

---

## Oracle HTTP Server

この章では、Oracle HTTP Server に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [OC4J プラグインのスタンドアロンとコア・インストールでの使用方法](#)
- [mod\\_oc4j と mod\\_jserv を同時に使用する際の制限](#)
- [AIX での Oracle Application Server Proxy Plug-in の使用](#)
- [mod\\_oprocmgr の有効化](#)

## OC4J プラグインのスタンドアロンとコア・インストールでの使用方法

OPMN がない OC4J スタンドアロン製品で OC4J プラグインを使用する場合、その OC4J プラグインで使用できるのは、特定のホストとポートへの静的ルーティングのみで、OC4J は AJP を使用するよう構成する必要があります。ホストとポートとの静的ルーティングを使用すると、次のような Oc4jMount ディレクティブのみがサポートされます。

```
Oc4jMount /j2ee/* ajp13://localhost:6001,localhost:6002
```

AJP を OC4J 構成で使用可能にするには、OC4J 構成の default-web-site.xml ファイル内に次のような行が存在する必要があります。

```
<web-site port="3000" protocol="ajp13" display-name="OracleAS Java Web Site">
```

port の値は、この OC4J プロセスが着信 AJP リクエストをリスニングするポートを指定します。

## mod\_oc4j と mod\_jserv を同時に使用する際の制限

mod\_oc4j と mod\_jserv は両方ともサブレット・コンテナに対するリクエストをルーティングするため、単一の Oracle HTTP Server インスタンス内で両方を実行するように構成する際は注意が必要です。特に、mod\_jserv の ApjServAction ディレクティブは、ルーティングの問題が発生する場合があります。そのため、使用しないでください。たとえば、このディレクティブの使用時に .jsp で終わるすべてのリクエストのマッピングが含まれていると、Oc4jMount ディレクティブを介して OC4J で処理される予定であったリクエストが、誤って mod\_jserv にルーティングされる場合があります。

## AIX での Oracle Application Server Proxy Plug-in の使用

Oracle Application Server CD Pack に含まれる Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities CD-ROM に、Proxy Plug-in が提供されています。このプラグインの構成については、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の付録 A および次の README ファイルを参照してください。

```
cd_mount_point/utilities/plug_ins/sunone/oc4j/README  
cd_mount_point/utilities/plug_ins/sunone/osso/README  
cd_mount_point/utilities/plug_ins/sunone/proxy/README
```

## mod\_oprocmgr の有効化

mod\_oprocmgr を有効にするには、少なくとも 1 つの非 HTTPS ポートを Oracle HTTP Server 用に有効にする必要があります。

## 構成に関する問題と回避策

この項では、構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle HTTP Server (1.0.2.2.x) を Oracle Application Server (9.0.4.x) で使用できない問題
- `mod_plsql` 構成ファイルの手動による編集
- 無効な `mod_plsql` 構成ファイルが Oracle Enterprise Manager インタフェースに表示されない問題
- FastCGI ソケット・パスの長さエラー
- ポート・トンネリングまたは `mod_oc4j` での SSL を使用可能にした後に Oracle HTTP Server が起動しない問題
- `mod_jserv` を使用可能にする場合の ApJServManual 設定情報

## Oracle HTTP Server (1.0.2.2.x) を Oracle Application Server (9.0.4.x) で使用できない問題

Oracle は、Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2.x) で提供される Oracle HTTP Server を、Oracle Application Server 10g (9.0.4.x) で提供される OC4J へのフロントエンドとして使用することはサポートしていません。これら 2 つのコンポーネント間でデータをルーティングするときは、`mod_proxy` を使用しないでください。

Oracle Application Server 10g (9.0.4.x) で提供される OC4J との間でデータをルーティングする場合は、常に `mod_oc4j` を使用してください。Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2.x) で提供される Oracle HTTP Server コンポーネントと、Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2.x) で提供される OC4J との間でデータをルーティングする場合は、`mod_proxy` モジュールを使用してください。

## mod\_plsql 構成ファイルの手動による編集

`mod_plsql` 構成ファイルの `ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/dads.conf` または `ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/cache.conf` を編集する場合は、次の手順に従って DCM と Oracle Enterprise Manager を同期化する必要があります。

- コマンドラインで `$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl -updateConfig -co HTTP_Server` を実行します。
- Application Server Control を再起動すると、Oracle Enterprise Manager の `mod_plsql` 管理で変更内容が認識されます。
- Oracle HTTP Server を再起動すると、構成ファイルに対する変更内容が認識されます。

## 無効な mod\_plsql 構成ファイルが Oracle Enterprise Manager インタフェースに表示されない問題

Application Server Control を使用して `mod_plsql` ファイルを構成し、検証時にそのファイルが破損したか、または無効な構文が含まれている場合は、Oracle Enterprise Manager に構成データが表示されません。実行する構成操作はありません。

## FastCGI ソケット・パスの長さエラー

ほとんどのプラットフォームでは、FastCGI が使用するソケットのパスは最大 108 文字に制限されています。次のようなエラーが発生した場合は、`FastCgiIpcDir` ディレクティブを使用して、108 文字より大幅に短いパス名 (`/tmp` など) を指定します。

```
Thu Oct 16 12:55:06 2003] [error] [client 148.87.9.44] [ecid: 82608810576,1]
FastCGI: failed to connect to (dynamic) server
"/opt/oracle/inst/Apache/Apache/fcgi-bin/echo": path
"/opt/oracle/inst/Apache/Apache/logs/fastcgi/dynamic/aac1cec5416b961cf002c5526b4159"
is too long for a Domain socket
```

## ポート・トンネリングまたは mod\_oc4j での SSL を使用可能にした後に Oracle HTTP Server が起動しない問題

ポート・トンネリング (iASPT) または mod\_oc4j での SSL を使用可能にするように構成を変更すると、変更後の Oracle HTTP Server が起動しない場合があります。この問題の解決方法は次のとおりです。

- 推奨する解決方法 : mod\_perl が不要な場合は、httpd.conf から LoadModule perl\_module libexec/libperl.so 行をコメント・アウトしてこれを使用不可にします。
- mod\_perl が必要な場合は、Sun 社の最新パッチ・セットを実行していることを確認し、mod\_perl の LoadModule 行を httpd.conf にある mod\_oc4j.conf のインクルードの後まで移動します。

## mod\_jserv を使用可能にする場合の ApJServManual 設定情報

mod\_jserv を使用可能にする場合、ApJServManual ディレクティブがオフモードで機能するのは、Apache が opmncctl ではなく apachectl start を使用して起動された場合のみです。

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [メトリック・ベースのロード・バランシングに関する追加情報](#)
- [IIS 用の匿名アクセスの構成](#)
- [Sun ONE での OC4J プラグインの構成の手順における誤り](#)
- [プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成の手順における誤り](#)
- [Oracle ではサポートされていないモジュールの記述の誤り](#)

## メトリック・ベースのロード・バランシングに関する追加情報

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「Oracle HTTP Server のモジュール」の章に、メトリック・ベースのロード・バランシングに関する記述があります。このトピックに関する追加情報は、『Oracle Application Server 10g リリース・ノート』の「OC4J」の章および『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## IIS 用の匿名アクセスの構成

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の付録「Oracle Application Server Containers for J2EE Plug-in の使用」に、IIS 用の匿名アクセスを構成するための次の情報を追加してください。

OC4J で認証を実行する場合は、次の手順を実行してください。

1. 「IIS Management GUI」で、デフォルトの Web サイトをクリックし、「Properties」を選択します。
2. 「Directory Security」タブを選択し、「Anonymous Access and Authentication Control」の下にある「Edit」ボタンをクリックします。「Anonymous access」がチェックされ、「basic authentication」と「integrated Windows Authentication」が両方ともチェックされていないことを確認します。

---

**注意：** IIS で認証を実行し、単にユーザー名を OC4J に渡す場合は、IIS で認証を使用不可にしないでください。

---

## Sun ONE での OC4J プラグインの構成の手順における誤り

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の付録「Oracle Application Server Containers for J2EE Plug-in の使用」の「Sun ONE での OC4J プラグインの構成」の項における次の記述に誤りがあります。

1. `/sunone/https-mymachine/magnus.conf` の末尾に次の行を追加します。

```
Init fn="load-modules" shlib="/sunone/opii.so" funcs=oppi_init,  
oppi_objecttype,oppi_service,oppi_child_init
```

正しくは次のとおりです。

```
Init fn="load-modules" shlib="/sunone/opii.so" funcs=oppi_init,  
oppi_objecttype,oppi_service,oppi_child_init
```

2. `/sunone/https-mymachine/obj.conf` を次のように変更します。

- a. `ObjectType` 行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=oppi_objecttype
```

- b. 次のような `Service` 行を追加します。

```
Service Type="oracle/opii" fn="oppi_service" UserOutPutStreamSize = 8192
```

正しくは次のとおりです。

- a. `ObjectType` 行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=oppi_objecttype
```

- b. 次のような `Service` 行を追加します。

```
Service type="oracle/opii" fn="oppi_service"
```

---

---

**注意：** パフォーマンスを最適化するために `UseOutputStreamSize` を使用する必要がある場合があります。詳細は、Sun ONE Web Server のマニュアルを参照してください。

---

---

## プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成の手順における誤り

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の付録「Oracle Application Server Proxy Plug-in の使用」の「プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成」項の手順 4 における次の記述に誤りがあります。

`obj.conf` ファイルの `Object name=default` セクションで、`ObjectType` で始まる他のすべての行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=op_objecttype UseOutputStreamSize=8192
```

正しくは次のとおりです。

`obj.conf` ファイルの `Object name=default` セクションで、`ObjectType` で始まる他のすべての行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=op_objecttype
```

## Oracle ではサポートされていないモジュールの記述の誤り

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「Oracle HTTP Server のモジュール」の章には、次のモジュールは Oracle ではサポートされていないと記述されていますが、これは誤りです。

`mod_asis`

`mod_auth_dbm`

`mod_cern_meta`

`mod_example`

`mod_imap`

`mod_log_agent`

`mod_nmap_static`

これらのモジュールは現在 Oracle でサポートされています。

---

---

## Oracle Application Server TopLink

この章では、Oracle Application Server TopLink (OracleAS TopLink) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS TopLink に関する一般的な問題とその回避策について説明します。

---

---

**注意：** この項は、サポートされるすべてのプラットフォームに適用されません。OracleAS TopLink ではファイル・パスおよびスクリプト名がすべてのプラットフォームで同じです。この項では Windows のファイル・パス・セパレータ（¥）をデフォルトで使用します。必要に応じて使用しているプラットフォームに適したファイル・パス・セパレータに置き換えてください。

---

---

この項の内容は次のとおりです。

- [新しいパッケージ名](#)
- [API の変更](#)
- [OracleAS TopLink の例](#)
- [BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 での EJB QL 解析と JSP 実行](#)
- [XML パーサーの依存性](#)
- [UTF-8 エンコードの例外](#)
- [SAXParseException のエラー・メッセージ](#)
- [OracleAS TopLink の使用 : 右から左へ記述する言語を使用する Web クライアント](#)
- [データベースとの通信が失われた後はプリコンパイルされた SQL 文の実行に失敗する問題](#)
- [OracleAS TopLink を IBM WebSphere 5.1 とともに使用](#)
- [クラスタリングを使用した検出機能の使用](#)
- [OracleAS TopLink Mapping Workbench](#)

### 新しいパッケージ名

リリース 2 (9.0.3) 以降、構造全体のベース・パッケージは `oracle.toplink` になりました。パッケージ名変更ツールを使用して、既存のアプリケーション・ソース・コードをアップグレードし、リリース 2 (9.0.3) より前のバージョンを参照する OracleAS TopLink Mapping Workbench のプロジェクトをアップグレードしてください。

---

---

**注意：** 以前のバージョンからリリース 2 (9.0.3) にアップグレードする場合は、プロジェクトを OracleAS TopLink 10g (9.0.4) でオープンする前にパッケージ名を変換する必要があります。

---

---

パッケージ名変更ツールの詳細は、『Oracle Application Server TopLink スタート・ガイド』を参照してください。

### API の変更

10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink の API が次のように変更されました。

- `DatabasePlatform.initializePreallocatedSequences()` のかわりに `DatabaseSession.getSequencingControl().initializePreallocated()` を使用してください。
- `DatabasePlatform.setUsesNativeSequencing(boolean)` は INTERNAL とマークされているため、ユーザーは使用できません。かわりに、`DatabaseSession.getSequencingControl().shouldUseNativeSequencing()` および `shouldUseTableSequencing()` を使用してください。

- `oracle.toplink.tools.codegen` が変更されました。既存のコードを維持するには、次を使用してください。
  - `AttributeDefinition` のかわりに、`ReflectiveAttributeDefinition` を使用してください。
  - `MethodDefinition` のかわりに、`ReflectiveMethodDefinition` を使用してください。追加のコード定義の実装は、`NonreflectiveMethodDefinition` および `NonreflectiveAttributeDefinition` に含まれています。
- `RemoteCORBAConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。
- `RemoteEJBConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。
- `RemoteJMSConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。
- `RemoteRMICConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。

## OracleAS TopLink の例

EJB 1.1 CMP Single Bean の例を BEA WebLogic 6.1 を使用して Sybase SQL Server で実行しようとする  
と、Sybase は SQL エラーをスローします。

## BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 での EJB QL 解析と JSP 実行

OracleAS TopLink 10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink が、ANTLR 2.70 に対して構築と解析を実行します。BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 には、ANTLR 2.72 が同梱されています。BEA WebLogic 8.1 SP1 を使用し、同じアプリケーションで OracleAS TopLink EJB QL 解析と JSP 実行を同時に使用すると、ANTLR のバージョン間の非互換性のために解析の問題が発生します。この項の内容は次のとおりです。

- [EJB QL 解析](#)
- [JSP 実行](#)

### EJB QL 解析

JSP を同時に実行せずに、BEA WebLogic 8.1 SP1 を使用して OracleAS TopLink EJB QL 解析を使用するには、`antlr.jar` ファイル (OracleAS TopLink のインストールで提供されるバージョン 2.70) をクラスパスの最初の項目として配置してください。

### JSP 実行

EJB QL を同時に使用せずに、BEA WebLogic 8.1 SP1 を使用して OracleAS TopLink で JSP を実行するには、`antlr.jar` ファイル (バージョン 2.70) をクラスパスから削除してください。

## XML パーサーの依存性

この項では、XML パーサーの依存性の問題について説明します。

- [OC4JXML パーサーの依存性](#)
- [Crimson XML パーサーの問題](#)

### OC4JXML パーサーの依存性

デフォルトでは、OC4J および OracleAS TopLink は両方とも Oracle XML Parser for Java v2 を使用します。OC4J と OracleAS TopLink を同時に使用する場合は、両方とも同じバージョンの Oracle XML Parser for Java v2 を使用していることを確認してください。バージョンが異なると、XML 解析に失敗してアプリケーション・エラーが発生する場合があります。

## Crimson XML パーサーの問題

Crimson (<http://xml.apache.org/crimson/>) は、Java 2 Platform, Standard Edition (J2SE) および一部の JAXP リファレンス実装で提供される XML パーサーです。

JAXP API を持つ Crimson を使用して、システム識別子が完全修飾 URL でない XML ファイルを解析すると、XML 解析に失敗して not valid URL 例外が発生します。

他の XML パーサーは、システム識別子 URL が具体的に参照されるまで、その妥当性チェックを遅延します。

この問題が発生する場合は、次のいずれかの処置を実行してください。

- 完全修飾のシステム識別子 URL が XML ファイルで使用されていることを確認します。
- 別の XML パーサー (Oracle XML Parser for Java v2 など) を使用します。

## UTF-8 エンコードの例外

10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink がサポートするのは UTF-8 エンコードのみです。UTF-8 以外にフォーマットされた XML ファイルを読み取ろうとすると、OracleAS TopLink の例外であるエラー・コード 9006 とともに SAXParseException が発生します。

## SAXParseException のエラー・メッセージ

- 「The markup in the document preceding the root element must be well-formed.」
- 「Start of root element expected.」

いずれかの例外が発生した場合は、UTF-8 エンコードの問題かどうかを調べてください。

## OracleAS TopLink の使用 : 右から左へ記述する言語を使用する Web クライアント

OracleAS TopLink: Web クライアントは、右から左へ記述する一部の言語のテキストを正しく表示できません。

## データベースとの通信が失われた後はプリコンパイルされた SQL 文の実行に失敗する問題

文キャッシュを使用するようにログインまたは問合せを構成し、データベースとの通信が失われた後にリストアすると、以前にキャッシュされた文の実行に失敗する場合があります。

たとえば、例外ハンドラを定義してセッションに登録するには、`Session.setExceptionHandler()` を使用するのが一般的な方法です。例外ハンドラを起動して失われた通信を処理し、そのハンドラがデータベースとの接続を再確立すると、以前にキャッシュした文の再実行に失敗します。

## OracleAS TopLink を IBM WebSphere 5.1 とともに使用

OracleAS TopLink を WebSphere Application Server 5.1 とともに使用するときは、`PARENT_FIRST` に設定したクラス・ローダー・モードを使用してアプリケーションを構成およびデプロイすることをお勧めします。

アプリケーションを `PARENT_LAST` に設定したクラス・ローダー・モードを使用して構成する必要がある場合は、次のいずれかを選択します。

- `JAVA_HOME/lib/jaxp.properties` ファイルを削除 (または名前を変更) します。`JAVA_HOME` は、通常 `WebShpere_Install/java/jre` です。
- WebSphere インストールに含まれる `xerces` ライブラリを、同じ共有ライブラリの `xmlparserv2.jar` の後に配置します。このファイルは、`WebShpere_Install/java/jre/lib/xml.jar` にあります。

## クラスタリングを使用した検出機能の使用

クラスタリングを使用した検出機能は、JMS を使用する ClusteringService でのみサポートされます。キャッシュの同期化には、ClusteringService ではなく、新しいリモート・コマンド・マネージャ (RCM) を使用してください。

## OracleAS TopLink Mapping Workbench

この項では、OracleAS TopLink Mapping Workbench 10g (9.0.4) の問題について説明します。

- Oracle Database の指定
- 以前のバージョンからのプロジェクトの移行
- Microsoft Windows と ATI ビデオ・カードでの JDK の問題
- マッピングされたネットワーク・ドライブの Windows XP での使用
- JAWS の使用
- アイコン・サイズ
- 大規模なクラスパスの参照
- ソース・コードの生成
- 複数レベルの結合
- サポートされない JRE
- 無効な警告メッセージ
- 配列型属性の不適切な set メソッド
- 式ビルダーでの取消しによって問合せが変更される問題
- 主キー・フィールドへの複数のマッピングが OracleAS TopLink Mapping Workbench での ejb-jar.xml ファイルの生成方法に影響を与える問題
- コード生成されたプロジェクト・クラスでは式のすべての型の文字列値を使用

### Oracle Database の指定

このリリースでは、Oracle9i および Oracle8i データベース固有の新しいプラットフォーム・ファイルが導入されました。以前のリリースには、汎用の Oracle データベース・プラットフォーム・ファイルが含まれていました。汎用の Oracle データベース・プラットフォームを使用する OracleAS TopLink Mapping Workbench 9.0.3 プロジェクトをインポートするときは、次の手順を実行します。

1. 「データベース」プロパティ・シートで、「Oracle8i」または「Oracle9i」のいずれかをデータベース・プラットフォームとして選択します。プロジェクトで Oracle8i より前のデータベースを使用している場合は、「Oracle」を選択します。詳細は、『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』の「データベースに対する作業」を参照してください。

---

---

**注意：** OracleAS TopLink Mapping Workbench を Oracle Database 10g とともに使用する場合は、「Oracle9i」を選択してください。

---

---

2. プロジェクトを保存して閉じ、次にそのプロジェクトを再度オープンします。

### 以前のバージョンからのプロジェクトの移行

OracleAS TopLink Mapping Workbench のプロジェクトをバージョン 3.6 より前のバージョンから移行する場合は、次のサイトからオラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

<http://metalink.oracle.com>

## Microsoft Windows と ATI ビデオ・カードでの JDK の問題

Microsoft Windows プラットフォームでは、J2SE 1.4.1 の Java 2D 機能が原因でシステム・フェイル（青色の画面になる）が発生する可能性があります。JDK 1.4.1\_02 ではこの不具合は修正されていますが、Java 以外の一部のアプリケーションではシステム・フェイルが発生する場合があります。OracleAS TopLink Mapping Workbench の実行時にこの問題が発生する場合は、ATI ドライバを更新してください。

特定のカードの最新ドライバは、通常、使用しているコンピュータ、ビデオ・カードまたはビデオ・チップ・メーカーの Web サイトから取得できます。詳細は、次の Web サイトで J2SE 1.4.1 のドキュメントを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4.1/relnotes.html>

## マッピングされたネットワーク・ドライブの Windows XP での使用

マッピングされたネットワーク・ドライブを Microsoft Windows XP プラットフォームで使用すると、OracleAS TopLink Mapping Workbench のファイル選択用ダイアログ（「ファイルの保存」や「ファイルを開く」など）でディレクトリ・ツリーのオープンや横断を行う際に、応答速度が低下する場合があります。このような動作を回避するため、ネットワーク・ドライブのマッピングを解除してください。

## JAWS の使用

JAWS 4.5.1 の制限によって、OracleAS TopLink Mapping Workbench の入力フィールド・ラベルが正しく表示されません。アクセス可能性を最大にするには、JAWS 3.7 および Access Bridge バージョン 103 の使用をお勧めします。

## アイコン・サイズ

OracleAS TopLink Mapping Workbench のツールバーのアイコン・サイズを変更すると、アプリケーションが次回起動したときに失敗する場合があります。workbench.xml ファイルを編集して、small-icon="false" を "true" に変更する必要があります。

## 大規模なクラスパスの参照

大規模ディレクトリ（ルート・ディレクトリなど）または .jar ファイルをプロジェクトのクラスパスで参照すると、「クラスの選択」ダイアログの応答速度がかなり遅くなり、パフォーマンスが低下する場合があります。

## ソース・コードの生成

記述子のソース・コードを生成し、OracleAS TopLink Mapping Workbench が新しいソース・コードを書き込む前にプロセスを取り消した場合は、ソース・コードが正常に更新されたことを示すダイアログが表示されます。しかし、実際には、プロセスを取り消すと、OracleAS TopLink Mapping Workbench は既存のコードを上書きしません。

10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink Mapping Workbench はインナー・クラスのコード生成をサポートしません。

BLOB を含む表からソース・コードを生成すると、生成された Java コードには、型定義とメソッド・パラメータのエラーが含まれる場合があります。このエラーは、ソース・コードを編集して削除する必要があります。

## 複数レベルの結合

OracleAS TopLink Mapping Workbench で 1 対 1 マッピングに対して「結合の使用」を選択すると、誤った SQL が生成され、NULL のインスタンスが SQL から戻されます。

### 例 12-1 複数レベルの結合

**Customer** は、1 対 1 マッピングによってリンクされた 3 つのオブジェクトからなります。

**Customer** は **Address** にリンクされ、**Address** は **Country** にリンクしています。

各クラスは異なる表にマッピングされ、**Customer** は CUSTOMER 表に、**Address** は ADDRESS 表に、**Country** は COUNTRY 表にマッピングされています。

「結合の使用」オプションを使用すると、OracleAS TopLink Mapping Workbench は誤った問合せを生成します。

リレーションシップを正しく結合するには、次の構文を使用します。

```
readAllByExample.addJoinedAttribute("address");  
readAllByExample.addJoinedAttribute(tpBuilder.get("address").get("country"));
```

## サポートされない JRE

OracleAS TopLink Mapping Workbench は Sun JRE 1.4 とともに使用しないでください。サポートされているプラットフォームの詳細は、『Oracle Application Server TopLink スタート・ガイド』を参照してください。

## 無効な警告メッセージ

OracleAS TopLink Mapping Workbench では、可変 1 対 1 マッピングを作成するとき、次の警告メッセージが誤ってステータス・バーに表示される場合があります。

「次の指定された問合せ名は、もう有効ではありません : xxx」

xxx は、マッピングの「問合せキーの関連付け」タブで指定した問合せキーの名前です。この警告は、無視しても安全です。

書込み可能マッピングと集計マッピングを同じフィールドに関連付けると、次の OracleAS TopLink Mapping Workbench 警告メッセージが表示される場合があります。

「次のフィールドには複数の書込み可能マッピングがあります : フィールド名」

実際には集計マッピングによってフィールドに書き込まれない場合（たとえば、フィールドがターゲット外部キー参照の一部として使用されている場合）、この警告は無視しても安全です。

## 配列型属性の不適切な set メソッド

OracleAS TopLink Mapping Workbench では、配列型属性の適切な set メソッドを生成しません。

## 式ビルダーでの取消しによって問合せが変更される問題

OracleAS TopLink Mapping Workbench の式ビルダーを使用しているときは、取消しを選択して変更内容を破棄しても、問合せが誤って変更される場合があります。

たとえば、ネストされた複合問合せを作成し、その複合問合せを削除するように問合せを編集したとします。次に、この変更内容を破棄するために「取消」を押しても、変更内容が誤って適用されます。この問題が発生した場合は、問合せを再度編集して、誤って削除された複合コンポーネントを置換する必要があります。

## 主キー・フィールドへの複数のマッピングが OracleAS TopLink Mapping Workbench での ejb-jar.xml ファイルの生成方法に影響を与える問題

OracleAS TopLink Mapping Workbench を使用して EJB 2.0 CMP Bean 記述子を作成するときは、Bean の主キー・フィールドへの複数のマッピングを作成しないでください。この記述子に主キー・フィールドへの複数のマッピングが含まれている場合、フィールドへの必要な直接マッピングは、記述子内の主キーへの最後のマッピングであることが必要です。最後のマッピングでない場合、OracleAS TopLink Mapping Workbench は主キー・フィールド要素を ejb-jar.xml ファイルに書き込めません。

たとえば、記述子に主キーに対するフィールドへの直接マッピングが含まれ、主キーを外部キーとして使用する 1 対 1 マッピングが後に続いている場合、主キー・フィールド要素は ejb-jar.xml ファイルに書き込まれません。

## コード生成されたプロジェクト・クラスでは式のすべての型の文字列値を使用

OracleAS TopLink Mapping Workbench で式を定義するときは、リテラル値の型を選択できます。プロジェクトの Java ソースをエクスポートする場合、すべてのリテラル値は文字列型として書き込まれます。

たとえば、LONG 型のリテラル値 (100000) を指定して問合せを定義し、プロジェクトの Java ソースをエクスポートする場合、このリテラル値は文字列型として書き込まれます。

**例 12-2 エクスポートされたプロジェクトの Java ソースの間合せ**

```
ReadObjectQuery namedQuery0 = new
ReadObjectQuery(examples.sessions.threetier.model.Employee.class);
namedQuery0.setName("testQuery");
...
namedQuery0.setSelectionCriteria(expBuilder0.get("salary").equal("100000"));
descriptor.getQueryManager().addQuery("testQuery", namedQuery0);
```

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [OracleAS TopLink の Web クライアントの構成](#)
- [OracleAS TopLink Mapping Workbench のチュートリアル](#)

## OracleAS TopLink の Web クライアントの構成

『Oracle Application Server TopLink アプリケーション開発者ガイド』の「Web Client の構成」の項に記述されている web.xml ファイルの正しいパスは、`ORACLE_HOME¥toplink¥config¥toplinkwc` です。

Web クライアントを Oracle Application Server Containers for J2EE とともに使用するときは、ドキュメントに示されている `ORACLE_HOME¥toplink¥examples¥oc4j¥904¥server¥` のかわりに、ローカルの `J2EE_HOME` ディレクトリを指定してください。

BEA WebLogic をデプロイするには、次に示すように、`ORACLE_HOME¥toplink¥config¥toplinkwc¥weblogic.xml` ファイルにこのデータ・ソースへの参照を定義する必要があります。

```
<reference-descriptor>
  <resource-description>
    <res-ref-name>jdbc/DataSourceName</res-ref-name>
    <jndi-name>jdbc/DataSourceName</jndi-name>
  </resource-description>
</reference-descriptor>
```

「アプリケーション・サーバーの構成」の項に記述されている、`toplinkwc.ear` をアプリケーション・サーバー固有のディレクトリにコピーする手順説明の最初のステップは必要ありません。`ORACLE_HOME¥toplink¥bin` ディレクトリ内の `assembleWebClient` スクリプトを実行すると、`build.properties` ファイルに指定されているように、`toplinkwc.ear` ファイルがアセンブルおよびデプロイされます。

## OracleAS TopLink Mapping Workbench のチュートリアル

『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』のチュートリアルを実行する際は、次の変更にご注意してください。

- 順序を使用する場合は、OracleAS TopLink Mapping Workbench から順序表を作成するのに加えて、データベースにも順序表を作成する必要があります。
- 順序表を作成するとき、`SEQ_NAME` と `SEQ_COUNT` のサイズには両方とも **38** を使用してください。
- `BaseProject` 記述子の継承を実装するときは、「間合せでのサブクラスの読取り」オプションが選択されていることを確認してください。
- 図 B-49 で、`BaseProject` クラスのインジケータ・タイプが誤って欠落しています。`BaseProject` は抽象クラスのためインジケータ値は必要ありませんが、「継承」タブには表示されています。

# 第IV部

---

## Oracle Application Server Portal の問題

第IV部では、Oracle Application Server Portal (OracleAS Portal) に関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- [第13章「Oracle Application Server Portal」](#)
- [第14章「Oracle Ultra Search」](#)
- [第15章「Oracle Application Server Syndication Services」](#)



---

---

## Oracle Application Server Portal

この章では、Oracle Application Server Portal (OracleAS Portal) に関する問題について説明します。  
この章の内容は次のとおりです。

- 構成に関する問題と回避策
- UI に関する問題と回避策
- OmniPortlet、シンプル・パラメータ・フォーム、Web クリッピング・ポートレットに関する問題と回避策
- 検索に関する問題と回避策
- PDK に関する問題と回避策
- NLS に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal の構成に関する問題とその回避策について説明します。

- 「Portal サービスの監視」リンクが動作しない
- 「Portal の Web Cache 設定」ページが正しく動作しない
- oc4j.properties に手動で設定する必要のある oracle.http.configfile プロパティ
- Federated Portal Adapter を SSL に関連付けるリライト規則の誤り
- 同一ホスト上の 2 つの Oracle HTTP Server にログインする際の問題
- OracleAS Web Cache の SSL を使用可能にしているサイトでの OracleAS Portal ターゲットの監視

### 「Portal サービスの監視」リンクが動作しない

OracleAS Portal の「Portal サービスの監視」リンクを使用すると、ポータルを監視および管理している Oracle Enterprise Manager Application Server Control に直接アクセスできます。このリンクは、次の場合に誤って構成されることがあります。

- Application Server Control の「Portal の Web Cache 設定」ページを使用して OracleAS Web Cache 構成を変更した場合
- ptlconfig スクリプトの `-site` モードを使用した場合

これらの場合、Application Server Control のポートが 1810 にハードコーディングされるため、リンクが動作しません。

また、Oracle Application Server のインスタンス名にアンダースコア '\_' が含まれている場合も、「Portal サービスの監視」リンクは動作しません。

回避策として、次のスクリプトを実行してください。

```
$ORACLE_HOME/portal/conf/ptlconfig -dad dad name -em
```

このスクリプトを実行すると、正しいポートを使用するようにリンクがリストアされます。「Portal サービスの監視」リンクをリフレッシュするには、OracleAS Portal コンテンツの OracleAS Web Cache と File System Cache の両方を消去する必要があります。

- OracleAS Web Cache を消去する手順：
  - 「サービス」ポートレットで「グローバル設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
  - 「キャッシュ」タブをクリックし、「Web Cache 全体を消去」を選択します。
  - 「適用」または「OK」をクリックしてキャッシュを消去します。
- File System Cache を消去する手順：
  - OracleAS Portal の File System Cache をクリーンアップします。この作業では、`Apache/modplsql/cache` ディレクトリ下の中間層 Oracle ホーム内にあるすべてのファイルとディレクトリを 1 つずつ削除していきます。キャッシュのディレクトリを直接削除しないでください。
  - OracleAS Portal リポジトリにアクセスする中間層が複数ある場合は、前述の手順を各中間層ごとに実行します。
  - `PortalListeningHostPort` の値を `http://host:port` に変更します。

`Apache/modplsql/cache` ディレクトリのデフォルト位置は、`Apache/modplsql/conf/cache.conf` ファイルの `PlsqlCacheDirectory` エントリの構成設定でわかります。デフォルト位置が変更されている場合は、そのディレクトリ下のファイルをすべてクリーンアップしてください。

## 「Portal の Web Cache 設定」 ページが正しく動作しない

Oracle Enterprise Manager Application Server Control の「Portal の Web Cache 設定」 ページでは、OracleAS Portal で使用される OracleAS Web Cache の設定を指定できます。ただし、ホストやポート番号の変更など、他の構成変更と同時に「リスニング・ポート SSL 使用可能」 プロパティを変更した場合、このページで行われた構成変更はターゲットに反映されません。この結果、Application Server Control でポータル ホームページ・ダウンロードのメトリックが失敗します。

使用可能な回避策は次の 2 通りあります。

- 1 番目の回避策では、Oracle Enterprise Manager 内の問題は解決されますが、手順 1 と手順 2 の間で短時間ですが OracleAS Portal が停止します。
  1. 「Portal の Web Cache 設定」 ページで、ポート・プロパティのみを別のポート番号に設定し、「OK」をクリックします。
  2. 「Portal の Web Cache 設定」 ページを再度オープンし、ポート・プロパティのみを実際のポート番号に設定し、「OK」をクリックします。
- 2 番目の回避策では、OracleAS Portal が停止することはありませんが、構成ファイルを手動で編集する必要があります。

1. 変更前に、\$MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/sysman/emd/targets.xml をバックアップします。
2. 次の例に示すプロパティに正しいホストおよびポートの詳細が設定されるように \$MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/sysman/emd/targets.xml を編集し、保存します。

```
<Property NAME="PortalListeningHostPort" VALUE="myportal.us.oracle.com:8000"/>
```

このプロパティは、TYPE="oracle\_portal" で始まるセクションの下にあります。適切な設定を選択（つまり <Property NAME="portal\_DAD" VALUE="portal"/> が更新を必要とするポータル・アプリケーションと一致）していることを確認してください。

3. ターゲットを Oracle Enterprise Manager に再ロードします。

```
$MID_TIER_ORACLE_HOME/bin/emctl reload
```

## oc4j.properties に手動で設定する必要のある oracle.http.configfile プロパティ

Oracle Application Server Portal Developer Kit のインストール時に、oc4j.properties の oracle.http.configfile プロパティは自動的に設定されません。したがって、oc4j.properties ファイルを手動で更新する必要があります。このファイルの場所は、次のとおりです。

- UNIX の場合 :ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_Portal/config/oc4j.properties

次の行を追加し、Oracle ホームへの正しい絶対パスに置き換えられるようにします。

```
oracle.http.configfile=ORACLE_HOME/portal/conf/cache.xml
```

## Federated Portal Adapter を SSL に関連付けるリライト規則の誤り

『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』では、Federated Portal Adapter を SSL に関連付ける方法について説明しています（6.3.2.1.4 項「OracleAS Portal 全体にわたる SSL」）。この項で説明されているリライト規則に誤りがありました。portal.conf ファイルからリライト規則をコピーするのではなく、MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/Apache/Apache/conf ディレクトリにある ssl.conf ファイルの仮想ホスト・セクションで次の行を追加または編集する必要があります。

```
RewriteEngine On
```

```
RewriteOptions inherit
```

```
</VirtualHost>
```

## 同一ホスト上の2つの Oracle HTTP Server にログインする際の問題

Infrastructure インストールと Portal and Wireless 中間層インストールが1台のコンピュータにある場合など、1台のコンピュータで2つの Oracle HTTP Server を実行しているとき、Microsoft Internet Explorer Web ブラウザでは OracleAS Portal にログインできません。この動作は Internet Explorer バージョン 5.5 および 6.0 で確認されています。OracleAS Single Sign-On サーバーが使用するポートから OracleAS Web Cache が使用するポートにブラウザ・リダイレクトが発行されるときに、この問題が発生します。OracleAS Web Cache のポートは Oracle9iAS Portal の背後に位置します。Internet Explorer はリダイレクトを受け取ると、Host: ヘッダーを宛先ポートではなく最初のポートによって誤って設定します。

Internet Explorer でこのエラーが発生した場合、ログインの試行後に次のメッセージのいずれかが表示されることがあります。

エラー : wwsec\_app\_priv.process\_signon で予期しないエラーが発生  
(ORA-06502: PL/SQL: 数値または値のエラー : 文字列バッファが小さすぎます)  
(WWC-41417)

または

エラー : 認証情報の解読に失敗しました。  
原因は、データが破損しているか、このアプリケーション構成の暗号化キーが不正であるか、不正なアクセスが試みられたためと考えられます。  
管理者に通知してください。(WWC-41454)

Internet Explorer は SSL モードおよび非 SSL モードにおいて Host: ヘッダーを誤って設定しますが、問題が発生するのは SSL モードの場合のみです。これは、OracleAS Web Cache が非 SSL モード内の包括的なデフォルト HTTP ポートにポートをマッピングするように設定されているためです。回避策は、2台のコンピュータを使用することです。1台は「Infrastructure」インストール・タイプ用、もう1台を「Portal and Wireless」インストール・タイプ用とします。

## OracleAS Web Cache の SSL を使用可能にしているサイトでの OracleAS Portal ターゲットの監視

Application Server Control を使用して SSL (HTTPS URL) を介して OracleAS Portal を監視するには、その URL の Web サイトで使用されている OracleAS Certificate Authority を認識するように Oracle Management Agent を構成する必要があります。エージェント・ソフトウェアは、セキュアインターネット Web サイトで使用される可能性の高いほとんどの商用の認証局を認識するように事前に構成されています。しかしながら、エージェントが OracleAS Certificate Authority を認識しない場合、Application Server Control では、OracleAS Portal ターゲットを監視する目的で OracleAS Portal Provider を監視したり OracleAS Metadata Repository のバージョン情報を表示したりできません。

### 関連項目 :

- Enterprise Manager のオンライン・ヘルプの Application Service Level Management に関する項を参照してください。
- OracleAS Certificate Authority などの公開鍵インフラストラクチャ (PKI) 機能の概要については、『Oracle Security 概要』の「セキュリティに対する公開鍵インフラストラクチャによるアプローチ」を参照してください。
- Enterprise Manager のオンライン・ヘルプの、リモート URL の可用性を監視するためのビーコンの使用方法に関する項を参照してください。

**OracleAS Certificate Authority を認識するようにエージェントを構成する手順は、次のとおりです。**

1. Web サイトの OracleAS Certificate Authority の証明書を次の手順で取得します。
  - a. Microsoft Internet Explorer で、監視する Web サイトの HTTPS URL に接続します。
  - b. ブラウザ画面下部にある小さな鍵のアイコンをダブルクリックします。このアイコンはユーザがセキュアな Web サイトに接続していることを示します。  
 アイコンをダブルクリックすると「証明書」ダイアログ・ボックスが表示され、Web サイトで使用されている証明書の情報が示されます。他のブラウザでも同様の仕組みで Web サイトの証明書の詳細を表示できます。
  - c. 「証明のパス」タブをクリックして、証明書のリストの最初のエントリを選択します。
  - d. 「証明書の表示」をクリックして、2 番目の「証明書」ダイアログ・ボックスを表示します。
  - e. 「証明書」ウィンドウで「詳細」タブをクリックします。
  - f. 「ファイルにコピー」をクリックして、証明書のエクスポート・ウィザードを表示します。
  - g. 証明書のエクスポート・ウィザードで、証明書をテキスト・ファイルにエクスポートして保存する形式として「**Base64 encoded X.509 (.CER)**」を選択します。テキスト・ファイルには myportal\_certificate.cer などの識別しやすい名前を付けます。
  - h. 任意のテキスト・エディタで証明書ファイルを開きます。  
 証明書ファイルには、次に示すような内容が表示されます。  

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIDBzCCAnCgAwIBAgIQTs4NcImNY3JAs5edi/5RkTANBgkqhkiG9w0BAQQFADCB
... base64 certificate content...
-----END CERTIFICATE-----
```
2. 認証局エージェントのリストを次の手順で更新します。
  - a. Oracle ホームの次のディレクトリで、b64InternetCertificate.txt ファイルを探します。  
 oracle\_home/sysman/config/  
 このファイルには、Base64 証明書のリストが記載されています。
  - b. エクスポートした証明書ファイルの内容を b64InternetCertificate.txt ファイルの冒頭に追加します。**BEGIN** 行から **END** 行まで、証明書の Base64 のテキストがすべて追加されるようにします。
3. Application Server Control を再起動します。  

```
emctl stop iasconsole
emctl start iasconsole
```

Application Server Control を再起動すると、エージェントが認識できる OracleAS Certificate Authority のリストが追加されたことが検出されます。これで、OracleAS Portal Provider を正しく監視し、OracleAS Metadata Repository のバージョン情報を表示できるようになります。

## UIに関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal の UI に関する問題とその回避策について説明します。

- 相対リンクが絶対リンクに変換される
- ポートレットをページに追加するときの問題 - プロバイダの登録の失敗
- Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 からアップグレードした場合の余分なパースペクティブ・ページ・テンプレート
- 新しいバージョンの作成時にカスタム属性がデフォルト値に戻る

## 相対リンクが絶対リンクに変換される

この問題は、Internet Explorer でリッチ・テキスト・エディタを使用する場合にのみ発生します。相対リンクが含まれるテキスト・アイテムを作成すると、そのリンクは絶対リンクに変換されます。これは、コンテンツを別のサイトにエクスポートする場合に問題となります。次に例を示します。

1. テキスト・アイテムを作成します。
2. リッチ・テキスト・エディタで HTML モードに切り替えます。
3. 次のように入力します。  
<IMG SRC="/images/home.gif" ALT="Home" BORDER=0>
4. 「OK」をクリックします。
5. テキスト・アイテムを編集します。

*base* が URL に追加され、たとえば、<IMG alt=Home src="http://webserver.us.abc.com:5000/images/home.gif" border=0> のように変換されていることに注意してください。

1つの回避策として、リッチ・テキスト・エディタを使用不可にする方法があります。詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。別の回避策は、Bug 3009204 にパッチを適用することです。このパッチでは、テキスト・アイテムを解析し、絶対 URL を相対 URL に変換するスクリプトが提供されます。

## ポートレットをページに追加するときの問題 - プロバイダの登録の失敗

ポートレットをページに追加できない場合は、プロバイダの登録に問題がある可能性があります。ポートレット ID が同じ 2 つのポートレット、名前のない複数のポートレットまたは ID のない複数のポートレットを持つプロバイダを登録した場合、エラー・メッセージは返されません。ただし、これらすべての場合で、そのプロバイダのポートレットをページなどに追加することはできません。

## Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 からアップグレードした場合の余分なパースペクティブ・ページ・テンプレート

以前に Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 リポジトリ・アップグレード・パッチ #2981297 のバージョン 1、2 または 3 を使用して Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 にアップグレードし、次に OracleAS Portal 10g (9.0.4) にアップグレードした場合は、パースペクティブ・ページ・テンプレートが 2 つ存在するという問題が発生する可能性があります。この問題が発生するのは、以前に Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 にアップグレードし、次に、アップグレードしたパースペクティブが含まれていたページ・グループに追加のパースペクティブを作成した場合です。

アップグレードしたページ・グループの 1 つ以上に、パースペクティブ・ページ・テンプレートが 2 つ含まれている場合は、影響を受けるページ・グループごとに次の手順を実行します。

1. Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 へのアップグレード後 (OracleAS Portal 10g (9.0.4) へのアップグレード前) に作成されたパースペクティブの 1 つのパースペクティブ・ページを表示します。
2. 編集モードに切り替えます。
3. ページ・ツールバーで、「**テンプレートの編集**」をクリックします。
4. テンプレート・ツールバーで、「**テンプレート:プロパティ**」をクリックします (ページ・グループではなく、必ずテンプレートの「プロパティ」リンクをクリックしてください)。
5. テンプレートの「表示名」を、たとえば「template\_name\_delete」という名前に編集して、「OK」をクリックします。
6. ナビゲータに移動し、ページ・グループのテンプレート領域にドリルダウンします。
7. 「template\_name\_delete」という名前のテンプレートを削除します。
8. 次のスクリプトを使用して、ページ・グループ内のパースペクティブ・ページをすべて削除してから、正しいパースペクティブ・ページ・テンプレートを使用して再度作成します。
  - ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstdefin.sql
  - ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstpgshw.sql

- ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstundef.sql
- ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstpgcre.sql
- ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstprcpg.sql

これらのスクリプトの詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

## 新しいバージョンの作成時にカスタム属性がデフォルト値に戻る

次の場合は、新しいバージョンが作成されたとき、カスタム属性の値がデフォルト値に戻ります。

- 「アイテムの編集」 ページで属性が非表示の状態、アイテムが編集され、新しいバージョンが作成された場合。この場合は、領域の表示内にカスタム属性が表示されなくなります。現在、唯一の回避策は、バージョンニング使用時は常に「アイテムの編集」 ページでカスタム属性を表示することです。
- アイテムが WebDAV を介して編集され、ページでバージョンニングが有効である場合（「シンプル」または「監査」バージョンニングのいずれか）。バージョンニングが有効な場合、WebDAV では常に新しいバージョンが作成され、カスタム属性の値は、新しいバージョンではデフォルト値に設定されます。現在、唯一の回避策は、カスタム属性をバージョンニングおよび WebDAV と組み合わせて使用しないことです。

## OmniPortlet、シンプル・パラメータ・フォーム、Web クリッピング・ポートレットに関する問題と回避策

この項では、OmniPortlet、Web クリッピング・ポートレット、シンプル・パラメータ・フォームに関する問題について説明します。これらのポートレットは、ポートレット・リポジトリ内に、ポートレット・リポジトリ:ポートレット・ビルダーのように格納されています。

- **ブラウザ要件**
- (OmniPortlet) インストール後に OmniPortlet プロバイダの更新が必要
- (OmniPortlet) 「ニュース・レイアウト・スクロール」 タイプが Netscape 4.79 でサポートされていない
- (OmniPortlet) 書式化された数値がチャートで表示されない

### ブラウザ要件

OmniPortlet、Web クリッピングまたはシンプル・パラメータ・フォームのポートレットを編集する（つまり、デフォルト編集モードでプロパティを設定する）には、次のバージョンのブラウザを使用する必要があります。

- Netscape 7.0 以上
- Microsoft Internet Explorer 5.5 以上（Windows NT および Windows 2000 の場合）
- Microsoft Internet Explorer 6.0（Windows XP の場合）

これらのバージョンより古いブラウザを使用すると、JavaScript エラーが発生する場合があります。

### (OmniPortlet) インストール後に OmniPortlet プロバイダの更新が必要

OmniPortlet でパラメータとイベントを使用する場合は、最初に OmniPortlet プロバイダを更新する必要があります。更新する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Portal にログインします。
2. 「ナビゲータ」リンクをクリックします。
3. 「プロバイダ」タブを選択します。
4. 「ローカルで構築されたプロバイダ」を選択します。
5. 「OmniPortlet プロバイダ」を探し、その「更新」リンクをクリックします。

## (OmniPortlet) 「ニュース・レイアウト・スクロール」タイプが Netscape 4.79 でサポートされていない

OmniPortlet の「ニュース・レイアウト・スクロール」タイプは、Microsoft Internet Explorer および Netscape 7.0 でサポートされています。Netscape 4.79 では機能しません。

## (OmniPortlet) 書式化された数値がチャートで表示されない

データ・ソース内の数値に、書式化された文字列、カンマまたは通貨記号（\$32,789.00 など）が含まれている場合、これらはチャートの生成時にテキストとみなされ、無視されます。回避策として、書式化文字を数値から削除してください。

## 検索に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal の検索機能に関する問題について説明します。

- [検索エラー - 「ページ・グループ ID が存在しません。」 \(WWS-30641\)](#)
- [最大戻り値が機能しない](#)
- [Netscape 4.79 を使用した検索結果の保存に関する問題](#)
- [結果属性が表示されない](#)
- [Oracle Text の有効化 / 無効化によるパースペクティブ選択への影響](#)
- [検索結果ページに複数の検索ポートレットが配置されている場合の問題](#)
- [パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した場合の検索結果への影響](#)
- [ページ・グループまたは検索属性が多数選択された場合に発生する問題](#)

## 検索エラー - 「ページ・グループ ID が存在しません。」 (WWS-30641)

関連する検索結果ページのページ・グループが削除された場合は、検索ポートレットまたは基本検索ボックス・アイテムが含まれるページに、次のエラーが表示されます。

```
Error: An unexpected error has occurred (WWS-32100)
```

```
...
```

```
The Page Group ID does not exist. (WWS-30641)
```

また、「[検索設定](#)」ページにアクセスして、新しい検索結果ページを選択することもできません（「[検索設定](#)」ページには、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにある「サービス」ポートレットからアクセスします）。

この問題を解決するには、[Bug 3263977](#) で公開されている指示に従ってください。この情報は、次の Oracle MetaLink の Web サイトから入手可能です。

<http://metalink.oracle.com>

## 最大戻り値が機能しない

（カスタム検索ポートレットを使用して）カスタム検索フォームを構築できます。このフォームでは、ユーザーが「結果の最大数を設定」できます。このリリースでは、返される結果の総数がこのオプションによって制限されません。

ただし、ユーザーによる「1 ページに表示する結果数の設定」を許可すると、各ページに表示される結果数を制限できます。

## Netscape 4.79 を使用した検索結果の保存に関する問題

Netscape 4.79 で、複数の検索語を空白で区切って検索した場合（sales targets など）は、検索結果の保存に関する問題が発生する場合があります。「The request had invalid syntax」というエラーが表示されます。

## 結果属性が表示されない

カスタム検索ポートレットでは、検索結果に表示する属性を選択できます。ただし、リストされている使用可能な属性の一部は、検索結果に表示されません。つまり、「基本アイテムタイプ」、「パラメータ・フォームの表示」、「アイテムのチェックアウトを有効にする」、「新しいブラウザ・ウィンドウでアイテムを表示するリンク」、「Oracle Reports Components」、「反転イメージ」、「アイテムコンテンツ」、「ポートレット・コンテンツ」、「ポートレット・インスタンスのグローバル一意 ID」、「プロバイダ名」、「更新アイテム・インジケータ」、「新規アイテム・インジケータ」は表示されません。

## Oracle Text の有効化 / 無効化によるパースペクティブ選択への影響

Oracle Text が有効な場合は、1 つ以上のパースペクティブで検索結果を制限できます。Oracle Text が無効な場合は、1 つのパースペクティブでのみ検索結果を制限できます。検索結果をパースペクティブで制限してから、Oracle Text を有効から無効（または無効から有効）に切り替えると、パースペクティブの選択が正常に機能しない場合があります。

## 検索結果ページに複数の検索ポートレットが配置されている場合の問題

検索機能は、1 つの検索ポートレットが 1 ページにマップされるように設計されています。したがって、複数の検索ポートレット（基本、詳細、カスタムまたは Ultra Search のポートレット）が含まれるページに検索結果を表示するように選択した場合は、結果ページのすべての検索ポートレットによって応答が行われ、各検索ポートレットに検索結果が表示されます。このような表示にならないように、検索結果は単一の検索ポートレットが含まれるページに表示することをお勧めします。

同様に、Ultra Search ポートレットから結果が返されると、同じページに配置された他の検索ポートレットによって応答が行われます。したがって、Ultra Search ポートレットが含まれるページには追加の検索ポートレットを配置しないでください。

## パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した場合の検索結果への影響

(Oracle Text が有効な場合のみ) パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した後、そのパースペクティブでアイテムを検索すると、アイテムが返されません。回避策として、パースペクティブの昇格後に、Oracle Text の索引を削除し、再作成してください。詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

## ページ・グループまたは検索属性が多数選択された場合に発生する問題

検索基準の属性が多数ある場合や検索対象のページ・グループ・リストが長い場合は、検索機能の動作に一貫性がなくなる可能性があります。この問題は、URL のサイズ制限が原因です。次に、発生する可能性のある問題の例を示します。

- 「Save Search」、「一括操作」、「編集」などのリンクが動作しません。これらのリンクが動作するのは、属性 / ページ・グループの選択数が少ない場合であることに注意してください。
- 検索結果のページでは、タブの変更時に検索基準が失われる可能性があります。
- 結果の保存時に検索結果の一部が失われる場合があります。また、検索を再度実行したときに、一部の属性が失われる可能性があります。

回避策は、ユーザーが選択可能な属性またはページ・グループ（またはその両方）の数を減らすことです。

## PDK に関する問題と回避策

Oracle Application Server Portal Developer Kit (PDK) リリース 9.0.4 は、OracleAS Portal & Wireless のインストール時に同時に組み込まれます。JPDK および PL/SQL PDK のリリース・ノートは、これらの中間層の \$ORACLE\_HOME の位置にあります。

- JPDK の場合 : \$ORACLE\_HOME/portal/pdkjava/v2/pdkjava.v2.releasenotes.html
- PL/SQL の場合 : \$ORACLE\_HOME/portal/pdkjava/v2/pdkplsql.release.notes.html

## OracleAS PDK の最新バージョン

新しいバージョンの OracleAS PDK が定期的にリリースされ、新機能、新規 API および追加ドキュメントが提供されます。最新の機能をすべて利用するために、Portal Center <http://portalcenter.oracle.com> から最新の PDK をダウンロードしてください。

最新バージョンの OracleAS PDK のリリース・ノートは、Portal Center および次の PDK のダウンロード場所にもあります。

- [pdk¥plsqli¥pdkplsqli.release.notes.html](#)
- [pdk¥jpdki¥v2¥pdkjava.v2.release.notes.html](#)

## WSRP および JSR 168 のサポート

Oracle Application Server 10g (9.0.4) 以降、OracleAS Portal は JSR 168 ポートレットの構築をサポートしています。OracleAS Portal は、WSRP 対応のポートレットをまだサポートしていません。そのため、現在 JSR 168 をテストできるのは、ホストされた OracleAS Portal Verification Service (<http://portalstandards.oracle.com/>) またはダウンロード用に利用できる OracleAS Portal の Developers Preview に限られます。また、Developers Preview と、ホストされた OracleAS Portal Verification Service は、いずれも開発の目的でのみ提供されるものですので、本番システムでは使用しないようにしてください。「JSR 168 ポートレットの登録」の項も参照してください。

## NLS に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal における National Language Support (NLS) に関する問題について説明します。

- [Oracle Text の検索の制限 \(テキスト・ファイルおよび HTML ファイル\)](#)
- [Netscape 7.0 を使用した場合の BiDi の配置に関する問題](#)
- [Excel/SYLK 形式のレポートを Microsoft Excel で開く場合の問題](#)
- [ダブルバイトの空白キーで検索キーワードを区切れない](#)
- [BiDi 言語ではテキスト入力が常に右から左に行われる](#)
- [URL アイテムに関する ISO-8859 以外の Web ページの制限](#)
- [ASCII 以外の文字に関する制限](#)
- [共有タイプ・オブジェクトが英語以外のページ・グループに表示されない](#)
- [Oracle Ultra Search ポートレットのヘルプ・ページに関する問題](#)
- [OracleAS Portal でサポートされない一部のデータベース・キャラクタ・セット](#)

## Oracle Text の検索の制限 (テキスト・ファイルおよび HTML ファイル)

一部の ASCII 以外のキャラクタ・セット環境では、プレーン・テキスト・ファイルおよび HTML ファイルの ASCII 以外の文字コンテンツを検索できません。

ドキュメントのキャラクタ・セットがデータベース・キャラクタ・セットと同じで、データベース・キャラクタ・セットが次のいずれかの場合は、プレーン・テキストおよび HTML ファイルを検索できます。

- US7ASCII
- WE8ISO8859P1
- JA16SJIS
- KO16KSC5601
- ZHS16CGB231280
- ZHT16BIG5

データベース・キャラクタ・セットがここにリストされているキャラクタ・セット以外でも、ドキュメントが WE8ISO8859P1 キャラクタ・セットの場合、検索機能は正常に動作します。他の ASCII 以外のキャラクタ・セット環境では、この問題が発生する可能性があります。

Word や PDF などのバイナリ・ファイルを検索するときは問題ありません。

## Netscape 7.0 を使用した場合の BiDi の配置に関する問題

Mozilla の問題のため、ヘッダー・イメージと一部のボタンが正しく配置されません。

## Excel/SYLK 形式のレポートを Microsoft Excel で開く場合の問題

Excel/SYLK 形式のレポートを作成するとき、ファイル・エンコードはデータベース・キャラクタ・セットと常に同じです。このようなファイルは Microsoft Excel で開くことができません。回避策として、エクスポートしたファイルをネイティブのエンコードに変換してください。

たとえば、データベース・キャラクタ・セットが UTF8 の場合、エクスポートしたレポートは UTF8 データベース・キャラクタ・セットでエンコードされているため、Excel では開くことができません。日本語の Windows システムでは、Excel は Shift\_JIS でエンコードされたファイルのみを開くことができますが、ファイルを Shift\_JIS でエクスポートするには、データベース・キャラクタ・セットが JA16SJIS であることが必要です。このため、データベース・キャラクタ・セットが EUC（日本語の別の標準キャラクタ・セット）または UTF8 の場合、ファイルは開きません。メモ帳を使用すると、ファイルを開いて別のキャラクタ・セットで保存できます。

## ダブルバイトの空白キーで検索キーワードを区切れない

ダブルバイトの空白文字を使用して 2 つの検索キーワードを区切ることはできません。シングルバイトの空白文字を使用する必要があります。

## BiDi 言語ではテキスト入力が常に右から左に行われる

すべてのテキスト領域およびフィールドの方向が右から左 (RTL) です。ただし、左から右 (LTR) に機能する必要があるテキスト領域もあります。Internet Explorer ユーザーは、左側にある [Ctrl] キーを押しながら [Shift] キーを押すと、この方向を変更できます。

## URL アイテムに関する ISO-8859 以外の Web ページの制限

URL アイテムを使用した ISO-8859-1 以外の Web ページは表示できない場合があります。この機能は他のポートレットでは提供されるため、かわりに NLS URL サービスや Web クリップングなどのポートレットを使用することもできます。

## ASCII 以外の文字に関する制限

- ASCII 以外の XML データは XML ポートレットに正しく表示されません。ASCII 以外の XML データを表示するには、この機能が備わっている OmniPortlet を使用してください。
- 指定した URL からの ASCII 以外のデータが URL ポートレットに正しく表示されません。このようなデータをポートレットに表示するには、この機能が備わっている Web クリップング・ポートレットを使用してください。
- Web プロバイダの表示名で ASCII 以外の文字を使用した場合、表示名が正しく表示されません。同様に、プロバイダ・グループの表示名で使用された ASCII 以外の文字も表示されません。
- データベース・プロバイダのポートレット名で、ASCII 以外の文字は使用できない場合があります。ただし、表示名では使用できます。
- ポートレット名に ASCII 以外の文字が含まれている場合は、ポートレットのプレビュー時に名前が正しく表示されません。
- (Internet Explorer のみ) UTF8 以外のデータベース・キャラクタ・セットを使用すると、フォーム・コンポーネントのラベルが正しく表示されない場合があります。この問題は Netscape では発生しません。

## 共有タイプ・オブジェクトが英語以外のページ・グループに表示されない

共有タイプ・オブジェクト（ページ・タイプ、アイテム・タイプ）のデフォルト言語は常に英語です。英語以外の言語でページ・グループを作成した場合は、そのページ・グループのデフォルト言語で共有タイプの翻訳が存在していないかぎり、共有タイプをページ・グループで使用可能にできません。

翻訳を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「共有オブジェクト」 ページ・グループに対して言語を使用可能にします。  
詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』の「翻訳の作成」の項を参照してください。
2. 「言語の設定」 ポートレットで該当する言語に切り替えます。
3. セッション言語が英語以外の言語に設定されている状態で、ページ・タイプまたはアイテム・タイプを編集します。  
この結果、該当する言語での翻訳タイプが自動的に作成されます。  
これで、英語以外のページ・グループで共有タイプが使用可能になります。

## Oracle Ultra Search ポートレットのヘルプ・ページに関する問題

Oracle Ultra Search ポートレットで「ヘルプ」リンクをクリックすると、全言語でヘルプ・ページに無効な情報が表示されます。

回避策として、次のディレクトリにある適切なヘルプ・ファイルのエンコードを UTF8 に変更します。

```
ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/UltrasearchPortlet/query/html
```

## OracleAS Portal でサポートされない一部のデータベース・キャラクタ・セット

データベースのキャラクタ・セットが Java によってサポートされていない場合、'サポートされていない IANA 文字コード' の例外が OracleAS Portal で表示されます。Java (1.3, 1.4, 1.5) は、次のキャラクタ・セットをサポートしていません。

- NE8ISO8859P10
- CEL8ISO8859P14

これらのキャラクタ・セットの文字を使用する必要がある場合は、Unicode キャラクタ・セット AL32UTF8 を使用してください。

## ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Portal ドキュメントの既知の誤りと補足事項について説明します。

- [ドキュメントの誤り](#)
- [追加文書](#)

## ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Portal ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [アイテム / ポートレットのプロパティの編集](#)
- [保留中のアイテムの編集](#)
- [最新バージョンのイメージの参照](#)
- [リスト・ビューでの作業](#)
- [非公開アイテムのセクションに関する記述の誤り](#)
- [アイテム・レベルのセキュリティとページ・キャッシュ](#)
- [ユーザー・プロファイルのヘルプの誤り](#)

- [カスタム検索結果の表示スタイルの定義](#)
- [ページ・ポートレットへの背景色または背景イメージの適用](#)
- [エラー・メッセージ WWC-40018 が誤って WWC-40019 と記述されている](#)
- [JSR 168 ポートレットの登録](#)

## アイテム/ポートレットのプロパティの編集

オンライン・ヘルプで、「**編集**」アイコンをクリックすると、アイテムまたはポートレットのプロパティを編集できると記述されています。これはアイテムに関しては正しい記述ですが、ポートレットの横にあるこのアイコンをクリックすると「**デフォルトの編集**」ページが表示されます。ポートレットのインスタンス属性（表示名など）を編集するには、「**操作**」アイコンをクリックして、「**編集ポートレットインスタンス**」リンクをクリックします。

## 保留中のアイテムの編集

「保留中のアイテム:プレビュー」のオンライン・ヘルプ ([cawkpend.htm](#)) では、承認プロセスの最初の承認者による承認が済んでいない場合、送信者は保留中のアイテムの編集を続行できると記述されていますが、これは誤りです。

## 最新バージョンのイメージの参照

イメージ属性で、アップロードしたソース・イメージを参照できます。ドキュメントには、現在次のように記述されています。

OracleAS Portal にアップロードされたイメージを再利用するには、このフィールドに、その内部名（ファイル名ではなく）をパスを指定せずに入力します。たとえば、1645.GIF と入力します。

参照したイメージ・アイテムでバージョンングを使用しているときに、参照で内部ファイル名（1645.gif など）を使用すると、イメージが作成された場合、参照では最新バージョンが使用されません。イメージ参照では、引き続き元のバージョンが表示されます。次に例を示します。

1. イメージ属性では、イメージ・アイテムを 1645.gif などの内部ファイル名で参照します。
2. イメージ・アイテムを更新し、新しいバージョンを作成します。新しいバージョンには、新しい内部ファイル名（1705.gif など）を設定します。
3. イメージ属性では引き続き 1645.gif が参照され、新しいバージョンのイメージを参照するように更新されません。

したがって、内部ファイル名は、バージョンングを使用していない場合か、最新バージョンでない場合でも、参照では常に元のバージョンを指し示す場合にのみ使用してください。

バージョンングを使用しながら、常に最新バージョンを表示する場合は、内部ファイル名ではなく、イメージ・アイテムへの永続性のあるリンクを使用します。永続性のあるリンクでは、常に最新バージョンのイメージが取得されます。このため、1645.gif と入力するかわりに、次のように入力します。

```
/pls/<DAD>/url/item/<GUID>
```

これは、永続性のあるリンクの相対 URL 書式です。次に例を示します。

```
/pls/portal/url/ITEM/A47D41ECA23648A9E030007F0100118A
```

ホスト名やドメイン名を変更する場合、またはコンテンツを別のサイトにエクスポートする場合は、常に相対 URL を使用する必要があります。永続的な URL の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』の「[ページおよびアイテムの URL について](#)」を参照してください。

## リスト・ビューでの作業

リスト・ビュー機能については、オンライン・ヘルプ・トピック「[ページ編集モード:リスト・ビュー](#)」(pobpglst.htm) に記載されています。このトピックの情報の一部に誤りがあります。

**ボタン:** **アクション・リスト** - オプション「**ILS を有効にする**」および「**ILS を無効にする**」は使用できません。

**ボタン:** **検索** - 検索では大文字・小文字は区別されません。

**サブアイテム** - オンライン・ヘルプでは、サブアイテムはリスト・ビューに表示されないと記述されています。これは正しい記述ですが、サブアイテムが検索基準と一致する場合、検索結果には表示されません。

また、リスト・ビューでは、テンプレートに基づくページに、テンプレートに属しているタブまたはアイテムが表示されないことに注意してください。「**テンプレートの編集**」リンクをクリックして、テンプレートにタブとアイテムを表示する必要があります。したがって、リスト・ビューでページを編集するときは、テンプレートから継承されたタブにアイテムを追加することはできません。また、別の編集ビュー（グラフィカル・ビューなど）を使用してページを編集したときに、これらのタブにアイテムが追加された場合、そのアイテムはリスト・ビューには表示されません。

Netscape 4.8 を使用している場合は、「説明」列の下のバージョン情報が誤って表示されます。この問題は Internet Explorer では発生しません。

## 非公開アイテムのセクションに関する記述の誤り

ページ・グループの編集の「**アイテム**」タブに関するオンライン・ヘルプ (sbrsmit.htm) に誤りがあり、「**期限切れアイテムと削除アイテム**」セクション、「**期限切れアイテムと削除アイテムの表示**」チェック・ボックス、「**期限切れアイテムと削除アイテムの保持**」チェック・ボックスと記述されています。これらは、正しくはそれぞれ「**非公開アイテム**」セクション、「**編集モードで非公開アイテムを表示**」チェック・ボックス、「**削除アイテムの保持**」チェック・ボックスです。これらのチェック・ボックスの使用の詳細は、ページ自体のテキストを参照してください。

## アイテム・レベルのセキュリティとページ・キャッシュ

オンライン・ヘルプに誤りがあり、アイテム・レベルのセキュリティ (ILS) が有効である場合は、ページ・キャッシュが自動的に無効になると記述されています。ページ・キャッシュは、ILS が有効である場合でも無効になりません。

## ユーザー・プロファイルのヘルプの誤り

「Portal ユーザー・プロファイルの編集」タブのオンライン・ヘルプ「**設定**」(secumed1.htm) および「**権限**」(secgmed3.htm) に誤りがあり、これらのページに「**デフォルトに戻す**」ボタンがあると記述されています。このオプションは使用できません。

## カスタム検索結果の表示スタイルの定義

「デフォルトの編集: カスタム検索 - 結果の表示」ページのオンライン・ヘルプ (sbrsres.htm) に誤りがあり、スタイルおよび属性の設定は、検索結果に返されたアイテムにのみ適用されると記述されています。「**検索結果のレンダリングに使用するスタイルおよび属性を指定してください。**」セクションの下にある「**スタイル**」および「**属性**」の設定は、アイテムとページの両方に適用されます。

## ページ・ポートレットへの背景色または背景イメージの適用

ページ・ポートレット (ナビゲーション・ページを含む) に背景色または背景イメージを表示する場合は、次の手順を実行します。

1. ナビゲーション・ページをポートレットとして公開したときに独自のスタイルを使用していること、つまり、ページ・プロパティで「**ポートレットを配置したページのスタイルを使用**」を選択していないことを確認します。
2. コンテナ・ページ (ポートレットが含まれているページ) のスタイルで、「**ポートレット・ボディ色**」を「**NULL**」(値指定なし) に設定します。この手順はドキュメントに記載されていません。

## エラー・メッセージ WWC-40018 が誤って WWC-40019 と記述されている

Web キャッシュ接続に関するエラー・メッセージ WWC-40018 が、『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』で誤って WWC-40019 と記述されています。

## JSR 168 ポートレットの登録

『Oracle Application Server Portal 開発者ガイド』の「ローカルの OracleAS Portal インスタンスへの登録」の項では、JSR 168 をローカルの OracleAS Portal インスタンスに登録する方法が説明されています。これらの説明は現在の本番用にリリースされた製品には適用されませんが、本番の WSRP 対応の OracleAS Portal がリリースされるまで Developers Preview として使用することができます。Developers Preview は開発の目的でのみ提供されるものですので、本番システムでは使用しないようにしてください。

## 追加文書

この項では、OracleAS Portal ドキュメントの既知の補足事項と追加事項について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [パブリック・ユーザーはアイテム・レベルのセキュリティが有効であるページを検索できない](#)
- [ログ・レジストリ・レコードのデータが不正確](#)
- [新規プロバイダへの権限付与](#)
- [カスタム属性に対する一意な名前の使用](#)
- [WebDAV クライアントで期限切れアイテムが期限切れ後も表示される](#)
- [Portal スマート・テキストおよび Portal スマート・リンク・アイテム](#)
- [検索設定の変更を有効にするためにキャッシュの失効が必要](#)

### パブリック・ユーザーはアイテム・レベルのセキュリティが有効であるページを検索できない

PUBLICユーザーは、アイテム・レベルのセキュリティが有効であるページでアイテムを検索できません。

### ログ・レジストリ・レコードのデータが不正確

ログ・レジストリ・レコードに関するオンライン・ヘルプ ([wvlogadm.htm](#)) で、ログが記録される処理がリストされています。OracleAS Web Cache を導入すると、OracleAS Portal の動作ログ表に記録される処理の一部が不正確になります。特に、表示、実行、表示および実行が該当します。ただし、ログが記録される他のすべての処理は正確であるため、動作ログ表とビューは OracleAS Portal Metadata Repository に存在したままです。

### 新規プロバイダへの権限付与

新規プロバイダを作成 / 登録すると、そのプロバイダに対するポートレットを表示するために、「Portlet ステージング領域」の下の「ポートレット・リポジトリ」にページが作成されます。このページは、すべてのログイン・ユーザーに表示されるわけではありません。表示できるのは、プロバイダを公開したユーザーとポータル管理者のみです。公開者またはポータル管理者は、必要に応じて、プロバイダ・ページのプロパティを変更して適切なユーザー / グループに権限を付与できます。

### カスタム属性に対する一意な名前の使用

カスタム属性の名前は、ページ・グループ間で一意になるように設定することをお勧めします。たとえば、ページ・グループ名を接頭辞や接尾辞として組み込むことができます。

カスタム属性に一意な名前が設定されていない場合は、検索結果の属性の選択時に同じ名前が表示されます。たとえば、2つのカスタマイズ属性の名前が両方とも 'MyCustomAttribute1' の場合は、次のようにリストされます。

```
MyCustomAttribute1
MyCustomAttribute1
```

このように、どの属性がどのページ・グループに属しているか確定できません。しかし、これらの属性に 'MyCustomAttribute\_PG1' と 'MyCustomAttribute\_PG2' という名前を設定すると、次のようにそれぞれ一意な名前で見分けられます。

```
MyCustomAttribute_PG1
MyCustomAttribute_PG2
```

## WebDAV クライアントで期限切れアイテムが期限切れ後も表示される

期限切れアイテムは、システム・ページ時にデータベースから完全に削除されるまで、WebDAV クライアントで表示され続けます。

## Portal スマート・テキストおよび Portal スマート・リンク・アイテム

(ポートレットとして公開されている) Portal スマート・テキストまたは Portal スマート・リンク・アイテムが含まれているページを、別のページに埋め込むことができます。別のページに埋め込むと、Portal スマート・テキスト / Portal スマート・リンク・アイテムは、埋め込まれたページに関連して動作します。たとえば、「**編集**」 Portal スマート・リンク・アイテムをページ A に追加し、そのページをポートレット A として公開した後、ポートレット A をページ B に配置すると、「**編集**」リンクを使用してページ B を編集できます。

## 検索設定の変更を有効にするためにキャッシュの失効が必要

ページ・キャッシュが有効の場合は、「検索設定」ページで行った変更が、既存の検索ポートレットにすぐに反映されない場合があります。たとえば、Oracle Text を有効にしている場合、指定した範囲の検索演算子は、キャッシュが消去されるまで使用できません。即時に適用されないその他の設定には、新しい「検索結果ページ」、「拡張検索リンク / ページ」および「インターネット検索エンジン」の詳細があります。

キャッシュは、すべての検索ポートレットで 24 時間ごとに自動的に消去されます。または、OracleAS Web Cache Manager (「**サービス**」ポートレットの「Web Cache 管理」リンクからアクセス可能) を使用してキャッシュを手動で消去できます。

---

---

## Oracle Ultra Search

この章では、Oracle Ultra Search に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- Oracle Ultra Search バックエンドのカスタマ・データベース・インストール
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Ultra Search に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Ultra Search URL ステータス・コード](#)
- [Oracle Application Server 10g へのアップグレード](#)
- [Oracle Ultra Search および OracleAS Portal](#)
- [データ・ソースに制限アクセスを使用する場合のセキュリティに関する考慮事項](#)
- [データベース・キャラクタ・セット変更後の Oracle Ultra Search の再構成](#)
- [マルチバイト名を使用したデータソースのクロールが失敗する](#)
- [ISO-2022-JP キャラクタ・セットのクロールが失敗する](#)
- [すべてのデータベース・キャラクタ・セットが Oracle Ultra Search でサポートされていない](#)
- [Oracle Ultra Search Configuration Assistant が Oracle Identity Management のアップグレード中に失敗する問題](#)
- [OracleAS RepCA のインストール](#)
- [不具合](#)
- [Oracle Ultra Search のアップグレード・メッセージ](#)

### Oracle Ultra Search URL ステータス・コード

Oracle Ultra Search では、一連のコードを使用して、クロールされた URL のクロール結果が示されます。標準の HTTP ステータス・コードに加え、HTTP 関連以外の問題についても固有のコードが使用されます。索引付けされるのは、ステータスが 200 の URL のみです。表 14-1 に、Oracle Ultra Search のステータス・コードを示します。

表 14-1 Oracle Ultra Search クローラの URL ステータス・コード

コード	説明	コード	説明
200	URL OK	907	ソケット・バインドの例外。
400	不正なリクエストです。	908	フィルタが使用できません。
401	権限が必要です。	909	複製ドキュメントが検出されました。
402	支払が必要です。	910	複製ドキュメントが無視されました。
403	アクセスは禁止されています。	911	空のドキュメント。
404	見つかりません。	951	URL 索引は未作成。
405	メソッドは使用できません。	952	URL クロール済。
406	受け入れられません。	953	メタ・タグ・リダイレクション。
407	プロキシ認証が必要です。	954	HTTP リダイレクション。
408	タイムアウトのリクエストです。	955	ブラック・リスト URL。
409	競合しています。	956	URL が一意ではありません。
410	存在しません。	957	監視 URL (プレースホルダとしての URL)。
414	リクエスト -URI が長すぎます。	958	ドキュメントの読取りエラー。
500	内部サーバー・エラーです。	959	フォーム・ログインに失敗しました。
501	実装されていません。	1001	データ型が TEXT/HTML ではありません。
502	ゲートウェイが不正です。	1002	ネットワーク・データ・ストリームが壊れています。
503	サービスは利用できません。	1003	HTTP リダイレクト位置が存在しません。

表 14-1 Oracle Ultra Search クローラの URL ステータス・コード (続き)

コード	説明	コード	説明
504	ゲートウェイのタイムアウトです。	1004	関連 URL が不正です。
505	HTTP バージョンはサポートされません。	1005	HTTP エラーです。
902	ドキュメント読み込みのタイムアウトです。	1006	HTTP ヘッダー解析中のエラーです。
903	フィルタリングに失敗しました。	1007	無効な URL 表の列名。
904	メモリー不足エラーです。	1008	JDBC ドライバがありません。
905	URL を処理中の I/O 例外。	1009	テキスト・ドキュメントとしてレポートされたバイナリ・ドキュメント。
906	接続が拒否されました。	1010	無効な表示 URL。

## Oracle Application Server 10g へのアップグレード

『Oracle Application Server 10g アップグレード』に従って、Oracle9iAS 9.0.2 を Oracle Application Server 10g にアップグレードする前に、データベース 9.0.1.5 のパッチ・セットを適用する必要があります。

パッチ・セットを適用した後に、そのパッチ・セットのノートに記述されている次のインストール後の処理は実行しないでください。

「変更しようとしているデータベースに Oracle Ultra Search をインストールしている場合にのみ、次の手順を実行してください。」

かわりに、次のインストール後の手順を実行してください。

- CONNECT / AS SYSDBA
- GRANT SELECT ON SYS.DBMS\_LOCK\_ALLOCATED TO WKSYS;
- ALTER USER WKSYS ACCOUNT UNLOCK;
- ALTER PACKAGE WKSYS.WK\_CRW COMPILE BODY;
- ALTER PACKAGE WKSYS.WK\_SNAPSHOT COMPILE BODY;

## Oracle Ultra Search および OracleAS Portal

Oracle Ultra Search でクロールできるのは、パブリックな Oracle AS Portal ソースのみです。パブリック・ページの設定方法は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

## データ・ソースに制限アクセスを使用する場合のセキュリティに関する考慮事項

この項では、データ・ソースへのアクセス制限に単一の ACL を使用する場合のセキュリティに関する重要な考慮事項について説明します。

Oracle Ultra Search のデータ・ソースは、単一の管理者指定 ACL で保護できます。この ACL は、そのデータ・ソースに属するドキュメントを表示できるユーザーとグループを指定します。

Oracle Ultra Search では、検索ユーザーが問合せを実行したとき、Oracle Server の ACL 評価エンジンを使用して権限を評価します。この ACL 評価エンジンは Oracle XML データベースの機能です。Oracle Ultra Search の問合せで、管理者指定 ACL によって保護されているドキュメントを取得しようとした場合、その ACL は、評価された後キャッシュされます。

ACL のキャッシュ期間は、XDB 構成パラメータによって制御されます。『Oracle9i XML データベース開発者ガイド』の「Oracle XML DB リソースのセキュリティ」の章を参照してください。XDB のマニュアルでは、/xdbconfig/sysconfig/acl-max-age パラメータを変更する必要があることが示されています。値は、ACL のキャッシュ期間を決定する数値（秒数）です。この構成パラメータの変更方法は、「Oracle XML DB のインストールおよび構成」の章を参照してください。

ACL はキャッシュされるため、管理者指定 ACL に対する変更はすぐには伝播されないことに注意してください。これは、変更が行われる前に存在していたデータベース・セッションにのみ適用されます。

## データベース・キャラクタ・セット変更後の Oracle Ultra Search の再構成

この再構成には、\$ORACLE\_HOME/ultrasearch/admin/ の下にある 2 つの SQL スクリプト (wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql) が使用されます。

- wk0prefcheck.sql が wksys の下で起動され、デフォルトのキャッシュ・キャラクタ・セットと索引設定が再構成されます。
- wk0idxcheck.sql は、データベース・キャラクタ・セットの変更前に作成されたインスタンス (デフォルト・インスタンスなど) を再構成するために必要です。このスクリプトはインスタンスの所有者が起動する必要があるため、wk0prefcheck.sql によって生成される再構成後のデフォルト設定に依存するため、wk0prefcheck.sql を最初に実行する必要があります。
- wk0idxcheck.sql を実行すると、Oracle Ultra Search で使用される Oracle Text 索引も削除および再作成されます。そのため、すでに索引付けされているデータ・ソースがある場合は、ユーザーがすべてのデータ・ソースを再クロールする必要があります。
- wk0idxcheck.sql はインスタンスごとに 1 回ずつ実行する必要があります。そのため、owner1 と owner2 がそれぞれ所有する inst1 と inst2 の 2 つのインスタンスがある場合は、wk0idxcheck.sql を、owner1 で 1 回、owner2 で 1 回の合計 2 回実行する必要があります。

## マルチバイト名を使用したデータソースのクロールが失敗する

マルチバイト名を使用したデータソースの Oracle Ultra Search クロールは失敗します。Oracle データベースを起動するローカル環境とロケールのターゲット・ファイルとの間に互換性がない場合は、ファイルが見つからないというエラーが発生します。

この問題を解決するには、正しいロケールを設定し、Oracle データベースを再起動して、強制的に Oracle Ultra Search でデータ・ソースを再クロールする必要があります。

次に例を示します。

1. 次のコマンドを使用して、Oracle データベース・インスタンスを停止します。

```
SQL> shutdown immediate
```

2. 次のコマンドを使用して、ロケールを 'ja' に設定します。

```
> setenv LANG ja
> setenv LC_ALL ja
```

3. 次のコマンドを使用して、Oracle データベース・インスタンスを再起動します。

```
SQL> startup
```

4. 強制再クロールで Oracle Ultra Search スケジュールを再起動します。

## ISO-2022-JP キャラクタ・セットのクロールが失敗する

ISO-2022-JP キャラクタ・セットのデータで Ultra Search を使用する場合は、Sun 社の JDK1.4.2\_04 以上をダウンロードし、それを Ultra Search バックエンド (Ultra Search スキーマが格納されているデータベース) のホスト・マシンにインストールして、Ultra Search バックエンドに新しい JDK インストールを指定する必要があります。

Ultra Search バックエンドに特定の JDK インストールを指定する (Ultra Search クローラの実行に使用される JDK を設定する) には、SQL\*Plus で ORACLE\_HOME/ultrasearch/admin/wkrepca.sql スクリプトを実行します。wksys ユーザーで接続し、JDK インストールのパスをスクリプトに渡す必要があります。次に例を示します。

```
sqlplus wksys/schema_password @ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wkrepca.sql
/usr/local/jdk1.4/bin/java
```

## すべてのデータベース・キャラクタ・セットが Oracle Ultra Search でサポートされていない

Oracle Ultra Search では、Oracle Text でサポートされないデータベース・キャラクタ・セットはサポートされていません。たとえば、AL32UTF8 キャラクタ・セットはサポートされていません。

Unicode サポートについては、UTF8 を使用してください。

サポートされているデータベース・キャラクタ・セットの詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「レクサー型」の項を参照してください。

## Oracle Ultra Search Configuration Assistant が Oracle Identity Management のアップグレード中に失敗する問題

Oracle Application Server 10g をアップグレードするとき、Oracle Identity Management のアップグレード中に Oracle Ultra Search Configuration Assistant が失敗することがあります。この問題は、SQL を使用して変更した WKSYS のパスワードが OracleAS Metadata Repository のパスワードと同期化していないために発生します。

Configuration Assistant での問題を回避するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して、Oracle Directory Manager を起動します。

```
※ $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```

2. Oracle Directory Manager に orcladmin ユーザーでログインします。

3. 「System Objects」フレームで次の操作を実行します。

- Entry Management を拡張します。
- cn=OracleContext を拡張します。
- cn=Products を拡張します。
- cn=OracleAS を拡張します。
- cn=OracleAS Infrastructure Databases を拡張します。
- OracleAS Metadata Repository の orclReferenceName を拡張します。

4. スキーマ WKSYS に対して OrclResourceName エントリを選択します。

「Properties」タブを選択すると、ランダムに作成されたパスワードが orclpasswordattribute フィールドに表示されます。

5. sqlplus を使用して、OracleAS Infrastructure 10g OracleAS Metadata Repository にログインします。

```
sqlplus /nolog
```

6. 次のコマンドを実行します。

```
SQL> CONNECT / AS SYSDBA  
SQL> ALTER USER WKSYS IDENTIFIED BY <randomized password>
```

## OracleAS RepCA のインストール

Oracle Ultra Search では、OracleAS RepCA をインストールすると、スキーマのインストールのみではなく完全インストールが実行され、Oracle Ultra Search バックエンドが構成されます。このため、既存の ORACLE\_HOME/ultrasearch ディレクトリをバックアップした後、新しいバージョンの Oracle Ultra Search を OracleAS RepCA インストール CD から Oracle ホーム・ディレクトリにコピーすることをお勧めします。

Oracle ホームが Cluster File System に含まれていない Oracle Application Server Real Application Clusters (RAC) では、Oracle ホームに新しい情報をコピーするだけでは十分ではありません。OracleAS RepCA インストール CD から Oracle Ultra Search をインストールすると、RAC の各 Oracle Application Server インスタンスに適用されません。このため、RAC の Oracle ホームごとに、既存の ORACLE\_HOME/ultrasearch ディレクトリをバックアップした後、新しいバージョンの Oracle Ultra Search を OracleAS RepCA インストール CD からコピーする必要があります。

## 不具合

- **Bug 3186386:** 非 SSO モードでの Oracle Ultra Search の ACL の作成または編集が失敗する

Oracle Ultra Search 管理者は、データベース管理者または管理権限が付与されている SSO ユーザーでログインできます。このリリースでは、データベース管理者でログインすると、特定の状況では、データ・ソース用の管理者指定 ACL を作成も編集もできません。ACL を作成または変更しようとする、「アクセスが拒否されました。」エラーが発生します。回避策は、データ・ソース用の ACL を作成 / 変更する場合は、常に SSO ユーザーでログインすることです。
  - **Bug 3411206:** データベース・キャラクタ・セットが UTF8 またはアジア言語のキャラクタ・セットの場合にデフォルト・インスタンスの索引付け設定が不適切である

デフォルト・インスタンスは、シード・データベースとともに作成され、英語 /ISO8859 に設定されます。インストール時に、中国語などのマルチバイト言語を処理するデータベース・キャラクタ・セット (例: UTF8) を設定するように選択した場合は、デフォルト・インスタンスを更新する必要があります。この問題を回避するには、wksys 下で \$ORACLE\_HOME/ultrasearch/admin/wk0prefcheck.sql を実行して索引設定を確認した後、インスタンス所有者 \$ORACLE\_HOME/ultrasearch/admin/wk0idxcheck.sql を実行して問題を修正します。デフォルト・インスタンス下にあるすべてのデータソース (ある場合) を再クロールする必要があります。データベース・キャラクタ・セットが JA16EUC の場合は、最初に Bug 3411046 の回避策を適用する必要があります。
  - **Bug 3411046:** データベース・キャラクタ・セットを JA16EUC に変更した場合に誤ったフィルタ出力キャラクタ・セットが設定される

Ultra Search のインストール後にデータベース・キャラクタ・セットを JA16EUC に変更し、wk0prefcheck.sql または wk0idxcheck.sql を実行すると、キャッシュ・ファイルのキャラクタ・セットが 'EUC\_JP' という誤った値に設定されます。この問題を回避するには、wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql 内の行 Encoding='EUC\_JP' を Encoding='Unicode' に変更し、wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql を再実行します。
  - **Bug 3318301:** データベース・キャラクタ・セットが KO16MSWIN949 の場合に韓国語のレクサーを使用できない

データベース・キャラクタ・セットが KO16MSWIN949 の場合は、韓国語ドキュメントの索引付けが使用できません。

データベース・キャラクタ・セットが JA16EUCTILDE、JA16EUCYEN、JA16SJISTILDE または JA16SJISYEN の場合は、日本語のレクサーに同じ問題が発生します。

データベース・キャラクタ・セットが ZHS32GB18030、ZHT16MSWIN950 または ZHT16HKSCS の場合は、中国語のレクサーに同じ問題が発生します。

この問題を回避するには、更新された wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql を取得して、インストールを修正します。Ultra Search を再インストールする場合は、更新された wk0pref.sql が必要です。
- XML DB に依存する問題:** 次の 2 つの XML データベースの不具合は、9.2.0.4 データベース・リリースで認識されています。これらの問題は、9.2.0.4 データベース後のパッチ・リリースで修正されます。
- **Bug 3172282:** 特定の ACL に対するすべての ACE をリストしようとするときに Oracle Core Dump する

Oracle 9.2.0.4 を使用している場合、Oracle Ultra Search 管理者は、管理者指定 ACL を作成後に表示できません。そのため、これらの ACL は編集または変更できません。したがって、管理者はこれらの ACL に指定した権限を常に把握しておく責任があります。さらに、ACL は表示できないため編集できません。この結果、ACL を変更する必要がある場合、既存のデータ・ソースを削除し、再作成して、新しい権限を設定した新規 ACL を割り当てる必要があります。

- **Bug 3176161:** resource\_view を updatexml で更新するとコア・ダンプが生成される

Oracle 9.2.0.4 を使用している場合、この不具合によって XDB リポジトリに格納されている ACL は更新できません。したがって、Bug 3172282 が修正された場合（および管理者が管理者指定 ACL を作成後に表示できる場合）でも、ACL を編集することはできません。この結果、ACL を変更する必要がある場合、既存のデータ・ソースを削除し、再作成して、新しい権限を設定した新規 ACL を割り当てる必要があります。

## Oracle Ultra Search のアップグレード・メッセージ

「OracleAS RepCA and Utilities」CD-ROM で提供されている upgradeInfra.sh スクリプトを使用して 9.0.2 インフラストラクチャをアップグレードすると、次のメッセージが表示されることがあります。

```
ERROR - seed data CC_TRUSTSTORE_FILE_NAME does not exist in table
WK$CRAWLER_CONFIG_DEFAULT
=====
=      FAILED upgrade of schema: WKSYS
=====
```

このメッセージを無視してアップグレードを続行しても安全です。

## Oracle Ultra Search バックエンドのカスタマ・データベース・インストール

Oracle Ultra Search は、既存の Oracle 9i (9.0.1.4) 以上のデータベースの上にインストールできます。次の 2 通りのインストール方法があります。

- [Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用したインストール](#)
- [wk0setup を使用した手動インストール](#)

## Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用したインストール

Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) は、カスタマ・データベースを OracleAS Metadata Repository に変換します。OracleAS RepCA はすべての Oracle Application Server コンポーネント・スキーマをインストールし、Oracle Ultra Search バックエンドもインストールします。

OracleAS RepCA は Oracle Application Server リリースでのみ使用できます。カスタマ・データベースへの Oracle Ultra Search バックエンドのインストールには、OracleAS RepCA を使用する方法をお勧めします。Oracle Ultra Search とともに他の Oracle Application Server コンポーネント・スキーマもすべてインストールされるというオーバーヘッドはありますが、かわりに OracleAS Infrastructure 10g の利点 (Identity Management の統合、IM 再関連付けの正しく定義されたプロセスなど) を利用できます。

OracleAS RepCA を使用して MR を作成する方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのインストール」の項を参照してください。

### OracleAS RepCA のインストール後に行う設定

Oracle Ultra Search については、OracleAS RepCA によるインストール後に実行する必要がある構成手順があります。Oracle Ultra Search クローラは、JDK 1.4.1 以上を必要とする Java アプリケーションです。Oracle Ultra Search は、OracleAS RepCA によってデフォルトの JDK インストール (\$ORACLE\_HOME/jdk/bin/java など) を使用するように構成されます。このインストールは、10g より前の ORACLE\_HOME では、JDK 1.4.1 より前のバージョンです。したがって、\$ORACLE\_HOME/jdk/bin/java がすでに JDK 1.4.1 以上でないかぎり、次の手順を実行する必要があります。

1. ローカル・システムに 1.4.1 以上の JDK をインストールします。
2. OracleAS RepCA CD の ultrasearch/admin ディレクトリに移動します。次に、SQL\*PLUS を使用して wkrepca.sql スクリプトを実行します。wksys ユーザーで接続し、JDK 1.4.1 以上の Java 実行ファイルのパスをスクリプトに渡す必要があります。次に例を示します。

```
sqlplus wksys/wksys_password@repca_cd/ultrasearch/admin/wkrepca.sql
/usr/local/jdk1.4/bin/java
```

## wk0setup を使用した手動インストール

Oracle Ultra Search バックエンドのみをカスタマ・データベースにインストールする場合は、Oracle Ultra Search バックエンドの手動インストールを選択できます。このプロセスを示すために、ここでは次の値と表記規則を使用します。

*ORACLE\_HOME*: ターゲット・データベースの Oracle ホーム・ディレクトリ。

*SH*: ソース・ディレクトリ。OracleAS RepCA CD のディレクトリで、Oracle Ultra Search のディレクトリ (OracleAS RepCA など) が含まれます。

Oracle Ultra Search バックエンドの手動インストールの手順は、次のとおりです。

1. `$ORACLE_HOME/ultrasearch` ディレクトリをバックアップします。バックアップするには、このディレクトリの名前を `$ORACLE_HOME/ultrasearch.old` に変更します。
2. `SH/ultrasearch` を `$ORACLE_HOME/ultrasearch` にコピーします。
3. ディレクトリを `$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin` に変更します。
4. Oracle Ultra Search スキーマ `wksys` がターゲット・データベースにすでに存在する場合は、次のように実行してアンインストールします。

```
@ sqlplus /nolog @$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0deinst.sql sys SYSPW CSTR
```

各パラメータの内容は後述の説明を参照してください。

5. SQL\*Plus スクリプト `wk0setup.sql` を実行します。

次に例を示します。

```
sqlplus /nolog @$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0setup.sql $ORACLE_HOME CSTR sys SYSPW 'as
sysdba' WKSYS PW TBLSPC TMPTBLSPC portal CFS oui PSEP JDBC DRV JDBC NL S JEXEC CTXHX JDBC_NODE
JDBC_ALL $ORACLE_HOME
```

使用されている様々なパラメータの内容は次のとおりです (パラメータは誤って解釈されないように、一重引用符で囲む必要があります)。

- *CSTR*: '@' で始まる TNS 別名 (@inst1 など)。このパラメータは1つの空白 ('') で渡すこともできます。
- *SYSPW*: SYS ユーザー / スキーマのパスワード。
- *WKSYS PW*: Oracle Ultra Search スキーマ `wksys` に使用されるパスワード。
- *TBLSPC*: `wksys` の表領域。
- *TMPTBLSPC*: `wksys` の一時表領域。
- *CFS*: *ORACLE\_HOME* が Cluster File System (CFS) にある場合は 'true'、それ以外は 'false'。
- *PSEP*: パス・セパレータ (例: UNIX では ';', Windows では '|')。
- *JBC DRV*: JDBC ドライバ `classes12.zip` へのパス (`$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip` など)。
- *JBC NL S*: `nls_charset12.zip` または `orai18.jar` へのパス (`$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip` など)。
- *JEXEC*: Java 実行可能ファイルのパス (`/packages/jdk1.4.1/bin/java` など)。このパスは、JDK 1.4.1 以上のインストールを指し示す必要があります。
- *CTXHX*: `INSOFILTER` である `ctxhx` へのパス (`$ORACLE_HOME/ctx/bin/ctxhx` など)。
- *JBC\_NODE*: Thin JDBC 接続文字列および '@' の後の部分のみ (`HOST:PORT:SID` など)。RAC の場合、この接続文字列は現行のノードに対するものであることが必要です。
- *JBC\_ALL*: *JBC\_NODE* と同じですが、CFS が `true` の RAC の場合、この JDBC 文字列にはすべての RAC ノードが含まれている必要があります (ヒント: TNS 構文を使用)。

## データベース・キャラクタ・セット変更後のバックエンドの再構成

Oracle Ultra Search のインストール後にデータベース・キャラクタ・セットが変更された場合は、新しいキャラクタ・セットに適応するように Oracle Ultra Search のバックエンドを再構成する必要があります。

この再構成には、`$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/`にある2つのSQLスクリプト (`wk0prefcheck.sql` および `wk0idxcheck.sql`) が使用されます。

- `wk0prefcheck.sql` が `wksys` の下で起動され、デフォルトのキャッシュ・キャラクタ・セットと索引設定が再構成されます。

`wk0idxcheck.sql` を実行すると、Oracle Ultra Search で使用される Oracle Text 索引も削除および再作成されます。すでに索引付けされているデータ・ソースがある場合は、すべてのデータ・ソースを強制的に再クロールする必要があります。

`wk0idxcheck.sql` はインスタンスごとに1回ずつ実行する必要があります。そのため、`owner1` と `owner2` がそれぞれ所有する `inst1` と `inst2` の2つのインスタンスがある場合は、`wk0idxcheck.sql` を、`owner1` で1回、`owner2` で1回の合計2回実行する必要があります。

- `wk0idxcheck.sql` は、データベース・キャラクタ・セットの変更前に作成されたインスタンス (デフォルト・インスタンスなど) を再構成するために必要です。このスクリプトはインスタンスの所有者が起動する必要があり、`wk0prefcheck.sql` によって生成される再構成後のデフォルト設定に依存するため、`wk0prefcheck.sql` を最初に実行する必要があります。

## ドキュメントの誤り

この項では、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [全般的な訂正](#)
- [セキュア検索](#)
- [セキュアな Oracle Ultra Search インストールの構成](#)
- [Oracle Application Server による Oracle Ultra Search Middle-Tier のインストール](#)
- [Oracle HTTP Server および OC4J とともに Oracle Ultra Search Middle-Tier を構成する場合](#)
- [ultrasearch.properties ファイルの編集](#)
- [Oracle Ultra Search のバックエンドをリモート・クローラ・ホストで構成する場合](#)
- [Oracle Ultra Search セキュリティ・モデル](#)
- [リモート・クローラ・プロファイル](#)

### 全般的な訂正

チューニングおよび管理の章の「一時ディレクトリ」という用語は、正しくは「キャッシュ・ディレクトリ」です。

### セキュア検索

Oracle Ultra Search では、ユーザー定義のデータ・ソース・タイプに対してのみ「Crawl ACLs from the Data Source」モードがサポートされます。このモードでは、クローラ・エージェントによって、他のドキュメント属性とともに、ACL がデータ・ソースから取得されます。Web、表、ポータル、電子メールまたはファイル・タイプの場合は、ACL をデータ・ソースから取得することはできません。

エージェント API に関しては、送信される URL の ACL をエージェントが設定できる新規 URL プロパティ "UrlData.ACL" があります。また、エージェント API には新規の `Ac1Helper` クラスがあります。このクラスによって、必ず正しい書式の ACL 文字列になるように ACL 文字列が生成されます。

ACL のプリンシパルとして使用できるのは、識別名 (DN) およびグローバル・ユーザー ID (GUID) のみです。

## セキュアな Oracle Ultra Search インストールの構成

セキュアな Oracle Ultra Search のインストールの設定に関して、次の追加事項および訂正事項があります。セキュアな Oracle Ultra Search のインストールを設定する前に、次のことを実行する必要があります。

- Oracle データベース リリース 9.2.0.4 以上のインストールまたはアップグレード。ドキュメントでは、リリース 10.1.0 以上と誤って記述されています。
- Oracle Internet Directory のインストール。中間層および IM (Identity Management) のリリースが 9.0.4 以上であることが必要です。

現在のドキュメントには、OracleAS RepCA を使用して、9.2.0.4 データベースを Oracle Application Server 9.0.4 Metadata Repository に変換できると記述されています。これを実行できるのは、9.2.0.4 データベースが存在する場合であるという記述を追加する必要があります。

- データベースの Oracle Internet Directory への登録。

OracleAS RepCA を使用すると、データベースを Oracle Internet Directory に登録できます。登録後、次の手動による手順を実行する必要があります。

- データベースの識別名を、RDBMS\_SERVER\_DN 初期化パラメータ値としてデータベース・サーバー・パラメータ・ファイル spfile.ora に追加します。
- データベースを再起動します。この結果、新規初期化パラメータが有効になります。
- Oracle-Oracle Internet Directory SSL リンク (以前は "SSL" が欠落していました) の構成。データベースと Oracle Internet Directory の間でセキュアな接続を確立するためには、次の各マニュアルの指示に従ってください。
  - **SSL に対応した Oracle Internet Directory の構成:** 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」の章
  - **SSL に対応したデータベースの構成:** 『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』の「エンタープライズ・セキュリティの管理」の章

また、Oracle Identity Management および Oracle Internet Directory を使用するデータベースの構成の詳細について『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照するという記述は無視してください。

## Oracle Application Server による Oracle Ultra Search Middle-Tier のインストール

「オプションの構成」 Oracle Installer 画面で「OracleAS Portal」オプションを選択した場合は、次の項の構成手順が Oracle Portal Configuration Assistant (OPCA) によって自動的に実行されます。

項テキスト (data-sources.xml ファイルの編集) で指示されている追加の手動手順を実行する必要はありません)。すべて自動的に構成されます。

## Oracle HTTP Server および OC4J とともに Oracle Ultra Search Middle-Tier を構成する場合

application.xml ファイルについて、<orion-application> タグの下の記述を次のように変更してください。

変更前:

```
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/lib/ultrasearch_query.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/webapp/config" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/uix2.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/share.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/regexp.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/lib/mail.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/lib/activation.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/lib/xmlparserv2.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip" />
<library path="$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.jar" />
```

変更後:

```
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/lib/ultrasearch_query.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/webapp/config" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/uix2.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/share.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/regexp.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/repository.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/ohw.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/ldapjclnt9.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/j2ee/home/jazn.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/portal/jlib/ptlshare.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/portal/jlib/pdkjava.jar"/>
```

default-web-site.xml について、<web-site> タグの下に次のように記述を追加してください。

変更前:

```
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="admin" root="/ultrasearch/admin" />
<web-app application="UltrasearchQuery" name="query" root="/ultrasearch/query"/>
<web-app application="UltrasearchPortlet" name="query" root="/provider/ultrasearch" />
```

変更後:

```
<web-app application="UltrasearchQuery" name="query" root="/ultrasearch/query"/>
<web-app application="UltrasearchQuery" name="welcome" root="/ultrasearch" />
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="admin" root="/ultrasearch/admin" />
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="admin_sso" root="/ultrasearch/admin_sso" />
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="ohw" root="/ultrasearch/ohw" />
```

## ultrasearch.properties ファイルの編集

ultrasearch.properties ファイルの内容が変更されています。

ultrasearch.properties ファイルの例を次に示します。

```
connection.driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
#If set, The JDBC connection URL specified here will override the dynamically #acquired one
from OID.
#This setting is also used by the 9i query sample (gsearch.jsp)
#Example: connection.url=jdbc:oracle:thin:@<host>:<port>:<sid>
connection.url=%JDBC_CONN_STR%
oracle.net.encryption_client=REQUESTED
oracle.net.encryption_types_client=(RC4_56,DES56C,RC4_40,DES40C)
oracle.net.crypto_checksum_client=REQUESTED
oracle.net.crypto_checksum_types_client=(MD5)
oid.app_entity_cn=m16bi.sgtcnsun03.cn.oracle.com
domain=us.oracle.com
```

ultrasearch.properties ファイルで JDBC 接続文字列を構成する必要がなくなりました。データベース接続情報は Oracle Internet Directory から取得されます。

---



---

**注意:** Oracle Ultra Search 9i の問合せサンプル・ページ (gsearch.jsp) は、そのままでは機能しなくなります。別のプロパティ・ファイルを使用するか、または ultrasearch.properties ファイルを編集する必要があります。

---



---

## Oracle Ultra Search のバックエンドをリモート・クローラ・ホストで構成する場合

手順 4 の正しい記述は次のとおりです。

4. 登録スクリプトを起動します。

WKSYS スーパー・ユーザーで SQL\*Plus を起動し、次のように入力します。

```
@full_path_of_registration_script
```

RMI ベースのリモート・クローラの登録スクリプトは、次のとおりです。

```
$REMOTE_ORACLE_HOME/ultrasearch/tools/remotecrawler/scripts/<platform>/register.sql
```

JDBC ベースのリモート・クローラの登録スクリプトは、次のとおりです。

```
$REMOTE_ORACLE_HOME/ultrasearch/tools/remotecrawler/scripts/<platform>/register_jdbc.sql
```

たとえば、UNIX ホストの \$REMOTE\_ORACLE\_HOME の値が /home/oracle9i の場合は、SQL\*Plus プロンプトで次のように入力して、RMI ベースのリモート・クローラを登録します。

```
/home/oracle9i/ultrasearch/tools/remotecrawler/scripts/unix/register.sql
```

同様に、Windows で SQL\*Plus を実行しているときに、\$REMOTE\_ORACLE\_HOME が d:\¥Oracle¥Oracle9i の場合は、SQL\*Plus プロンプトで次のように入力して、JDBC ベースのリモート・クローラを登録します。

```
d:\¥Oracle¥Oracle9i¥ultrasearch¥tools¥remotecrawler¥scripts¥winnt¥register_jdbc.sql
```

## Oracle Ultra Search セキュリティ・モデル

Oracle Ultra Search でセキュア Web サイトにアクセスする場合、クローラのトラストストアおよび Oracle Containers for J2EE (OC4J) JVM のトラストストアに証明書をインポートする必要がある場合があります。

Oracle Ultra Search 管理ツールは、OC4J JVM 内で動作する Web アプリケーションです。セキュア・ポータル・インスタンスでは、クライアントが SSL で認証されている必要があります。セキュア・ポータル・インスタンスでページ・グループを検出するには、Oracle Ultra Search 管理ツールで HTTPS ネットワーク・コールを行う必要があります。

デフォルトでは、OC4J JVM は一般に知られている認証局の証明書を認識します。しかし、セキュア・ポータル・インスタンスで、自己署名証明書または不明な認証局によって署名された証明書が使用される場合は、ポータルの証明書を OC4J JVM のトラストストアにインポートする必要があります。これは、Sun 社の keytool ユーティリティで実行できます。

OC4J JVM のデフォルトのトラストストアは \$ORACLE\_HOME/jdk/jre/lib/security/cacerts にあります。

**関連項目：** Sun 社の keytool 鍵および証明書管理ユーティリティの使用  
方法、SSL サービスのカスタマイズ、およびトラストストア管理の詳細  
は、Sun 社のドキュメントを参照してください。

別のトラストストアを使用するように OC4J を構成する方法は、OracleAS Containers for J2EE のドキュメントを参照してください。

## リモート・クローラ・プロファイル

この項の最後に、次の注意を追加してください。

---

**注意：** リモート・クローラのキャッシュ・ディレクトリは、サーバー側クローラのキャッシュ・ディレクトリにマウントする必要があります（「クローラ」の「設定」タブで指定）。このようにマウントしないと、ドキュメントの索引を作成できません。

---

---

## Oracle Application Server Syndication Services

この章では、Oracle Application Server Syndication Services (OracleAS Syndication Services) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [ドキュメントの誤り](#)

## ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Syndication Services のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [ファイルおよび WebDAV コネクタの増分更新に関する注意](#)

## ファイルおよび WebDAV コネクタの増分更新に関する注意

増分更新は、アクセスされるファイルおよび Web Distributed Authoring and Versioning (WebDAV) の最終変更日に基づいて行われます。原則として、ある更新から次の更新までに配信されるファイルは、ソース・ディレクトリをスキャンして、変更日が前回の更新時間より後の要素をすべて識別することによって判別されます。一部のオペレーティング・システムでは、ファイルを移動したときにファイルの変更日が更新されないため、移動したリソースで元の変更時間が保持されます。

この動作を考慮する必要があるのは、OracleAS Syndication Services によってコンテンツ・リソースとして使用されるファイルがあるディレクトリに移動する場合です。つまり、移動したファイルの元の変更日が最終更新時間より前である場合、これらのファイルは、次の増分更新時に配信されません。この場合は、完全更新によってファイルを取得できます。

ディレクトリ内でファイルをコピーする場合、コピー・コマンドでは変更日に現在の日付が設定されるため、この問題は発生しません。

# 第 V 部

---

## Oracle Application Server Wireless の問題

第 V 部では、OracleAS Wireless に関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第 16 章 「Oracle Application Server Wireless」



# 16

---

## Oracle Application Server Wireless

この章では、Oracle Application Server Wireless (OracleAS Wireless) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Wireless の一般的な問題に関する情報と回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- マルチチャネル・ゲートウェイの使用
- パフォーマンスの最適化と JSP ファイルの変更
- メッセージのトランスポート
- マルチバイトのユーザー名は Jabber ではサポートされない
- ドライバ名の変更
- プッシュ SOAP の URL
- 一部の MXML メッセージでのイメージの破損
- 通知の早期配信
- XHTML および XForms
- Customization Portal でのデバイス妥当性チェック用にローカライズされた音声メッセージのエラー
- 再作成された SSO ユーザーが使用できない機能
- シグネチャ獲得フォーム・コントロールの使用
- Oracle Application Server Wireless と Web Cache の統合
- Oracle Application Server Wireless と Oracle Portal の統合
- Oracle Application Server Wireless の log.xml ファイルは NLS をサポートしない
- POST メソッドはすべての言語でサポートされているわけではない

---

---

**注意：** パフォーマンスの問題と計画の詳細は、OTN-J の「OracleAS Wireless」セクションを参照してください。

---

---

- Web クリッピングのヘルプ・ページの制限
- 無効なユーザー・アカウント
- Web クリッピングの出力が異なる言語で表示される場合がある
- 日本語文字列によるショート・メッセージの送信を避ける
- 韓国語文字でメッセージを保存できない
- リポジトリ・オブジェクトのアップロードに関するオンライン・ヘルプ

## マルチチャネル・ゲートウェイの使用

マルチチャネル・ゲートウェイを使用するには、Web アプリケーションを作成してデプロイする必要があります。アプリケーションの開発には、任意の Web テクノロジを使用できます。静的ページまたは動的ページのいずれも使用できます。また、モバイル XML または XHTML マークアップ言語も使用できます。HTTP (HTTPS) プロトコルを介してアプリケーションにアクセスできることが唯一の要件です。アプリケーションは、マルチチャネル・ゲートウェイと同じマシン上で実行される場合とそうでない場合があります。

説明を簡略にするため、アプリケーションは単純な JSP (Hello.jsp) であるとします。この JSP にアクセスするための URL は、次のとおりです。

```
http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp
```

マルチチャネル・ゲートウェイは、次の URL を使用してアクセスできる別の Web アプリケーションです。

```
http://hostname:7777/mcs/remote/
```

7777 は Oracle9iAS Wireless のデフォルト・ポートです。ただし、マルチチャネル・ゲートウェイはコンテンツを作成しないため、マルチチャネル・ゲートウェイの URL にアクセスしてもコンテンツは表示されません。使用しているデバイスからマルチチャネル・ゲートウェイを介して独自のアプリケーション（コンテンツ・ソース）にアクセスするには、特別な URL を指定する必要があります。特別な URL の作成方法を説明するために、次のサンプル URL について考えてみます。

```
http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp
```

使用しているデバイスに入力する URL は、次のとおりです。

```
http://hostname:7777/mcs/remote/http/myhost/8080/jsp/Hello.jsp
```

次に、この URL の作成方法を説明します。

1. 基本となるマルチチャネル・ゲートウェイの URL を取得します。ここでは、次のとおりです。

```
http://hostname:7777/mcs/remote/
```

2. アプリケーションへの絶対 URL を作成します。この URL には、デフォルトのポート番号（HTTP の場合は 80、HTTPS の場合は 443）を使用する場合でもポート番号を含めます。

3. アプリケーションの元の URL にある `://` と `:` を `/` に置き換えます（つまり、`http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp` を `http/myhost/8080/jsp/Hello.jsp` に変更します）。

4. 変更した URL をマルチチャネル・ゲートウェイの URL に追加します。

Web アプリケーションにパラメータを渡す手順はとても簡単です。標準的な URL 構文を使用して、URL の最後に問合せ文字列を追加します。

次に例を示します。fname パラメータと lname パラメータを Hello.jsp に渡す場合は、次の構文を使用します。

```
http://hostname:7777/mcs/remote/http/myhost/8080/jsp/Hello.jsp?fname=John&lname=Doe
```

マルチチャネル・ゲートウェイでユーザー・デバイスからの要求を受信すると、次のように、元のアプリケーション URL が再作成されます。

```
http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp
```

要求はこの URL に送信されます。マルチチャネル・ゲートウェイでは、ユーザー・デバイスが要求の送信に使用したのと同じ HTTP メソッドを使用します（ユーザー・デバイスが GET を使用した場合、マルチチャネル・ゲートウェイは GET を使用してバックエンド・アプリケーションにアクセスします。現在サポートされているのは、GET および POST のみです）。

## パフォーマンスの最適化と JSP ファイルの変更

一般的に、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) は JavaServer Pages (JSP) ファイルを調べて変更を検出し、次に再コンパイルします。ただし、ptg Web アプリケーション内にデプロイされた JSP ファイルについては、この OC4J の動作が変更されています。

インクルードされ、プリコンパイルされた JSP ファイルを変更すると、OC4J ではその JSP ファイルの変更を検出およびコンパイルしません。

---

**関連項目：** OC4J 構成の詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の「JSP 構成パラメータ」を参照してください。

---

たとえば、ptg Web アプリケーション内にデプロイされたすべての JSP ファイルはプリコンパイルされます。なんらかの理由でそれらの JSP ファイルを変更すると、プリコンパイルされたクラス・ファイルを使用できなくなるため、OC4J 設定を変更して JSP コンパイルを使用可能にする必要があります。使用可能にするには、次の場所にある ptg アプリケーションの web.xml ファイルを変更します。

```
[ORACLE_HOME]/OC4J_Wireless/applications/ptg/ptg-web/WEB-INF/web.xml.
```

この問題（JSP ファイルへの変更内容が有効にならない）を回避し、Oracle Application Server Wireless に含まれる JSP ファイルのパフォーマンスを最適化するには、次の例に説明するように web.xml ファイルを変更する必要があります。

1. ファイルから次の部分を削除します。

```
<!--
WARNING!!! Overridden JSP engine settings
With this configuration the JSP files in this application will NOT be recompiled.
Any changes to the JSP source files will NOT take effect.
If you want to switch back to the default JSP engine settings simply comment out
the servlet declaration and mapping for the jsp servlet below.
-->
<servlet>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<servlet-class>oracle.jsp.runtimev2.JspServlet</servlet-class>
<!-- you can disable page scope listener if you
don't need this function. -->
<init-param>
<param-name>check_page_scope</param-name>
<param-value>>true</param-value>
</init-param>
<!-- you can set main_mode to "justrun" to speed up
JSP dispatching, if you don't need to recompile
your JSP anymore. You can always switch your
main_mode. Please see our doc for details -->
<init-param>
<param-name>main_mode</param-name>
<param-value>justrun</param-value>
</init-param>
<load-on-startup>0</load-on-startup>
</servlet>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/* .jsp</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/* .JSP</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/* .jspx</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/* .sqljsp</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/* .SQLJSP</url-pattern>
</servlet-mapping>
```

2. また、ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_Wireless/applications/ptg/ptg-web/WEB-INF/classes/\_modules ディレクトリ、および ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_Wireless/applications/ptg/ptg-web/WEB-INF/classes ディレクトリにある名前がアンダースコア（\_）で始まるすべてのクラス・ファイルも削除する必要があります。
3. OC4J\_Wireless アプリケーションを再起動します。

## メッセージのトランスポート

メッセージに関して次の問題があります。

- デバイスでの不具合のため、ASCII 以外の文字を含む件名付き MMS メッセージの Nokia 3650 への送信はサポートされていません。
- SyncML サーバー設定の Nokia 3650 への送信はサポートされていません。
- 事前にシードされているサイト・レベルのすべてのドライバは、デフォルトで使用可能です。パフォーマンスを向上させるために、不要なドライバを使用不可にできます。
- メッセージのトランスポートでは、拡張メッセージ・サービス (EMS) で送信できるのは英語のメッセージのみです。英語以外の言語は、SMS および MMS でサポートされています。

## マルチバイトのユーザー名は Jabber ではサポートされない

Instant Messaging で使用するバックエンドである Jabber では、マルチバイトのユーザー名をサポートしません。このため、Instant Messaging モジュールでもマルチバイトのユーザー名をサポートしません。

## ドライバ名の変更

ユーザー・インタフェースとドキュメントでは、*XMSDriver* への参照がすべて *PushDriver* に変更されました。

## プッシュ SOAP の URL

このリリースでは、プッシュ SOAP の URL が変更されました。Oracle Application Server Wireless の新規にインストールしたインスタンスに対して XMS クライアントを使用している場合は、新しい URL を使用するようにクライアントを更新する必要があります。デフォルトでは、新しい URL は `/xms/webservices` (以前のリリースでは `/push/webservices`) です。

インスタンスをリリース 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードした場合、古い URL (`/push/webservices`) は有効なままで、アプリケーションは実際には 9.0.2 のコード・ベースを実行します。したがって、古い URL は下位互換性を維持するためにのみ使用し、新しい URL (`/xms/webservices`) を使用するように SOAP API のクライアントを更新する必要があります。

## 一部の MXML メッセージでのイメージの破損

属性 `addImageExtension=true` を指定したイメージ参照を含む MXML メッセージを XMS を使用して電子メール受信者に送信すると、一部の電子メール・クライアントでは、表示されるインライン・イメージが破損している場合があります。この問題を回避するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Wireless Tools の「**基本管理**」タブに移動します。
2. 「ASYNC」デバイスを選択します。
3. 「**編集**」をクリックします。
4. 「ブラウザ」セクションに移動し、「イメージファイル MIME タイプ」表にナビゲートします。
5. 次の MIME タイプを左ペインから右ペインに移動します。
  - `image/bmp bmp`
  - `image/png png`
  - `image/tiff tif`
  - `image/gif gif`
  - `image/jpeg jpeg`
6. 「**適用**」をクリックして変更内容を保存します。

## 通知の早期配信

連絡ルールで送信時間枠を指定しているユーザーに対して電子メールで通知メッセージを送信する場合、メッセージが時間枠より早期に配信される場合があります。たとえば、ユーザーが連絡ルールで午前 10 時まで電子メールを受信しないように指定している場合でも、通知が午前 9 時に生成されると、60 分間配信が遅延されることはなく、そのメッセージは即時に送信されます。

この問題の回避策はありません。

## XHTML および XForms

この項では、XHTML および XForms に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- XHTML/XForms の非同期サポート
- XForms で「戻る」ボタンを使用する際のエラー
- XForms を使用したラジオ・ボタン、チェック・ボックスおよび選択リストの表示
- XForms を使用したフォーム送信

### XHTML/XForms の非同期サポート

XForms を使用して非同期サービスを開発する場合は、`itemset` ではなく `item element` を使用して `select` 要素と `select1` 要素のオプション・リストを表示する必要があります。

### XForms で「戻る」ボタンを使用する際のエラー

XForms Web アプリケーションでは、ブラウザの「戻る」ボタンを使用できません。Oracle Application Server は、ブラウザと Application Server 間の複数のラウンドトリップをサポートするために、サーバー上のフォームの状態をキャッシュします。ブラウザの「戻る」ボタンを使用すると、ブラウザ（キャッシュ）はサーバーの現在の状態をフェッチしないため、競合が発生する場合があります。また、特定のアクション（XForms の `submit` など）の場合、Application Server では状態が消去されるため（発行後にサーバーの状態が消去されるため）、再発行が試行されると（ブラウザの「戻る」ボタンを使用して）、サーバーはエラーをスローします。

### XForms を使用したラジオ・ボタン、チェック・ボックスおよび選択リストの表示

XForms は、`select1` と `select` コントロールを使用して、値リストから 1 つ以上選択できることを示します。ラジオ・ボタン、チェック・ボックスまたは選択リストを表示するには、これらのコントロールを使用します。また、`appearance` 属性を使用して、UI で表示される `select1` または `select` の種類を制御します。`appearance="full"` を使用して、ラジオ・ボタン（`select1` の場合）またはチェック・ボックス（`select` の場合）を表示します。

### XForms を使用したフォーム送信

XForms 文書で `post submission` メソッドを使用すると、XForms プロセッサは、送信済の XML（インスタンス）データの `xmlns` 名前空間属性（デフォルト名前空間と使用した名前空間の接頭辞）を送信しません。これは既知の不具合で、作成者は、名前空間の接頭辞をインスタンス・データのルート要素に定義することで、この問題を回避できます。

## Customization Portal でのデバイス妥当性チェック用にローカライズされた音声メッセージのエラー

音声チャンネルを介したデバイス妥当性チェック・メッセージは、ユーザーのロケールが「English」に設定されている場合のみ機能します。このメッセージは、音声ゲートウェイで英語自動音声認識（ASR）エンジンを使用してレンダリングされます。ユーザー・ロケールまたはゲートウェイが他の設定の場合は、ASR エンジンでサポートされていないため、メッセージ配信でエラーが発生する場合があります。

## 再作成された SSO ユーザーが使用できない機能

Oracle Application Server Wireless Tools の再作成された SSO ユーザーは、その Tools の一部の機能にアクセスできません。あるユーザーを削除してから再作成すると、そのユーザーは Wireless Tools のすべての機能を使用できなくなります。この問題は、SSO サーバーがユーザーの GUID 情報をキャッシュするために発生します。この問題を解決するには、SSO サーバーを再起動します。

## シグネチャ獲得フォーム・コントロールの使用

一部のブラウザ (Spectrum24® WebClient for Palm Computing Platform など) は、シグネチャ獲得機能をサポートしています。OracleAS Wireless XML を使用して開発されたアプリケーションでは、シグネチャ獲得をサポートするために必要なターゲット・マークアップを生成できます。このリリースでは、次のブラウザでのシグネチャ獲得がサポートされています。

- Palm オペレーティング・システム 4.1 用の Symbol Spectrum24® WebClient for Palm Computing Platform バージョン 2.8-10
- Microsoft Pocket PC の Microsoft Pocket Internet Explorer 4.1
- Microsoft CE3 以上の Microsoft Pocket Internet Explorer

サポートされている Microsoft Pocket PC や Windows Mobile プラットフォームには、Oracle Signature Capture Plug-in for Pocket Internet Explorer がインストールされている必要があります。

## Oracle Application Server Wireless と Web Cache の統合

WebCache は MobileXML 文書をサポートしていますが、XHTML+XForms または XHTML-MP で記述された文書はサポートしていません。

## Oracle Application Server Wireless と Oracle Portal の統合

デバイスでこの機能を使用するには、デバイスが適切な HTTP ACCEPT ヘッダーを送信する必要があります。

## Oracle Application Server Wireless の log.xml ファイルは NLS をサポートしない

このリリースでは、Oracle Application Server Wireless の log.xml は NLS をサポートしていません。

## POST メソッドはすべての言語でサポートされているわけではない

XForms トランスフォーマは、POST メソッドを含むマークアップ言語を出力する場合があります。したがって、POST メソッドをサポートしないデバイス (日本の旧型の J-Phone Type C2 デバイスなど) は、XForms でサポートされません。

## Web クリップングのヘルプ・ページの制限

OracleAS Wireless Webtool の Web クリップングの機能にアクセスする場合、Web ブラウザに Netscape を使用してブラウザの言語が日本語であるとき、Web クリップングのヘルプ・ページを正常に表示できません。

## 無効なユーザー・アカウント

OracleAS Wireless Portal に HDML シミュレータによってアクセスする場合、無効なユーザー・アカウントでログインしようとするとき、ユーザー名の非 ASCII データは破損データとして表示されるか、別の文字列に変更されます。

## Web クリップिंगの出力が異なる言語で表示される場合がある

OracleAS Wireless Web クリップングで、ユーザー・プロファイルと異なる言語で出力が表示される場合があります。ユーザー・プロファイルの言語は、Webtool にログインするときに使用される言語です。Web クリップング・マネージャは、Web ブラウザの言語をデフォルトとして使用します。

OracleAS Wireless Web クリップングの出力を特定の言語で表示するには、Web ブラウザの言語の設定方法に関するブラウザのヘルプを参照してください。

## 日本語文字列によるショート・メッセージの送信を避ける

OracleAS Wireless Portal（特に ptg/rm）との接続のために UP.SDK 3.3.1 シミュレータを使用している場合、SMS に移動して日本語文字列のショート・メッセージを送信および保存すると、保存された日本語のメッセージが文字化けになります。

## 韓国語文字でメッセージを保存できない

OracleAS Wireless Portal にログインして「PIM」→「Short Messaging」を選択し、韓国語文字で事前定義ショート・メッセージを作成して保存すると、その SMS が保存されたことを確認できます。ただし、「メッセージの選択」を選択して保存されたメッセージを選択しようとしても、そのメッセージは見つかりません。

OracleAS Wireless Portal にアクセスする場合、韓国語文字でショート・メッセージを保存しないようにお勧めします。

## リポジトリ・オブジェクトのアップロードに関するオンライン・ヘルプ

リポジトリ・オブジェクトのアップロードに関するオンライン・ヘルプでは、次の2つの手順が必須と記述されていますが、これは誤りです。

3. アクティビティのログを記録する場所を入力します。これはサーバー側で生成されるログ・ファイルです。たとえば、/temp/activity.log と入力します。これは必須フィールドです。

4. エラーのログを記録する場所を入力します。これはサーバー側で生成されるログ・ファイルです。たとえば、/temp/error.log と入力します。これは必須フィールドです。

これらの手順は必須ではなく、ユーザーはログ・ファイルの場所の詳細を指定しないでデータをアップロードできます。

## 構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Wireless の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 10g の 64 ビット・データベースで Configuration Assistant が Wireless に対してハングする
- Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名にはシングルバイトの英数字のみ使用
- Oracle Internet Directory に基づくアプリケーション・エンティティでの潜在的な競合
- OC4J\_Wireless
- Oracle Application Server Wireless ホスト名の更新
- Oracle Application Server Workflow の統合
- OracleAS Wireless の不正なサイト URL
- Openwave プラグインを使用した新規デバイスまたはシミュレータの検出
- Oracle Application Server Wireless と Oracle Internet Directory の統合
- Studio ツールおよび Customization ツールにログインできない
- AIX における Wireless Fax PIM モジュールの追加の構成手順
- AIX における Wireless Instant Messaging PIM モジュールの追加の構成手順

## 10g の 64 ビット・データベースで Configuration Assistant が Wireless に対してハングする

元のデータベースと同じマシン上に 10g データベースを再作成する前に、元のデータベースと同じサービス名と SQL\*Net ポートを使用して、データベースに接続を試みるすべての中間層を停止する必要があります。これによって、多数の誤ったユーザー名 / パスワード要求を受け取ることがありません（多数の誤った要求を受け取る場合、アカウントはロック・アウトします）。

新しいデータベースの作成中も中間層を実行し続ける必要がある場合は、回避策として、failed\_login\_attempts を UNLIMITED に設定します。

## Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名にはシングルバイトの英数字のみ使用

Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名に使用できるのは、シングルバイトの英数字のみです。これには、メッセージ・ゲートウェイ、通知エンジン、データ・フィード・エンジン、通知イベント・コレクタ、パフォーマンス・ログ出力およびロケーション・イベント・サーバーのインスタンス名も含まれます。

## Oracle Internet Directory に基づくアプリケーション・エンティティでの潜在的な競合

共通のメタデータ・リポジトリ（Oracle Application Server Wireless スキーマ）に対してインストールされた Oracle Application Server Wireless 中間層は、Oracle Internet Directory の共通のアプリケーション・エンティティを共有します。アプリケーション・エンティティは最初の Oracle Application Server Wireless 中間層のインストール時に作成され、その中間層をインストールした Oracle Internet Directory ユーザーが所有します。同じメタデータ・リポジトリに対して後続の Oracle Application Server Wireless 中間層をインストールするときは、最初の中間層インストール時に作成されたアプリケーション・エンティティが使用されます。

メタデータ・リポジトリに対する後続の Oracle Application Server Wireless 中間層のインストールは、最初の Oracle Application Server Wireless 中間層をインストールした Oracle Internet Directory ユーザーが実行する必要があります。

別の Oracle Internet Directory ユーザーを使用して後続の Oracle Application Server Wireless 中間層をインストールする場合は、後続の Oracle Application Server Wireless 中間層のインストールを開始する前に、アプリケーション・エンティティの共有所有者として Oracle Internet Directory ユーザーを追加する必要があります。

Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの共有所有者を追加する手順は、次のとおりです。

1. 次のスクリプトを実行して、最初の中間層から Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの名前を検索します。

```
$ORACLE_HOME/wireless/bin/getAppEntityName.sh [bat]
```

このスクリプトは、Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの名前を出力します。

2. 前のステップで戻された Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの名前に対して、Oracle Internet Directory Deployment Delegation Console または Oracle Internet Directory ディレクトリ・マネージャを使用して、新しい Oracle Internet Directory ユーザーをコンポーネント所有者として追加します。

---

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の「Deployment Delegation Console を使用したグループへのユーザーの追加」を参照してください。

---

## OC4J\_Wireless

OC4J\_Wireless サーバーで多数の同時ユーザーをサポートする必要がある場合は、次の JVM オプションを使用して最大メモリー・サイズを 1GB（以上）に増やしてください。

```
-Xms512m -Xmx1024m
```

さらに高いヒット率をサポートするには、`httpd.conf` で `MaxClients` パラメータの値を増やすことができます。たとえば、`httpd.conf` で `MaxClients` を 1024 に設定すると、最大 1024 の同時 HTTP リクエストを許容できます。この結果、OC4J\_Wireless インスタンス内のアプリケーション・サーバー・スレッド数の増加が見込めます。OC4J\_Wireless で多数のアプリケーション・サーバー・スレッドをサポートするためには、スレッド・スタック・サイズを 256KB に縮小してください。Solaris 環境では、デフォルトのスタック・サイズは 512KB です。スタック・サイズは、次の JVM オプションで設定します。

```
-Xss256k
```

複数の CPU を持つマシン上で OC4J\_Wireless インスタンスを実行している場合は、JVM オプションを設定し、JDK 1.4 で Parallel GC アルゴリズムを使用可能にできます。ParallelGCThreads パラメータには、ホスト内の CPU の数を設定できます。たとえば、4 つの CPU を持つ Solaris マシンの場合は、次のように JDK 1.4 JVM オプションを設定すると、OC4J\_Wireless インスタンスのパフォーマンスが向上します。

```
-XX:+UseParallelGC -XX:ParallelGCThreads=4
```

GC チューニング・パラメータを次のように設定すると、OC4J\_Wireless のパフォーマンスが向上します。

```
-XX:NewRatio=2 -XX:SurvivorRatio=16
```

## Oracle Application Server Wireless ホスト名の更新

Oracle Application Server Wireless のポートとホスト名の両方を更新する手順は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』に記載されています。ホスト名のみを更新してポートを更新しない場合は、次の手順に従ってください。

中間層ホストで次のコマンドを実行して、Wireless を SSO に再登録します。

```
ORACLE_HOME/wireless/bin/reRegisterSSO.sh new_wireless_url oracle_home administrator_dn
```

ここで、

`new_wireless_url` は、新しい Web Cache リスナー・ポートを含む Wireless HTTP URL です。

`oracle_home` は、Web Cache ポートを変更する中間層 Oracle ホームです。

`administrator_dn` は、Oracle Internet Directory 管理者です。

たとえば、ホスト `myhost` の `/home/oracle` の中間層インストールで Web Cache リスナー・ポートを 7779 に変更すると、次のようになります。

```
ORACLE_HOME/wireless/bin/reRegisterSSO.sh http://myhost:7779/ptg/rm
/home/oracle cn=orcladmin
```

## Oracle Application Server Workflow の統合

ユーザーが Workflow 通知を適切に受信できるように、Customization Portal で次の設定が適切に行われていることを確認してください。

- デバイスは作成および検証されている必要があります。
- 「ユーザー・プロファイル」セクションの「他のアプリケーションからのマイ・ユーザー・プロファイルへのアクセスを許可」がチェックされていることが必要です。
- 正しく連絡先が指定されていることが必要です。

また、Workflow ホームページでも正しく設定されている必要があります。

設定する手順は、次のとおりです。

1. Workflow ホームページにログインします。
2. 「ユーザー設定」をクリックします。「電子メール通知を送信してください」の値に「メールを送信しないでください」は指定できません。この値が指定されている場合、ユーザーは「更新」をクリックして値を変更する必要があります。「メールを送信しないでください」または「プレーン・テキスト要約メール」以外のオプションを選択します。
3. 変更内容を確認して「OK」をクリックします。

Workflow のワークリスト・アプリケーションを使用可能にするには、「ワークフロー」フォルダを参照可能にする必要があります。参照可能にする手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server Wireless Tool にログインします。
2. 右上部にある「コンテンツ」タブをクリックして、「コンテンツの公開」ページに移動します。
3. 「ワークフロー」フォルダを選択して「編集」をクリックします。
4. 「参照可能」ボックスを選択して、「適用」をクリックします。

## OracleAS Wireless の不正なサイト URL

9.0.4 の中間層のインストール時に、WebCache では HTTPS ポート番号を構成する必要があります。WebCache で HTTPS ポート番号が構成されていない場合、Oracle Application Server Wireless はデフォルトで HTTPS ポートを 0 (ゼロ) に設定します。

WebCache で正しい HTTPS ポートを構成した後は、Oracle Enterprise Manager を使用して HTTPS 関連の URL パラメータをすべて再構成する必要があります。

## Openwave プラグインを使用した新規デバイスまたはシミュレータの検出

Openwave で提供されるプラグイン・インタフェースを使用する場合は、HDML\_EZweb 論理デバイスのユーザー・エージェントを次のように変更してください。

```
UP.Browser/3.0*UP.Link/3*, UP.Browser/3.2.9.1-*UP.Link/3*
```

## Oracle Application Server Wireless と Oracle Internet Directory の統合

Oracle Application Server Wireless と Oracle Internet Directory の間でデータを同期化する場合は、Oracle Directory Integration Server (odisrv) を実行します。

## Studio ツールおよび Customization ツールにログインできない

Customization ツールおよび Studio ツールへのログインに関する問題が報告されています。この問題は、Wireless を構成する前に JServ を構成したときに発生しています。したがって、JServ を構成する前に Wireless を構成してください。JServ と OC4J を同時に実行した場合の問題については、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「JServ および OC4J の同時使用」を参照してください。

## AIX における Wireless Fax PIM モジュールの追加の構成手順

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「FAX」の項に、Wireless FAX PIM モジュールの構成方法が説明されています。AIX では、FAX アプリケーションを正しく機能させるために、次の追加の構成手順を実行する必要があります。

1. ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
2. ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルを編集します。
3. ファイルの wireless セクションを検索します。このセクションは、たとえば、次のような行で始まります。

```
<ias-component id="wireless" status="enabled">
```

wireless セクションには、環境変数 CLASSPATH のエントリがいくつか含まれています。エントリは、たとえば次のような行で始まります。

```
<variable id="CLASSPATH" ...
```

4. CLASSPATH セクションの最後に、RightFax Java API jar/zip ファイル用に環境変数 CLASSPATH のエントリを追加します。次の構文を使用します。ここで、ORACLE\_HOME は、ORACLE\_HOME のインストール位置への絶対パスに置換します。

```
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/wireless/lib/RFJava_api.zip" append="true"/>
```

また、RightFax Java API zip ファイルが、エントリで指定した位置に正しくインストールされていることを確認してください。

5. 新しい opmn 構成を再ロードします。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl reload
```

6. Wireless を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=wireless
```

7. DCM を更新します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig
```

## AIX における Wireless Instant Messaging PIM モジュールの追加の構成手順

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「Instant Messaging」の項に、Wireless Instant Messaging PIM モジュールの構成方法が説明されています。AIX では、Instant Messaging アプリケーションを正しく機能させるために、次の追加の構成手順を実行する必要があります。

1. ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
2. ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルを編集します。
3. ファイルの wireless セクションを検索します。このセクションは、たとえば次のような行で始まります。

```
<ias-component id="wireless" status="enabled">
```

wireless セクションには、環境変数 CLASSPATH のエントリがいくつか含まれています。エントリは、たとえば、次のような行で始まります。

```
<variable id="CLASSPATH" ...
```

4. CLASSPATH セクションの最後に、Jabber Java API jar ファイル用に環境変数 CLASSPATH のエントリを追加します。次の構文を使用します。ここで、ORACLE\_HOME は、ORACLE\_HOME のインストール位置への絶対パスに置換します。

```
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/wireless/lib/jabberbeans.jar" append="true"/>
```

また、RightFax Java API zip ファイルが、エントリで指定した位置に正しくインストールされていることを確認してください。

5. 新しい opmn 構成を再ロードします。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl reload
```

6. Wireless を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=wireless
```

7. DCM を更新します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig
```

## ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Wireless のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- ユーザーのロケールの決定
- UNIX ポートの記述
- Oracle Application Server Wireless Tool でのアカウント番号
- MXML タグの用語集
- 音声アプリケーション用の Oracle Application Server Wireless の構成
- オーディオ・パラメータの場所
- Grammar.jsp
- ドライバ属性
- Jabber の例
- チューニングに関する追加情報
- 更新された URL
- Web サービスの使用
- カスタマイズにおいてユーザー・パスワードを変更できない
- 既存のユーザーを追加してもエラーが発生しない
- ユーザー・グループ更新時のエラー・メッセージ
- デバイスの検索結果が更新されない
- ロケーション検索でロケーション名が返されない

## ユーザーのロケールの決定

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「Wireless Web サーバー」の項の正しい記述は次のとおりです。

Oracle Application Server Wireless Web サーバー (ptg/rm) では、次の順序でユーザーのロケールを決定します。

1. PAlocale (ある場合) を使用します。
2. Accept-Language HTTP ヘッダー (ある場合) を使用します。
3. サイトのデフォルトのロケールを使用します。

## UNIX ポートの記述

ドキュメント全体を通して、すべてのインスタンスで UNIX は Solaris に置換できます。ただし、『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の第 13 章「Oracle Application Server Wireless の最適化」で説明されている Oracle Application Server Wireless のチューニングは除きます。この章で説明されているチューニングは Solaris 固有です。

## Oracle Application Server Wireless Tool でのアカウント番号

Oracle Application Server Wireless Tool を使用してデバイスを作成または変更するときは、デバイスに対して電話番号を入力します。この番号がデバイスのアカウント番号になります。オンライン・ヘルプでは、ユーザー・インタフェースに「アカウント番号」というラベルが表示される場所で電話番号を参照する場合があります。これは、正しくはアカウント番号です。

## MXML タグの用語集

MXML タグのオンライン用語集で、dtmf 属性の <SimpleMenu> が欠落しています。

この属性は、DTMF キーが最初の 9 つの <SimpleMenuItem> に自動的に割り当てられるかどうかを制御します。

dtmf 属性の値は true または false で、デフォルトは false です。

## 音声アプリケーション用の Oracle Application Server Wireless の構成

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』では、マニュアルのリリース以後に次の箇所が変更されました。

- 「音声対応アプリケーションの構成とテスト」の情報は不要になったため、削除してください。
- 「ボイス・アクセス用 Mobile Studio の提供」では、記述してある手順以外に、PALogin パラメータを PALogin=true に設定する必要があります。

## オーディオ・パラメータの場所

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「電子メール・アプリケーションをプリフェッチするためのボイス・メイン・メニューの構成」にある記述で、ORACLE\_SERVICES\_PIM\_MAIL\_AUDIO\_TMP\_DIR パラメータと ORACLE\_SERVICES\_PIM\_MAIL\_AUDIO\_TMP\_URL は、Voice Main Menu アプリケーションではなくメール・アプリケーションにあります。

## Grammar.jsp

次の記述は、『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「一般コマンドのテスト」に適用されます。

- grammar.jsp へのパスが正しくありません。統合されたインスタンスの globalGrammar.jsp へのパスは、<IAS-HOME>/j2ee/OC4J\_Wireless/applications/modules/modules-web/common/jsp/globalGrammar.jsp です。
- 次の記述は無効になりました。

「My Oracle」メイン・メニューの次のファイル、またはパーソナライズしたメニューの他の .JSP を変更します。」

```
<iasw-root>/iaswv20/wireless/j2ee/applications/voice/voice-web/mainmenu/MOCGrammar.jsp
```

## ドライバ属性

『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』の「ビルトイン・ドライバ」にあるドライバ属性に関する記述が次のように変更されました。

- UCP ドライバ用の sms.server.default.encoding 属性:

テキスト・メッセージのデフォルト・エンコード。デフォルト値は IA5 です。マルチバイト言語（中国語など）の場合は、この属性を UCS-2 に設定する必要があります。属性 sms.message.chunksize はこれに応じて設定する必要があります（つまり、エンコードが IA5 の場合はチャンク・サイズを 160 未満に設定し、エンコードが UCS-2 の場合は 70 未満に設定します）。

- SMPP ドライバ用の sms.server.default.encoding 属性:

テキスト・メッセージのデフォルト・エンコード。デフォルト値は IA5 です。マルチバイト言語（中国語など）の場合は、この属性を UCS-2 に設定する必要があります。属性 sms.message.chunksize はこれに応じて設定する必要があります（つまり、エンコードが IA5 の場合はチャンク・サイズを 160 未満に設定し、エンコードが UCS-2 の場合は 70 未満に設定します）。

## Jabber の例

『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』の「Jabber の概要」で、参照する図が誤っています。この段落の正しい記述は次のとおりです。

Oracle Application Server Wireless インスタンスが、ID の oracleagent@msn を使用し、Jabber の MSN トランスポート・ゲートウェイを介して MSN に接続する場合を考えてみます。この場合、MSN のエンド・ユーザーは、クライアントからこの ID (oracleagent@msn.com) にメッセージを送信して、Oracle Application Server Wireless インスタンスのアプリケーションにアクセスできます。

## チューニングに関する追加情報

チューニング情報は、Oracle Application Server Wireless のマニュアルの発行以降に変更および追加されています。OTN-J で Oracle Application Server Wireless のチューニングに関する最新情報を入手してください。

## 更新された URL

OracleAS Wireless のマニュアルの発行以後、いくつかの URL が変更されました。表 16-1 にその詳細を示します。

表 16-1 OracleAS Wireless で変更された URL

既存の URL	変更後の URL
<a href="http://software.palm.com/download.jsp">http://software.palm.com/download.jsp</a>	<a href="http://software.palm.com">http://software.palm.com</a>
<a href="http://java.sun.com/products/Javacomm/">http://java.sun.com/products/Javacomm/</a>	<a href="http://java.sun.com/products/javacomm/">http://java.sun.com/products/javacomm/</a>
<a href="http://messenger.us.oracle.com/push/webservices">http://messenger.us.oracle.com/push/webservices</a>	<a href="http://messenger.oracle.com/push/webservices">http://messenger.oracle.com/push/webservices</a>
<a href="http://software.palm.com/download.jsp">http://software.palm.com/download.jsp</a>	<a href="http://software.palm.com/">http://software.palm.com/</a>
<a href="http://vvsp.local.hostname:vvsp.local.port/">http://vvsp.local.hostname:vvsp.local.port/</a>	リンクではなく、例として使用されています。
<a href="http://www.otn.oracle.com/docs/products/oracle9i/doc_library/901_%20doc/nav/docindex.htm">http://www.otn.oracle.com/docs/products/oracle9i/doc_library/901_%20doc/nav/docindex.htm</a>	この参照は無視してください。
<a href="http://www.otn.oracle.com/wireless">http://www.otn.oracle.com/wireless</a>	<a href="http://otn.oracle.co.jp">http://otn.oracle.co.jp</a>
<a href="http://xmlns.oracle.com/2002/MobileXML">http://xmlns.oracle.com/2002/MobileXML</a>	<a href="http://xmlns.oracle.com">http://xmlns.oracle.com</a>

## Web サービスの使用

「Web サービスの使用」の項に、モバイル・ポジショニングのサポートに関する記述がありません。この段落は次のように置換してください。

Oracle Application Server のロケーション・サービスでは、Geocoder、Mapper、Router または YPFinder インタフェースの機能を使用する Wireless アプリケーションでの Web サービスの使用をサポートします。アプリケーション開発者は、アプリケーションを OracleAS Wireless 内で実行する場合、特別なコードを追加する必要はありません。Web サービスは、ジオコーディング、マッピング、ルーティング、ビジネス・ディレクトリ (YP) およびモバイル・ポジショニングのサポートのために、サービス・プロキシとして統合されています。

## カスタマイズにおいてユーザー・パスワードを変更できない

エンド・ユーザーは、管理者によって権限が与えられている場合のみパスワードを変更することができます。権限が与えられていないと、「パスワードの変更」フィールドはグレー表示 (使用不可) になります。

パスワードのリセットに関する詳細は『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』を参照してください。

## 既存のユーザーを追加してもエラーが発生しない

ユーザーまたはグループを、既存の名前で追加しようとする、既存のユーザー・データまたはグループ・データが更新されます。この場合、エラーが生成されるのではなく、既存情報の更新が行なわれます。

## ユーザー・グループ更新時のエラー・メッセージ

ユーザー・グループ・データを不正な情報（たとえば既存の名前）で編集すると、エラーが表示されません。詳細を変更し、「終了」をクリックすると、新しいエンティティが作成されます。

## デバイスの検索結果が更新されない

Webtool 上のあるタブ（たとえば「基本管理」）で、デバイスの検索を実行すると、次に Webtool の別のタブ（たとえば「サービス」）で検索を実行しても、前の検索結果がそのまま残ります。

## ロケーション検索でロケーション名が返されない

アドレスからロケーションを作成し、その新しいロケーション名で検索を行なうと、ロケーション情報は返されますが、ロケーション名は表示されません。

# 第VI部

---

## キャッシュに関する問題

第VI部では、キャッシュ・コンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- [第17章「Oracle Application Server Web Cache」](#)



---

## Oracle Application Server Web Cache

この章では、Oracle Application Server Web Cache (OracleAS Web Cache) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [一般的な問題と回避策](#)
- [構成に関する問題と回避策](#)

## 一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Web Cache に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- セキュリティ
- 圧縮されたコンテンツが現在はブラウザに表示されない
- エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって監視されるページの Cookie および JavaScript
- パフォーマンスの低下とメモリー
- ディスク領域とサービスの中断
- HTTP 通信の変更の影響
- 範囲リクエストに対するレスポンス動作の変更

### セキュリティ

Web ページをキャッシュするように OracleAS Web Cache を設定すると、URL を認識している他のユーザーがこれらのページにアクセスする可能性があります。このため、キャッシュ保護コンテンツは作成しないでください。

### 圧縮されたコンテンツが現在はブラウザに表示されない

圧縮を使用可能にすると、一部のブラウザの不具合によって圧縮と出力 HTML が影響を受けます。あるブラウザ・タイプでは、圧縮を使用するために追加設定を実行する必要があります。または不具合のある特定のブラウザでは、圧縮を使用禁止にする必要がある場合があります。

#### 関連項目：

- ブラウザによる制限の簡単なリストは、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。
- 該当するブラウザに関するベンダーのドキュメントを参照してください。

### エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって監視されるページの Cookie および JavaScript

エンド・ユーザーのパフォーマンス監視では、追加の Cookie が作成され、JavaScript がページに挿入されます。エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって作成された追加の Cookie および JavaScript と競合する Cookie および JavaScript が、アプリケーションによって生成される可能性があります。この動作によってアプリケーションに問題が発生する場合は、OracleAS Web Cache Manager の「End-User Performance Monitoring」ページ（「Logging and Diagnostics」→「End-User Performance Monitoring」）でこの機能を使用禁止にしてください。

### パフォーマンスの低下とメモリー

OracleAS Web Cache はメモリー内キャッシュであるので、ページングを最小化するために OracleAS Web Cache は専用コンピュータに配置するのが最適な方法です。コンピュータが OracleAS Web Cache の実行専用でない場合は、キャッシュの最大サイズが合計メモリーの 20 パーセントを超えないようにしてください。

オブジェクトのキャッシュまたは失効に費やす時間が増加する場合は、コンピュータでページングが発生していないかどうかを確認してください。ページングによってパフォーマンスが大幅に低下する可能性があります。ページングが発生するコンピュータで OracleAS Web Cache が効率的に動作するように設定するには、OracleAS Web Cache を専用コンピュータに配置するか、またはキャッシュの最大サイズとキャッシュ・オブジェクトの最大サイズを小さくします。

OracleAS Web Cache がキャッシュの最大サイズを超えるメモリーを使用する場合、その増加の原因は、キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを超えるドキュメントに対する大量の同時リクエストである可能性があります。この場合、ドキュメントはキャッシュされないため、OracleAS Web Cache では、リクエストの処理およびオリジナル・サーバーへの転送に、ドキュメントをキャッシュした場合より多く

のメモリーが使用されます。アクセス・ログを確認して、大容量のドキュメントに対して多数の同時リクエストが行われているかどうかを判別し、これらのドキュメントがキャッシュされるように、キャッシュ・オブジェクトの最大サイズの値を調整してください。さらに、キャッシュ・ルールまたはレスポンス・ヘッダーでドキュメントのキャッシュが指定されていることを確認してください。

キャッシュの最大サイズまたはキャッシュ・オブジェクトの最大サイズを変更するには、OracleAS Web Cache Manager の「Resource Limits」ページ（「Properties」→「Resource Limits」）で、「Maximum Cache Size」および「Maximum Cached Object Size」に新しい制限を設定します。

**関連項目：** 推奨トポロジの詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## ディスク領域とサービスの中断

十分なディスク領域のないシステムでは、OracleAS Web Cache が失敗する場合があります。ログ・ファイルが含まれるパーティションに十分な領域があることを確認してください。

## HTTP 通信の変更の影響

OracleAS Web Cache が既存の Web アプリケーション・サーバー環境に追加されると、HTTP 通信の変更がアプリケーションの次の側面に影響を与えます。

- プロトコル / ホスト名 / ポートのマッピング

通信を OracleAS Web Cache 経由で確実にダイレクトするには、すべての絶対 URL を、OracleAS Web Cache のプロトコル、ホスト名およびポート番号を使用するように設定します。また、Oracle HTTP Server の httpd.conf ファイル内の Port ディレクティブで、必ず OracleAS Web Cache のリスニング・ポートを指定してください。

- SSL 処理

クライアントと OracleAS Web Cache 間の接続が HTTPS であるが、OracleAS Web Cache とオリジナル・サーバー間の接続が HTTP の場合は、証明書管理を OracleAS Web Cache に追加します。

- ページ配信のタイミング

圧縮されたページまたは処理が必要なページの場合、OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーからページ全体を取得してから、ページをブラウザに送信します。

- HTTP プロトコル

OracleAS Web Cache では、次のことが透過的に実行されます。

- OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーとブラウザ間のプロトコル・バージョンのアップグレードおよびダウングレードを行います。

- キャッシュ可能オブジェクトの場合、OracleAS Web Cache は、コンテンツをブラウザに送信するときに、最初のリクエストに対するチャンク・エンコードではなく Content-Length レスポンス・ヘッダーを付加します。

- キャッシュ・ヒットの場合、OracleAS Web Cache は Content-Length レスポンス・ヘッダー・フィールドを、その内容がオリジナル・サーバーから送信された内容と異なるときは必ず上書きします。この機能によって、ブラウザが完全なページ・コンテンツを受信することが保証されます。

## 範囲リクエストに対するレスポンス動作の変更

以前のリリースでは、OracleAS Web Cache で Range という HTTP リクエスト・ヘッダー・フィールドの付いたマルチパート・ドキュメントのリクエストを受信したとき、そのドキュメントがすでにキャッシュされていなかった場合、OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーにドキュメント全体をリクエストし、ドキュメント全体をクライアントに送信していました。ドキュメントがすでにキャッシュされていた場合、OracleAS Web Cache は、クライアントがリクエストした部分のみを送信していました。

このリリースでは、OracleAS Web Cache で Range という HTTP リクエスト・ヘッダー・フィールドの付いたマルチパート・ドキュメントのリクエストを受信し、そのドキュメントがすでにキャッシュされていないと、OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーにドキュメントの一部をリクエストしま

す。OracleAS Web Cache は、(オリジナル・サーバーから受信した内容によって、ドキュメント全体またはドキュメントの一部の場合がある) レスポンスをクライアントに正確に戻します。

ただし、OracleAS Web Cache がキャッシュするのはドキュメント全体であるレスポンスのみで、範囲のレスポンスであるレスポンスはキャッシュしません。このキャッシュ動作は、将来のリリースで修正されます。

## 構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Web Cache の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 設定の開始方法
- 構成に関する一般的な誤り
- ポートの競合
- ラージ・オブジェクトのキャッシュ
- chgiphost.sh 実行前にキャッシュをクラスタから削除する
- アップグレード時におけるキャッシュ・クラスタ・メンバー間での失効リクエストの送信
- セッションと複数の Cookie のバインド
- Internet Explorer ブラウザにおけるキャッシュ操作の成功メッセージに関する再ロードの問題

## 設定の開始方法

OracleAS Web Cache を設定するには、OracleAS Web Cache Manager を使用します。設定を完了した後は、Application Server Control を使用して、キャッシュの起動、停止または再起動の他に、キャッシュおよびオリジナル・サーバーのステータスを監視できます。

OracleAS Web Cache Manager を使用する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Web Cache のコンピュータにログインしていない場合は、インストールを実行したユーザーの ID でログインします。
2. OracleAS Web Cache を Oracle Process Manager and Notification (OPMN) Server とともに起動します。コマンドラインで、次のように入力します。

```
opmnctl startproc ias-component=WebCache
```

3. ブラウザに、OracleAS Web Cache の Welcome ページの URL を入力します。

```
http://web_cache_hostname:4000/webcacheadmin
```

4. 管理者ユーザー ID とパスワードの入力を求められた場合は、ユーザー名に、ユーザー名 `ias_admin`、または OracleAS Web Cache の管理者ユーザー名 `administrator` のいずれかを入力します。インストール時にパスワードを指定した場合は、そのパスワードを入力します。

OracleAS Web Cache では、`webcache.xml` と `internal.xml` という 2 つの設定ファイルを使用します。OracleAS Web Cache Manager は、設定情報を `webcache.xml` ファイルに書き込みます。OracleAS Web Cache は、`internal.xml` ファイルを使用します。これらのファイルは、UNIX 上では `$ORACLE_HOME/webcache` ディレクトリ、Windows 上では `ORACLE_HOME\webcache` ディレクトリにあります。このリリース・ノートに説明されている場合、またはオラクル社カスタマ・サポート・センターから指示された場合を除き、これらの設定ファイルを手動で編集しないでください。これらの設定ファイルを不適切に編集すると、OracleAS Web Cache で問題が発生することがあります。

**関連項目：** 設定に関する詳細な説明は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## 構成に関する一般的な誤り

構成に関してよくある誤りを次に示します。

- 「Site-to-Server Mapping」 ページ（「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」 → 「Site-to-Server Mapping」）でサイトをオリジナル・サーバーに正しくマップしていない場合。サイトがマップされていない場合、OracleAS Web Cache は、リクエストをデフォルトの Oracle HTTP Server に転送します。サイトの設定に関するその他のエラーは、次のとおりです。
  - サイトのすべての別名が指定されていない
  - ワイルド・カード文字 \* の使用の誤り
  - 複数のオリジナル・サーバーがあるサイトに、サイトからサーバーへの複数のマッピングを作成する
- ポートの競合
 

**関連項目：** 詳細は、17-5 ページの「ポートの競合」を参照してください。
- URL の ping
 

「Origin Server」 ページ（「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」 → 「Origin Servers」）で「Ping URL」 フィールドを設定するとき、URL の入力方法はオリジナル・サーバーによって異なります。Web アプリケーション・サーバーの場合は、Web アプリケーション・サーバーの仮想ホストを表すサイト名またはドメイン名を含む相対 URL か完全修飾 URL のいずれかを入力します。プロキシ・サーバーの場合は、プロキシ・サーバーの背後にあるオリジナル・サーバーの仮想ホストを表すサイト名またはドメイン名を含む完全修飾 URL を入力します。URL がキャッシュされるようにしてください。
- root 権限による webcached の実行
 

1024 より小さい特権ポート番号の場合、ファイル記述子が 1,024 よりも多い場合、あるいは現在の opmnctl または webcachectl のユーザーが OracleAS Web Cache Manager の「Process Identity」 ページ（「Properties」 → 「Process Identity」）で設定したユーザーと一致しない場合は、root 権限で実行するように webcached を設定する必要があります。

**関連項目：** 設定の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## ポートの競合

デフォルトでは、OracleAS Web Cache は、次に示すデフォルトの HTTP ポートを使用するように設定されています。

- リスニング・リクエスト : 7777
- 管理用リクエスト : 4000
- 失効用リクエスト : 4001
- 統計用リクエスト : 4002

これらのポートが使用中の場合には、インストール・プロシージャによって、使用可能なポート番号の範囲の中から別のポート番号が割り当てられます。

インストールが終了すると、OracleAS Web Cache が起動します。ポートの競合がある場合は、OracleAS Web Cache の起動に失敗することがあります。

**関連項目：** ポートの設定方法、ポートの競合の解決方法、およびポートの競合に関するイベント・ログのメッセージの詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## ラージ・オブジェクトのキャッシュ

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを設定するには、OracleAS Web Cache Manager の「Resource Limits」ページ（「Properties」→「Resource Limits」）に移動します。

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを指定した場合は、指定のサイズ以下で、キャッシュ・ルールに一致するドキュメントのみがキャッシュに保存されます。指定のサイズを超えるオブジェクトは、他のキャッシュ・ルールを満たしている場合でもキャッシュされません。9.0.4 インストールのデフォルトは 100KB です。アップグレードされたキャッシュの場合、デフォルトでは制限は指定されていません。アップグレードされたキャッシュにデフォルトを適用する場合は、「Resource Limits」ページで「Maximum Cached Object Size」の値を変更してください。

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを超えるドキュメントがあり、そのドキュメントが頻繁にリクエストされる場合は、キャッシュ・オブジェクトの最大サイズの制限値を大きくすることを考慮してください。

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズの設定は、レスポンスに Content-Length ヘッダーが存在しない場合は無視されます。

**関連項目：** リソース制限の設定方法の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## chgiphost.sh 実行前にキャッシュをクラスタから削除する

スクリプト chgiphost.sh を使用すると、コンピュータのホスト名または IP アドレスを変更できます。コンピュータに、OracleAS Web Cache クラスタの一部である中間層インスタンスが含まれている場合は、このスクリプトを実行する前に、そのインスタンスをキャッシュから削除してください。

**関連項目：**

- キャッシュ・クラスタの削除方法の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。
- chgiphost.sh スクリプトの使用方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

## アップグレード時におけるキャッシュ・クラスタ・メンバー間での失効リクエストの送信

OracleAS Web Cache クラスタがある場合は、キャッシュ・クラスタ・メンバーを 1 つずつアップグレードできます。キャッシュはリクエストに対する応答を継続します。ただし、他のクラスタ・メンバーは設定バージョンが異なるため、キャッシュは、異なるバージョンで動作しているキャッシュ・クラスタ・メンバーにはリクエストを転送しません。かわりに、リクエストされたドキュメントが、そのキャッシュまたは同じ設定バージョンのクラスタ・メンバーにキャッシュされていない場合、OracleAS Web Cache はリクエストをオリジナル・サーバーに転送します。この場合、OracleAS Web Cache Manager の「Operations」ページ（「Operations」→「Cache Operations」）で、「Operation Needed」が「Incompatible software version」であることを示します。

キャッシュ・クラスタ・メンバーが同じバージョンの OracleAS Web Cache を実行していない場合も、ドキュメントを失効し、その失効を他のクラスタ・メンバーに伝播できますが、失効リクエストは、9.0.2 または 9.0.3 など旧バージョンの OracleAS Web Cache で動作しているキャッシュから送信される必要があります。

**関連項目：** キャッシュ・クラスタ・メンバーのアップグレードの情報など、OracleAS Web Cache を 10g (9.0.4) にアップグレードする方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g アップグレード』を参照してください。

## セッションと複数の Cookie のバインド

ユーザー・セッションをオリジナル・サーバーにバインドするように OracleAS Web Cache を設定するには、OracleAS Web Cache Manager の「Session Binding」ページ（「**Origin Servers, Sites, and Load Balancing**」 → 「**Session Binding**」）で、サイトをセッション定義名に関連付けます。Cookie の設定時に、OracleAS Web Cache でユーザー・セッションを複数の Cookie とバインドする場合は、Any Set Cookie のセッションを選択します。Any Set Cookie を選択するときは、「**Session Binding Cookie**」で「**Enable**」をクリックして、レスポンスに Set-Cookie レスポンス・ヘッダーを含めるように OracleAS Web Cache に指定してください。

**関連項目：** セッション・バインドの設定の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## Internet Explorer ブラウザにおけるキャッシュ操作の成功メッセージに関する再ロードの問題

OracleAS Web Cache Manager の「Cache Operations」ページ（「**Operations**」 → 「**Cache Operations**」）で正常な操作を送信すると、成功メッセージのダイアログ・ボックスが表示されます。このメッセージを確認して「**OK**」をクリックした場合、Internet Explorer の一部のバージョンでは、成功のダイアログ・ボックスによって OracleAS Web Cache Manager のインタフェースがメッセージ・ボックス自体に再ロードされます。



# 第VII部

---

## ビジネス・インテリジェンスに関する問題

第VII部では、ビジネス・インテリジェンス・コンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第18章「Oracle Application Server Discoverer」
- 第19章「Oracle Reports」
- 第20章「Oracle Application Server Personalization」



---

## Oracle Application Server Discoverer

この章では、Oracle Application Server Discoverer (OracleAS Discoverer) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 有用な情報
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Discoverer に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 動作要件
- Discoverer Plus 終了時の内部エラー (Bug 3168973)
- OracleAS Discoverer Plus とインターネット・ブラウザの組合せによってポップアップを使用できない (Bug 2932434)
- Netscape v7.0 ブラウザでの OracleAS Discoverer Plus の起動 (Bug 2916131)
- Excel にエクスポートする際の Microsoft Internet Explorer v6.0 の起動エラー (Bug 3114083)
- NT での OracleAS Discoverer Plus と Sun Java Plug-In 1.4.1 の実行に関する障害 (Bug 2917867)
- Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データの問題 (Bug 3106890)
- Netscape 4.7 ブラウザを使用する OracleAS Discoverer Viewer に有効なフォント・サイズ (Bug 3113325)
- Netscape 4.x での OracleAS Discoverer の使用に関する制限事項 (Bug 3182331)
- Web キャッシュ接続をオープンできないエラー (WWC-40019) (Bug 2960099)
- Jinitiator 1.3 でトルコ語ロケールの OracleAS Discoverer Java Plus を起動できない (Bug 3231114)
- 英語以外のロケールで OracleAS Discoverer からエクスポートしたファイルを Microsoft Excel で再オープンするとハングまたはエラーが発生する (Bug 2878213)
- ボタンが表示されない、または英語のテキストで表示される (Bug 3083171)
- 英語以外の環境において英語テキストが表示される (Bug 3229690)
- ワークブック名、フォルダやアイテム名が正しく表示されない (Bug 3509929)

## 動作要件

Oracle Application Server Discoverer の動作要件に関する最新の情報は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

## Discoverer Plus 終了時の内部エラー (Bug 3168973)

システムでワークブックのスケジューリングが使用禁止になっていると、Discoverer Plus の終了時に次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

内部エラーが発生しました。エラーが継続する場合は、Discoverer 管理者に問い合わせてください。

このエラーは、Discoverer が V\$PARAMETER を問い合わせるスケジューリングされたワークブックのステータスを取得しようとするために発生します。この問題を解決するには、次の回避策の 1 つを使用します。

- 『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』および『Oracle Developer Suite リリース・ノート』に従って、ワークブックのスケジューリング機能を設定します。
- ShowExpiredRunsOnExit 作業環境のデフォルト値を 0 (ゼロ) に設定します。
- Discoverer Plus で「ツール」→「オプション」→「一般」を選択し、「終了する際に、期限切れの結果を表示せずに自動的に削除する」チェック・ボックスを選択します。

## OracleAS Discoverer Plus とインターネット・ブラウザの組合せによってポップアップを使用できない (Bug 2932434)

OracleAS Discoverer Plus は、「接続先 Discoverer Plus」メイン・ページのポップアップ・ウィンドウとして表示されます。ただし、一部のインターネット・ブラウザにはポップアップ・ウィンドウを禁止するオプションがあります。接続を選択する際、ブラウザにそのようなオプションがあり Discoverer Plus が表示されない場合は、ポップアップ・ウィンドウを禁止するブラウザのオプションがオフになっているかどうかを確認してください。

## Netscape v7.0 ブラウザでの OracleAS Discoverer Plus の起動 (Bug 2916131)

Netscape v7.0 ブラウザから Discoverer Plus を正常に起動するには、次の手順に従って Netscape の設定を変更します。

1. Netscape のメニュー・バーから「編集」→「設定」→「サポートアプリケーション」を選択します。
2. 「常に Netscape Plug-in Finder Service (PFS) を使用してプラグインを取得する」チェック・ボックスの選択を解除します。

## Excel にエクスポートする際の Microsoft Internet Explorer v6.0 の起動エラー (Bug 3114083)

Microsoft Internet Explorer v6.0 を使用して Discoverer Plus から Microsoft Excel にエクスポートするときに、独立したブラウザ・ウィンドウが正常に起動しないことがあります。この問題は、Microsoft Internet Explorer v6.0 で動作設計が変更されたことに起因しています。

次の手順に従って、Discoverer 中間層を Microsoft Internet Explorer の信頼済みサイトに指定することによって、問題を回避してください (次のメニュー・オプションは記載時点での正確な情報です)。

1. Microsoft Internet Explorer のメニュー・バーから「ツール」→「インターネット オプション」を選択し、「インターネット オプション」ダイアログを表示します。
2. 「セキュリティ」タブを表示します。
3. 「信頼済みサイト」アイコンを選択して「サイト」ボタンをクリックし、「信頼済みサイト」ダイアログを表示します。
4. Discoverer 中間層の URL を次の書式で入力します。

`http://host.domain:port`

ここで、

- *host.domain* には、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインを指定します。
- *port* には、Discoverer がインストールされているポート番号 (通常は 7777 または 7778) を指定します。

## NT での OracleAS Discoverer Plus と Sun Java Plug-In 1.4.1 の実行に関する障害 (Bug 2917867)

NT クライアントで Discoverer Plus を使用する場合は、JInitiator 1.3.1.9 または Sun Java Plug-In 1.4.2 を使用してください。これは、Sun Java Plug-In 1.4.1 を使用したときの不具合によるものです。

## Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データの問題 (Bug 3106890)

Microsoft Internet Explorer では、HTTP 圧縮を使用している Web サーバーから送信されたデータの最初の 2048 バイトが消失する問題 (ページの表示に失敗する問題) が判明しています。この問題の詳細は、次のリンクにアクセスしてください。

<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q313712>

次の手順に従ってクライアントの HTTP 1.0 で HTTP 圧縮を使用不可に指定することによって、問題を回避できます。

1. Microsoft Internet Explorer のメニュー・バーから「ツール」→「インターネット オプション」を選択し、「インターネット オプション」ダイアログを表示します。
2. 「詳細設定」タブを表示します。
3. 次の各チェック・ボックス（「HTTP 1.1 設定」カテゴリ）の選択を解除します。
  - 「HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックス
  - 「プロキシ接続で HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックス

## Netscape 4.7 ブラウザを使用する OracleAS Discoverer Viewer に有効なフォント・サイズ (Bug 3113325)

Netscape 4.7 ブラウザを使用した Discoverer Viewer では、フォントのレンダリングに関する問題が判明しています。Netscape 4.7 では、カスケード・スタイル・シート (CSS) のサポートに制限があります。この問題は、CSS に指定されているフォント・サイズが無視されることに起因しています。

この問題を解決するには、新しいブラウザのバージョンにアップグレードしてください。

## Netscape 4.x での OracleAS Discoverer の使用に関する制限事項 (Bug 3182331)

Netscape 4.x で Discoverer を使用すると、次の問題が発生することが判明しています。

- Netscape 4.x で Discoverer Viewer を使用している場合、ワークブック・リストのフィルタ処理には ASCII 文字のみを使用する必要があります。
- Netscape 4.x で Discoverer Viewer を使用している場合、パラメータには ASCII 文字のみを使用する必要があります。
- Netscape 4.x で Discoverer を使用している場合、プライベート接続の作成には ASCII 文字のみを使用する必要があります。
- Netscape 4.x で Discoverer Plus を使用している場合、ブラウザ・ウィンドウのサイズは変更できません。

問題を回避するには、Netscape の新しいバージョンを使用してください。

## Web キャッシュ接続をオープンできないエラー (WWC-40019) (Bug 2960099)

既存の OracleAS Infrastructure 10g を使用しながら、新規に Business Intelligence および Forms のインストールタイプを実行した後、Discoverer ポートレットを編集して発行しようとする、エラー・メッセージが表示される可能性があります。

エラーを回避するには、OracleAS Portal のコンテンツに対して OracleAS Web Cache が使用不可になっていることを確認してください。

1. Portal 管理者（たとえば、ユーザー名 Portal を使用）で OracleAS Portal にログインします。
2. 「管理」タブを表示します。
3. 「Portal」サブタブを表示します。
4. 「サービス」領域で「グローバル設定」リンクを選択します。
5. 「キャッシュ」タブを表示します。
6. 「Web Cache を Portal コンテンツ・キャッシュに対応させる」チェック・ボックスの選択を解除します。
7. 「ホスト名」フィールドが正しく設定されていることを確認します。

**注意:** 複数の Oracle Application Server Middle-Tier がインストールされている場合、ホスト名は最新の Oracle Application Server インストールのホスト名に更新されます。場合によっては、以前の Oracle Application Server インストールのホスト名に変更する必要があります。
8. 「適用」または「OK」をクリックして変更内容を保存します。

## JInitiator 1.3 でトルコ語ロケールの OracleAS Discoverer Java Plus を起動できない (Bug 3231114)

ロケールがトルコ語に設定されている場合、JInitiator 1.3.1.8 を使用して OracleAS Discoverer Plus を起動することはできません。

回避策は Sun Java Plug-In 1.4.1 を使用することです。この問題は最新バージョンの JInitiator (1.3.1.16) では解決済です。

## 英語以外のロケールで OracleAS Discoverer からエクスポートしたファイルを Microsoft Excel で再オープンするとハングまたはエラーが発生する (Bug 2878213)

英語以外の環境において、OracleAS Discoverer を使用し、Excel の Pivot 形式でエクスポートしたファイルを開くと、Excel がハングもしくはエラーを返すことがあります。この回避策として、ファイルを開く時に、マクロを無効にしてください。

## ボタンが表示されない、または英語のテキストで表示される (Bug 3083171)

Oracle Application Server のインストール後、完全に翻訳された内容が「OracleAS Discoverer Viewer」および「OracleAS Discoverer 接続先リスト」のページに表示されないことがあります。一部のボタン、テキストまたはリンクが英語で表示される場合もあります。

この問題を解決するには、Oracle Application Server のインストール完了後にすべての OPMN サービスを再起動してください。

## 英語以外の環境において英語テキストが表示される (Bug 3229690)

英語以外のロケール設定において、OracleAS Discoverer Viewer を使用している場合、設定した言語に関わらず、英語テキストが表示されることがあります。(例えば、ボタン名やリンク名など)

こうした場合は、Oracle Enterprise Manager から、OC4J\_BI\_Forms サービスを再起動してください。

## ワークブック名、フォルダやアイテム名が正しく表示されない (Bug 3509929)

英語以外のロケールで OracleAS Discoverer を使用した場合に、ワークブック名が正しく表示されない、ワークブックが開けない等の問題が発生した場合は、`$ORACLE_HOME/discoverer/discwb.sh` ファイルの `NLS_LANG` の変数の値を確認し、以下に示す手順を実行してください。

また、Discoverer Plus を使用したクエリー構築時のフォルダ名やアイテム名が正しく表示されない場合も、同様の手順を実行してください。

1. すべての OracleAS Discoverer プロセスを停止します。次のコマンドを入力し、実行中の OracleAS Discoverer プロセスを表示します。

```
$ ps -aef dis51ws
```

2. `$ORACLE_HOME/discoverer/discwb.sh` ファイルのバックアップを作成します。

```
$ cp $ORACLE_HOME/discoverer/discwb.sh $ORACLE_HOME/discoverer/discwb.sh.org
```

3. `$ORACLE_HOME/discoverer/discwb.sh` ファイルを編集し、次の構文を使用して、`NLS_LANG` 変数を必要なロケールに設定します。

```
NLS_LANG="Required_locale.UTF8"
```

次に例を示します。

```
NLS_LANG="JAPANESE_JAPAN.UTF8"
```

4. ブラウザを再起動し、OracleAS Discoverer ページにナビゲートします。

## 構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Discoverer の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Plus のトランスポートが HTTPS の場合は常に HTTPS URL の使用が必要 \(Bug 3024208\)](#)
- [インストール後の OracleAS Discoverer の構成でのエラー \(Bug 3206792\)](#)

### Plus のトランスポートが HTTPS の場合は常に HTTPS URL の使用が必要 (Bug 3024208)

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の第 12 章「OracleAS Discoverer のセキュリティ管理」には、Discoverer 中間層管理者が、HTTPS を Discoverer Plus のトランスポート・プロトコル（アプレットと中間層との間の通信に使用）として指定する方法が記述されています。『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』では、HTTPS プロトコルを指定した後、Discoverer Plus を起動するための HTTPS URL を管理者がエンド・ユーザーに示すように説明されています。エンド・ユーザーが、HTTPS URL ではなく、デフォルトの HTTP URL を使用して Discoverer Plus を起動しようとすると、次のエラー・メッセージが表示されます。

**Oracle Discoverer Application Server に接続できません。: 試行 1 RMI プロトコル・オーバー HTTPS トランスポート: Web サーバー: <url> から応答がありません。**

この問題を解決するには、エンド・ユーザーが HTTPS URL を使用して Discoverer Plus を起動する必要があります。

### インストール後の OracleAS Discoverer の構成でのエラー (Bug 3206792)

Oracle Application Server をインストールする場合、インストールの過程で OracleAS Discoverer を構成するように指定できます。

Oracle Application Server Control を使用して、インストール終了後に OracleAS Discoverer を構成することもできます。インストール終了後に OracleAS Discoverer を構成する場合は、Discoverer の設定ページを表示するときに次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

**エラーが発生しました: oracle.disco.oem.configurationDiscoConfigurationException:**

**Cannot find element:configuration Entity Path [system/configuration] not valid.Check log to see if the PlugIn was loaded**

このエラー・メッセージが表示された場合は、次の手順でコマンドラインから Oracle Application Server Control を再起動します。

1. コマンド・プロンプトに次のコマンドを入力し、Oracle Application Server Control を停止します。  
`$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole`
2. コマンド・プロンプトに次のコマンドを入力し、Oracle Application Server Control を起動します。  
`$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole`

## 有用な情報

この項では、OracleAS Discoverer に関する有用な情報について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード](#)
- [End User Layer 表の手動による編集](#)
- [スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーによる問合せのリフレッシュ](#)
- [HWOnline ファイルの利用](#)
- [書式設定: 軸ラベルのフォント・サイズ](#)
- [スケジューリングと集計](#)
- [パフォーマンスを改善する OracleAS Discoverer Portlet Provider の追加構成パラメータ](#)

- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドによる Oracle Discoverer レジストリ変数の設定
- Oracle Discoverer のその他のレジストリ変数
- OracleAS Discoverer Viewer のカスタマイズの移行
- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行 (UNIX のみ)
- OracleAS Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF)
- 不要になった XWindow ディスプレイ

## Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード

Oracle Discoverer 3.1 からアップグレードする場合は、中間手順として EUL を Discoverer 4.1 にアップグレードするための要件が『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』に記載されています。

Oracle Discoverer Administration Edition 4.1 を所有していない場合は、Internet Developer Suite (1.0.2) の CD Pack を入手して、Oracle Discoverer Administration Edition 4.1 を使用してください。

## End User Layer 表の手動による編集

オラクル社カスタマ・サポート・センターまたは開発部門から特に指示がないかぎり、End User Layer (EUL) 表またはそのコンテンツは (たとえば、SQL\*Plus を使用して) 手動で編集しないでください。手動による EUL 表の編集はサポートされていません。手動で編集すると EUL が破損する可能性があります。

## スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーによる問合せのリフレッシュ

スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーの場合は、「スケジュール・マネージャ」ダイアログの「リフレッシュ」ボタンによって、問合せが実表で再度実行されることはありません。問合せは、スケジュールされたワークブックの結果を格納する表で再実行されます。これは、「オプション」ダイアログの「一般」タブで「問合せを自動的に実行」オプションを選択している場合にも適用されます。

## HWOnline ファイルの利用

以前のバージョンの Oracle Discoverer には、ドリルアウト機能のデモを実行するための HWOnline.htm および Memo.doc ファイルが付属していました。ディスク領域を節約し、インストール時間を短縮するために、これらのファイルとその使用方法の説明は Oracle Technology Network Japan (OTN-J) の Web サイトからダウンロード可能予定です。

<http://otn.oracle.co.jp/>

## 書式設定 : 軸ラベルのフォント・サイズ

以前のバージョンの Oracle Discoverer では、軸アイテムのフォント・サイズは、データのフォント・サイズよりもわずかに大きく自動設定されていました。リリース 9.0.4 以降は、軸ラベルのデフォルト・フォント・サイズがデータと同じサイズになりました。

## スケジューリングと集計

次の計算が指定されているワークブックをスケジュールする場合は注意が必要です。

- DISTINCT 集計（たとえば、COUNT DISTINCT、SUM DISTINCT）
- CASE 式が含まれている計算
- 分析関数が含まれている計算
- PL/SQL 関数が含まれている計算

ワークブックの「オプション」ダイアログの「集計」タブにある「**「シート書式」タブで設定された「集計できないラベル」**」（**「集計できない値」オプション**）を表示します」オプションが実際に選択されているかどうかに関係なく、Discoverer では、このオプションが選択されているかのようにスケジュールされたワークブックが処理されます。

また、「オプション」ダイアログの「集計」タブにある「**データベースで集計された値を表示 データベースでは、Discoverer と同じ集計方法が使用されます。**」オプションは、スケジュールされたワークブックには使用できないことに注意してください。

## パフォーマンスを改善する OracleAS Discoverer Portlet Provider の追加構成パラメータ

表 18-1 に、OracleAS Discoverer Portlet Provider を使用している場合に OracleAS Discoverer のセッション・プールのパフォーマンスを改善できる configuration.xml ファイルの追加設定項目を示します。

表 18-1 OracleAS Discoverer Portlet Provider の構成パラメータ

設定	説明
/disco:configuration/portlet/@maxSessionAgeHour	<p>Discoverer セッションがセッション・プール内に存在できる最大時間（時間単位）を指定します。この時間を経過すると、そのセッションは Portlet Provider によってプールから削除されます。</p> <p>この設定のデフォルト値は 1 時間です。ほとんどの場合、デフォルト値のまま不都合はありません。</p> <p>セッションによってあまりにも多くのメモリーが消費される場合は、低い値を指定します。この値を低くすると、セッションの再利用周期が速くなり、再利用セッションで確保されるメモリーがオペレーティング・システムに解放されるため、メモリー消費量が削減されます。ただし、セッションを再起動する必要があるため、リフレッシュ時間はわずかに増加します。</p> <p>maxSessionAgeHour は絶対的なタイムアウトであることに注意してください。プール内のセッションが頻繁に使用されている（つまり、非アクティブ時間が maxSessionInactivityPeriodMinute を超えることがない）場合にも、maxSessionAgeHour 値に達するとセッションは削除されます。</p>
/disco:configuration/portlet/@maxSessionInactivityPeriodMinute	<p>Discoverer セッションがセッション・プール内で非アクティブな状態で存在できる最大時間（分単位）を指定します。この時間を経過すると、そのセッションは Portlet Provider によってプールから削除されます。</p> <p>この設定のデフォルト値は 10 分です。ほとんどの場合、デフォルト値のまま不都合はありません。</p> <p>セッションによってあまりにも多くのメモリーが消費される場合は、低い値を指定します。この値を低くすると、セッションの再利用周期が速くなり、再利用セッションで確保されるメモリーがオペレーティング・システムに解放されるため、メモリー消費量が削減されます。ただし、セッションを再起動する必要があるため、リフレッシュ時間はわずかに増加します。</p> <p>maxSessionInactivityPeriodMinute は非アクティブなセッションのみに適用されます。実行中の問合せは非アクティブとはみなされません。つまり、maxSessionInactivityPeriodMinute に指定した時間よりも長くかかる問合せを実行しているために、セッションが終了することはありません。</p>

## Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドによる Oracle Discoverer レジストリ変数の設定

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java に用意されている一部のコマンドを使用する場合は、表 18-2 に示す Discoverer レジストリ変数の明示的な設定が必要になる場合があります。

表 18-2 OracleAS Discoverer レジストリ変数

コマンド	Discoverer レジストリ変数
-export	ArchiveCacheFlushInterval FormatXML ExportJoinFromMaster
-refresh_ オブジェクト	DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh EnableTriggers
-import	FormatXML
-connect -apps_user	AppsFNDNAM AppsGWYUID
-load	SetNULLItemHeadingOnBulkLoad MaxNumberJoinPredicates
すべてのコマンド	SqlTrace

Windows プラットフォームの場合、Discoverer レジストリ変数は Windows のレジストリに格納されません。UNIX プラットフォームの場合、Discoverer レジストリ変数は .reg\_key.dc ファイルに格納されません。

Discoverer レジストリ変数を設定するには、次のいずれかを実行します。

- (Windows のみ) regedit または regedt32 を使用して、Windows レジストリを編集することによって必要なレジストリ変数の値を指定します。
- (Windows および UNIX) コマンド・プロンプトに次のコマンドを入力することによって、必要なレジストリ変数の値を指定します。

```
dis51pr -setadminpref registry variable name value
```

Discoverer レジストリ変数（およびその説明、デフォルト値、使用可能な値など）の詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』
- 『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』

## Oracle Discoverer その他のレジストリ変数

Discoverer では、『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』および『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』に記載されている変数に加え、表 18-3 に示すレジストリ変数を使用できます。

表 18-3 Discoverer その他のレジストリ変数

カテゴリ	Discoverer レジストリ変数	説明	デフォルト	有効な値
データベース	DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh	リフレッシュする場合に、更新された項目の説明を破棄して当初の説明で置換するか、更新された項目の説明をそのまま保持するかを指定します。	0	0 = 更新された説明を使用 1 = 当初の説明を使用
データベース	EnableTriggers	データベース・トリガーを使用できるかどうかを指定します。  たとえば、Discoverer では、リフレッシュ時に新しい列を検出するたびに、データベースをコールしようとします。この値を 0 (ゼロ) に設定すると、Discoverer はデータベース・コールを実行しません。	0	0 = データベース・トリガー使用不可 1 = データベース・トリガー使用可能
データベース	ExportJoinFromMaster	ビジネスエリアをエクスポートするときに、マスター・フォルダからの結合もエクスポートするかどうかを指定します。	0	0 = マスター・フォルダからの結合をエクスポートする 0 以外 = マスター・フォルダからの結合をエクスポートしない
データベース	SetNULLItemHeadingOnBulkLoad	バルク・ロードを実行するときに、アイテム・ヘッダーをアイテム表示名と同じ値に設定するか、NULL の値を設定するかを指定します。	0	0 = アイテム・ヘッダーにアイテム表示名を設定 1 = アイテム・ヘッダーに NULL を設定

## OracleAS Discoverer Viewer のカスタマイズの移行

以前のバージョンから Discoverer をアップグレードする際、過去に Discoverer Viewer をカスタマイズした場合は、ファイルを手動で編集してカスタマイズ内容を再度適用する必要があります。詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 4.1 から 9.0.4 にアップグレードする場合は、『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』を参照してください。
- 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードする場合は、『Oracle Application Server 10g アップグレード』を参照してください。

Discoverer Viewer をカスタマイズする場合は、Discoverer の各バージョン間でカスタマイズを移行する責任があります。実行した変更によっては、新しいバージョンの Discoverer に付属しているファイルをカスタマイズしたファイルで単純に置換できない可能性があります。その場合は、新しいバージョンのファイルを手動で編集して、カスタマイズ内容を反映する必要があります。

## Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行 (UNIX のみ)

UNIX で Oracle Discoverer EUL Command Line for Java を実行するには、様々な環境変数を正確に設定する必要があります。次に示すように、環境変数は、discwb.sh スクリプトを使用して明示的に設定するか、または eulapi スクリプトを使用して暗黙的に設定できます。

- 環境変数を明示的に設定して Oracle Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを発行するには、コマンドを発行するコマンドライン・プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_HOME/discoverer/discwb.sh
```

このコマンドの発行後は、次の Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドを入力できます。

```
java -jar ORACLE_HOME/discoverer/lib/eulbuilder.jar -command list
```

たとえば、Sales1 と呼ばれるフォルダをリフレッシュするには、次のように入力します。

```
java -jar ORACLE_HOME/discoverer/lib/eulbuilder.jar -connect jchan/12345@my_database
-refresh_folder Sales1
```

- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの実行時に環境変数を暗黙的に設定するには、ORACLE\_HOME/bin ディレクトリの eulapi スクリプトを使用してコマンドを実行します。たとえば、Sales1 と呼ばれるフォルダをリフレッシュするには、次のように入力します。

```
ORACLE_HOME/bin/eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1
```

ヒント : eulapi スクリプトを実行するたびに ORACLE\_HOME/bin を入力しなくても済むようにするには、最初に discwb.sh を実行します。

## OracleAS Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF)

Real Application Clusters (RAC) システムでの透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF) に対する OracleAS Discoverer のサポートには、次の tnsnames.ora エントリの例のように、「select」のフェイルオーバー・モードが必要です。

```
NAME =
(DESCRIPTION=
(ADDRESS=
(PROTOCOL=tcp)
(HOST=servername)
(PORT=1521))
(CONNECT_DATA=
(SERVICE_NAME= NAME)
(FAILOVER_MODE=
(TYPE=select)
(METHOD=basic)
(RETRIES=4)
(DELAY=15))))
```

RETRIES および DELAY の初期設定を、この例で指定されている値（つまり、4 と 15）にすることを推奨します。ただし、ユーザー独自のシステムでは、これらの値を増加することが必要な場合もあります。

フェイルオーバーが発生すると、まれにエラー・メッセージが表示されることがあります。エラー・メッセージに応答すると、セッションは正常に続行されます。この問題を解決するために、リリース 9.0.4 のパッチの発行が予定されています。

## 不要になった XWindow ディスプレイ

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 2.12 項「HTTP を使用した Discoverer Viewer の使用」には、次のような説明があります。

UNIX 環境で OracleAS をインストールした場合は、Discoverer Viewer のグラフおよびチャート作成機能をサポートするために、Discoverer サーブレットで XWindow ディスプレイを使用可能にする必要があります。X Server を参照するように DISPLAY 環境変数を設定する方法は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

XWindow ディスプレイは不要になりました。

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Discoverer Portlet Provider を OracleAS Portal に登録するときに必要な追加手順
- configuration.xml ファイルの構成設定の訂正
- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンド実行に関する構文例での '-jar' の欠落
- 規定されている EUL のリリース要件 5.1 は正しくは 5.0.2
- ShowExpiredRunsOnExit 作業環境に表示される誤ったデフォルト設定
- ユーザー・レベルの作業環境を 1.0.2.2 から 9.0.4 へアップグレードするためのコマンドの誤り

### Discoverer Portlet Provider を OracleAS Portal に登録するときに必要な追加手順

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 9.4 項「OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法」に、次の追加手順を挿入してください。

- 9.d. 「ユーザー・ログイン頻度」を「ユーザーセッションごとに 1 回」に変更します。

### configuration.xml ファイルの構成設定の訂正

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の A.4 項「configuration.xml 内の構成設定のリスト」の表には、複数の細かい誤りがあります。次の表を参照してください。

表 18-4 訂正表

設定	訂正
/disco:configuration/portlet/@maximumSessions	正しい記述は次のとおりです。 /disco:configuration/portlet/@maxSessions
/disco:configuration/servlet/xsl_translator/stylesheet_pool	正しい記述は次のとおりです。 /disco:configuration/servlet/xsl_translator/@stylesheet_pool
query_progress_delay	このパラメータは、configuration.xml ファイルでグローバルに設定できなくなりました。ただし、このパラメータはユーザーごとに設定できます。『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 11.8 項「Discoverer Viewer の URL パラメータ」を参照してください。

### Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンド実行に関する構文例での '-jar' の欠落

『Oracle Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』の「Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの実行方法」の項と「ワイルドカードを使用した EUL オブジェクトの指定」の項の例では、コマンドライン構文の '-jar' 部分が欠落しています。Java のコマンドラインを実行するときは、次の構文を使用します。

```
java -jar eulbuilder.jar -command list
```

### 規定されている EUL のリリース要件 5.1 は正しくは 5.0.2

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の ix および 1-17 ページには、次の段落が含まれています。

Discoverer を使用してデータを分析するには、データベースに Discoverer End User Layer (EUL) リリース 5.1 をインストールする必要があります。Discoverer マネージャは、Oracle Developer Suite 10g

(9.0.4) のコンポーネントとして出荷されている Oracle Discoverer Administrator リリース 9.0.4 以上を使用して End User Layer (EUL) リリース 5.0.2 を作成するか、アップグレードする必要があります。

前述の段落で指定されている EUL リリースの記述は誤りです。これらの段落は次のように置換してください。

Discoverer を使用してデータを分析するには、データベースに Discoverer End User Layer (EUL) リリース 5.0.2 をインストールする必要があります。Discoverer マネージャは、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) のコンポーネントとして出荷されている Oracle Discoverer Administrator リリース 9.0.4 以上を使用して End User Layer (EUL) リリース 5.0.2 を作成するか、アップグレードする必要があります。

## ShowExpiredRunsOnExit 作業環境に表示される誤ったデフォルト設定

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 8.8 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」では、ShowExpiredRunsOnExit 作業環境のデフォルト設定は 0 (ゼロ) と記載されていますが、これは誤りです。この作業環境の実際のデフォルト設定は 1 です。

## ユーザー・レベルの作業環境を 1.0.2.2 から 9.0.4 へアップグレードするためのコマンドの誤り

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の D.3.1.2 項「ユーザー・レベルの作業環境を Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 9.0.4 へアップグレードする方法 (UNIX の場合)」では、次のコマンドを入力する箇所が 2 つあります。

```
prompt> <ORACLE_HOME_2>/discoverer/bin/dis51pr -migrate
```

両方とも、正しいコマンドは次のとおりです。

```
prompt> ORACLE_HOME_2/discoverer/util/migrateprefs.sh -from 102
```



# 19

---

## Oracle Reports

この章では、Oracle Reports に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- NLS 固有の問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Reports に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Application Server での `rwconverter` ヘルプの表示
- Express Server 問合せの作成
- Matrix-with-Group レポートの Paper Design ビューへのグラフの挿入
- OracleAS Portal での DelimitedData へのレポートの実行
- Web への簡単なマトリックス・レポートの実行
- JServ が構成されていると OracleAS Reports Services のデモが機能しない
- Reports サーバーに対する Graphics6i 使用のための構成

### Oracle Application Server での `rwconverter` ヘルプの表示

Oracle Application Server のみのインストールでは、Oracle Reports オンライン・ヘルプ・システムはインストールされません。「Convert」ダイアログ・ボックス (`rwconverter` に対するユーザー・インタフェース) の「ヘルプ」をクリックすると、次のメッセージが表示されます。

```
REP-544: on-line help system is not available
```

Oracle Reports のオンライン・ヘルプを表示するには、次のいずれかを実行します。

- Oracle Developer Suite をインストールします。このインストールには Oracle Reports のオンライン・ヘルプが含まれます。
- Oracle Technology Network (OTN) 上の Oracle Reports のオンライン・ヘルプにアクセスします。
  1. <http://www.oracle.com/technology/products/reports/index.html> にナビゲートします。
  2. 「Index」および「Search」タブを使用して必要な情報を探します。たとえば、「Search」タブで「Convert dialog box」とタイプして、Convert ダイアログ・ボックスのヘルプ・トピックを表示します。

### Express Server 問合せの作成

適切なファイルがインストールされていない状態で Express Server 問合せを作成すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

```
REP-0069:Internal Error
```

```
XR-3013: The Express xConnect.ini file is missing or incomplete
```

#### 回避策

Express Server 問合せを作成する前に、必要な Express Server 接続ファイルがマシン上にあることを確認してください。

---

---

**注意：** Oracle Express Pluggable Data Source の構成および使用の詳細は、OTN の Express PDS ヘルプ (<http://www.oracle.com/technology/products/reports/index.html>) を参照してください。

---

---

### Matrix-with-Group レポートの Paper Design ビューへのグラフの挿入

Matrix-with-Group レポートの Paper Design ビューでグループに1つのグラフを挿入すると、Reports Builder に失敗します。

#### 回避策

Paper Design ビューではなく、Paper Layout でグラフを挿入します。

## OracleAS Portal での DelimitedData へのレポートの実行

OracleAS Portal で Reports Server を登録した場合、その Reports Server を使用して DESFORMAT=DELIMITEDDATA へのレポートを実行できません。

この問題を回避するには、OracleAS Portal から Reports Server を登録解除するか、またはスタンドアロン Reports Server を実行して DESFORMAT=DELIMITEDDATA へのレポートを実行します。

## Web への簡単なマトリックス・レポートの実行

Web レイアウトに対する実行機能を使用して、Web に対して作成および実行された単純なマトリックス・レポートが正しく表示されません。

## JServ が構成されていると OracleAS Reports Services のデモが機能しない

同一のアプリケーション・サーバー・インスタンスに JServ と OracleAS Reports Services を構成している場合は、OracleAS Reports Services のデモを実行できません。

## Reports サーバーに対する Graphics6i 使用のための構成

Forms/Reports/Graphics を統合するため、次の手順を実行して Reports/Graphics を正しく設定します。

1. g90runm.sh スクリプトに、次のように入力します。

```
ORACLE_GRAPHICS6I_HOME=<location forms6i>
export ORACLE_GRAPHICS6I_HOME
PRINTER=<real printer>
export PRINTER
```

2. reports.sh スクリプトに、次のように入力します。

```
ORACLE_GRAPHICS6I_HOME=<location forms6i>; export ORACLE_GRAPHICS6I_HOME
REPORTS_DEFAULT_DISPLAY=NO; export REPORTS_DEFAULT_DISPLAY
DISPLAY=<machine name>:0.0; export DISPLAY
```

## 構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Reports の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [DISPLAY とプリンタ依存性の実装廃止](#)
- [負荷の高いマシンに対する Reports Server の構成](#)
- [Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更](#)
- [PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善](#)
- [Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定](#)
- [OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決](#)
- [reports.sh ファイルへの REPORTS\\_DEFAULT\\_DISPLAY と LDR\\_CNTRL の設定](#)

## DISPLAY とプリンタ依存性の実装廃止

Oracle Reports 10g (9.0.4) では、実行時に環境変数 DISPLAY または有効なプリンタ (PRINTER または TK\_PRINTER) を定義する必要がなくなりました。

環境変数 DISPLAY が定義されていても、X-Windows の表示はデフォルトでは使用されません。

Oracle Reports 10g (9.0.4) へのアップグレードを行う既存のカスタマは、この変更によって、外観、ページ数、出力ファイル・サイズ、既存のレポートのパフォーマンスに影響を受ける可能性があります。必要であれば、環境変数 DISPLAY を X-Windows 表示に、REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY を NO に設定することによって、以前の動作を復元できます。

### 関連項目：

- 環境変数 REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY および screenprinter.ppd の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』および Reports Builder のオンライン・ヘルプを参照してください。
- 『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の「Oracle Reports でのフォントの管理」の章の「レポート出力のフォント」を参照してください。

## 負荷の高いマシンに対する Reports Server の構成

処理速度が遅いマシンや負荷の高い状態で実行しているマシンにレポートをデプロイするには、次の構成が必要になる可能性があります。

- ping タイムアウト (OPMN 側) : ping タイムアウトとは、OPMN がタイムアウトの判断に使用する単位です。OPMN は、(OC4J\_BI\_FORMS で) インプロセス Reports Server からのコールバックを指定時間待機した後、タイムアウトと判断します。

デフォルトのタイムアウト時間は 150 です。この時間は、ping タイムアウト、ping 間隔およびリトライ回数から算出されます。それぞれのデフォルト値は次のとおりです。

ping タイムアウト = 30 秒

ping 間隔 = 20 秒

リトライ回数 = 3 回

---

**注意：** リトライ回数は、OPMN が OC4J に正常に接続し、プロセスから定期的に ONS 通知を受信する場合にのみ適用可能です。

---

これらの値に基づいて、それぞれ 30 秒のタイムアウトと 20 秒の間隔で 3 回の ping が試行されます。1 回目の ping は、指定された ping 間隔が経過した後に実行されます。したがって、OPMN によって OC4J が起動された時点から、プロセスに反応がなく再起動とみなされるまでに、約 150 (20 + 3 × 30 + 2 × 20) 秒が経過します。OPMN が OC4J に接続し、OC4J の処理速度が非常に遅いため定期的な ONS 通知の送信が滞る場合は、30 秒のタイムアウトが適用される可能性があります。

**関連項目：** opmn.xml ファイルの詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

- コールバック・タイムアウト (Reports Server 側) : コールバック・タイムアウトとは、Reports Server がタイムアウトの判断に使用する単位で、エンジンからの応答を指定時間待機した後、タイムアウトと判断します。この値は、Reports Server 構成ファイル server\_name.conf で指定できます。このタイムアウト時間の単位はミリ秒です。

次に例を示します。

```
<engine id="rwEng" class="oracle.reports.engine.EngineImpl" initEngine="1" maxEngine="1" minEngine="0" engLife="50" maxIdle="30" callbackTimeOut="80000">
```

---



---

**注意：** マシンの処理速度が非常に遅い場合はタイムアウトの値を増加してください。

---



---

## Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更

Oracle Reports で、Reports Queue Manager を使用して管理者パスワードを変更すると、次のアクションを Oracle Enterprise Manager または OPMN から実行できなくなります。

- Reports Server の起動または停止
- Reports Server のメトリックの表示

### 推奨事項

Reports Server の管理には、Oracle Enterprise Manager または OPMN の使用をお勧めします。

ただし、Reports Queue Manager を使用して管理者パスワードを変更する場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. 変更したユーザー名とパスワードを、指定された Reports Server エントリの `targets.xml` ファイルに追加します。
2. `ENCRYPTED=FALSE` を設定します。

次に例を示します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="foo" ENCRYPTED="FALSE"/>
...
...
<Property NAME="Password" VALUE="hello123" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

3. Oracle Enterprise Manager 10g を再起動します。Oracle Enterprise Manager 10g を再起動すると、ユーザー名とパスワードが暗号化され、`ENCRYPTED=TRUE` が設定されます。

## PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善

環境変数 `REPORTS_GRAPH_IMAGE_DPI` は、PDF ファイルまたはプリンタにグラフを出力する際の 1 インチ当たりのドット数 (DPI) を指定します。この環境変数のデフォルト値は、レポートの生成時間をできるかぎり短縮してレポート・ファイル・サイズも小さくなるように、72DPI に設定されています。

72DPI よりも高い値を指定すると、PDF ファイルまたはプリンタに送信されるグラフのイメージ解像度が向上します。ただし、レポート出力の生成時間およびファイル・サイズに影響を与えます。

---



---

**注意：** この環境変数に 250 の値を指定すると、次のようになります。

- Oracle Reports のグラフを挿入したレポートの生成時間は、72dpi に設定した値で同じレポートを生成する場合に比べて 5～6 倍必要です。
  - PDF ファイル・サイズも 5～6 倍に増加します。
- 
- 

**有効な値** 72～300

**デフォルト** 72

### 使用方法

- UNIX の場合は、`reports.sh` で環境変数を設定します。

250 よりも大きい DPI 値を設定し、グラフが約 5 × 5 インチよりも大きい場合は、JVM のメモリー不足エラーを回避するために、`REPORTS_JVM_OPTIONS` を使用して JVM ヒープ・サイズの値も変更する必要があります。

**関連項目：** JVM オプションの設定方法については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

- この変数は、PDF およびプリンタへの出力に限定されているため、Oracle Reports の配布機能では現在サポートされません。

## Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定

デフォルトでは使用可能でない JVM の特定の機能を使用するために、JVM オプションの明示的な設定が必要になる場合があります。そのためには、コマンドラインでキーワード `JVMOPTIONS` を使用して、Reports Runtime、Reports Builder または Reports Converter の Java 仮想マシン (JVM) のいずれかに対してオプションを設定します。

たとえば、次のコマンドを使用してヒープ領域が 512MB の Reports Builder を起動できます。

```
rwbuilder jvmoptions=-Xmx512M
```

複数のオプションを指定できます。その場合はオプションを引用符で囲む必要があります。

```
rwbuilder jvmoptions="-Xmx256M -Xms=128M"
```

**構文** `JVMOPTIONS={options in reports runtime, reports builder, reports converter JVM}`

**デフォルト** `-Xmx256M`

---

**注意：** `jvmoptions` キーワードを使用して値を設定すると、その値は環境変数 `REPORTS_JVM_OPTIONS` の値よりも優先されます。

---

## OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決

OracleAS Portal で、Oracle Reports セキュリティの設定を Reports 定義ファイル・アクセスに対して構成している場合は、Reports 定義ファイルの編集時に、「実行」または「ポートレットとして実行」をクリックすると、エラーが発生する可能性があります。

```
500 Internal Server Error
Unexpected Error. Please contact Administrator
```

このエラーは、次の条件すべてに当てはまる場合に発生します。

- 実行環境が、9.0.4 MT (中間層)、9.0.4 IM (識別管理) および 9.0.2 MR (メタデータ・リポジトリ) を相互に実行するように構成された、相互運用デプロイ (9.0.2 と 9.0.4 の複合環境を許可) の場合。
- SSOCONN パラメータを使用して OracleAS Portal で Oracle Reports を実行している場合。
- SSOCONN パラメータに指定した接続リソースが、Oracle Internet Directory サーバーで作成されていない場合。

この問題を回避する手順は、次のとおりです。

1. 9.0.4 IM の `ORACLE_HOME` にある次のファイルをテキスト・エディタでオープンします。

```
ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/mod_osso.conf
```

2. 次のフラグを追加します。

```
OssRedirectByForm on
```

次に例を示します。

```
<IfModule mod_osso.c>
OssIpCheck off
OssIdleTimeout off
OssConfigFile
/private1/iasinst/install_set1/904infra/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf
OssRedirectByForm on
</IfModule>
```

## reports.sh ファイルへの REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY と LDR\_CNTRL の設定

AIX では、reports.sh ファイルの REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY 変数と LDR\_CNTRL 変数が次のように設定されていることを確認してください。次に例を示します。

```
LDR_CNTRL=MAXDATA=0x80000000; export LDR_CNTRL
REPORTS_DEFAULT_DISPLAY=NO; export REPORTS_DEFAULT_DISPLAY
```

LDR\_CNTRL 変数が設定されていないと、Reports 実行可能ファイルの実行時に、ヒープの割当てができないことを示すメッセージが表示されます。たとえば、LDR\_CNTRL 変数を設定しないで rwrun.sh を実行すると、次のメッセージが表示されます。

```
Unable to alloc heap of requested size, perhaps the maxdata value is too small
```

REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY 変数が NO に設定されていないと、一部の Reports 実行可能ファイルが正常に動作しません。たとえば、REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY 変数を NO に設定せずに rwrun.sh を実行すると、コア・ダンプおよび Java コア・ダンプが作成されます。また、rwclient.sh を実行すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
REP-0178: Cannot connect to Reports Server <repserver_name>
```

## 管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Reports の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Reports Server 情報に対する Enterprise Manager のアクセスの認証](#)
- [OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行](#)

### Reports Server 情報に対する Enterprise Manager のアクセスの認証

server\_name.conf の identifier 要素に、新しい値 SERVERACCESSKEY が追加されました。この値は、Enterprise Manager で Reports Server 情報を保護するために使用されます。

次の認証が実装されます。

- server\_name.conf ファイルの identifier 要素の値が暗号化され、%SERVERACCESSKEY\_USER%/ %SERVERACCESSKEY\_PASSWORD% の形式になります。次に例を示します。
 

```
<identifier confidential="yes" encrypted="no">
%SERVERACCESSKEY_USER%/ %SERVERACCESSKEY_PASSWORD%</identifier>
```
- targets.xml ファイルの対応するエントリを次に示します。
 

```
<Property NAME="UserName" VALUE="%SERVERACCESSKEY_USER%" ENCRYPTED="FALSE"/>
<Property NAME="Password" VALUE="%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

デフォルトのインストールでは、インストール時の %SERVERACCESSKEY\_USER% 値と %SERVERACCESSKEY\_PASSWORD% 値は、targets.xml の値と必ず一致します。

---

**注意：** Enterprise Manager で Reports Server のページにデータを正しく表示するためには、server\_name.conf と targets.xml の %SERVERACCESSKEY\_USER% と %SERVERACCESSKEY\_PASSWORD% が一致する必要があります。

---

ユーザー名とパスワードを変更する手順は、次のとおりです。

1. ORACLE\_HOME/reports/conf/server\_name.conf ファイルを次のように編集します。
 

```
<identifier confidential="yes" encrypted="no">new_username/new_password</identifier>
```

2. `ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml` ファイルを次のように編集します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="new_username" ENCRYPTED="FALSE"/>
<Property NAME="Password" VALUE="new_password" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

3. Enterprise Manager と Reports Server を再起動します。 `server_name.conf` と `targets.xml` のユーザー名とパスワードは、再起動後に暗号化されます。

---

**注意：** Oracle Reports 10g (9.0.4) から、Oracle Enterprise Manager (Enterprise Manager) は、Reports Server 情報へのアクセスに OID 認証を使用しません。Enterprise Manager では、SERVERACCESSKEY 値を使用して認証を実装します。

---

## OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行

デフォルト以外の言語設定で OracleAS Portal をインストールした場合は、ポータル・ページ上のアイテム・リンクとしてのレポートの公開に必要な複数のエントリが、自動的にインストールされません。 `rwleng.sql` スクリプトを使用して、選択した言語をインストールする必要があります。

したがって、次の場合は `rwleng.sql` スクリプト (`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwd/`) を実行する必要があります。

- OracleAS Portal のインストール時に、デフォルト (US) に加えて少なくとも1つの言語を選択した場合。  
および
- OracleAS Portal のアイテム・リンクとしてレポートを公開する場合。

---

**注意：** これはインストール完了後1回かぎりのタスクです。1回実行すると OracleAS Portal でアイテム・リンクとしてレポートを公開できるようになります。

---

スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwd/` ディレクトリに変更します。
2. `sqlplus` を実行します。
3. ポータル・スキーマを使用して OracleAS Portal にログインします。

---

**注意：** これは、OracleAS Portal PL/ SQL パッケージのインストールに使用するポータル・スキーマです。

---

4. 次のパラメータを使用して `rwleng.sql` スクリプトを実行します。

```
@rwleng.sql language_list
```

ここで、

`language_list` は、カンマ区切りの言語リストです。

たとえば、フランス語と日本語をインストールするには、次のように指定します。

```
@rwleng.sql f,ja
```

### 使用方法

- `sqlplus` は、カンマ (,) 区切りの1つのパラメータではなく、2つのパラメータとして言語リストを取り扱うため、カンマ (,) の前後には空白を使用できません。
- `rwleng.sql` スクリプトのヘッダーには、全言語の省略形のリストが含まれています。様々な省略形を確認するには、テキスト・エディタを使用してスクリプト・ファイルを開いてください。

## NLS 固有の問題と回避策

この項では、Oracle Reports の NLS 固有の問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- マルチバイト・エンコーディングの JSP レポートのオープン / 実行
- マルチバイトのオブジェクト型データにアクセスするレポートの実行
- キャラクタ・セット固有の Tk2Motif.rgb ファイルの位置の規定
- ヨーロッパ言語以外による Oracle Enterprise Manager 画面の表示

### マルチバイト・エンコーディングの JSP レポートのオープン / 実行

JSP レポートのエンコーディングが NLS\_LANG 環境変数の対応する値と異なる場合（例：JSP レポートが EUC-JP で NLS\_LANG が JA16SJIS の場合など）、次のようなエラーが発生します。

- JSP ファイルの実行時
  - REP-6106/6104 javax.servlet.jsp.JspException
  - REP-0495 問合せをトークン化できません
- JSP ファイルを Reports Builder で開いたとき
  - REP-0069 Internal Error または REP-6106

この問題を回避するために、NLS\_LANG に対応したエンコーディングに JSP レポート・ファイルを変換する必要があります。

例：

JSP レポートのエンコーディング：

```
<%@ page contentType="text/html; charset=EUC-JP" %>
<META http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=EUC-JP">
```

この JSP ファイルは、EUC-JP キャラクタ・セットでエンコードされている必要があります。

NLS\_LANG の設定：

```
NLS_LANG=JAPANESE_JAPAN.JA16EUC
```

この例では、NLS\_LANG の設定値（JA16EUC）と JSP レポートのエンコーディング（EUC-JP）とが正しく対応しています。

### マルチバイトのオブジェクト型データにアクセスするレポートの実行

マルチバイト文字を含むレポートで、オブジェクト型データにアクセスする場合、レポートの実行に失敗します。

### キャラクタ・セット固有の Tk2Motif.rgb ファイルの位置の規定

デフォルトでは、Oracle Reports は環境変数 NLS\_LANG の言語部分に基づいて Tk2Motif.rgb ファイルを検索します。ファイルの位置は言語設定（ORACLE\_HOME/guicommon9/tk90/admin/<language>）によって異なります。

---

**注意：** Tk2Motif.rgb ファイルには、たとえば、Oracle Reports NLS\_CHARACTERSET と X フォント間のフォント・マッピングなど、Oracle Toolkit の Motif バージョンに対するリソース設定が含まれています。

---

キャラクタ・セットの設定が NLS\_LANG のキャラクタ・セット部分と異なる Tk2Motif.rgb ファイルを Oracle Reports が検出すると、REP-3000 エラーになります。

次に例を示します。

NLS\_LANG=AMERICAN\_AMERICA.JA16EUC を設定すると、Oracle Reports は次のディレクトリでファイルを検索します。

```
ORACLE_HOME/guicmmon9/tk90/admin/Tk2Motif.rgb
```

この Tk2Motif.rgb ファイルは、JA16EUC キャラクタ・セットではなく、WE8ISO8859P1 キャラクタ・セット用に設計されているため、この検索では、REP-3000 エラーが発生します。

キャラクタ・セット固有の Tk2Motif.rgb ファイルの位置には TK90\_UNKNOWN の値を設定できます。

**有効な値** 有効な TK2Motif.rgb ファイルの位置。

### 例

```
$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/JA  
(NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.JA16EUC)
```

## ヨーロッパ言語以外による Oracle Enterprise Manager 画面の表示

Oracle Enterprise Manager Application Server Control では、西ヨーロッパ以外の言語を使用していると、Reports Server の次のページに、文字化けしたタイトルが表示されることがあります。

- エンジン
- 構成
- 構成ファイルの編集

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。

- 『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の第 8 章 8.1.2 ~ 2.1 項では、Solaris の場合は reports.sh ファイルに REPORTS\_CLASSPATH 変数が格納されていると説明されています。REPORTS\_CLASSPATH 変数は、すべての UNIX プラットフォームの reports.sh ファイルにあります。
- 『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の第 19 章「OracleAS Reports Services の管理と監視」では、Oracle Enterprise Manager ユーザー・インタフェースに対する最新の更新内容が反映されていないスクリーンショットが掲載されている可能性があります。
- OTN が改良されたため、Oracle Reports のドキュメント・ページに直接アクセスする URL がマニュアル内で誤って記載されています。  
<http://otn.oracle.com/docs/products/reports/content.html> を  
<http://www.oracle.com/technology/documentation/reports.html> の URL に訂正してください。

---

## Oracle Application Server Personalization

この章では、Oracle Application Server Personalization (OracleAS Personalization) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Personalization に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 正確な製品名
- 「拡張」ボタンで「404 ファイル未検出」メッセージが表示される
- ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しない
- パフォーマンスとデータ・サイジング
- SSL モード
- MTR 参照が異なる場合に発生する RE パッケージの配布での障害
- RE セッションがアクティブな場合に発生する RE パッケージの配布での障害

### 正確な製品名

正確な製品名は、Oracle Application Server Personalization です。この製品の旧称は、Oracle9i Personalization です。Oracle9i Personalization 以外に、Oracle Personalization または OP と呼ばれる場合もあります。正しい略称は、OP ではなく、OracleAS Personalization です。

### 「拡張」ボタンで「404 ファイル未検出」メッセージが表示される

以前に「拡張」ボタンをクリックしたウィンドウがそのままオープンしている状態で、メッセージ・ビューア・ウィンドウを表示するために「拡張」ボタン（「ログ」ページ下部）をクリックすると、一部のブラウザのバージョンによっては、このメッセージが表示されます。

### ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しない

セッションフルおよびセッションレス両方の REAPI コールで、昇順または降順の選択に関係なく、リコメンデーション・コンテンツに対する ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しません。回避策はありません。

### パフォーマンスとデータ・サイジング

次の表に、3 種類のデータセットのパフォーマンス結果を示します。ビルド時間は、顧客数に対して直線相関、平均プロファイル・サイズに対して二次曲線相関になります。これらの結果は、Sun Enterprise 450（4 x UltraSPARC-II 400MHz）搭載メモリー 4096MB による実行結果です。これらの数値に基づいて、任意のデータセットのビルド時間を推定できます。

データ セット	顧客数	項目数	平均プロ ファイル ・サイズ	平均レーティ ング・プロ ファイル	平均購入 プロ ファイル	平均 ナビゲート・ プロファイル	ビルド 時間	集計 モデル・ ルール数	抱合せ販売 モデル・ ルール数
1	1000	50000	50	8	17	25	1 分	9152	155
2	5000	50000	71	8	27	36	3 分	166588	37
3	1000	50000	100	16	34	50	5 分	313154	2997

各列ヘッダーは、次の内容を示しています。

- **データセット**: データセットの ID。
- **顧客数**: 登録顧客数。MTR\_CUSTOMER 表のレコード数です。
- **項目数**: 項目数。MTR\_ITEM 表のレコード数です。
- **平均プロファイル・サイズ**: 各顧客プロファイルの項目数。これは、平均レーティング・プロファイル、平均購入プロファイルおよび平均ナビゲート・プロファイルの合計です。

- **平均レーティング・プロファイル:**各顧客プロファイルのレーティング項目の平均数。MTR\_RATING\_DETAIL のレコード数を MTR\_RATING\_DETAIL 内の CUSTOMER\_ID 数で除算した結果です。
- **平均購入プロファイル:**各顧客プロファイルの購入項目の平均数。MTR\_PURCHASING\_DETAIL のレコード数を MTR\_PURCHASING\_DETAIL 内の CUSTOMER\_ID 数で除算した結果です。
- **平均ナビゲート・プロファイル:**各顧客プロファイルのナビゲート項目の平均数。MTR\_NAVIGATION\_DETAIL のレコード数を MTR\_NAVIGATION\_DETAIL 内の CUSTOMER\_ID 数で除算した結果です。
- **ビルド時間:**集計モデルおよび抱合せ販売モデルのビルドにかかる合計時間。
- **集計モデル・ルール数:**集計モデルのルール数。
- **抱合せ販売モデル・ルール数:**抱合せ販売モデルのルール数。

### MOR 一時領域

次の式を使用して、MOR 一時領域に必要なバイト数の概算を推定します。

$$(54 * P^2 * C) / 2$$

P は平均プロファイル・サイズ、C は顧客数です。ビルド時に生成される各項目の組合せを格納するには、1 レコード当たり 54 バイト必要です。これは、2 つの項目列と 1 つの件数列を格納するために必要な領域です。モデル・ビルドを実行する場合、使用可能な一時領域は、データセットの P 値と C 値に必要な推定一時領域よりも大きくする必要があります。

## SSL モード

OracleAS Personalization リリース 10g (9.0.4) では、OracleAS Personalization 管理 UI での SSL モードは必須ではありませんが、SSL モードを使用して OracleAS Personalization 管理 UI にログインすることをお勧めします。SSL を使用せずに管理 UI にログインすると、警告メッセージが表示されます。メッセージは英語でのみ表示されます。20-8 ページの『[Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド](#)』の誤りを参照してください。

## MTR 参照が異なる場合に発生する RE パッケージの配布での障害

RE にあった MTR とは異なる MTR を参照するリコメンデーション・エンジンに、新しいモデル・パッケージを配布すると、現行のユーザー・セッションがすべて終了し、そのセッション・データは古い MTR に同期化されます。これは、現行のセッションがすべて無効になることを意味します。

## RE セッションがアクティブな場合に発生する RE パッケージの配布での障害

アクティブな RE セッションがある場合に、新しいパッケージを RE に配布すると、その直後の REAPI コールが失敗となる可能性があります。回避策はコールを再試行することです。

この回避策を実行するための Java コード例を次に示します (REAPI コールが指定されている try ブロックの後ろで例外を取得して、指定した 3 種類のエラーの発生を判断するチェックを実行し、3 種類のいずれかのエラーが検出された場合は REAPI メソッドを再起動します)。

```
filename: RetryTest.java
```

```
// Copyright (c) 2003 Oracle Corp
/*
 * This code snippet demonstrates a work-around
 * to overcome ORA-04068 error in calling REAPI
 * right after a new package is deployed
 */
```

```
import oracle.dmt.op.re.reapi.rt;
import java.lang.Long;
import java.sql.*;
import java.io.IOException;
```

```
/*
```

```
* Class RetryTest
* <P>
*/
public class RetryTest
{
    /*
    * main
    * @param args
    */
    public static void main(String[] args) throws ClassNotFoundException
    {
        REProxy proxy = REProxy.getProxy();
        String custID = "945"; // arbitrary, for demo only
        String sessionID = "101"; // arbitrary, for demo only
        TuningSettings tunings;
        FilteringSettings filters;
        IdentificationData idData;
        String[] m_catList = new String[1];
        RecommendationContent recContent;
        RecommendationList rec;

        try {
            proxy.createCustomerSession(custID, sessionID);

            // create settings data
            idData = IdentificationData.createSessionful(sessionID,
                Enum.User.CUSTOMER);
            idData.userID = "user1"; // arbitrary, for demo only
            tunings = new TuningSettings(Enum.DataSource.NAVIGATION,
                Enum.InterestDimension.INTEREST,
                Enum.PersonalizationIndex.HIGH,
                Enum.ProfileDataBalance.BALANCED,
                Enum.ProfileUsage.EXCLUDE);
            m_catList[0] = "socks"; // arbitrary, for demo only
            filters = new FilteringSettings();
            filters.categoryList = m_catList;
            filters.categoryMembership = Enum.CategoryMembership.EXCLUDE_LEAVES;
            filters.categoryFiltering = Enum.Filtering.ON;
            recContent = new RecommendationContent(Enum.Sorting.ASCENDING);

            rec = proxy.recommendTopItems(idData,
                10,
                tunings,
                filters,
                recContent);
            System.out.println("Done!"); // arbitrary, for demo only
            proxy.releaseProxy();
        } catch (BadDBConnectionException bdbe) {
            bdbe.printStackTrace();
        } catch (SQLException se) {
            if (isNewDeploy(se))
                return (recommendTopItems(idData, 10, tunings, filters, recContent));
            else
                System.err.println(se);
        } catch (IOException ioe) {
            System.err.println(ioe);
        } catch (BadDBConnectionException bdbe) {
            bdbe.printStackTrace();
        }
    }

    /*
    * isNewDeploy - find out if a brand new package is deployed
    */
    private boolean isNewDeploy(SQLException e) {
```

```

String st = e.getMessage();
String functionName = "isNewDeploy";
try {
    if (debugAll() || debugApi())
        m_log.logT(functionName + " SQLException caught: " + e.getMessage());
    if (st.indexOf("ORA-04068") >= 0)
        return true;
    else
        return false;
} catch (NullPointerException npe) {
    return false;
}
}
}

```

## 構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Personalization の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- OracleAS Personalization に対する SSL の構成
- ネイティブ・キャラクタ・セットの制限
- 未選択の Personalization がコンポーネント構成オプションに表示されない
- RAC での作業には SID ではなく SERVICE\_NAME の使用が必要

### OracleAS Personalization に対する SSL の構成

この項では、SSL モードで OracleAS Personalization 管理 UI にアクセスできるように、https を構成するために必要な手順を説明します。

Oracle Application Server Business Intelligence をインストールする場合は、オプション・ボックスを選択して Oracle Personalization を構成します。

「Personalization スキーマ作成ウィザード」を使用して、カスタム・データベースに OracleAS Personalization スキーマを構成します。次の手順を実行します。

1. \$ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml を編集し、<ias-component id=HTTP\_Server>要素の ssl-disabled を検索します。起動モードを ssl-disabled から ssl-enabled に変更します。変更するとエントリは次のようになります。

```
<data id="start-mode" value="ssl-enabled"/>
```

2. 次のコマンドを使用して OPMN を再ロードします。

```
opmnctl reload
```

3. 次の 2 つのポート番号が \$ORACLE\_HOME/install/portlist.ini ファイルにリストされていることに注目してください。

```
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 4444
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = 4443
```

次の例では、SSL モードの Apache にポート 4444、SSL モードの Web Cache にポート 4443 を使用します。portlist.ini でポート値の設定を調整します。

4. ブラウザから http://<host>:4000/webcacheadmin/ にアクセスし、Web Cache 管理 UI にログインします。
5. リスニング・ポートを追加します。

```
IP: ANY
Port 4443
Protocol: HTTPS
Wallet : $OH/webcache/wallets/default/
```

「Require Client-Side Certificate」ボックスは選択しないでください。

6. オリジナル・サーバーを追加します。

```
Hostname: <host>
Port: 4444
Routing: ENABLE
Capacity: 100
Failover Threshold: 5
Ping URL: /
Ping Interval (seconds): 10
Protocol: https
```

7. サイト定義を追加します。

```
Host Name: <host>
Port Number: 4443
HTTPS Only Prefix:
Client-Side Certificate: Not Required
Default Site: No
Create Alias from Site Name with/without www: No
```

8. サイトからサーバーへのマッピングを（最後のレコードの前に）追加します。

- a. サイト定義で構成した SSL をコンボ・ボックスで選択します。
- b. 構成した SSL Web サーバーを選択します。
- c. Unrestricted を除外します。

9. 画面右側の最上部にある「Apply Changes」をクリックします。

10. 「Cache Operations」の下の「Restart」ボタンをクリックします。

11. OracleAS Business Intelligence インスタンスの Enterprise Manager にログインします。

12. 「OC4J\_BI\_Forms」を選択して「Restart」をクリックします。

13. 「HTTP Server」を選択して「Stop」をクリックします。

14. 再度「HTTP Server」を選択して「Start」をクリックします。（サーバーを停止してから起動する必要があります。再起動で変更内容すべてが有効になるわけではありません。）

これで SSL が動作するようになります。https://host:4443/OP/Admin への接続を試みてください。

## ネイティブ・キャラクタ・セットの制限

OracleAS Personalization の利用には、キャラクタセットとして UTF8 のみサポートされます。

## 未選択の Personalization がコンポーネント構成オプションに表示されない

Oracle Application Server Business Intelligence インストールで、OracleAS Personalization 管理サーブレットの選択を解除してインストールを実行した場合は、次の手順に従ってサーブレットを構成します。

1. OracleAS Personalization 管理 UI サーブレットが格納されている .ear ファイルを検索します。このファイルは、Oracle Application Server Business Intelligence インストールの ORACLE\_HOME の下に、次の名前で格納されています。

```
$ORACLE_HOME/mp/web-app/op.ear.
```

Web ブラウザを起動する位置から .ear ファイルを参照できることを確認します。

2. OracleAS Personalization 管理 UI を構成する Oracle Application Server Business Intelligence インスタンスを管理している「Enterprise Manager」画面から、「OC4J\_BI\_Forms」コンポーネント・リンクをクリックします。
3. 「OC4J: OC4J\_BI\_Forms」ページの「アプリケーション」リンクをクリックします。

4. 「OC4J:OC4J\_BI\_Forms:Applications」ページの「EAR ファイルのデプロイ」リンクをクリックします。
5. 「J2EE アプリケーション」入力フィールドの「参照」ボタンをクリックして、手順1で参照した op.ear ファイルにナビゲートします。
  - a. 「アプリケーション名」フィールドに「OP」と入力します。
  - b. 親アプリケーションのデフォルトを選択します。
  - c. 「続行」ボタンをクリックします。
6. /OP および /redemo のデフォルトの URL マッピングは正確です。「終了」ボタンをクリックしてください（OracleAS Personalization 管理 UI では Single Sign On を使用しません。そのため、次のページの JAZN の構成は不要です。ここで「終了」をクリックします）。
7. Personalization スキーマ作成ウィザード (opconfig) を使用して、顧客データベース・スキーマを構成します。
8. Enterprise Manager を使用して OC4J\_BI\_Forms J2EE コンテナを再起動した後、OracleAS Personalization 管理 UI にログインします。

## RAC での作業には SID ではなく SERVICE\_NAME の使用が必要

OPCONFIG ウィザードは、tnsnames.ora ファイルの CONNECT\_DATA レコードの SID を使用して Oracle に接続するため、RAC テスト・システムスキーマを作成できませんでした。RAC の場合は、SID を SERVICE\_NAME に変更する必要があります。

## 管理に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Personalization の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [JDBC ドライバ](#)
- [顧客データベース](#)
- [パスワードの制限](#)
- [混在できないデータベース言語とブラウザ言語](#)
- [OracleAS Personalization のホーム・ディレクトリ](#)
- [変更された OP MTR の列](#)
- [OracleAS Personalization の高可用性](#)

### JDBC ドライバ

OracleAS Personalization のマニュアルでは、使用できる JDBC ドライバの種類に関する説明が省略されています。OracleAS Personalization リコメンデーション・エンジンを実行しているデータベースで動作している JDBC ドライバを使用できます。

### 顧客データベース

OracleAS Personalization には、Oracle Application Server に付属しているデータベースに加え、顧客データベースが必要です。顧客データベースは、Oracle9i リリース 1 (9.0.1) であることが必要です。

### パスワードの制限

パスワードの暗号化および復号化のために、OracleAS Personalization ユーザーのパスワードには 2 つの制限があります。

- OracleAS Personalization ユーザーは、パスワードの末尾には空白を入力しないでください。
- ユーザー・パスワードは、標準的な Oracle の制限である 30 文字以下に制限されます。

## 混在できないデータベース言語とブラウザ言語

NLS\_LANGUAGE によって、OracleAS Personalization メッセージの言語が決まります。OracleAS Personalization は、メッセージをブラウザ・セッション固有の言語に翻訳しません。これは、OracleAS Personalization 管理 UI は管理用の UI であり、そのユーザーはデータベース NLS\_LANGUAGE に指定されている言語を理解できると想定して設計されているためです。

## OracleAS Personalization のホーム・ディレクトリ

リリース 9.0.4 では、OracleAS Personalization のディレクトリが \$ORACLE\_HOME/dmt から \$ORACLE\_HOME/mp に移動しました。

## 変更された OP MTR の列

OP MTR の複数の表の列が VARCHAR2 (4000) 型から VARCHAR2 (1000 CHAR) に変更されました。変更されたのは、次の表の DESCRIPTION 列です。

- MTR\_TAXONOMY
- MTR\_CATEGORY
- MTR\_HOTPICK\_GROUP
- MTR\_ITEM

また、これらの表すべての NLS\_LENGTH\_SEMANTICS は CHAR 型に設定されています。

## OracleAS Personalization の高可用性

OracleAS Personalization Recommendation Engine Application Program Interface (REAPI) は、OracleAS Portal などの可用性の高い Web アプリケーションに埋め込むことができます。

## ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Personalization ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 『Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド』の誤り
- 『Oracle Application Server Personalization プログラマーズ・ガイド』の誤り
- プログラマーズ・ガイドの 9.1.1 ~ 9.1.2 項のコード・サンプルの欠落
- プログラマーズ・ガイドの B.3.2 項のコード・サンプルの欠落

## 『Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド』の誤り

マニュアルに記載されている http の入力によるログインは、かわりに https を入力することをお勧めしています。これは推奨事項であり、必須ではありません。http を入力してログインすると、セッションが保護されていないことを示す警告が表示されます（「SSL モード」も参照してください）。

誤りとその訂正を次に示します。

- 2-1 ページ 9 行目：

`http://hostname>/OP/Admin/`

次のように置換してください。

`http://hostname:port/OP/Admin`

- 3-5 ページ 6 行目：  
「Recommend Top Items」 ページ  
次のように置換してください。  
「Recommend TopN Items」 ページ
- 3-5 ページ 7 行目：  
表示推奨数: 10  
次のように置換してください。  
推奨項目数: 10
- 3-6 ページ 下から 11 行目：  
推奨項目数: 10  
次のように置換してください。  
推奨項目数: 10
- 3-8 ページ 5 行目：  
項目  
次のように置換してください。  
項目エントリ
- 3-9 ページ 3 行目：  
表示推奨数: 10  
次のように置換してください。  
推奨項目数: 10

## 『Oracle Application Server Personalization プログラマーズ・ガイド』の誤り

誤りとその訂正を次に示します。

- 2-5 ページ 14 行目：  
`http://server/redemo/`  
次のように置換してください。  
`http://hostname:port/redemo`
- 7-10 ページ 9 行目：  
`get Database URL()`  
次のように置換してください。  
`getDatabaseURL()`
- 10-9 ページ：  
`getDatabaseAlias()`  
次のように置換してください。  
`getDBAlias()`

- 8-2 ページ 10 ~ 11 行目 :

```
LoadCustomerProfiles()  
PurgeCustomerProfiles();
```

次のように置換してください。

```
LoadCustomerProfiles()  
PurgeCustomerProfiles()
```

## プログラマーズ・ガイドの 9.1.1 ~ 9.1.2 項のコード・サンプルの欠落

『Oracle Application Server Personalization プログラマーズ・ガイド』の 9.1.1 項および 9.1.2 項のコード・サンプルが欠落しています。その項では、ファンクションの実行に必要な主な手順がリストされています。ファイル REBatchTest.java に、recommendTopItems と crossSellForItem の起動方法を示すサンプル・コードがあります。

ファイル REBatchTest.java は、ディレクトリ ORACLE\_HOME/mp/reapi/batch/ にあり、OracleAS Personalization がインストールされているシステムで使用できます。

## プログラマーズ・ガイドの B.3.2 項のコード・サンプルの欠落

『Oracle Application Server Personalization プログラマーズ・ガイド』の B.3.2 項のサンプル・プログラムは、サンプル・プログラムではありません。これは、プロパティ・ファイル batchtest.txt (B.3.1 項) の繰返しです。

B.3.2 項に必要なサンプル・プログラムは、ORACLE\_HOME/mp/reapi/batch/ ディレクトリの REBatchTest.java ファイルに格納されています。このプログラムは OracleAS Personalization がインストールされているシステムで使用できます。

# 第VIII部

---

## E-Business 統合の問題

第VIII部では、E-Business コンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第21章「Oracle Application Server ProcessConnect」
- 第22章「Oracle Workflow」



---

## Oracle Application Server ProcessConnect

この章では、Oracle Application Server ProcessConnect (OracleAS ProcessConnect) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- テクノロジ・アダプタに関する問題と回避策
- アプリケーション・アダプタに関する問題と回避策
- Tuxedo 用の統合アダプタに関する問題と回避策
- スキーマ・パスワードに関する問題と回避策
- モデリング・ツールとユーザー・インターフェースに関する問題と回避策
- D3L 使用時の契約の検証に関する問題と回避策
- エクスポート / インポートに関する問題
- 構成の作成とデプロイに関する問題と回避策
- デプロイに関する問題と回避策
- Oracle Wallet Manager ユーティリティに関する問題
- 別のメタデータ・リポジトリへの ProcessConnect 中間層の再関連付け
- サポートされていない XSD 構成メンバーに関する問題と回避策
- OracleAS ProcessConnect の削除
- その他の既知の問題
- ドキュメントの誤り

## テクノロジー・アダプタに関する問題と回避策

この項では、OracleAS ProcessConnect のテクノロジー・アダプタに関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Database アダプタ](#) : ポートの値
- [Oracle Database アダプタ](#) : 表定義の変更
- [Oracle Database アダプタ](#) : ネイティブ・イベント作成時の XML 解析エラー
- [Oracle Database アダプタ](#) : 同じ表名のスキーマを使用した相互作用の作成
- [Web サービス・アダプタと HTTP アダプタ](#) : プロキシのホスト名
- [Web サービス・アダプタ](#) : Web Services Description Language
- [ファイル /FTP アダプタ](#) : Microsoft FTP サーバーがサポートされていない
- [Advanced Queuing アダプタ](#) の交換プロトコル
- [Advanced Queuing アダプタ](#) と 8.1.7 アプリケーション (スポーク) データベース
- [アダプタおよび変換時の NullPointerException](#) エラー
- [Oracle HTTP アダプタ](#) および [Internet Information Server](#)

### Oracle Database アダプタ : ポートの値

Oracle Call Interface (OCI) 接続を使用する場合は、Oracle Database アダプタの配信チャンネルにポートの値を指定する必要があります (Bug 3031166)。

#### 説明

Oracle Database アダプタの配信チャンネルに OCI 接続を指定し、ポートの値が空白の場合は、その配信チャンネルを選択して相互作用を参照すると、エラーが発生します。

#### 回避策

OCI 接続を使用する場合は、ポートに値が指定されていることを確認します。実際の値は使用されません。

### Oracle Database アダプタ : 表定義の変更

Oracle Database アダプタは、実行中の表定義への変更をサポートしていません (Bug 3112202)。

#### 説明

表定義の削除と再作成、または変更のために列が異なる場合は、相互作用に失敗します。

#### 回避策

Oracle Database アダプタの相互作用で使用される表の列は、デプロイ後に変更しないでください。

### Oracle Database アダプタ : ネイティブ・イベント作成時の XML 解析エラー

OUT 引数があり、パッケージ名のないストアド・プロシージャに対して相互作用を実行すると、ランタイム・エラーが発生します。OUT 引数用の XML が誤って移入されます (Bug 3359643)。

#### 回避策

ストアド・プロシージャをパッケージ名の下に配置します。ストアド・プロシージャを使用して相互作用を作成します。

## Oracle Database アダプタ：同じ表名のスキーマを使用した相互作用の作成

インタフェース表のアダプタ交換プロトコルから読取りレコードは使用できず、また同じ表名の2つのスキーマを設定することはできません。各スキーマに対して相互作用を作成しようとすると、2番目の相互作用作成時に次のエラーが戻されます (Bug 3220416)。

```
Error -: AIP-12207: Failed while creating Interaction
Error -: AIP-16012: Parameter: adapter Exchange Protocol is unique for object Interaction
```

### 説明

OracleAS ProcessConnect は、表名を使用して相互作用名および Oracle レコード名を設定します。2番目の相互作用の作成が失敗する原因は、表名が同じであるためです。相互作用名と Oracle レコード名は、一意キー制約下では一意であることが必要です。

### 回避策

1. 2番目の表にビューを設定します。
2. そのビューに基づいて相互作用を作成します。

## Web サービス・アダプタと HTTP アダプタ：プロキシのホスト名

Web サービス・アダプタと HTTP アダプタにプロキシのホストを指定する場合は、ホスト名のみを指定します。

正: 'proxy.foo.com'

誤: 'http://proxy.foo.com'

## Web サービス・アダプタ：Web Services Description Language

Web Services Description Language (WSDL) ファイルでは、schema 要素にすべての xmlns タグを指定する必要があります (Bug 3152573)。

### 説明

WSDL ファイル内の schema 要素では definitions 要素に定義されている名前空間の接頭辞が使用されているが、該当する名前空間の接頭辞が、その schema 要素に定義されていない場合は、相互作用のレコードに対してネイティブなイベント・ウィザードを実行すると、エラーが発生します。

### 回避策

WSDL ファイルを編集して、使用するすべての名前空間を schema 要素に定義します。

#### 有効:

```
<definitions xmlns:s="http://www.w3.org/2001/XMLSchema"
  xmlns:s0="http://www.foo.com"
  targetNamespace="http://www.foo.com"
  xmlns="http://schemas.xmlsoap.org/wsdl/">
  <types>
    <s:schema elementFormDefault="qualified"
      xmlns:s="http://www.w3.org/2001/XMLSchema"
      targetNamespace="http://www.foo.com">
      ...
    </s:schema>
  </types>
```

#### 無効:

```
<definitions xmlns:s="http://www.w3.org/2001/XMLSchema"
  xmlns:s0="http://www.foo.com"
  targetNamespace="http://www.foo.com"
  xmlns="http://schemas.xmlsoap.org/wsdl/">
  <types>
    <s:schema elementFormDefault="qualified"
      targetNamespace="http://www.foo.com">
      ...
    </s:schema>
  </types>
```

## ファイル/FTP アダプタ : Microsoft FTP サーバーがサポートされていない

OracleAS ProcessConnect 9.0.4 では、Microsoft FTP サーバーから戻される非主流の FTP 結果コードがファイル/FTP アダプタで認識されません。具体的には、Microsoft FTP サーバーは、NLST（ディレクトリの一覧表示）、RETR（ファイルの取得）および STOR（ファイルの挿入）などのコマンドの応答として結果コード 125 を返します。ファイル/FTP アダプタでは、主流の結果コード 150（ほとんどの FTP サーバー製品で使用）が想定されているため、結果コード 125 で応答している Microsoft FTP サーバー上にあるインバウンド・ディレクトリ内のファイルは検出されません。

## Advanced Queuing アダプタの交換プロトコル

ペイロード・フィールドで Oracle Object Queue を使用する場合は、ペイロード・フィールドとしてマークされていないオブジェクト・タイプのすべてのバイナリ・メンバー（BLOB および RAW）を、プラットフォームのデフォルトのキャラクタ・セットでエンコードする必要があります。

## Advanced Queuing アダプタと 8.1.7 アプリケーション（スポーク）データベース

8.1.7 アプリケーション（スポーク）データベースを Advanced Queuing アダプタで使用する場合は、次のタスクを実行する必要があります。

1. テキスト・エディタを使用して次をコピーし、ASCII ファイルに貼り付けます。

```
connect sys/password;  
create function substrc(str in varchar2, i1 in number, i2 in number)  
    return varchar2 is  
begin  
    return substr(str, i1, i2);  
end;  
/  
create public synonym substrc for substrc;  
grant all on substrc to public;
```

2. この ASCII ファイルを SQL 拡張子（たとえば、substrc\_patch.sql）を使用して保存します。
3. *password* を 8.1.7 アプリケーション・データベースの *sys* に対するパスワードに変更します。
4. SQL\*Plus を使用し、8.1.7 アプリケーション・データベースに対してこの SQL スクリプトを実行します。

## アダプタおよび変換時の NullPointerException エラー

OracleAS ProcessConnect では、構成パラメータのロギング・レベルがいくつか提供されています。すべての構成パラメータの名前の一部に、`oracle.tip.DiagnosticLevel` が含まれます。構成パラメータは `tip.properties` ファイル内にあります。このファイルには、Oracle Enterprise Manager の OracleAS ProcessConnect 中間層インスタンス・ページ下部にある「サーバー・プロパティ」ページ・リンクからアクセスできます（Bug 3173735）。

### 説明

`oracle.tip.DiagnosticLevel` パラメータがデバッグ・モード・ロギング・レベルに設定されている場合は、変換時に NullPointerException エラーが発生する場合があります。

### 回避策

該当する `oracle.tip.DiagnosticLevel` のパラメータ値をデバッグではなくエラーに設定します。

**関連項目：**「サーバー・プロパティ」ページの構成パラメータにアクセスする方法は、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』の次の説明を参照してください。

**章：**第 18 章、「Oracle Enterprise Manager を使用したシステム管理」

**見出し：**「Oracle Application Server ProcessConnect の監視タスクおよび管理タスク」

「サーバー・プロパティ」ページのオンライン・ヘルプにも、様々なレベルの `oracle.tip.DiagnosticLevel` 構成パラメータに関する説明があります。

## Oracle HTTP アダプタおよび Internet Information Server

Oracle では、リリース 9.0.4 用の Oracle HTTP アダプタを使用した Microsoft Internet Information Server (IIS) の使用がサポートされています。このサポートは、インバウンド通信用の OracleAS Proxy Plugin for Microsoft IIS を使用することによって提供されます。

## アプリケーション・アダプタに関する問題と回避策

この項では、次のアプリケーション・アダプタの設計時の構成に関する問題とその回避策について説明します。

- PeopleSoft 8 用の Oracle Application Server 統合アダプタ
- SAP R/3 用の Oracle Application Server 統合アダプタ
- Siebel 2000 用の Oracle Application Server 統合アダプタ
- J.D. Edwards OneWorld XE 用の Oracle Application Server 統合アダプタ

## インストール時のライセンス登録

OracleAS ProcessConnect のインストーラでは、アプリケーション・アダプタのライセンスが正しく登録されません。

### 回避策

---



---

**注意：** 変数 `ORACLE_HOME` は、現在の `ORACLE_HOME` の絶対パスを示します。

---



---

1. 次のパスを組み込むように環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` を設定します。

```
ORACLE_HOME/ip/adapters/lib
```

2. 次を実行します。

```
ORACLE_HOME/ip/adapters/bin/licreg
ORACLE_HOME/ip/adapters/config/acboip.lic
```

## インストーラで CLASSPATH が正しく設定されない

OracleAS ProcessConnect のインストーラでは、アプリケーション・アダプタの設計時構成に対して `CLASSPATH` が正しく設定されません。

### 回避策

---



---

**注意：** `ORACLE_HOME` 変数はすべて Oracle ホームの実パスで置換してください。

---



---

1. `ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml` で、`<process-type id="OC4J_ProcessConnect" module-id="OC4J">` の下にある `environment` 要素の下に、次の XML セグメントを追加します。

```
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/appadapters.jar"
append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Connector.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Kernel.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelDataBean.jar"
append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTC_enu.jar"
append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcCommon.jar"
append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcOM.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/psjoa.jar" append="true"/>
```

2. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/config/application.xml` で、最後のライブラリ・パスを次のように置換します。

**正:**

```
<!-- Comment the following element to use principals.xml -->
<library path="ORACLE_HOME/ip/config"/>
<principals path="./principals.xml"/>

<log>
```

**誤:**

```
<!-- Comment the following element to use principals.xml -->
<library path="ORACLE_HOME/ip/config"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/appadapters.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Connector.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Kernel.jar"/>
<library path= "/private/sabburi/midtier/ip/adapters/lib/SiebelDataBean.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTC_enu.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcCommon.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcOM.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/psjoa.jar"/>
<principals path="./principals.xml"/>

<log>
```

この結果、コメント行の下にある他のアダプタ・ライブラリが削除されます。

3. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/application-deployments/integration/orion-application.xml` で、次の太字の行を追加します。

```
<library path="ORACLE_HOME/lib/dms.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/uix2.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/rts2.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/ohw.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/regexp.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/share.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/lib/xmlparserv2.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/lib/ip.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/rdbms/jlib/xsul2.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/lib/chartbuilder.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/legacyadapters.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/appadapters.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/lib/xdb_g.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/gss-1_2.zip"/>
<principals path="principals.xml"/>
```

## Tuxedo 用の統合アダプタに関する問題と回避策

この項では、Tuxedo 用の Oracle Application Server 統合アダプタに関する問題とその回避策について説明します。このアダプタは、OracleAS ProcessConnect で使用可能なレガシー・アダプタです。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Connect の問題](#)
- [Oracle Connect へのメタデータのインポート](#)

### Oracle Connect の問題

Oracle Connect では、次の問題が発生します。

- 文字列フィールドが NULL で終了せず、埋め込まれる。
- 配列にカウンタが含まれていない。
- 大規模な Field Manipulation Language (FML) ファイルに依存しているサービスでエラーが返される。

パッチ情報については、Bug 3212302 を参照してください。

### Oracle Connect へのメタデータのインポート

Oracle Studio Import Metadata パースペクティブで、メタデータを Field Manipulation Language (FML) ファイルから Oracle Connect にインポートすると、次の問題が発生します。

- 生成された XML メタデータで文字列フィールドが正しく定義されていない。
- 配列にカウンタが含まれていない。

パッチ情報については、Bug 3212314 を参照してください。

## スキーマ・パスワードに関する問題と回避策

OracleAS ProcessConnect のインストール時に「Identity Management Access」オプションを選択しないと、「Specify Metadata Repository for ProcessConnect Information」画面で ProcessConnect および Workflow のスキーマ・パスワードを指定するときに、次のエラーが表示される可能性があります。

```
An error occurred while validating the password of the ProcessConnect schema.  
Either the schema does not exist in the database or an invalid password has been specified.
```

### 回避策

両方のスキーマ・パスワードをロック解除して変更します。詳細は、『Oracle Application Server ProcessConnect インストレーション・ガイド』の 2-4 ページを参照してください。

## モデリング・ツールとユーザー・インタフェースに関する問題と回避策

この項では、OracleAS ProcessConnect のモデリング・ツールとユーザー・インタフェースに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [管理タブのハング](#)
- [OC4J\\_ProcessConnect インスタンスの起動、停止および再起動](#)
- [セッション・タイムアウト](#)
- [Netscape のポップアップ・ウィンドウに関する問題](#)
- [サポートされる Web ブラウザ](#)
- [ユーザー・インタフェース操作の速度が遅い](#)
- [複数ユーザーによる同一オブジェクトの更新](#)

## 管理タブのハング

OracleAS ProcessConnect のユーザー・インタフェース・ツールで管理タブをクリックすると、システムがハングする場合があります (Linux ではいくつかの事例が確認されています)。

### 回避策

次のファイルをコピーします (つまり、既存のファイルを置換します)。

```
"$ORACLE_HOME/ip/install/administration.uix" を "$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/applications/integration/ip/pages/administration/administration.uix" へ
```

ただし、これによって、Enterprise Manager へのリンクがなくなります。Enterprise Manager に接続するには、別のブラウザ・ウィンドウを使用して、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』の 18-5 ページに指定され、ここで繰り返されている URL を入力します。

Oracle Enterprise Manager Application Server Control から OracleAS ProcessConnect にアクセスする手順は、次のとおりです。

1. 次の URL に進みます。

```
http://hostname:port/
```

ここで、

*hostname* は、OracleAS ProcessConnect Middle-Tier インスタンスがインストールされているホストの名前です。

*port* は、OracleAS ProcessConnect をインストールしたときに割り当てた番号です。このポート番号は、インストールの終了時に表示されます。

## OC4J\_ProcessConnect インスタンスの起動、停止および再起動

ProcessConnect Enterprise Manager のホームページにある「すべて起動」、「すべて停止」、「すべて再起動」の各ボタンは、OC4J\_ProcessConnect インスタンスに影響を与えません (Bug 3167662)。

### 回避策

OC4J\_ProcessConnect を個別に起動、停止および再起動します。

## セッション・タイムアウト

デフォルトのセッション・タイムアウトは、web.xml ファイルに指定されており、構成可能です。

### 説明

セッション・タイムアウトを短くすると、セッション・オブジェクトが廃棄され、無効なページになります。

web.xml ファイルの場所は、次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/applications/integration/ip/WEB-INF/web.xml
```

### 回避策

ブラウザのタイムアウト後に、ユーザー・インタフェース・ツールにログインします。OracleAS ProcessConnect のホームページに進み、タイムアウトしたページに達するまでタブをクリックします。web.xml に次の行を追加してセッション・タイムアウトを構成し、タイムアウト前のセッション継続時間を分単位で 120 にします。

```
<session-config>
<session-timeout>120</session-timeout>
</session-config>
```

## Netscape のポップアップ・ウィンドウに関する問題

Netscape 4.78 および 4.79 で、ポップアップ・ウィンドウに問題が発生する場合があります。たとえば、イベント本体要素を作成し、データ型を選択するために懐中電灯アイコンをクリックすると問題が発生します。

### 回避策

Netscape 4.8、Netscape 7.0 または Internet Explorer 5.5 にアップグレードします。

## サポートされる Web ブラウザ

表 21-1 に、オペレーティング・システムでサポートされる Web ブラウザを示します。この Web ブラウザから OracleAS ProcessConnect のユーザー・インタフェース・ツールにアクセスできます。

表 21-1 サポートされる Web ブラウザ

オペレーティング・システム	サポートされるブラウザ
Red Hat Linux 2.1 (AS/ES) および United Linux 1.0	Netscape 4.78
	Netscape 4.79
	Netscape 4.80
	Netscape 7.0
	Netscape 7.0.2
Red Hat Linux 3.0	Netscape 7.0
	Netscape 7.0.2
HP-UX	Netscape 4.78
	Netscape 4.79
	Netscape 7.0
Solaris 8	Netscape 7.0
Windows NT および 2000	Internet Explorer 5.5
Windows XP	Internet Explorer 6.0

## ユーザー・インタフェース操作の速度が遅い

ユーザー・インタフェースの操作中に、ブラウザがハングしているように見える場合があります。

### 説明

一部のユーザー・インタフェースの操作では、完了まで数分かかる場合があります。たとえば、数百のデータ型を含む大きな XSD のインポートでは、最大 10 分程度かかる場合があります。操作の完了を待機してください。

## 複数ユーザーによる同一オブジェクトの更新

複数のユーザーが、リポジトリを同時にエクスポートすることはできません。

### 説明

現在のリリースでは、1 人のユーザーがオブジェクトを表示しているときに、別のユーザーがそのオブジェクトを更新すると、キャッシュがデータベースにフラッシュされるまで、最初のユーザーはそのオブジェクトの最新バージョンを参照できません。同時更新の場合は、最後の更新が有効となります。

## D3L 使用時の契約の検証に関する問題と回避策

AIP-17301 「The inbound interaction spec type associated with the translator {0} must have a parameter value that is associated with an event body element of a native event type」エラーが戻された場合は、次を実行します (Bug 3042640)。

1. デザイン・リポジトリの所有者 (ip) で SQL\*Plus にログインします。
2. 次のコマンドを発行します。

```
update TIP_ADAPTERPARAMETER_T
  set ISMANDATORY = 'N'
  where NAME = 'Namespace' and
        DESCRIPTION like 'XSD%';
```

3. 変更をコミットします。

WebIV の Note # 263536.1 を参照してください。

## エクスポート/インポートに関する問題

すべての契約は、エクスポート前に承認されている場合でも、「ドラフト」の状態ではインポートされません。構成を作成および配置する前に、関連する契約を承認する必要があります。

## 構成の作成とデプロイに関する問題と回避策

新規の構成を作成する場合は、すべてのビジネス・プロセスと関連するオブジェクトが取得されます。構成が作成されるのは、これらすべてのオブジェクトが有効な場合のみです。作成されているが統合内で使用されていない余分なビジネス・プロセスやオブジェクトが原因で、検証エラーが発生する場合があります。

### 回避策

構成を作成する前に、余分なオブジェクトの削除または妥当性チェックが行われていることを確認します。

## デプロイに関する問題と回避策

デプロイ時に、モデリング・ツールは、既存の構成が静止するのを待機してから新規の構成をデプロイします。静止には、長時間かかる場合があります。

### 説明

静止に 3～4 分以上かかる場合は、2 つの可能性があります。

1. 現在アクティブな構成が、メッセージを処理中です。

または

1. アクティブな構成が、外部イベントを待機中です。

### 回避策

調整レポートに未処理の調整がなく、予期される外部イベントがない場合は、構成の静止を中断できません。

## Oracle Wallet Manager ユーティリティに関する問題

この項では、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』に対する説明を記述します。具体的には次のとおりです。

章: 第 20 章、「Oracle Application Server ProcessConnect セキュリティ」

見出し: 「Oracle Application Server ProcessConnect の B2B アダプタの SSL 設定」

Oracle Wallet Manager を起動するには、「Oracle Application Server ProcessConnect の B2B アダプタの SSL 設定」に記述されている HTTP クライアントの手順を実行する前に、コマンド・プロンプトで `owm` を入力してください (Bug 3146118)。

## 別のメタデータ・リポジトリへの ProcessConnect 中間層の再関連付け

次の手順は、J2EE インストールに対してのみ有効です (J2EE より後のインストールには無効です)。

1. 次のファイルを `IASSchema=false` となるように編集します。

```
$ORACLE_HOME/ip/config/ConfigTool.properties
```

他のすべてのプロパティは「true」に設定してください。

2. コマンド・プロンプトで `ConfigTool` を実行し、次のように正しい環境変数を設定します。

```
java oracle.tip.install.ConfigTool oracle_home null ip_passwd wf_passwd dbhost dbport
db servicename null null null null null
```

ここで、

`oracle_home` は、このインストールの現在の Oracle ホームです。

`ip_passwd` は、新規データベース内の `ip` スキーマに対するパスワードです。

`wf_passwd` は、新規データベース内の `owf_mgr` スキーマに対するパスワードです。

`dbhost` は、新規データベースに対するホスト名です。

`dbport` は、新規データベースに対するポートです。

`db servicename` は、新規データベースに対するサービス名です。

(注意: パラメータは合計で 12 個あります。)

再関連付けを終了した後は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』にある、OracleAS ProcessConnect およびワークフローのシードとデータを新しいメタデータ・リポジトリに移行する際の再関連付けに関する項を参照してください。

## サポートされていない XSD 構成メンバーに関する問題と回避策

この項では、サポートされていない追加の XSD 構成メンバーについて説明します。この項は、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』の付録 A 「ネイティブ書式およびトランスレータ」を補足します。この項の内容は次のとおりです。

- ワイルドカード要素を含む `complexType`
- ネストされた置換グループ
- 匿名メンバーのカーディナリティ
- `type="xs:anySimpleType"` のメンバー

## ワイルドカード要素を含む complexType

ワイルドカード要素（すべてのタグ）を含む complexType には、他のメンバーを指定できません。WildcardMember が、所有するデータ型の唯一のメンバーでない場合は、実行時エラーが発生します (Bug 3112007)。ワイルドカードが制限されている場合は、complexContent 拡張子のある実行時エラーが発生します (Bug 3115819)。

### 説明

XMLSchema では、ワイルドカードのメンバー要素は、それが最後に発生するメンバーである場合、どの複合型にも許容されます。次に例を示します。

```
<xs:complexType name="Colour">
  <xs:sequence>
    <xs:element name="saturation" type="xs:string"/>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="2"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>
```

複数の要素と 1 つのワイルドカードを使用して XSD でタイプを定義する別の方法には、complexContent 拡張子と制限を使用する方法があります。単一のワイルドカード・メンバーでタイプが定義されている場合、そのタイプは complexContent 拡張子のベースとしては使用できません。これは、ベースのワイルドカードに加えて、拡張タイプで指定した追加のメンバーでタイプを指定したことと同等なためです。同様に、拡張子によって導出された complexContent タイプには、そのベース型が空白でないかぎり、ワイルドカード・メンバーを含めることはできません。

### サポートされない場合:

```
<xs:complexType name="Colour1">
  <xs:sequence>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="1"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>

<xs:complexType name="Colour2">
  <xs:complexContent>
    <xs:extension base="Colour1">
      <xs:sequence>
        <xs:element name="hue" type="xs:string"/>
      </xs:sequence>
    </xs:extension>
  </xs:complexContent>
</xs:complexType>

<xs:complexType name="Colour3">
  <xs:complexContent>
    <xs:extension base="Colour2">
      <xs:sequence>
        <xs:element name="saturation" type="xs:string"/>
        <xs:any processContents="skip" maxOccurs="2"/>
      </xs:sequence>
    </xs:extension>
  </xs:complexContent>
</xs:complexType>
```

OracleAS ProcessConnect でのワイルドカード・メンバーに対するサポートは、限定されたサポートのみです。このため、ワイルドカード・メンバーを含む complexType に、他のメンバー要素または属性を含めることはできません。また、complexContent 拡張子のベースとして使用されているタイプのワイルドカード・メンバーに対するサポート、および導出された complexContent タイプのワイルドカード・メンバーに対するサポートはありません。前述の例では、Colour1 は単独で ProcessConnect においてサポートされます。Colour2 は、そのベース型にワイルドカードが含まれているため、サポートされません。Colour3 は、ワイルドカードと別のメンバーの他にワイルドカード・メンバーを含んだ Colour1 から、2 つのステップで導出されているためサポートされません。

次の例では、サポートされない構造体が削除されています。

**サポートされる場合:**

```
<xs:complexType name="Colour1">
  <xs:sequence>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="1"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>
```

サポートされないワイルドカードの構造体は、設計時には検出されませんが、実行時には失敗します (AIP-10403 「起動エンジンは、ステップの実行後、ビジネス・イベントを呼び出す際に異常終了しました。」。ネイティブなイベントやビジネスのデータ型を作成する前に、サポートされないワイルドカードの構造体をすべて XSD から削除する必要があります。

**回避策**

必要なワイルドカードの内容を把握している場合は、その内容でワイルドカード・メンバーを置換できます。

一般的な回避策は、次のようにワイルドカード・メンバーを含むグループを定義してから、元のタイプのワイルドカードをそのグループへの参照に置き換えることです。

```
<xs:complexType name="Colour">
  <xs:sequence>
    <xs:element name="hue" type="xs:string"/>
    <xs:group ref="wild"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>

<xs:group name="wild">
  <xs:sequence>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="2"/>
  </xs:sequence>
</xs:group>
```

**ネストされた置換グループ**

ネストされた置換グループによって実行時エラーが発生します (Bug 3112030)。

**説明**

XMLSchema では、1つの置換グループの見出しである要素が、別のグループのメンバーになれます。ProcessConnect では、置換グループに別の置換グループを含めることはできません。ネストされた置換グループは、設計時には検出されませんが、実行時エラーが発生します。これを避けるには、ネイティブなイベントやビジネスのデータ型を作成する前に、すべてのネストされた置換グループを XSD から削除する必要があります。

次の例の WritingImplement は、トップレベルの置換グループです。この置換グループには、Pen と Pencil の2つのメンバーがあります。Pencil は、DisposablePencil と MechanicalPencil を含む独立した置換グループの見出しでもあります。

次の例は、Pencil が置換グループ WritingImplement 内にあるため、機能しません。

**サポートされない場合:**

```
<xs:element name="subsgpr">
  <xs:complexType>
    <xs:sequence>
      <xs:element ref="WritingImplement"/>
      <xs:element ref="Pen"/>
      <xs:element ref="Pencil"/>
    </xs:sequence>
  </xs:complexType>
</xs:element>

<xs:element name="WritingImplement" abstract="true"/>
```

```

<xs:element name="Pen" substitutionGroup="WritingImplement" type="penType"/>

<xs:element name="Pencil" substitutionGroup="WritingImplement"/>
<xs:element name="MechanicalPencil" substitutionGroup="Pencil" type="pencilType"/>
<xs:element name="DisposablePencil" substitutionGroup="Pencil" type="pencilType"/>

```

## 回避策

ネストされた置換グループを、そのグループのメンバーおよび元のグループ・メンバーすべてを含む、単一のグループにフラット化します。ネストされた置換グループへの各参照は、フラット化されたグループへの参照に置換されます（次の例では太字で示します）。次の例では、置換グループ `Pencil` のメンバーが `WritingImplement` に移動します。 `Pencil` への参照は、 `WritingImplement` への参照に変更されます。ただし、 `Pen` は別の置換グループの見出しではないため、 `Pen` への参照は変更されません。

### サポートされる場合：

```

<xs:element name="subsgroup">
  <xs:complexType>
    <xs:sequence>
      <xs:element ref="WritingImplement"/>
      <xs:element ref="Pen"/>
      <xs:element ref="WritingImplement"/>
    </xs:sequence>
  </xs:complexType>
</xs:element>

<xs:element name="WritingImplement" abstract="true"/>

<xs:element name="Pen" substitutionGroup="WritingImplement" type="penType"/>

<xs:element name="Pencil" substitutionGroup="WritingImplement" type="pencilType"/>
<xs:element name="MechanicalPencil" substitutionGroup="WritingImplement" type="pencilType"/>
<xs:element name="DisposablePencil" substitutionGroup="WritingImplement" type="pencilType"/>

```

## 匿名メンバーのカーディナリティ

`maxOccurs` が無制限の匿名選択グループによって、実行時エラーが発生します (Bug 3133105)。

### 説明

OracleAS ProcessConnect は、実行時にカーディナリティのある匿名メンバーによって失敗します。この構造体は設計時には検出されないため、インポートする前に、すべてのカーディナリティのある匿名メンバーを XSD から削除する必要があります。削除しないと、実行時エラーが発生します。匿名メンバーは、ネストされた選択グループまたは順序グループ、および再使用可能なグループへの参照から作成されます。匿名メンバーに、1 以外の値に設定された `minOccurs` または `maxOccurs` がないかぎり、XSD 内でエラーが発生します。

次の例にある、ネストされた選択グループ、ネストされた順序グループ、およびグループ参照は、それぞれにカーディナリティがあるためすべて無効です。

### サポートされない場合：

```

<xs:complexType name="Document">
  <xs:sequence>
    <xs:choice minOccurs="0" maxOccurs="unbounded">
      <xs:element name="text" type="xs:string"/>
      <xs:sequence minOccurs="1" maxOccurs="2">
        <xs:element name="warning" type="xs:string"/>
        <xs:element name="code" type="xs:int"/>
      </xs:sequence>
    </xs:choice>
    <xs:group ref="mygroup minOccurs="0"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>

```

## 回避策

現在、このサポートされない構造体に対する回避策はありません。

## type="xs:anySimpleType" のメンバー

anySimpleType に、facetValue が NULL の whiteSpace ファセットがある場合は、実行時エラーが発生します (Bug 3133329)。

### 説明

名前空間 <http://www.w3.org/2001/XMLSchema> 内にある XMLSchema のスカラー型 anySimpleType は、すべてのスカラー型の導出に必要なベース型です。スキーマでは、このベース型は要素のタイプまたはスカラー型のベース型としても直接使用できます。

**サポートされる** (whiteSpace の値が設定されている) 場合:

```
<xsd:simpleType name="ID">
  <xsd:restriction base="xsd:anySimpleType">
    <xsd:whiteSpace value="preserve">
  </xsd:restriction>
</xsd:simpleType>
```

**サポートされない** (whiteSpace の値が設定されていない) 場合:

```
<xsd:complexType name="Comment">
  <xsd:attribute name="severity" type="xsd:anySimpleType">
</xsd:complexType>

<xsd:simpleType name="SKU">
  <xsd:restriction base="xsd:anySimpleType">
    <xsd:length value="10">
  </xsd:restriction>
</xsd:simpleType>
```

OracleAS ProcessConnect では、インスタンスに表示されるすべてのスカラー型に、whiteSpace ファセットの値を指定する必要があります。anySimpleType にはこのファセットに対する値がないため、メンバーのタイプとして直接使用することはできません。導出されたタイプで whiteSpace ファセットの値が宣言されている場合は、anySimpleType を別の simpleType のベース型として使用できません。前述の例にある Comment は、その中にタイプが anySimpleType の属性が含まれているため、使用できません。ID は anySimpleType から導出されますが、whiteSpace の値を指定するため有効です。SKU は anySimpleType から直接導出され、whiteSpace の値を提供しないため使用できません。

## 回避策

anySimpleType を別のスカラー型のベースとして使用する場合は、導出されたタイプに whiteSpace ファセットを追加します。次のように、タイプ SKU を変更します。

```
<xsd:simpleType name="SKU">
  <xsd:restriction base="xsd:anySimpleType">
    <xsd:length value="10">
    <xsd:whiteSpace value="preserve">
  </xsd:restriction>
</xsd:simpleType>
```

タイプが anySimpleType の要素については、タイプを string に変更します。Comment は、次のようになります。

```
<xsd:complexType name="Comment">
  <xsd:attribute name="severity" type="xsd:string">
</xsd:complexType>
```

## OracleAS ProcessConnect の削除

この項では、OracleAS ProcessConnect の削除時に発生する可能性のある問題について説明します (Bug 2940328 および Bug 3092893)。

削除の操作では、ORACLE\_HOME/config/ias.properties の Components 行を削除します。これによって、OracleAS ProcessConnect を同じ ORACLE\_HOME に再インストールする場合に、問題が発生する可能性があります。

ProcessConnect を削除した後は、インストール・タイプに従って ORACLE\_HOME/config/ias.properties で次の行を追加します。

- J2EE および WebCache が中間層にインストールされている場合は、次の行を追加します。  
Components=Apache,J2EE,WebCache,JServ
- Portal と Wireless が中間層にインストールされている場合は、次の行を追加します。  
Components=Apache,J2EE,WebCache,JServ,Portal,Wireless
- Business Intelligence および Forms が中間層にインストールされている場合は、次の行を追加します。  
Components=Apache,J2EE,WebCache,JServ,Portal,Wireless,Discoverer,Personalization,Reports,Forms

## その他の既知の問題

OracleAS ProcessConnect における既知の問題は、次のとおりです。

- シード済の相互作用に対してネイティブなイベント型を作成すると、失敗します。ユーザーには警告されません (Bug 2815475)。
- データ定義記述言語 (D3L) 定義にタイプ termstring のフィールドが含まれており、endchar 属性の文字がネイティブなワイヤ・メッセージ (インバウンド変換用) にない場合は、D3L パーサーがスピンし、Java OutOfMemoryError が発生します (Bug 3076754)。

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Datatype Transformation Map リストからのルールを選択に関する修正 \(チュートリアル\)](#)
- [ネイティブ・イベントの削除に関する修正 \(チュートリアル\)](#)
- [HTTP アダプタのインストール後のタスクに関する修正](#)
- [表 8-4、Advanced Queuing アダプタのネーミング規則に対する修正](#)
- [maxOccurs が無制限の匿名選択グループに関する修正](#)

## Datatype Transformation Map リストからのルールを選択に関する修正 (チュートリアル)

この項では、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』に対する修正と説明を記述します。具体的には次のとおりです。

章: 第7章、「チュートリアル - 企業内の統合」

見出し: 「アウトバウンド・イベント変換マップのルールの作成」

ページ: 7-35

手順 11 から 13 では、「追加」をクリックする前に、**Datatype Transformation Map** リストからルールを選択する必要があります。したがって、手順 11 から 13 は次の順で実行します。

11. **Datatype Transformation Map** リストから「copy:from=string」→「to=string」の順に選択します。

- 「追加」をクリックします。これによって、「Add Transformation Rules」ページに進みます。
- 「ターゲット」表の「すべて拡張」をクリックします。

## ネイティブ・イベントの削除に関する修正（チュートリアル）

この項では、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』に対する修正と説明を記述します。具体的には次のとおりです。

章：第7章、「チュートリアル-企業内の統合」

見出し：「タスク 3: ネイティブ・イベントの削除」

ページ：7-79

HR New Ad のネイティブ・イベントを、タスク 3 の説明に従って削除する前に、このネイティブ・イベントに関連するイベント・マップを最初に削除する必要があります。このイベント・マップを「Native Event Type Details: HR New Ad」ページから削除します。

## HTTP アダプタのインストール後のタスクに関する修正

この項では、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』に対する修正と説明を記述します。具体的には次のとおりです。

章：第8章、「Oracle Application Server ProcessConnect テクノロジ・アダプタ」

見出し：「HTTP アダプタのインストール後のタスク」

ページ：8-50

- ステップ 1 で開くファイルは、orion-application.xml ファイルで、jazzn-data.xml ではありません。両方のファイルが、ステップ 1 で指定したディレクトリに配置されています。
- ステップ 2 では、orion-application.xml ファイル用に示した <principals path="principals.xml" /> を追加しないでください。この行は、このファイルにすでに存在しています。

かわりに、その行のすぐ後に示されている 3 行を、orion-application.xml ファイルに追加します。

```
<security-role-mapping name="sr_manager">  
  <group name="managers"/>  
</security-role-mapping>
```

- ステップ 3 で開くファイルは、jazzn-data.xml ファイルで、orion-application.xml ではありません。
- ステップ 4 では、ステップ 4 で示されるレルム・セクション全体を、jazzn-data.xml ファイルに追加します。
- ステップ 9 では、次の URL を起動して、環境が正しく構成されたことをテストします。

```
http://hostname:port/integration/transportServletB
```

または、ステップ 5 から 7 の間に、HTTP アダプタで SSL を有効にした場合は、HTTPS を使用します。

```
https://hostname:port/integration/transportServletB
```

transportServlet に追加された B によって、orion-application.xml ファイルと jazzn-data.xml ファイルに、環境が正しく構成されたことがテストされます。B を指定しない場合は、構成された環境はテストされず、一般的なテスト・ディテールのセットが使用されます。

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager の起動後は、/tmp/tstvalidation.log ファイルを削除しないでください。このファイル内の情報は、デバッグの目的で役立ちます。

---

## 表 8-4、Advanced Queuing アダプタのネーミング規則に対する修正

この項では、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』に対する修正と説明を記述します。具体的には次のとおりです。

**章:** 第 8 章、「Oracle Application Server ProcessConnect テクノロジ・アダプタ」

**見出し:** 「アドバンスド・キューイング・アダプタの設計時タスク」

**ページ:** 8-15

表 8-4 の最後の 3 つのアダプタ交換プロトコル（「Enqueue to...」で開始する説明文がある）は、インバウンド方向ではなく、アウトバウンド方向のためのプロトコルです。

## maxOccurs が無制限の匿名選択グループに関する修正

この項では、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』に対する修正と説明を記述します。具体的には次のとおりです。

**付録:** A、「ネイティブ書式およびトランスレータ」

**見出し:** 「minOccurs="0"、maxOccurs が 1 を上回る選択または順序（親が選択または順序、あるいはその両方である場合を除く）」

**ページ:** A-8

この説明は、不適切です。詳細は、[21-14 ページ](#)の「匿名メンバーのカーディナリティ」を参照してください。

この章では次の内容について説明します。

- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Workflow の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Application Server および Oracle E-Business Suite の Oracle Workflow
- Oracle Workflow コンポーネントのバージョン
- Oracle Workflow Manager の構成
- Workflow Configuration Assistant のサイレント・モードでの実行
- LDAP ポート
- ecxutils.jar に関するエラー
- インストール後に行う Workflow ディレクトリ・サービス実装の変更

### Oracle Application Server および Oracle E-Business Suite の Oracle Workflow

Oracle E-Business Suite データベースに、スタンドアロンの Oracle Workflow サーバーをインストールしないでください。Oracle Application Server 10g (9.0.4) で使用できる Oracle Workflow のバージョン、またはこのバージョンの Oracle Workflow に依存している Oracle Application Server のコンポーネントを使用する場合は、Oracle Workflow サーバーを、Oracle E-Business Suite のインスタンスには使用しないデータベースにインストールする必要があります。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) を Oracle E-Business Suite とともに実装する場合、Oracle Workflow Configuration Assistant は、そのデータベースにスタンドアロン・バージョンの Oracle Workflow サーバーをインストールしません。かわりに、Oracle E-Business Suite に埋め込まれている Oracle Workflow サーバーのバージョンは、継続して使用できます。

Oracle Application Server Metadata Repository 10g (9.0.4) を Oracle E-Business Suite が使用しているデータベースにインストールする場合、Oracle Workflow Configuration Assistant は、そのデータベースにスタンドアロン・バージョンの Oracle Workflow サーバーをインストールしません。かわりに、Oracle E-Business Suite に埋め込まれている Oracle Workflow サーバーのバージョンは、継続して使用できますが、Oracle Application Server の機能の一部が制限される場合があります。詳細は、Oracle MetaLink の Note 251627.1 (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

### Oracle Workflow コンポーネントのバージョン

使用するデータベースにインストールされた Oracle Workflow サーバー・コンポーネントのバージョンは、Oracle Workflow スキーマも含めて、使用する Oracle Workflow 中間層コンポーネントのバージョンと一致する必要があります。つまり、Oracle Workflow リリース 2.6.3 を使用する場合は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) で使用できる Oracle Workflow サーバーと中間層コンポーネントの両方をリリース 2.6.3 のコンポーネントにする必要があります。

Oracle Workflow リリース 2.6.2 がインストールされている既存の Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) のインフラストラクチャ・データベースを使用する場合は、そのデータベースを Oracle Application Server 10g (9.0.4) の中間層のホームで使用する前に、Oracle Workflow サーバーのインストールをリリース 2.6.3 にアップグレードする必要があります。Oracle Workflow サーバーのインストールをリリース 2.6.3 にアップグレードするには、「アップグレード」オプションを指定して、Oracle Workflow Configuration Assistant を Oracle Application Server 10g (9.0.4) の中間層のホームにある wf サブディレクトリから実行します。

---

**注意：** 既存の Oracle Workflow サーバーのインストールをアップグレードするために、Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) を使用しないでください。適切に Oracle Workflow リリース 2.6.3 にアップグレードするには、Oracle Workflow Configuration Assistant を使用します。

---

## Oracle Workflow Manager の構成

Oracle Workflow の管理機能や Java ベースの Workflow Notification Mailer も含め、Oracle Workflow Manager コンポーネントを Oracle Enterprise Manager Application Server Control 内で使用する場合は、Workflow Configuration Assistant を実行して Oracle Workflow Manager を構成します。

- Oracle Content Management Software Development Kit の CD から Oracle Workflow をインストールすると、Oracle Universal Installer によって Workflow Configuration Assistant が自動的に起動され、Oracle Workflow Manager が自動的に構成されます。
- Oracle Workflow のファイルがインストールされている Oracle ホームから Workflow Configuration Assistant を手動で実行する場合は、最初に Workflow Configuration Assistant のスクリプトを編集して、Oracle Application Server インスタンスおよび使用する Oracle Workflow インストールが常駐するデータベースを指定するインストール・パラメータを設定する必要があります。この情報は、Workflow Configuration Assistant が Oracle Workflow Manager の情報を Oracle Enterprise Manager Application Server Control の targets.xml ファイルに構成するために必要です。

手動による Workflow Configuration Assistant の実行中に、Oracle Workflow Manager を構成する場合は、次のディレクトリで Workflow Configuration Assistant のスクリプトを編集します。

- UNIX の場合: `$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh`

テキスト・エディタでスクリプトを開き、次のような行を検索します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir workflow_directory /orahome oracle_home /ospath $PATH
```

次に例を示します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir /d1/iasinstall/m21pw1/wf /orahome /d1/iasinstall/m21pw1 /ospath $PATH
```

このスクリプトを編集し、/wkdir、/orahome および /ospath の各パラメータの後に Oracle Workflow Manager に必要なパラメータを追加します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir workflow_directory /orahome oracle_home /ospath $PATH
/iasname schema_name.machine_name /iasmachine machine_name /iasport port_number /iassid
database_SID /jdbcconnnode connect_string /fileupdate true
```

次のようにパラメータ値を指定します。

- /iasname - 使用する Oracle Application Server インスタンスの名前。次の書式で指定します。  
`schema_name.machine_name`
- /iasmachine - 使用する Oracle Application Server インスタンスのホスト名。
- /iasport - Oracle Workflow スキーマが常駐するデータベースのデータベース・リスナーのポート番号。
- /iassid - Oracle Workflow がインストールされているデータベースのシステム識別子 (SID)。
- /jdbcconnnode - リモート・データベースにアクセスするための JDBC 接続識別子。次の書式で指定します。`host:port:sid`
- /fileupdate - Oracle Enterprise Manager Application Server Control の targets.xml ファイルを更新するためには、このパラメータの値を true に指定する必要があります。

スクリプトへの変更を保存し、次のコマンドを使用して Workflow Configuration Assistant を起動します。

- UNIX の場合:
 

```
$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh
```

Oracle Workflow Configuration Assistant のウィンドウが表示されたら、Workflow Notification Mailer を実行する場合に必要な追加のパラメータも含めて、残りの構成パラメータを入力します。詳細は、インストール・マニュアルを参照してください。

## Workflow Configuration Assistant のサイレント・モードでの実行

Workflow Configuration Assistant を手動で起動する場合は、サイレント・モードでの実行を選択できます。そのためには、最初にスクリプトを編集し、使用するすべての構成パラメータを入力します。この場合は、すべての必須パラメータと同様に、使用する機能の条件によって必要となるパラメータも指定する必要があります。

次のディレクトリで、Workflow Configuration Assistant のスクリプトを編集します。

- UNIX の場合: `$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh`

テキスト・エディタでスクリプトを開き、次のような行を検索します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir <workflow_directory> /orahome <oracle_home>
/ospath $PATH
```

次に例を示します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir /d1/iasinstall/m21pw1/wf /orahome /d1/iasinstall/m21pw1
/ospath $PATH
```

このスクリプトを編集し、`/wkdir`、`/orahome` および `/ospath` の各パラメータの後に追加のパラメータを追加します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir workflow_directory /orahome oracle_home /ospath $PATH
/wfacct workflow_schema /wfpasswd workflow_schema_password /syspasswd SYS_password /instype
installation_type /orasid database_SID /constr connection_string
```

サイレント・モードで Workflow Configuration Assistant を実行するには、次の必須パラメータをスクリプトに含める必要があります。

- `/wkdir` - 使用する Oracle ホーム・ディレクトリ内の Oracle Workflow ディレクトリ。デフォルトのディレクトリは、次のとおりです。 `$ORACLE_HOME/wf`
- `/orahome` - 使用する Oracle ホーム・ディレクトリ。
- `/wfacct` - 使用する Oracle Workflow データベース・アカウントのユーザー名。新規インストールの場合、デフォルトの Workflow アカウントは `owf_mgr` です。
- `/wfpasswd` - 使用する Oracle Workflow データベース・アカウントのパスワード。
- `/syspasswd` - 使用する SYS パスワード。詳細については、Oracle DBA に連絡してください。

---

**注意：** Oracle Workflow Configuration Assistant をサイレント・モードで実行するために、これらのパスワードをスクリプトに入力する場合は、必ずファイルを保護し、この情報にアクセスできるのは許可された管理者のみにしてください。

---

- `/instype` - Oracle Workflow を新規インストール、または Oracle Workflow リリース 2.6.3 を再インストールする場合は、`Install` を指定します。Oracle Workflow リリース 2.6.0、リリース 2.6.1 またはリリース 2.6.2 の既存のインストールをアップグレードする場合は、`Upgrade` を指定します。Oracle Workflow の既存のインストールに言語をロードする場合は、`"add language"` を指定します。
- `/nlsopt` - `/instype` パラメータに `Add language` を指定した場合は、追加する言語の言語コードで `/nlsopt` パラメータを指定する必要があります。Oracle Workflow Server は、Oracle Application Server がサポートする次の言語をサポートしています。
  - AR - アラビア語
  - PTB - ポルトガル語 (ブラジル)
  - FRC - フランス語 (カナダ)
  - CS - チェコ語
  - DK - デンマーク語
  - NL - オランダ語

- US - 英語
- SF - フィンランド語
- F - フランス語
- D - ドイツ語
- EL - ギリシャ語
- IW - ヘブライ語
- HU - ハンガリー語
- I - イタリア語
- JA - 日本語
- KO - 韓国語
- ESA - スペイン語 (南米)
- N - ノルウェー語
- PL - ポーランド語
- PT - ポルトガル語
- RO - ルーマニア語
- RU - ロシア語
- ZHS - 簡体字中国語
- SK - スロバキア語
- E - スペイン語
- S - スウェーデン語
- TH - タイ語
- ZHT - 繁体字中国語
- TR - トルコ語

■ `/orasisid` - Oracle Workflow がインストールされているデータベースのシステム識別子 (SID) または TNS 名。

■ `/constr` - Oracle Workflow がインストールされているデータベースの接続文字列。

また、次の追加パラメータを指定することによって、各パラメータに対応する機能を使用できます。

- `/tablespace` - Oracle Workflow データベース・アカウントに割り当てる有効な表領域名。このパラメータを指定しない場合、新規インストールの Oracle Workflow データベース・アカウントに対するデフォルトの表領域は `USERS` です。このパラメータは、Oracle Workflow の新規インストールを実行している場合のみ有効です。アップグレード中に Oracle Workflow の表領域の変更はできません。
- `/debug` - Workflow Configuration Assistant によってデバッグ情報を `workflow.log` ファイルに書き込む場合は、`true` を指定します。記録しない場合は、`false` を指定します。
- Oracle Workflow ディレクトリ・サービスとして Oracle Internet Directory と統合する場合は、次のパラメータを指定します。
  - `/ldaphost` - 使用する Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリが常駐するホストの名前。
  - `/ldapport` - ホスト上のポート。
  - `/ldapuser` - LDAP サーバーへの接続に使用される LDAP ユーザー・アカウント。このユーザー名には書込み権限を指定し、LDAP ディレクトリにバインドする必要があります。次に例を示します。 `cn=orcladmin`
  - `/ldapopwd` - LDAP ユーザー・アカウントのパスワード。

- /ldaplogbase - その下に変更ログが格納される LDAP ノード。次に例を示します。  
cn=changelog
- /ldapuserbase - その下にユーザー・レコードがある LDAP ノード。次に例を示します。  
cn=Base, cn=OracleSchemaVersion
- Oracle Workflow Manager を使用する場合は、次のパラメータを指定します。
  - /iasname - 使用する Oracle Application Server インスタンスの名前。次の書式で指定します。  
*schema\_name.machine\_name*
  - /iasmachine - 使用する Oracle Application Server インスタンスのホスト名。
  - /iasport - Oracle Workflow スキーマが常駐するデータベースのデータベース・リスナーのポート番号。
  - /iassid - Oracle Workflow がインストールされているデータベースのシステム識別子 (SID)。
  - /jdbconnode - リモート・データベースにアクセスするための JDBC 接続識別子。次の書式で指定します。*host:port:sid*
  - /fileupdate - Oracle Enterprise Manager Application Server Control の targets.xml ファイルを更新するためには、このパラメータの値を true に指定する必要があります。
- Workflow Notification Mailer を使用する場合は、次のパラメータを指定します。これらのパラメータを指定する場合は、Oracle Workflow Manager のパラメータも指定する必要があることに注意してください。
  - /mailserver - インバウンドの Internet Message Access Protocol メール・サーバーの名前。
  - /mailuser - 通知メーラーが電子メールの送受信に使用するメール・アカウントのユーザー名。
  - /mailhtml - Oracle HTTP Server で Oracle Workflow に定義された Web エージェントを識別するベースの URL。HTML エージェントは、次の書式で指定する必要があります。  
  
http://server.com:portID/pls/wf  
  
server.com:portID は、使用する Web リスナーがリクエストを受け入れるサーバーと TCP/IP のポート番号を示します。
  - /mailhost - アウトバウンドの SMTP メール・サーバーの名前。
  - /mailreply - 着信メッセージを受信する電子メール・アカウントのアドレスで、このアドレスには、通知の応答が送信されます。

スクリプトへの変更を保存し、次のコマンドを使用して Workflow Configuration Assistant を起動します。

- UNIX の場合 :  
\$ORACLE\_HOME/wf/install/wfinstall.csh

スクリプトにすべての最小限の必須パラメータが含まれている場合、そのスクリプトは Oracle Workflow Configuration Assistant のウィンドウを表示することなく構成を実行します。

## LDAP ポート

Oracle Internet Directory と統合する場合は、Workflow Configuration Assistant または Oracle Workflow 内の「グローバル・ワークフロー設定」ページのいずれかで、使用している LDAP ディレクトリに、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバーの情報を指定します。LDAP サーバーへの接続ポートには、非 Secure Sockets Layer (非 SSL) のポートを指定する必要があります。

## ecxutils.jar に関するエラー

Oracle Workflow のインストール時と構成時に作成された workflow.log ファイルには、ecxutils.jar という名前のファイルのロードに関するエラーが表示される場合があります。これらのエラーは、無視しても安全です。

## インストール後に行う Workflow ディレクトリ・サービス実装の変更

Oracle Workflow のインストール時と構成時には、実装するディレクトリ・サービスのタイプを選択します。Oracle Internet Directory (OID) および Oracle Application Server Single Sign-On と統合するか、または Oracle Database のユーザーとロールを Oracle Workflow のディレクトリ・リポジトリとして使用できます。

ディレクトリ・サービスの実装は、初期のインストールと構成が完了した後に、必要に応じて変更できます。

詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」を参照してください。

### Oracle Database ユーザーから Oracle Internet Directory への変換

1. 使用しているデータベースに DBMS\_LDAP の PL/SQL パッケージがロードされていることを確認します。このパッケージには、LDAP サーバーからデータにアクセスするために使用されるファンクションとプロシージャが含まれており、LDAP 同期に必要なパッケージです。DBMS\_LDAP パッケージがすでにインストールされているかどうかを確認するには、SQL\*Plus に接続して、次のコマンドを使用します。

```
desc DBMS_LDAP
```

DBMS\_LDAP パッケージが存在しない場合は、ORACLE\_HOME/rdbms/admin ディレクトリにある catldap.sql スクリプトを実行して、DBMS\_LDAP パッケージを手動でロードします。このスクリプトは、SYS ユーザーで実行します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus "SYS/SYS password as sysdba" @$ORACLE_HOME/rdbms/admin/catldap.sql
```

2. ORACLE\_HOME/wf/sql/wfdircsv.sql スクリプトを実行して、Oracle Internet Directory 統合をサポートする Oracle Workflow ディレクトリ・サービスのビューを実装します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/passwd @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfdircsv.sql
```

3. Oracle Workflow のセキュリティ・ファンクションとプロシージャが含まれた適切なバージョンの WFA\_SEC パッケージをロードします。このパッケージをロードするには、Oracle Workflow データベース・ユーザーで SQL\*Plus にログインし、ORACLE\_HOME/wf/sql/wfsecsb.sql スクリプトを実行します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/passwd @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfsecsb.sql
```

4. Oracle HTTP Server の dads.conf ファイルにある、データベース・アクセス記述子 (DAD) を Oracle Workflow 用に更新して、次のパラメータを指定します。DAD を更新するには、Oracle Enterprise Manager を使用するか、または dads.conf ファイルを直接編集することもできます。DAD の名前は、/pls/your\_Workflow\_DAD にする必要があります。次に例を示します。

```
/pls/wf
```

- PlsqlDatabaseUsername - Oracle Workflow スキーマ
- PlsqlDatabasePassword - Oracle Workflow スキーマ・パスワード
- PlsqlDatabaseConnectionString - データベース接続文字列
- PlsqlDefaultPage - wfa\_html.home
- PlsqlSessionStateManagement - StatelessWithResetPackageState
- PlsqlAuthenticationMode - Basic

5. 次のエントリを、使用する mod\_osso 構成ファイルに追加して、Oracle Workflow DAD を保護します。使用する DAD の名前を、your\_Workflow\_DAD に置き換えます。

```
<Location /pls/your_Workflow_DAD>
  require valid-user
  authType Basic
</Location>
```

詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Application Server Single Sign-On アプリケーション開発者ガイド』の「mod\_osso を使用したアプリケーションの開発」。

DAD および mod\_osso 構成ファイルを更新した後は、Oracle HTTP Server を再起動します。

6. 「グローバル・ワークフロー設定」ページで、次の LDAP 作業環境を設定します。詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「グローバル・ユーザー設定の設定」。
  - LDAP ホスト
  - LDAP ポート
  - LDAP ユーザー名
  - LDAP パスワード
  - LDAP ChangeLog のベース・ディレクトリ
  - LDAP ユーザー・ベース・ディレクトリ
7. 既存の Workflow ユーザー情報を、Oracle Internet Directory に移行します。シングル・サインオンとシングル・アドミニストレーションを有効にするには、既存の Oracle Workflow ユーザー情報を、1 回で Oracle Internet Directory に移行する必要があります。以前にユーザー情報を格納したユーザー表も含めて、すべての必要なデータを WF\_LOCAL\_USERS から移行することを確認します。移行後のユーザー情報の維持は、Oracle Internet Directory を介してのみ行います。
 

Oracle Internet Directory には、ldifmigrator という移行ツールが用意されています。このツールを使用するには、必要な置換変数を使用して、ユーザー情報をデータベースから中間 LDAP Data Interchange Format (LDIF) ファイルに抽出する必要があります。ldifmigrator ツールは、実行時に指定された引数または LDAP ディレクトリから取得した情報に基づいて変数を置換することによって、ファイル内の中間エントリを実際の LDIF エントリに変換します。ldifmigrator によって生成された LDIF ファイルは、Oracle Internet Directory バルク・ツールを使用して Oracle Internet Directory にアップロードできます。

ldifmigrator、中間 LDIF ファイルに必要な書式および Oracle Internet Directory バルク・アップロード・ツールの詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の付録 A 「LDIF およびコマンドライン・ツールの構文」。
8. WF\_LDAP API を使用して Oracle Workflow ディレクトリ・サービスを Oracle Internet Directory と定期的に同期化します。手順については、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」の「Workflow ディレクトリ・サービスと Oracle Internet Directory の同期」。

## Oracle Internet Directory から Oracle Database ユーザーへの変換

1. Oracle Workflow ディレクトリ・サービスと Oracle Internet Directory との同期化のために、WF\_LDAP API の実行を計画していたデータベース・ジョブをすべて停止します。詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」の「Workflow ディレクトリ・サービスと Oracle Internet Directory の同期」。
2. Oracle HTTP Server の dads.conf ファイルにある、データベース・アクセス記述子 (DAD) を Oracle Workflow 用に更新して、次のパラメータを指定します。DAD を更新するには、Oracle Enterprise Manager を使用するか、または dads.conf ファイルを直接編集することもできます。DAD の名前は、/pls/your\_workflow\_DAD にする必要があります。次に例を示します。
 

```
/pls/wf
```

  - PlsqlDatabaseConnectionString - データベース接続文字列
  - PlsqlDefaultPage - wfa\_html.home
  - PlsqlSessionStateManagement - StatelessWithResetPackageState
  - PlsqlAuthenticationMode - Basic

mod\_plsql データベース認証を有効にするために、データベースのユーザー名またはパスワードを指定していないことを確認します。
3. Workflow DAD のエントリを、mod\_osso 構成ファイルから削除します。
 

DAD および mod\_osso 構成ファイルを更新した後は、Oracle HTTP Server を再起動します。

4. ORACLE\_HOME/wf/sql/wfdirouv.sql スクリプトを実行して、Oracle Workflow ディレクトリ・サービスのビューを、Oracle Database のユーザーとロールにマップします。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/passwd @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfdirouv.sql
```

wfdirouv.sql スクリプトは、ネイティブの各 Oracle Database ユーザーの電子メール・アドレスを、そのユーザーのユーザー名にそれぞれ設定します。最低限のセットアップ手順としては、スクリプトを編集して、ネイティブの Oracle Database ユーザーを WF\_ROLES ビュー定義を介して既存のメール・ディレクトリ・ストアにリンクするか、またはユーザー名と電子メール・アカウント名が一致する場合は、@oracle.com などの組織のドメインを WF\_USERS ビュー定義のユーザー名に追加します。通常、変更する列は、WF\_USERS の EMAIL\_ADDRESS および WF\_ROLES の EMAIL\_ADDRESS です。詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」を参照してください。

5. Oracle Workflow のセキュリティ・ファンクションとプロシージャが含まれた適切なバージョンの WFA\_SEC パッケージをロードします。このパッケージをロードするには、Oracle Workflow データベース・ユーザーで SQL\*Plus にログインし、<ORACLE\_HOME>/wf/sql/wfsecwsb.sql スクリプトを実行します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/<passwd> @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfsecwsb.sql
```

6. 「グローバル・ワークフロー設定」ページで、次の LDAP 作業環境を消去します。詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「グローバル・ユーザー設定の設定」。

- LDAP ホスト
- LDAP ポート
- LDAP ユーザー名
- LDAP パスワード
- LDAP ChangeLog のベース・ディレクトリ
- LDAP ユーザー・ベース・ディレクトリ

## 管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Workflow の管理に関する問題とその回避策について説明します。

### Java ベースの Workflow Notification Mailer

リリース 2.6.3 の Oracle Workflow には、Generic Service Component Framework 内にサービス・コンポーネントとして実装された Java ベースの通知メーラー・プログラムが含まれています。このプログラムは、ユーザーに通知を電子メールで通信し、応答を解釈します。Oracle Workflow には、Workflow Notification Mailer という、シードされた通知メーラー・サービス・コンポーネントが用意されています。このプログラムには、アウトバウンドの SMTP メール・サーバーとインバウンドの IMAP メール・サーバーが必要です。

通知メーラーの新しい Java ベースの実装によって、Oracle Workflow の以前のリリースで使用されていた C ベースの Notification Mailer プログラムが置き換えられます。Oracle Workflow の既存のインストールをリリース 2.6.3 にアップグレードする場合は、注意してください。C ベースの Notification Mailer 用の実行可能ファイルは、アップグレード時にスタブ・ファイルに置き換えられ、そのバージョンの Notification Mailer は実行できなくなります。かわりに、Oracle Enterprise Manager Application Server Control 内の Oracle Workflow Manager コンポーネントを使用して、Java ベースの Workflow Notification Mailer を実行します。

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。

### データベース・アクセス記述子

『Oracle Workflow for Oracle Content Management SDK インストール・ノート』には、「インストール」オプションまたは「アップグレード」オプションを選択した場合は、Workflow Configuration Assistant によって、Oracle Workflow の Database Access Descriptor (DAD) が Oracle HTTP Server インストール内の `mod_osso` 構成ファイルに作成される、という Workflow Configuration Assistant に関する記述があります。実際に DAD が作成される先は、Oracle HTTP Server インストール内の `dads.conf` ファイルです。

### DBMS\_LDAP パッケージ

『Oracle Workflow for Oracle Content Management SDK インストール・ノート』の「Oracle Workflow Server インストール」の項では、Oracle Universal Installer および Oracle Workflow Configuration Assistant の実行後に、「DBMS\_LDAP パッケージのロード (条件によっては必要)」を 4 つの手順で示しています。Oracle Internet Directory と Oracle Application Server Single Sign-On を Oracle Workflow ディレクトリ・サービスとして統合する場合、この手順は、実際にはインストール前に実行する必要があります。Oracle Universal Installer と Oracle Workflow Configuration Assistant を実行する前に、使用するデータベース内に DBMS\_LDAP の PL/SQL パッケージがロードされていることを確認してください。

使用するデータベースに DBMS\_LDAP パッケージをインストールせずに、Oracle Internet Directory 統合の LDAP 値を指定して、Oracle Universal Installer と Oracle Workflow Configuration Assistant を実行した場合は、Oracle Workflow Configuration Assistant の完了後に無効なパッケージが発生する可能性があります。この場合は、『Oracle Workflow for Oracle Content Management SDK インストール・ノート』の説明に従ってパッケージをロードし、次に Oracle Workflow スキーマを再コンパイルします。詳細は、『Oracle9i PL/SQL パッケージ・プロシージャおよびタイプ・リファレンス』を参照してください。

# 第IX部

---

## 管理とセキュリティに関する問題

第IX部では、管理とセキュリティに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第23章「Oracle Internet Directory」
- 第24章「Oracle Delegated Administration Services」
- 第25章「Oracle Directory Integration and Provisioning」
- 第26章「Oracle Application Server Certificate Authority」
- 第27章「Oracle Enterprise Manager」



---

---

## Oracle Internet Directory

この章では、Oracle Internet Directory に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Internet Directory に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Internet Directory データベースのシャットダウン時または接続に失敗した場合の OIDMON の動作
- SSL 対応および非 SSL 対応の両 LDAP ポートでリスニングできる Oracle ディレクトリ・サーバー・インスタンス
- 不完全なバルク・ロード操作からの回復
- Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでプラグイン機能がサポートされない
- ref 属性に値が設定されていると ROOT DSE を変更できない
- 中断されたバルク・ロード操作のロールバック

### Oracle Internet Directory データベースのシャットダウン時または接続に失敗した場合の OIDMON の動作

Oracle Internet Directory モニターでは、シャットダウンを適切に処理するためにデータベース内の情報が必要です。

高可用性の使用例では、データベースへの接続に失敗した場合、Oracle Internet Directory モニターは自動的にシャットダウンしません。かわりに、Oracle Internet Directory モニターはデータベースへの接続を繰り返し試行します。そのため、データベースが起動すると、Oracle Internet Directory モニターは Oracle Internet Directory のサーバー・インスタンスを再起動できます。

したがって、データベースが使用不可の場合は、Oracle Internet Directory モニターを適切にシャットダウンできません。ユーザーは、特定のオペレーティング・システムの適切なメカニズムを使用して、Oracle Internet Directory モニターのプロセスを強制的に停止する必要があります。

データベースが長時間停止した状態の場合、Oracle Internet Directory モニターは、データベースの再起動時に他の Oracle Internet Directory のサーバー・インスタンスを再起動できません。ユーザーは、Oracle Internet Directory モニターのプロセスを強制的に停止し、データベースが再起動した後に再起動する必要があります。

### SSL 対応および非 SSL 対応の両 LDAP ポートでリスニングできる Oracle ディレクトリ・サーバー・インスタンス

以前のバージョンの Oracle Internet Directory とは異なり、2つの個別のインスタンスは不要です。

### 不完全なバルク・ロード操作からの回復

バルク・モードで `bulkload.sh` を使用したロードに失敗した場合は、次のオプションを使用すると、ディレクトリを元の状態に戻すことができます。

```
bulkload.sh -connect connect_string -recover
```

ただし、このオプションを使用しても、索引は作成されません。索引を再作成するには、次のオプションを使用します。

```
bulkload.sh -connect connect_string -index.
```

## Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでプラグイン機能がサポートされない

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、次のプラグイン機能が Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでサポートされていません。

- Windows NT ドメインの外部認証プラグイン。
- プラグイン定義の一部としてディレクトリ・サーバーに接続するための、OID PL/SQL PLUGIN API として提供される LDAP\_PLUGIN パッケージの `simple_bind_s()` ファンクション。

## ref 属性に値が設定されていると ROOT DSE を変更できない

ルート DSE エントリの `ref` (参照) 属性が空白以外の値に設定されていると、ルート DSE エントリの変更が、この属性内で参照されるディレクトリ・サーバー上で試行されます。`ref` 属性が空白以外の値に設定されている場合に、ルート DSE エントリの変更を元のサーバー上で実行するには、`managedDSA` 制御を渡す必要があります。制御を渡すには、`ldapmodify` の `-M` オプションを使用します。

## 中断されたバルク・ロード操作のロールバック

`bulkload.sh` 操作が中断された場合、ディレクトリ管理者は、新規の `-recover` フラグを使用してディレクトリを元の状態にリストアできます。ディレクトリが空でない場合は、ロールバック後にすべての索引を再作成する必要があります。索引を再作成するには、次のオプションを使用します。

```
bulkload.sh ... -index
```

## 構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Internet Directory の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- リリース 9.0.2 からのアップグレード後に必要なグループ・コンテナに対する ACL ポリシーの設定
- Oracle Internet Directory が重複した `authpassword` ベリファイアを生成する
- インストール時にルート DSE 直下の DN をデフォルトの識別管理レム DN として選択しないこと
- 部分レプリケーションでは依存しているネーミング・コンテキストを変更できない
- ファンアウト・レプリカに対する Oracle Application Server Single Sign-On のデプロイ
- LDAP ポートを割り当てるために Oracle Internet Directory のインストール後にファイル `portlist.ini` を参照
- パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する
- 部分レプリケーションから除外できない必須属性
- 完全に指定されていないアクセス権が「アクセス権付与」になる
- ファンアウト・インストールで Oracle Internet Directory を起動する手順

## リリース 9.0.2 からのアップグレード後に必要なグループ・コンテナに対する ACL ポリシーの設定

Oracle Internet Directory をリリース 9.0.2 からリリース 9.0.4 にアップグレードする場合、次の ACL ポリシーをレム内のグループ・コンテナに対して設定する必要があります。ACL ポリシーによって、グループ `cn=Common Group Attributes,cn=groups,Oracle_Context_DN` の各メンバーに、プライベート・グループとパブリック・グループ (つまり、`orclIsVisible` が設定されていないか、または `TRUE` または `FALSE` に設定されているグループ) に対する参照、検索および読取りのアクセス権を許可する必要があります。ACL の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 17 章の「グループ・データを管理するためのデフォルトの権限」の項を参照してください。

「共通グループ属性」グループは、OracleAS Portal でプライベート・グループおよびパブリック・グループを問い合わせるために使用します。ACIはグループ・コンテナに対して追加する必要があります。Realm DNをレルムのDNに、DN of groups container in the realmを適切なグループ検索ベースに変更します。

```
dn: DN of groups container in the realm
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to entry filter=(!(orclisvisible=false)) by group="cn=Common Group
Attributes,cn=groups, cn=Oracle Context, Realm DN" (browse)
orclaci: access to attr=(*) filter=(!(orclisvisible=false)) by group="cn=Common
Group Attributes,cn=groups,cn=Oracle Context, Realm DN" (search, read)
orclaci: access to entry filter=(orclisvisible=false) by group="cn=Common Group
Attributes,cn=groups,cn=Oracle Context, Realm DN" (browse)
orclaci: access to attr=(*) filter=(orclisvisible=false) by group="cn=Common Group
Attributes,cn=groups, cn=Oracle Context, Realm DN" (search, read)
```

## Oracle Internet Directory が重複した authpassword ベリファイアを生成する

ルート Oracle コンテキストの製品共通エントリの commonUserSearchBase 属性の値がレルム Oracle コンテキストの同じ属性の値と重複している場合、レルムのユーザーに対して重複した authpassword ベリファイアが生成されます。そのため、共通製品エントリ

(cn=common,cn=products,cn=OracleContext ) の commonUserSearchBase 属性を移入する必要はありません。

## インストール時にルート DSE 直下の DN をデフォルトの識別管理レルム DN として選択しないこと

Oracle Internet Directory のインストール時に、Oracle Installer では、デフォルトの識別管理レルムのデフォルト値を提示します。このデフォルト値またはカスタマイズした値のいずれかを選択できます。ただし、ルート直下の DN（レベル1のDN）を選択すると OracleAS Single Sign-On の構成で問題が発生します。

## 部分レプリケーションでは依存しているネーミング・コンテキストを変更できない

Oracle Internet Directory ノード内の特定のネーミング・コンテキストから、ファンアウト・レプリケーション・ノードに部分レプリケーションを構成している場合は、ソース・ノードのこれらのネーミング・コンテキスト・エントリの名前は変更しないでください。

## ファンアウト・レプリカに対する Oracle Application Server Single Sign-On のデプロイ

Oracle Internet Directory のノード内の特定のネーミング・コンテキストから、他のファンアウト・レプリケーション・ノードに部分レプリケーションを構成した後、OracleAS Single Sign-On をこれらのノードの一部またはすべてに対して個別に構成できます。レプリケーション・ノードに対して OracleAS Single Sign-On をデプロイするには、次の手順を実行します。

1. レプリカ・ノード上のデータベースのデータベース登録エントリを検出します。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h replica host -p port -D cn=orcladmin
-w super user password -b "cn=oraclecontext" -s one "objectclass=orclpdbserver" dn
```

これにより、Oracle Internet Directory に登録済のデータベースすべての DN リストが cn=short database name,cn=oraclecontext の形式で返されます。レプリカ・ノードの基礎となるデータベースに対応する DN を検索します。

2. レプリカ・ノードの ReplicaID を識別します。レプリカ・ノードの ReplicaID は、次のレプリカ・ノードのルート DSE エントリから取得します。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h replica host -p port -D cn=orcladmin
-w super user password -b "" -s base "objectclass=*" orclreplicaid
```

- レプリケーション構成の DN を変更します。次のようにファイル `repid.ldif` を作成します。

```
dn: orclreplicaid=ReplicaID from Step 2, cn=replication configuration
changetype: modify
replace: seeAlso
seeAlso: DB registration DN from Step 1
```
- 次のように、`ldapmodify` を使用して LDIF ファイル `repid.ldif` をレプリカ・ホストにアップロードします。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h replica host -p port -D cn=orcladmin
-w super user password -v -f repid.ldif
```

## LDAP ポートを割り当てるために Oracle Internet Directory のインストール後にファイル `portlist.ini` を参照

Oracle Application Server またはサード・パーティ製品のインストール時に Oracle Internet Directory または LDAP ポートを要求されます。Oracle Internet Directory のインストール時に割り当てられた特定のポート番号を見つけるには、`$ORACLE_HOME/install/portlist.ini` ファイルを参照してください。

Oracle Internet Directory のインストール時における LDAP を有効化するためのデフォルトのポートは 389 です。このため、Oracle Installer は必ず最初にこのポートを選択します。ただし、多くの UNIX マシンでは、`/etc/services` に LDAP 予約ポート 389 用の 1 行が含まれています。この行がある場合、Installer は、かわりに 3060 から 3129 の範囲のポート番号を選択します。

Oracle Internet Directory の実行時にポートを確認するには、`ldapbind` コマンドライン・ツールを実行して、`portlist.ini` ファイルに指定されたホスト名とポート番号を指定するか、または Oracle Internet Directory のインストール時に指定された代替ポートを指定します。

## パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する

Oracle Internet Directory 10g (9.0.4) では、初回ログイン後にパスワードの変更を要求できます。ユーザーは、Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「パスワードの変更」画面を使用して、パスワードを変更する必要があります。他のメカニズムを使用すると、パスワード変更要件を満たさず、次のログイン時にも同じようにパスワードの変更を要求される場合があります。

## 部分レプリケーションから除外できない必須属性

部分レプリケーションを使用すると、レプリケーションから特定の属性を除外できます。除外するには、除外対象の属性を `cn=NamingContext` エントリの `excludedAttributes` 属性に追加します。ただし、必須属性を除外すると、レプリケーションは失敗します。

除外できない属性は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』で指定されています。この中には、ユーザー定義のオブジェクト・クラス定義では必須とみなされない属性も含まれています。たとえば、`cn` が 1 つ以上のユーザー定義のオブジェクト・クラス定義のオプション属性であっても、部分レプリケーションから除外できません。

## 完全に指定されていないアクセス権が「アクセス権付与」になる

各タイプのディレクトリ・アクセスに対するアクセス制御情報を各 DIT のルート DSE に追加することにより、ディレクトリ・データへのアクセスが適切に解決されます。適切な解決とは、要求されたリソースへのアクセスを拒否するか、アクセス権限を付与するかのどちらかです。このようなトップレベルのポリシーがない場合、Oracle Internet Directory 内に格納されたリソースへのアクセスは、ACI による決定が「未解決」となります。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 14 章を参照してください。ACI による決定が「未解決」の場合、Oracle Internet Directory では、要求されたリソースへのアクセス権が付与されます。

## ファンアウト・インストールで Oracle Internet Directory を起動する手順

Oracle Application Server のファンアウト・インストール（他のオプションを指定せずに、Identity Management コンポーネントと OracleAS Metadata Repository で構成される）では、次の手順を実行して Oracle Internet Directory を起動します。

1. `oidpasswd` を実行して Wallet を作成します。
2. `opmn` が応答することを確認します。  

```
> opmnctl ping
```
3. `ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml` ファイルにある `ias-component=OID` のステータスを **disabled** から **enabled** に変更します。
4. 次のコマンドを使用して、`opmn.xml` ファイルを再ロードします。  

```
> opmnctl reload
```
5. 次のコマンドを使用して、ファンアウト・インストールの Oracle Internet Directory を起動します。  

```
> opmnctl startproc ias-component=OID fan-out installation
```

## 管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Internet Directory の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 部分レプリケーションでネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更する `ldapmoddn` を処理できない
- 特権ユーザー・アカウントのロック解除
- Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動
- Oracle Internet Directory のサーバーを起動できるのは Oracle Internet Directory ソフトウェアをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみ
- ODS データベースのユーザー・パスワードは `oidpasswd` ツールによってのみ変更可能
- Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用すると Application Server Control でポート・ステータス情報が表示されない
- `oidctl` フラグ引数が原因でレプリケーション・サーバーが起動に失敗することがある

### 部分レプリケーションでネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更する `ldapmoddn` を処理できない

部分レプリケーションでは、`ldapmoddn` を使用してネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更することはできません。

### 特権ユーザー・アカウントのロック解除

Oracle Identity Management には、2つの異なるタイプの特権ユーザーがいます。これらの特権ユーザー・アカウントは両方とも、特定のパスワード・ポリシーがアクティブ化されるとロックされます。

最初のタイプの特権ユーザーは、DN `cn=orcladmin` を持つスーパー・ユーザーで、デフォルトの識別管理レーム内の特別ユーザー・エントリとして表されます。この特権によって、ディレクトリ管理者は DIT の変更および Oracle Internet Directory のサーバー構成の変更を実行できます。スーパー・ユーザー (`orcladmin`) のアカウントがロックアウトされた場合（不正なパスワードによるバインドが何回も試行された結果）、Oracle Internet Directory のリポジトリに対する DBA 権限を持つ管理者は、`oidpasswd` ツールによってそのアカウントをロック解除できます。`orcladmin` アカウントをロック解除するには、次のコマンドを実行します。

```
oidpasswd unlock_su_acct=TRUE
```

第2タイプの特権ユーザーは、レルム固有の権限を付与されているユーザーで、レルム内のユーザーとグループの作成や削除などの機能および Oracle Delegated Administration Services に関連する機能すべてを管理します。このアカウントは、DN `cn=orcladmin, cn=users, realm DN` を持つエントリで表されます。シングル・スーパー・ユーザー・アカウントの場合と異なり、各レルムごとに独自のレルム固有の権限を付与されているユーザーがいます。レルム固有の権限を付与されているアカウントをロック解除する場合、管理者は、Oracle Directory Manager を使用してアカウントのパスワードを変更します。

## Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動

1次ノードで実行中のディレクトリ・レプリケーション・サーバー (oidrepld) または Directory Integration and Provisioning Server (odisrv) のいずれか (あるいは両方) が失敗した場合、2次ノードの Oracle Internet Directory モニターでは、これらのプロセスを5分後に2次ノードで起動します。ただし1次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは、1次ノード上で自動的に再起動しません。

通常モードでの停止は、フェイルオーバーとして扱われません。すべてのプロセスが正常に停止された場合、2次ノードで稼働中の Oracle Internet Directory モニターは、これらのプロセスを5分後に2次ノードで起動しません。さらに、障害が発生した場合と同様、1次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは1次ノード上で自動的に再起動しません。

## Oracle Internet Directory のサーバーを起動できるのは Oracle Internet Directory ソフトウェアをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみ

Oracle Internet Directory のサーバー (ディレクトリ・サーバー、ディレクトリ・レプリケーション・サーバーおよび Directory Integration and Provisioning Server のデーモン) を起動できるのは、Oracle Internet Directory ソフトウェアをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみです。

## ODS データベースのユーザー・パスワードは oidpasswd ツールによってのみ変更可能

ODS データベースのユーザー・パスワードを変更する場合は、oidpasswd ツールを使用する必要があります。他の方法で ODS データベースのユーザー・パスワードを変更すると、Oracle Internet Directory インスタンスは起動できなくなります。

## Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用すると Application Server Control でポート・ステータス情報が表示されない

1つ以上の Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用している場合、Application Server Control では、これらのサーバーのポート・ステータス情報が表示されません。

## oidctl フラグ引数が原因でレプリケーション・サーバーが起動に失敗することがある

oidctl への最後のフラグ引数が数値以外の場合、OIDMON では OIDREPLD の起動に失敗することがあります。たとえば、次のコマンドは oidctl への最後の引数として数値以外の値を持っています。

```
oidctl server=oidrepld configset=1 instance=1 connect=inst1 flags="-p 3000 -m false" start
```

回避策として、フラグの配列を変更して最後の値が数値になるようにします。以下に例を示します。

```
oidctl server=oidrepld configset=1 instance=1 connect=inst1 flags="-m false -p 3000" start
```

## ドキュメントの誤り

この項では、Oracle Internet Directory のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [init\\$ORACLE\\_SID.ora](#) のパラメータは、データベース起動時に自動的にロードされない
- [Oracle Internet Directory](#) による 1 つのサーバー・インスタンスでの SSL モードと非 SSL モードのサポート
- 属性を除外するためのコンテンツ・ルールがこのリリースではサポートされていない
- [StopOdiServer.sh](#) ツールの構文
- 自動ブートストラップ用のレプリカの構成についての追加情報
- [表 A-37 「プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ」](#) の誤り
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の補足事項
- 『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』の「Oracle Internet Directory サーバー・プラグインの開発」の章の誤り
- レプリケーションの章は『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の付録を参照すること

### init\$ORACLE\_SID.ora のパラメータは、データベース起動時に自動的にロードされない

データベースの起動時に `init$ORACLE_SID.ora` を明示的に指定しないかぎり、データベースでは起動時に、データベース初期化パラメータを `spfile$ORACLE_SID.ora` から読み込みます。したがって、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』でデータベース・パラメータの変更が指定されている場合は必ず、後続のデータベースの再起動時に `init$ORACLE_SID.ora` ファイルを明示的に指定する必要があります。

### Oracle Internet Directory による 1 つのサーバー・インスタンスでの SSL モードと非 SSL モードのサポート

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』では、同じホスト上で SSL クライアントと非 SSL クライアントの両方をサポートしようとする場合は、2 つの別々のサーバー・インスタンスを構成する必要があると記述されていますが、これは誤りです。リリース 9.0.4 では、Oracle Internet Directory によって、1 つのサーバー・インスタンスで SSL と非 SSL の両方のモードがサポートされます。

### 属性を除外するためのコンテンツ・ルールがこのリリースではサポートされていない

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』では、エントリから属性を除外するためのコンテンツ・ルールを使用できると記述されていますが、これは誤りです。この機能は、このリリースの Oracle Internet Directory ではサポートされていません。

### StopOdiServer.sh ツールの構文

付録 A 「LDIF およびコマンドライン・ツールの構文」の「StopOdiServer.sh ツールの構文」の項に示されている StopOdiServer.sh ツールのパス名に誤りがあります。

正しいパス名は次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/ldap/odi/admin/stopodiserver.sh
```

使用方法は次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/ldap/admin/stopodiserver.sh
[ -LDAPhost LDAP_server_host ]
[ -LDAPport LDAP_server_port ]
[ -binddn super_user_dn (default cn=orcladmin) ]
[ -bindpass bind_password (default=welcome) ]
-instance instance_number_to_stop
```

## 自動ブートストラップ用のレプリカの構成についての追加情報

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の自動ブートストラップ用のレプリカの構成手順の説明でいくつかの追加情報が抜けていました。25-25 ページの「タスク 3: 自動ブートストラップを行うためのレプリカの構成」の項で、更新するレプリカ・エントリのステータスの指定およびステータスが更新されるノードについての記載が抜けていました。

正しい説明は次のとおりです。

自動ブートストラップ機能を使用するには、次のように、コンシューマ・ノードのコンシューマのレプリカ・サブエントリの `orclreplicastate` 属性を 0 に設定します。

1. サンプル・ファイル `mod.ldif` を、次のように編集します。

```
Dn: orclreplicaid=<consumer replica's unique replica identifier>
cn=replication configuration
changetype:modify
add:orclreplicastate
orclreplicastate: 0
```

2. `ldapmodify` を使用して、レプリカのサブエントリの `orclreplicastate` 属性を更新します。

```
@ ldapmodify -D "cn=orcladmin" -w administrator_password -h <host of consumer
replica> -p <port> -f mod.ldif
```

## 表 A-37 「プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ」の誤り

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の表 A-37 に記載されている `event_subscription` の項目には誤りがあります。正しくは次のとおりです。

表 23-1 プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ

名前	説明	操作	必須 / オプション
<code>event_subscription</code>	DIP がこのアプリケーションに通知を送信する必要があるイベント。この文字列の書式は、「[USER]GROUP:[対象のドメイン>];[DELETE]ADD][MODIFY(<カンマで区切られた属性名のリスト>)]」です。異なる値を持つパラメータを複数回リストに含めると、複数の値を指定できます。デフォルト設定はありません。	作成 / 修正	アウトバウンド・イベントの場合のみ必須

## 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の補足事項

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』には、次の有用な情報が記載されていませんでした。

- 25-22 ページの「LDAP ベースのレプリカのインストール」の項に、「構成オプションの選択」画面ですべての選択を解除するという手順がありますが、その理由が示されていませんでした。この手順を実行する理由は、その他のコンポーネントを配置する前にレプリケーションをインストールして構成する必要があるからです。
- 同じセクションで、Wallet を作成するコマンドラインの後に、なぜ Wallet が必要なのかについての説明がありませんでした。理由は、Wallet にはブートストラップの目的で Oracle Internet Directory に接続する際に使用するレプリケーション・サーバー ID が含まれているからです。

## 『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』の「Oracle Internet Directory サーバー・プラグインの開発」の章の誤り

表 5-2 「操作ベースと属性ベースのプラグイン・プロシージャのシグネチャ」で、IN パラメータ列に示されている、いくつかの呼び出しコンテキストに対する値に誤りがあります。次のように変更してください。

- 「ldapadd 前」に対する IN パラメータ列の値は Ldapcontext、DN、Entry としてください。
- 「ldapadd 時」の値は Ldapcontext、DN、Entry としてください。
- 「ldapadd 時（ただし、デフォルト・サーバーの動作を置換）」の値は Ldapcontext、DN、Entry としてください。
- 「ldapadd 後」の値は Ldapcontext、Add result、DN、Entry としてください。

「plugin」というインスタンスはすべて「plug-in」に変更してください。

## レプリケーションの章は『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の付録を参照すること

LDAP ベースのレプリケーションを構成するユーザーは、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の 25 章で説明するように、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「Infrastructure サービスの変更における補助手順」も参照してください。

---

## Oracle Delegated Administration Services

この章では、Oracle Delegated Administration Services (DAS) および Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Delegated Administration Services に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する
- リリース 9.0.2 および 9.0.4 で Oracle Delegated Administration Services の構成権限でレルムの値を編集できない
- メンバーが指定されていないロールが「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」の「ロールの割り当て」セクションに表示されない
- グループ所有者が同じセッションで作成されたグループを編集できない
- Oracle Internet Directory を再起動すると DAS セッション・エラーが返される

### パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する

Oracle Internet Directory 10g (9.0.4) では、初回ログイン後にパスワードの変更を要求できます。ユーザーは、Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「パスワードの変更」画面を使用して、パスワードを変更する必要があります。他のメカニズムを使用すると、パスワード変更要件を満たさず、次のログイン時にも同じようにパスワードの変更を要求される場合があります。

### リリース 9.0.2 および 9.0.4 で Oracle Delegated Administration Services の構成権限でレルムの値を編集できない

リリース 9.0.2 および 9.0.4 のアップグレードでは、レルムの値を編集できるのは orcladmin ユーザーのみです。他のユーザーは、Oracle Delegated Administration Services の構成権限を付与されていても、この値を編集できません。これは、他のユーザーにはユーザー検索ベース、ユーザー作成ベース、グループ検索ベースおよびグループ作成ベースを読み込むための十分な権限がないためです。回避策は、これらのコンテナに対する ACL を変更し、匿名参照アクセスを有効化することです。

### メンバーが指定されていないロールが「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」の「ロールの割り当て」セクションに表示されない

回避策: ロールには 1 つ以上の一意のメンバーを含める必要があります。これによって、ロールは「ユーザーの作成」ページと「ユーザーの編集」ページの「ロールの割り当て」セクションに表示されるようになります。

ロールに一意のメンバーを追加する場合、LDIF ファイルの構文は次のようになります。

```
dn: DN_of_role_entry
changetype: modify
add: uniquemember
uniquemember:DN of member entry
```

ファイルを変更するには、次のコマンドを発行します。

```
ldapmodify -p oid_port -h oid_host -D "cn=orcladmin" -w admin_password -v -f file_name.ldif
```

### グループ所有者が同じセッションで作成されたグループを編集できない

グループの作成後、グループの所有者は同じセッションでグループを編集できません。回避策: ログアウトしてブラウザを閉じて、再度ログインします。

## Oracle Internet Directory を再起動すると DAS セッション・エラーが返される

Oracle Internet Directory を再起動した場合、すでにログインしている DAS セッションがエラーを返すか、すべての検索に対してエントリを返さなくなります。

この問題を回避するには、次のいずれかの手順を実行します。

- DAS セッションからログアウトし、Oracle Internet Directory が正常に再起動したら再びログインします。
- Oracle Internet Directory が再起動したら、DAS を再起動します。

## 構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Delegated Administration Services の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 個別のホストへの Oracle Delegated Administration Services のデプロイ
- デフォルトのレルム管理者に必要な構成権限がない
- Oracle Delegated Administration Services を構成して 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードされた Oracle Internet Directory のインストールに対して実行

### 個別のホストへの Oracle Delegated Administration Services のデプロイ

個別の Oracle ホームに Oracle Delegated Administration Services を構成する場合は、スタンドアロン・インストールを実行します。このインストールを実行するには、Identity Management のインストール・タイプを選択し、「構成オプション」画面で「Delegated Administration Service」を選択します。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

### デフォルトのレルム管理者に必要な構成権限がない

Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールにログインする場合、デフォルトのレルム管理者にはユーザーの作成または DAS 構成の変更に必要な権限がありません。回避策は次のとおりです。

1. Oracle Directory Manager で、レルムの `cn=userpassword, cn=attributes, cn=User Configuration, cn=Attribute Configuration, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext, DN` にナビゲートします。
2. 前述のエントリを選択し、`orclDasViewable` の値を 0 に変更します。
3. 「適用」を選択します。
4. Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを再起動します。

### Oracle Delegated Administration Services を構成して 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードされた Oracle Internet Directory のインストールに対して実行

リリース 9.2 からリリース 9.0.4 にアップグレードした Oracle Internet Directory のインストールに対して Oracle Delegated Administration Services 10g (9.0.4) を実行するには、次の手順を実行します。

匿名参照アクセスを許可するには、コンテナ `cn=users, realm DN` および `cn=groups, realm DN` に対する ACL を変更します。

## 管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Delegated Administration Services の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「Unified Messaging Voicemail PIN」フィールドのラベルの誤り](#)
- [特権ユーザー・アカウントのロック解除](#)
- [1 つの DNS ドメインで Oracle Delegated Administration Services を、別の DNS ドメインで OracleAS Portal を実行](#)

### Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「Unified Messaging Voicemail PIN」フィールドのラベルの誤り

Oracle Collaboration Suite のユーザーがセルフ・サービス・コンソールを使用して、自分のパスワードを変更する場合、ユーザーのボイスメール PIN 番号に関連付けられたフィールド名が「EmailServerContainer」と誤って表示されます。この問題を解決するには、次の方法を使用します。

1. Oracle Directory Manager を使用して、DN (cn=orclpwdverifierconfig, cn=EMailServerContainer, cn=Products, cn=OracleContext, cn=subscriber realm) のエントリにナビゲートします。
2. このエントリを選択します。
3. 「プロパティの表示」で「すべて」を選択します。
4. 表示名のテキスト・ボックスに「Voicemail PIN」と入力します。
5. 「適用」を選択します。

### 特権ユーザー・アカウントのロック解除

Oracle Identity Management には、2 つの異なるタイプの特権ユーザーがいます。これらの特権ユーザー・アカウントは両方とも、特定のパスワード・ポリシーがアクティブ化されるとロックされます。

最初のタイプの特権ユーザーは、DN cn=orcladmin を持つスーパー・ユーザーで、デフォルトの識別管理レلم内の特権ユーザー・エントリとして表されます。この特権によって、ディレクトリ管理者は DIT の変更および Oracle Internet Directory のサーバー構成の変更を実行できます。スーパー・ユーザー (orcladmin) のアカウントがロックアウトされた場合 (不正なパスワードによるバインドが何回も試行された結果)、Oracle Internet Directory のリポジトリに対する DBA 権限を持つ管理者は、oidpasswd ツールによってそのアカウントをロック解除できます。orcladmin アカウントをロック解除するには、次のコマンドを実行します。

```
oidpasswd unlock_su_acct=TRUE
```

第 2 タイプの特権ユーザーは、レلم固有の権限を付与されているユーザーで、レلم内のユーザーとグループの作成や削除などの機能および Oracle Delegated Administration Services に関連する機能すべてを管理します。このアカウントは、DN cn=orcladmin, cn=users, realm DN を持つエントリで表されます。シングル・スーパー・ユーザー・アカウントの場合と異なり、各レلمごとに独自のレلم固有の権限を付与されているユーザーがいます。レلم固有の権限を付与されているアカウントをロック解除する場合、管理者は、Oracle Directory Manager を使用してアカウントのパスワードを変更します。

### 1 つの DNS ドメインで Oracle Delegated Administration Services を、別の DNS ドメインで OracleAS Portal を実行

1 つのドメインで Oracle Delegated Administration Services を実行し、別のドメインで OracleAS Portal を実行する場合は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の「OracleAS Portal と Oracle Internet Directory の関係」の項に記載されている説明に従ってください。

## ドキュメントの誤り

この項では、Oracle Delegated Administration Services のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [オンライン・ヘルプに誤って記載されている識別管理レルの編集方法](#)
- [「ロールの構成」画面のオンライン・ヘルプが表示されない](#)

### オンライン・ヘルプに誤って記載されている識別管理レルの編集方法

Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールのオンライン・ヘルプには、検索された特定レルムを変更するには、検索結果ページからレルムを選択して「**続行**」を選択するように説明されていますが、これは誤りです。検索結果ページを使用すると、選択したレルムを表示できますが、変更はできません。レルム構成を変更するには、「**構成**」タブを選択して変更を入力した後、「**実行**」を選択します。レルムの構成設定を表示し、変更する手順は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 31 章「Oracle Internet Directory セルフサービス・コンソール」を参照してください。

### 「ロールの構成」画面のオンライン・ヘルプが表示されない

Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「ロールの構成」ページ（「ユーザー・エントリの構成」タスクのステップ 5）には、ページの上部和下部にヘルプ・アイコンがあります。このアイコンをクリックすると「要求されたトピックを見つけることができませんでした」というエラー・メッセージが表示されます。



---

## Oracle Directory Integration and Provisioning

この章では、Oracle Directory Integration and Provisioning に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策

## 構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Directory Integration and Provisioning の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- **Directory Integration and Provisioning Assistant** を使用する前にプロパティ・ファイルにエンコードを指定
- **Oracle Directory Manager** による **Directory Integration** プロファイルの作成時に **ACI** が正しく設定されない
- デフォルトの識別管理レームの位置をサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインにあわせる
- **Directory Integration and Provisioning Server** のインストール後のステータス
- 2つの **Oracle Internet Directory** プラグイン機能が、**Oracle Internet Directory** リリース 9.2 からアップグレードした後サポートされない

### Directory Integration and Provisioning Assistant を使用する前にプロパティ・ファイルにエンコードを指定

次のようなファイルの場合には、LDIF で使用するエンコードを指定する必要があります。

- サード・パーティ・ディレクトリのユーティリティを使用して生成されたファイル。
- NLS データを含むファイル。
- 異なるプラットフォームで処理されるファイル。

これは、**Directory Integration and Provisioning Assistant** では、ファイルは生成されたシステム上で処理されるものとデフォルトで想定しているためです。

エンコードは、ブートストラップの実行に使用する構成プロパティ・ファイルの `odip.bootstrap.srcenc` プロパティを使用して指定します。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 32 章の「Directory Integration and Provisioning Assistant」を参照してください。

### Oracle Directory Manager による Directory Integration プロファイルの作成時に ACI が正しく設定されない

Oracle Directory Manager の類似項目の作成機能を使用してプロファイルを作成する場合、ACI が適切にコピーされません。回避策は次のとおりです。

1. LDIF ファイル `profileacl.ldif` を次のように作成します。

```
dn: orclODIPAgentName=<Profile Name>,cn=subscriber profile,cn=changelog subscriber,
cn=oracle internet directory
changetype: modify
replace: orclaci
orclaci: access to attr = (*) by group="cn=odisgroup,cn=odi,cn=oracle internet directory"
(read,write,search,compare)
orclaci: access to entry by group="cn=odisgroup,cn=odi,cn=oracle internet directory"
(browse,proxy)
```

このファイルを次のようにアップロードします。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h OID host -p OID port -D OID superuser -w OID superuser
password -v -f profileacl.ldif
```

## デフォルトの識別管理レルムの位置をサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインにあわせる

Oracle Identity Management インフラストラクチャを後でサード・パーティ・ディレクトリと同期化する目的でインストールする場合は、デフォルトの識別管理レルムの位置をサード・パーティ・ドメインにあわせませす。たとえば、使用しているサード・パーティ・ドメインが `sales.acme.com` の場合は、Oracle の識別管理レルムのルートを `dc=sales,dc=acme,dc=com` に配置します。

インフラストラクチャがすでにインストール済で、指定したレルムがサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインと一致していない場合は、そのレルムをすでに使用しているかどうかに応じて、次の2つのオプションがあります。

- このインフラストラクチャに対してその他の中間層をインストールしていない場合は、インフラストラクチャを再インストールして正しいデフォルトのレルムの位置を選択します。ユーザー・オブジェクトとグループ・オブジェクトが DIT に正しく格納されていることを確認する場合は、<http://otn.oracle.co.jp> にある「Customizing Identity Management Realms Based on Deployment Requirements」を参照してください。
- 位置をあわせないでレルムをすでに使用している場合は、<http://otn.oracle.co.jp> にある「Customizing Identity Management Realms Based on Deployment Requirements」の指示に従ってください。

**関連項目：** Oracle Internet Directory とサード・パーティ・ディレクトリの統合に関する詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の VII 部を参照してください。

## Directory Integration and Provisioning Server のインストール後のステータス

Oracle Internet Directory がインフラストラクチャとともにインストールされた後にのみ、OID Configuration Assistant は Directory Integration and Provisioning Server を起動します。Oracle Directory Integration and Provisioning のスタンドアロン・インストールでは、OID Configuration Assistant はサーバーを登録するのみで、起動はしません。

これは、Directory Integration and Provisioning Server の2つのインスタンスに同じインスタンス番号または同じ構成設定番号を付けることができないという制限があるためです。

Directory Integration and Provisioning Server の最初のインスタンスは、常にインスタンス番号1と構成設定番号0を使用して起動されます。その後、このサーバーの別のインスタンスが別のインストールで起動された場合は、同じようにインスタンス番号1と構成設定番号0が使用されます。その結果、このインスタンス番号と構成設定番号がすでに使用されているため、2番目のインスタンスはエラーになります。

ただし、Directory Integration and Provisioning Server は登録されているため、インスタンスを手動で起動することはできます。手動で起動するには、スクリプト `$ORACLE_HOME/bin/odisrv` を使用します。スクリプトを実行する際、起動するサーバー・インスタンスに、現在実行中の他のインスタンスと同じインスタンス番号または構成設定番号が指定されていないことを確認してください。

## 2つの Oracle Internet Directory プラグイン機能が、Oracle Internet Directory リリース 9.2 からアップグレードした後サポートされない

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、次のプラグイン機能が Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでサポートされていません。

- Windows NT ドメインの外部認証プラグイン。
- プラグイン定義の一部としてディレクトリ・サーバーに接続するための、OID PL/SQL PLUGIN API として提供される LDAP\_PLUGIN パッケージの `simple_bind_s()` ファンクション。

## 管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Directory Integration and Provisioning の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Real Application Cluster](#) またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび [Directory Integration and Provisioning Server](#) インスタンスの再起動
- [Real Application Clusters](#) および [Directory Integration and Provisioning Service](#) の使用
- Windows 同期化レلمで必要なユーザー・スキーマ
- 選択したオブジェクト・タイプの Active Directory から Oracle Internet Directory への同期化
- Oracle Internet Directory から Active Directory へのパスワードの同期化
- 特殊文字を含むグループ名を Microsoft Active Directory と同期化できない

### Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動

1 次ノードで実行中のディレクトリ・レプリケーション・サーバー (oidrepld) または Directory Integration and Provisioning Server (odisrv) のいずれか (あるいは両方) が失敗した場合、2 次ノードの OID モニターでは、これらのプロセスを 5 分後に 2 次ノードで起動します。ただし 1 次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは、1 次ノード上で自動的に再起動しません。

通常モードでの停止は、フェイルオーバーとして扱われません。すべてのプロセスが正常に停止された場合、2 次ノードで稼働中の OID モニターは、これらのプロセスを 5 分後に 2 次ノードで起動しません。さらに、障害が発生した場合と同様、1 次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは 1 次ノード上で自動的に再起動しません。

### Real Application Clusters および Directory Integration and Provisioning Service の使用

次の使用例を考えてみます。

- Oracle Internet Directory が Real Application Clusters (RAC) モードで構成されています。
- Directory Integration and Provisioning Server が別のノードで Oracle Directory Integration and Provisioning 専用インストールの一部として実行中です。
- Directory Integration and Provisioning Server を実行している対象の Oracle Internet Directory ノードに障害が発生します。

この使用例では、Directory Integration and Provisioning Server は、他の RAC 対応の Oracle Internet Directory ノードの 1 つに実行を透過的に切り替えることができません。その結果、Directory Integration and Provisioning Server も中断するため、`$ORACLE_HOME/bin/odisrv` スクリプトを使用して手動で起動する必要があります。

### Windows 同期化レلمで必要なユーザー・スキーマ

Microsoft Windows 接続のデプロイでは、識別管理レلم内のユーザーは、ローカルで (つまり、Oracle Internet Directory に対して) 認証される必要があります。これに対し、その他のレلمのユーザーは、Microsoft Active Directory によって認証される必要があります。外部認証プラグインは、識別管理レلمに対してのみ構成される必要があります。つまり、このレلمのユーザーは Microsoft Active Directory に対して認証されます。

このような識別管理レلم内のすべてのユーザーには、オブジェクト・クラス `orclADUser` で定義した属性を含める必要があります。このオブジェクト・クラスには Windows の認証に対して必要な属性が含まれています。Microsoft Active Directory で作成され、Oracle Internet Directory に同期化されたすべてのユーザーには、デフォルトでこれらの属性が設定されています。これは、Microsoft Active Directory では、デフォルトでこれらの属性が作成されるためです。一方、Oracle Internet Directory で作成され、Microsoft Active Directory に同期化されたこのような識別管理レلم内のユーザーは、適切に構成されていないかぎり、デフォルトで正しいスキーマを継承しません。

正しいスキーマの継承は、次の複数の方法で達成できます。

デフォルトでは、レルム内のどの事前シード済ユーザーにも `orclSAMAccountName` 属性は移入されません。したがって、この属性をレルムの下 `orcladmin` に移入する必要があります。

## 選択したオブジェクト・タイプの Active Directory から Oracle Internet Directory への同期化

ユーザー・エントリーを Microsoft Active Directory から Oracle Internet Directory に同期化するとき、特定のオブジェクト・タイプのみを同期化する必要がある場合は、接続されたディレクトリの検索フィルタを適切に移入してください。たとえば、ユーザーおよびグループ情報に対する変更を同期化し、コンピュータ情報に対する変更は同期化しない場合は、この属性の値を次のように設定する必要があります。

```
SEARCHFILTER=(|(objectclass=group) (&(objectclass=user) (!(objectclass=computer))))
```

この属性を更新するには、Oracle Directory Manager または Directory Integration and Provisioning Assistant を使用します。

## Oracle Internet Directory から Active Directory へのパスワードの同期化

Oracle ディレクトリ・サーバーを使用すると、SSL モードおよび非 SSL モードの両方でパスワードを変更できますが、Microsoft Active Directory では SSL モードでのみパスワードを変更できます。したがって、Oracle Internet Directory から Microsoft Active Directory へのパスワードの同期化を実行できるのは次の場合のみです。

- Oracle ディレクトリ・サーバーがサーバー認証 SSL モードで実行中の場合。
- Directory Integration and Provisioning Server が同じモードで Microsoft Active Directory に接続されている場合。

**関連項目：**『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 43 章  
「Microsoft Windows 環境との統合」

## 特殊文字を含むグループ名を Microsoft Active Directory と同期化できない

Active Directory の `samaccountname` 属性には特殊文字を使用できません。その結果、Oracle Internet Directory が Active Directory のグループ名の真のソースであり、グループ名 (`cn` 属性にある) に特殊文字が含まれている場合、エクスポートによる同期化は失敗します。これは、Oracle Internet Directory `cn` 属性が Microsoft Active Directory の `samaccountname` 属性にマップされるためです。ユーザー・エントリーの場合は、次のような回避策があります。マッピング構成ファイルで、特殊文字を含まない他の属性を Microsoft Active Directory の `samaccountname` 属性にマップします。

ただし、グループの場合、`orclGroup` オブジェクト・クラスには、`cn` 以外に `samaccountname` にマップできる必須属性はありません。このため、Microsoft Active Directory にエクスポートする場合は、Oracle Internet Directory のグループ名に特殊文字を使用することはできません。



---

## Oracle Application Server Certificate Authority

この章では、Oracle Application Server Certificate Authority (OracleAS Certificate Authority、OCA) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [構成に関する問題と回避策](#)

## 構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Certificate Authority の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [OCA Web Administrative 証明書を DC 値で登録しない](#)
- [Netscape ブラウザを使用する場合のエラー・メッセージ](#)

### OCA Web Administrative 証明書を DC 値で登録しない

zh、zh\_CN.GBK、zh\_TW.BIG5、および ko Solaris ロケールでは、OCA Web Administrative 証明書を DC 値で登録してはなりません。DC 値で Web Administrative 証明書を登録するには、OCA Administrative の Web ページで「**Advanced DN**」をクリックし、有効な DC 値で DN を入力します。たとえば、cn=sgtcnsun03WCN, ou=SGT, o=Oracle, c=CN, dc=oracle のようになります。

### Netscape ブラウザを使用する場合のエラー・メッセージ

OCA とともに Netscape 4.7x ブラウザを使用すると、場合によって次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

「セキュリティ・ライブラリで、不適切なフォーマットの DER エンコード・メッセージが検出されました」

このメッセージは、OCA 証明書が発行されたときに、印刷できない文字またはその他の特殊文字が証明書の DN に含まれていて、発行側では Netscape で処理できない特殊な文字を使用したことを示します。

この問題を回避するには、使用できる印刷可能文字のみを DN に使用するサーバー証明書を再発行します。OCA 証明書 DN に使用できる文字は、次のとおりです。

- 小文字および大文字の英字（スペース文字を含む）
- 0～9の数字
- + ' , - . / : = ? の文字（アンダースコアは含まない）

---

---

## Oracle Enterprise Manager

この章では、Oracle Enterprise Manager に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

## 一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Enterprise Manager Application Server Control に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 同一ホスト上での複数のアプリケーション・サーバーの管理時に複数のブラウザ・ウィンドウを使用
- OC4J メトリックを収集するための Oracle HTTP Server の実行
- 仮想ホストに IP とポートの複数の組合せは入力できない
- OracleAS Web Cache 管理ポート用プロトコルと統計ポート用プロトコルの一致
- JAZN 構成時にサポートされないパス情報
- OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー
- OC4J の「セキュリティ」ページでユーザーを追加した後は OC4J の再起動が必要
- ブラウザ・ウィンドウに表示される「SMISession has been invalidated」エラー
- 管理プロセスの実行前に定義する必要がある NLS\_LANG および LC\_ALL (オペレーティング・システムのデフォルト・ロケール)
- 新規作成した仮想ホストのアクセス・ログがログ・ビューアで使用できない
- ログ・ビューアでの XML ログ・ファイルの表示に関する問題
- Oracle Application Server 9.0.2 または 9.0.3 の削除後に発生する Oracle Application Server 10g Application Server Control に関する問題
- Application Server Control のパフォーマンス・ノート
- Linux および HP-UX でのヒープ使用量メトリックの誤り
- Oracle HTTP Server リスナー・ポートが重複してリストされる
- プロパティを Oracle Application Server クラスタ内の OC4J インスタンスに適用した際の誤解を招くおそれのあるエラー・メッセージ
- アプリケーション・サーバー・インスタンスの Metadata Repository を変更した際の不明な Oracle ホーム・エラー
- コマンドラインから実行した管理タスクが Application Server Control のページに反映されない
- Internet Explorer 5.5 を SSL モードで使用した場合の問題
- OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow コンポーネント用のスキーマ・パスワードの変更はサポートされない
- Infrastructure のインストールで Home インスタンスはデフォルトで使用不可
- スタンドアロン・バージョンの OracleAS Forms Services および OracleAS Reports Services の「Infrastructure」ページの使用
- HTTP Server の拡張プロパティを Netscape Navigator で編集するときのエラーと制限
- Enterprise Manager を使用して WAR アプリケーションを再デプロイする際の回避策
- 「Web Cache 管理」ページへのリンク時にページが表示されないエラー
- Oracle Application Server 10g (9.0.4) を使用するコンピュータでの Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent の削除
- Application Server Control において OracleAS Web Cache を管理および機能監視するための Cookie の有効化
- Macintosh ブラウザを使用してパフォーマンス・チャートを表示する際および Identity Management を構成する際の問題
- Macintosh ブラウザを使用する際の進捗ページの問題
- ログ・ページからのデータのポスト

## 同一ホスト上での複数のアプリケーション・サーバーの管理時に複数のブラウザ・ウィンドウを使用

Application Server Control 内で構成を変更する場合、ブラウザではユーザーが編集集中のセッションの状態を追跡します。たとえば、ユーザーが「終了」または「適用」をクリックするまで、画面上の構成ウィザード内でユーザーが行った変更およびユーザー位置を追跡します。

1つのホスト上に複数の Application Server インスタンスをインストールしている場合に、そのホスト上で OC4J インスタンスを管理するために2つ以上のブラウザ・ウィンドウを開くと、ブラウザの状態に問題が発生する場合があります。構成の変更中にウィンドウ間を切り替えると、予測不可能な動作が起きる場合があります。たとえば、セッションが異常終了したというメッセージがブラウザに表示されることがあります。

この問題を回避するためには、新しいブラウザのインスタンスをデスクトップから起動し、元のブラウザ・セッションから開いたすべての新規ウィンドウを閉じます。

Netscape 7 を使用している場合は、追加のブラウザ・ウィンドウ用に新規の Netscape プロファイルを作成する必要があります。

## OC4J メトリックを収集するための Oracle HTTP Server の実行

アプリケーション・サーバーで OC4J インスタンスのパフォーマンス・メトリックを収集するには、アプリケーション・サーバー・インスタンスの Oracle HTTP Server を起動して実行している必要があります。Oracle HTTP Server のコンポーネントが停止すると、OC4J メトリックは収集されなくなり、Application Server Control で使用できなくなります。

## 仮想ホストに IP とポートの複数の組合せは入力できない

Application Server Control では、Oracle HTTP Server の httpd.conf 構成ファイルの仮想ホスト・ディレクティブに複数の IP アドレスの組合せを入力する機能はサポートしていません。

つまり、Application Server Control を使用して Oracle HTTP Server インスタンスを管理する場合、httpd.conf ファイルに次の組合せ以外は入力しないでください。

```
<VirtualHost 1.2.3.4:5678 >
...
</VirtualHost>
```

## OracleAS Web Cache 管理ポート用プロトコルと統計ポート用プロトコルの一致

Oracle Application Server Web Cache には、2つのポートが用意されています。1つは管理ポートで、Web Cache Manager にアクセスするために使用します。もう1つのポートは、Web Cache のパフォーマンス統計を収集するために使用します。

Oracle Application Server Web Cache のプロトコルを変更する場合は、管理ポート用と統計ポート用に同じプロトコルを使用する必要があります。2つのポート用のプロトコルが一致しない場合、Application Server Control はパフォーマンス・メトリックを収集できず、Web Cache ターゲットのホーム・ページで Web Cache Manager へのリンクが正常に機能しません。

## JAZN 構成時にサポートされないパス情報

OC4J のセキュリティでは、ユーザー・マネージャを使用して、J2EE アプリケーションにアクセスするユーザーとグループを認証および認可します。アプリケーションのユーザーとグループの指定に使用できるユーザー・マネージャの1つに、JAZN ユーザー・マネージャがあります。

Enterprise Manager Application Server Control を使用すると、JAZN ユーザー・マネージャをアプリケーションに関連付けるように指定できます。Enterprise Manager の「アプリケーションのデプロイ：ユーザー・マネージャ」ページを使用すると、アプリケーションで JAZN XML 構成または JAZN LDAP 構成のいずれかを使用するように指定できます。

Enterprise Manager を使用して XML ベースの JAZN 構成を指定する場合は、次の行を orion-application.xml ファイルに入力します。

```
<jazn provider="XML" location="./jazn-data.xml" />
```

Enterprise Manager を使用して LDAP ベースの JAZN 構成を指定する場合は、次の行を orion-application.xml ファイルに入力します。

```
<jazn provider="LDAP" default-realm="sample_subrealm" />
```

一部のアプリケーションでは、jazn.xml ファイルへのパスを入力して JAZN 構成を指定しますが、Enterprise Manager ではこのタイプの JAZN 構成をサポートしていません。このタイプの JAZN 構成は、orion-application.xml ファイルでは、次のように指定します。

```
<jazn config="jazn.xml"/>
```

このタイプの JAZN 構成を orion-application.xml ファイルに手動で指定した場合は、「Enterprise Manager OC4J Security」ページを使用できなくなります。あるいは、このページを正常に使用できたように見えても、後で問題が発生する場合があります。

ユーザー・マネージャを使用して J2EE アプリケーションのユーザーとグループを指定する方法については、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー

Application Server Control を使用して OC4J アプリケーションのデプロイを試行すると、次のエラーが表示されることがあります。

```
Deployment failed: Nested exception
Root Cause: Lookup error: javax.naming.NoPermissionException: Not allowed to
look up java:comp/ServerAdministrator, check the namespace-access tag setting
in orion-application.xml for details;
```

このエラーは、デフォルトの OC4J アプリケーションのユーザー・マネージャに、ユーザー admin およびグループ administrators が含まれていない場合に表示されます。

デフォルト・アプリケーションのユーザー・マネージャのユーザーとグループを表示または定義する手順は、次のとおりです。

1. アプリケーションのデプロイに使用した OC4J インスタンスの OC4J ホーム・ページにナビゲートします。
2. 「アプリケーション」をクリックすると、選択した OC4J インスタンスにデプロイされたアプリケーションのリストが表示されます。
3. 「アプリケーション」ページの上部に表示される「デフォルト・アプリケーション名」をクリックします。

Enterprise Manager に、デフォルト・アプリケーションの OC4J アプリケーション・ホーム・ページが表示されます。

4. ページを下にスクロールして、「セキュリティ」をクリックします。

Enterprise Manager の「セキュリティ」ページにグループとユーザーのリストが表示されます。

## OC4J の「セキュリティ」ページでユーザーを追加した後は OC4J の再起動が必要

OC4J の「セキュリティ」ページで変更を行った後、その変更を有効にするには OC4J インスタンスを再起動する必要があります。たとえば、「OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー」で説明するように、admin ユーザーおよび administrators グループを追加する場合は、手順の最後に OC4J インスタンスを再起動する必要があります。

## ブラウザ・ウィンドウに表示される「SMISession has been invalidated」エラー

ブラウザ・ウィンドウに次のエラー・メッセージが表示される場合があります。

The SMISession has been invalidated. Resolution: Please close the current SMISession, start another one and reapply the actions

この問題を解決するには、タイムスタンプの右にある「データを更新」アイコンをクリックするか、ブラウザを閉じて再び開き、新規セッションを起動します。このエラーは、複数のユーザーが1つの Enterprise Manager Application Server Control 上で競合する構成アクションを同時に実行すると発生します。

## 管理プロセスの実行前に定義する必要がある NLS\_LANG および LC\_ALL (オペレーティング・システムのデフォルト・ロケール)

英語以外の環境では、コマンドライン・ツール (opmnctl または emctl など) を起動してプロセス開始する場合は、オペレーティング・システムのデフォルトのロケールと NLS\_LANG 設定が適切に構成されていることを確認してください。

### オペレーティング・システム・ロケールの確認

デフォルトのロケールが適切に設定されていることを確認するには、環境変数 LC\_ALL または LANG が適切な値で設定されていることを確認します。現在の設定をチェックするには、次のコマンドを実行します。

```
$PROMPT> locale
```

各オペレーティング・システム固有の値は、プラットフォーム固有のドキュメントを参照してください。

### NLS\_LANG 設定の確認

NLS\_LANG 設定を確認する手順は、次のとおりです。

1. 環境変数 NLS\_LANG が、OS のデフォルトのロケール設定と互換性のある適切な値で設定されていることを確認します。言語固有の値は、使用している Oracle 製品のグローバル化・サポート・ガイドを参照してください。
2. NLS\_LANG 設定が次のファイルに存在するかどうかを確認します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml
```

3. opmn.xml が存在する場合は、opmn.xml ファイルの NLS\_LANG 設定が環境変数 NLS\_LANG と同一であることを確認します。
4. たとえば、次の内容が opmn.xml ファイルに表示されます。

```
<environment>
  <variable id="TMP" value="/tmp"/>
  <variable id="NLS_LANG" value="JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS"/>
</environment>
```

## 新規作成した仮想ホストのアクセス・ログがログ・ビューアで使用できない

HTTP Server のログの名前、位置または作成に影響する操作を実行したとき (たとえば、HTTP Server の新規の仮想ホストを作成したとき)、ログ・ファイル・ビューアにその更新内容が反映されない場合があります。たとえば、新規作成した仮想ホストのログ・ファイルがログ・ビューアに表示されない場合があります。

この問題は、ログ・ファイル・ビューアが HTTP Server のログ・ファイルに関する情報をキャッシュしているために発生します。この問題を解決して現行のログ・ファイルを検出するには、「ログの表示」ページの「更新」アイコンを押してください。

## ログ・ビューアでの XML ログ・ファイルの表示に関する問題

Internet Explorer のバージョン、およびアプリケーション・サーバーが実行されているサーバー・プラットフォームによっては、XML フォーマットで格納されているログ・ファイルを表示できない場合があります。

たとえば、「ログ・ファイル」ページでログ・ファイルの名前をクリックしたとき、Application Server Control によってエラーが表示され、ログ・ファイルの内容が表示されない場合があります。

この問題を解決するには、別のブラウザ、または別のバージョンのブラウザを使用して XML ログ・ファイルを表示してください。

## Oracle Application Server 9.0.2 または 9.0.3 の削除後に発生する Oracle Application Server 10g Application Server Control に関する問題

特定の状況では、自動プロシージャを実行して Application Server 9.0.2 または 9.0.3 を削除すると、Application Server 10g ディレクトリ内のいくつかの構成ファイルが誤った情報で上書きされます。

Application Server 10g の Enterprise Manager 制御スクリプトが変更されると、その構成ファイルのバックアップが必要に応じて作成されます。このため、変更されたファイルをそのバックアップに置換することによって、この問題を解決できます。

該当する構成ファイルは次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/sysman/config/iasadmin.properties  
$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml  
$ORACLE_HOME/sysman/j2ee/config/jazn-data.xml  
$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config/consoleConfig.xml
```

それぞれの構成ファイルについて、複数のバックアップ・ファイルが存在する場合があります。バックアップには <original-file-name>.n (n は数字の 1 ~ 10) の書式で名前が付けられます。

最新のバックアップ・ファイルが 1、その直前のバックアップが 2 のように数字が付けられます。タイムスタンプをチェックするか、またはバックアップ・ファイルを調べて、最新の正しいバージョンのデータを判別する必要があります。ほとんどの場合、Application Server 9.0.2 または 9.0.3 を削除する前の最新のバックアップ・バージョンがこれに該当します。

構成ファイルをリストアする手順は、次のとおりです。

1. UNIX の場合は emctl コマンド、Windows の場合は「サービス」コントロール・パネルを使用して、Application Server Control を停止します。
2. 前述の構成ファイルを削除するか、または名前を変更します。
3. 正しいバージョンと判断したバックアップ・ファイルをコピーします。
4. Application Server Control を起動します。

## Application Server Control のパフォーマンス・ノート

次のパフォーマンス・ノートを使用すると、特定の使用状況で Oracle Enterprise Manager Application Server Control のパフォーマンス全体を改善できます。

### Internet Explorer および Netscape Navigator 7.0 でのデプロイ・パフォーマンス

Microsoft Internet Explorer または Netscape 7.0 を使用して OC4J アプリケーションをデプロイしようとすると、ファイルのアップロードにかなり長い時間（たとえば、45MB の .ear ファイルの場合で 10 分。Netscape 7.1 の場合は 15 秒）かかることがあります。これは、OC4J デプロイメント・ウィザードのパフォーマンスに直接影響を与えます。

Netscape Navigator を使用している場合は、Netscape 7.1 にアップグレードしてください。

Internet Explorer を使用している場合は、この問題に対応している次の Microsoft Knowledge Base Article を参照してください。

<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;329781>

## 大規模な OC4J アプリケーションのデプロイの問題

大規模なアプリケーション（50MB を超える EAR または WAR ファイル）をデプロイする場合は、DCM デーモンのデフォルト構成では不十分です。このような大規模アプリケーションをデプロイしようとすると、メモリー不足エラーになります。

この問題を解決するためには、Application Server Control を使用して、次の手順で DCM デーモンの java ヒープを増やします。

1. Application Server Control の Application Server ホーム・ページにナビゲートします。
2. 「プロセス管理」をクリックして、opmn.xml ファイルを編集します。
3. DCM デーモンの構成セクションの場所を特定して、次の文字列を java-parameters データ・タグの値セクションに追加します。

```
-XmxnnnMB
```

次に例を示します。

```
-Xmx128M
```

4. ファイルを保存します。

## エージェントのメモリー・エラー

Oracle Application Server には、Application Server Control の監視データを収集する Oracle Management Agent が組み込まれています。Management Agent が、Application Server メトリックの収集中にメモリー不足になった場合は、Management Agent 内で実行中の JVM に使用可能なメモリー（デフォルトは 64M）を増加できます。

emd.properties ファイル内で、agentJavaDefines プロパティに -XmxnnnM（たとえば、-Xmx128M）修飾子を付加して、Management Agent JVM に使用可能な java ヒープの量を増加できます。修飾子を認識させるには、Management Agent を再起動する必要があります。

emd.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

```
(UNIX) $ORACLE_HOME/sysman/config/  
(Windows) $ORACLE_HOME\sysman\config\
```

## 追加のパフォーマンス・ノート

Application Server Control 内の各ページに対してキャッシュされたメトリック（デフォルトで収集され、エージェント・メモリーに格納されたメトリック）を取得するには、Application Server Control を起動する前に環境変数 EM\_OC4J\_OPTS を次のように定義します。

```
-Doracle.sysman.refreshFlag=true
```

Application Server Control が起動、停止およびその他のアクションを待機するように処理中のページを無効にするには、Application Server Control を起動する前に環境変数 EM\_OC4J\_OPTS を次のように定義します。

```
-Doracle.sysman.eml.util.iAS.waitForCompletion=true
```

Application Server ホーム・ページの opmn で管理されていないコンポーネントに対するステータスとホスト関連メトリックを取得するために、タイムアウト（デフォルトは 2 秒）の時間を長くするには、Application Server Control を起動する前に環境変数 EM\_OC4J\_OPTS を次のように定義します。

```
-Doracle.sysman.ias.ApplicationServerObject.timeout=true
```

## Linux および HP-UX でのヒープ使用量メトリックの誤り

Application Server Control で、HTTP Server ホーム・ページの「ステータス」セクションの「ヒープ使用量 (M バイト)」フィールドに表示される値は、Linux および HP-UX プラットフォームで実行される HTTP Server インスタンスに対して正確ではありません。

## Oracle HTTP Server リスナー・ポートが重複してリストされる

Application Server Control の「ポート」ページで、Oracle HTTP Server 診断ポートを指定した Oracle HTTP Server リスナーについて、余分な Oracle HTTP Server リスナー行が重複してリストされる場合があります。この問題は、opmn.xml ファイルを変更した後に OPMN の再ロード操作を実行すると発生します。ポートが重複してリストされる問題は、通常、新規の OC4J インスタンスを作成したときに発生します。

Oracle HTTP Server を再起動すると、重複した行は表示されなくなります。

## プロパティを Oracle Application Server クラスタ内の OC4J インスタンスに適用した際の誤解を招くおそれのあるエラー・メッセージ

OC4J の「サーバー・プロパティ」ページで Oracle Application Server クラスタ内の OC4J インスタンスに変更を適用すると、「クラスタ間でサーバー・プロパティが適用されました。」というメッセージが常に表示されます。実際は、環境変数、ポート、アイランドおよびアイランド・プロセス数の変更は、現在管理されている現行の OC4J インスタンスにのみ適用され、クラスタ内の他の OC4J インスタンスには適用されません。このページの他の値 (Java オプションなど) はクラスタ間で適用されます。

クラスタ間で適用される値についての情報は、ページの上部にヒントとして表示されます。ただし、確認メッセージは不適切な場合があります。

## アプリケーション・サーバー・インスタンスの Metadata Repository を変更した際の不明な Oracle ホーム・エラー

Application Server Control の「Infrastructure」ページから、中間層で使用する Metadata Repository を変更できます。Metadata Repository を変更後、次のエラーが表示される場合があります。

```
Error retrieving information of database managed cluster. Cluster Manager
initialization failure Root Cause: Unknown Oracle_Home:
"/private/iasinst/OraHome1". Resolution: Please refer to the base exception for
resolution, or call Oracle support.
```

この問題を回避するには、「Change Database Managed Cluster」ウィザードの最後のページにあるチェック・ボックスを確認します。デフォルトでは、バックアップおよびリカバリのためにこのチェック・ボックスが選択されています。ただし、バックアップやリカバリ以外の理由で Metadata Repository を変更する場合は、このチェック・ボックスの選択を解除する必要があります。

選択を解除せずに Metadata Repository を変更した場合、このエラーを回避するには、「Change Database Managed Cluster」ウィザードを再度実行して元の Metadata Repository に戻します。次に、再度「Change Database Managed Cluster」ウィザードを実行して、Metadata Repository を適切なデータベースに変更し、ウィザードの最後のページにあるチェック・ボックスの選択を解除します。

OracleAS Infrastructure のインストールを実行する場合、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用可能です。ただし、Oracle Application Server の J2EE and Web Cache、Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストールを実行する場合、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用不可になります。これは、正常な動作です。

## コマンドラインから実行した管理タスクが Application Server Control のページに反映されない

管理または構成の変更 (dmctl コマンドラインの applyarchiveto コマンドを含む) が Application Server Control の外部で発生した場合、Application Server Control のキャッシュが消去されるまでその変更は反映されません。キャッシュを消去するには、タイムスタンプの右にある「データを更新」アイコンをクリックするか、ブラウザを閉じて再び開き、新規セッションを起動します。

## Internet Explorer 5.5 を SSL モードで使用した場合の問題

Application Server Control を SSL モードで使用すると、Internet Explorer 5.5 の使用時に問題が断続的に発生する場合があります。

たとえば、J2EE アプリケーションをデプロイするとき、「500 - 内部サーバー・エラー」というメッセージが表示される場合があります。また、Oracle HTTP Server の再起動を要求するページなどの確認ページに応答した直後に、次のエラーが発生する場合があります。

```
Error: Processing already completed
```

この問題を解決するには、新しいバージョンの Internet Explorer にアップグレードするか、または次の Microsoft Knowledge Base Article 265369 を参照して SSL タイムアウト値を増やしてください。

<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=http://support.microsoft.com:80/support/kb/articles/Q265/3/69.ASP&NoWebContent=1>

## OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow コンポーネント用のスキーマ・パスワードの変更はサポートされない

Oracle Application Server 9.0.4 では、Application Server Control は OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow Metadata Repository のスキーマ・パスワードの変更をサポートしません。

## Infrastructure のインストールで Home インスタンスはデフォルトで使用不可

OracleAS Infrastructure のインストールを実行するとき、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用不可です。ただし、Oracle Application Server の J2EE and Web Cache、Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストールを実行する場合、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用可能になります。これは、正常な動作です。

## スタンドアロン・バージョンの OracleAS Forms Services および OracleAS Reports Services の「Infrastructure」ページの使用

スタンドアロンの Oracle Forms および Oracle Reports Server 10g をインストールして Application Server Control を起動し、「Infrastructure」プロパティ・ページを表示すると、ページの「Metadata Repository」セクションに次のエラーが表示されます。

```
Error retrieving information of default metadata repository. Unable to establish secure connection to Oracle Internet Directory Server
```

さらに、ページの「識別管理」セクションに「構成」ボタンが表示されます。Infrastructure のこれらのコンポーネントは、スタンドアロンの Oracle Forms および Oracle Reports Server 10g のインストールには適用されません。このため、エラー・メッセージを無視して、「構成」ボタンをクリックしないでください。

## HTTP Server の拡張プロパティを Netscape Navigator で編集するときのエラーと制限

Netscape Navigator 4.79 を使用して、HTTP Server の「拡張サーバー・プロパティ」ページから開いたファイルへの変更を適用したり元に戻すと、次のエラーが発生する場合があります。

```
A network error occurred while Netscape was receiving data
(Network Error: Connection aborted)
```

さらに、「拡張プロパティ」ページで編集している構成ファイルの内容は、Netscape の検索機能を使用して検索できません。

このエラーを回避するには、サポートされているバージョンの Microsoft Internet Explorer を使用してください。

## Enterprise Manager を使用して WAR アプリケーションを再デプロイする際の回避策

Application Server Control の「OC4J アプリケーション」ページで、EAR ファイル（ファイル・タイプが .ear のアプリケーション）および WAR ファイル（ファイル・タイプが .war の Web アプリケーション）をデプロイできます。

Enterprise Manager を使用して WAR ファイルをデプロイするには、「OC4J アプリケーション」ページで「WAR ファイルのデプロイ」をクリックします。これによって、WAR ファイルのデプロイ処理が開始されます。

最初に WAR ファイルをデプロイすると、Enterprise Manager はデプロイ・ツールを起動します。このツールによって、WAR アプリケーションは、デプロイの前に J2EE アプリケーション（.ear ファイル）にラップされます。Enterprise Manager が WAR ファイルをデプロイするために作成する .ear ファイルには、アプリケーション・モジュールが記述された application.xml ファイルが含まれます。.ear ファイルにはアプリケーション名が付けられます。デプロイ・ツールを使用して手順を進めるときに、この名前を指定します。WAR アプリケーションをデプロイすると、新しいアプリケーション（.ear ファイル）の名前が「デプロイ済アプリケーション」表に表示されます。

WAR ファイルは、Enterprise Manager を使用してデプロイした後、「OC4J アプリケーション」ページでアプリケーション（.ear ファイル）を選択し「再デプロイ」をクリックしても、再デプロイできません。

Enterprise Manager を使用して WAR ファイルを再デプロイするには、最初にアプリケーションをアンデプロイして、次の手順に従ってアプリケーションを再度デプロイしてください。

1. 「OC4J アプリケーション」ページの「デプロイ済アプリケーション」表で、WAR ファイルがラップおよびデプロイされたアプリケーション（.ear ファイル）を選択します。
2. 「アンデプロイ」をクリックします。
3. 「WAR ファイルのデプロイ」をクリックします。デプロイ・ツールで、アプリケーション名として、WAR ファイルがラップおよびデプロイされたアプリケーション（.ear ファイル）に対して最初に指定した名前を指定します。

WAR アプリケーションをデプロイすると、Web アプリケーション（.ear ファイル）の名前が「デプロイ済アプリケーション」表に表示されます。

## 「Web Cache 管理」ページへのリンク時にページが表示されないエラー

Application Server Control Console を使用して Oracle Application Server Web Cache を監視するとき、Application Server Control Console の「Web Cache」ページから「Web Cache Manager administration」ページに直接リンクできます。

ただし、Microsoft Internet Explorer 6.0 を使用しているとき、「Web Cache Manager」ページに接続しようとするときのエラーが発生する場合があります。

The page cannot be displayed

このエラーは、Microsoft Internet Explorer 6.0 のセキュリティ更新の 1 つを使用してシステムを更新した後に発生します。

次の手順に従って問題を回避します。

1. エラーがブラウザに表示された場合は、すぐに、Internet Explorer ブラウザの「アドレス」フィールドの URL を調べます。
2. URL から次のテキスト文字列を削除します。  
administrator:badpassword@
3. [Enter] を押し、プロンプトが表示されたら Web Cache 管理者アカウントの資格証明を入力します。

## Oracle Application Server 10g (9.0.4) を使用するコンピュータでの Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent の削除

Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent を、Oracle Application Server 10g (リリース 9.0.4) のインスタンスが 1 つ以上あるコンピュータにインストールしている場合、Management Agent を安全に削除するためにいくつかの処理を実行する必要があります。

Oracle Application Server 10g を Management Agent より前にインストールした場合は、Management Agent のインストールおよび構成フェーズ時に自動的に検出されます。Grid Control Console を使用すると、Management Agent が常駐するホストで一連のターゲットとしてリストされるアプリケーション・サーバー・インスタンスを確認できます。

さらに、Application Server Control Console から集中管理を明示的に構成した場合、または Grid Control Console の「Application Server」サブタブで「追加」ボタンをクリックして Oracle Application Server 10g インスタンスを検出した場合は、Management Agent を削除するとき、次の手順に従ってください。

1. Management Agent を削除する前に、次の手順に従って Grid Control Console から Application Server 10g インスタンスを削除します。
  - a. Grid Control Console で、「ターゲット」を選択し、「Application Server」を選択します。
  - b. 削除するインスタンスを選択して、「削除」をクリックします。
  - c. 処理を確認して、操作が完了するまで待機します。

---

**注意：** アプリケーション・サーバー・インスタンスのすべてのサブターゲットが削除されるまで、待機する必要があります。「管理サービス」タブの「Deleted Targets」をクリックすると、この非同期操作の進捗状況をチェックできます。削除対象のすべてのターゲットが削除されるまで待機してください。

---

2. ホスト上のすべての Oracle Application Server 10g インスタンスでこの操作が完了した後、Management Agent を削除します。

すでになんらかの方法で Management Agent を削除している場合は、AS\_HOME/sysman/emd ディレクトリの centralagents.lst ファイルから AGENT\_HOME エントリを削除してください。AGENT\_HOME エントリが最後のエントリの場合は、centralagents.lst ファイルを削除できます。この操作は、Oracle Application Server 10g インスタンスごとに実行する必要があります。この手順を実行しないと、OC4J インスタンスの作成または削除など、Oracle Application Server 10g の構成を変更するときにエラーが発生する場合があります。

## Application Server Control において OracleAS Web Cache を管理および機能監視するための Cookie の有効化

Application Server Control を使用している場合、OracleAS Web Cache を管理および機能監視するために Web ブラウザの Cookie を有効にする必要があります。Cookie を有効にする方法の詳細は、Web ブラウザのオンライン・ヘルプを参照してください。

## Macintosh ブラウザを使用してパフォーマンス・チャートを表示する際および Identity Management を構成する際の問題

Macintosh コンピュータで Apple Safari ブラウザを使用している場合は、Application Server Control Console を使用して、Application Server 中間層インストールの Identity Management 構成を構成および変更できません。

具体的には、Application Server Control Console の「Infrastructure」ページの「ID 管理」セクションで「構成」をクリックしたときに、問題が発生します。Identity Management ホストのホストおよびポートを入力できますが、ウィザードの次のページが表示されません。

また、Application Server のホームページのパフォーマンス・チャートが Macintosh ブラウザでは正しく表示されません。該当箇所にはチャートのかわりに小さい疑問符が表示されます。

この問題を回避するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して Application Server Control を停止します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
```

2. 修正するアプリケーション・サーバー・インスタンスの Oracle ホームにある次の構成ファイルを、テキスト・エディタを使用して開きます。

```
$ORACLE_HOME/sysman/j2ee/config/emd-web-site.xml
```

3. ファイル内で次のエントリを探します。

```
<!-- The default web-app for this site, bound to the root -->
<default-web-app application="em" name="default" />
<web-app application="em" name="emd" root="/emd" load-on-startup="true" />
```

4. <web-app> タグに次の引数を追加します。

```
shared="true"
```

たとえば、次のとおりです。

```
<!-- The default web-app for this site, bound to the root -->
<default-web-app application="em" name="default" />
<web-app application="em" name="emd" root="/emd"
load-on-startup="true" shared="true"/>
```

5. 変更内容を保存し、em-web-site.xml ファイルを閉じます。
6. 次のコマンドを使用して Application Server Control を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```

## Macintosh ブラウザを使用する際の進捗ページの問題

Application Server Control で新規 OC4J インスタンスの作成などの操作を実行している際に、Enterprise Manager に進捗ページが表示されることがよくあります。これは、操作が進行中であることを示しています。

Macintosh コンピュータで Apple Safari ブラウザを使用している場合は、操作の完了後にも進捗ページが表示され続けます。その結果、操作の確認ページが表示されません。

この問題を解決するには、EM\_OC4J\_OPTS 環境変数を次の値に設定して、Application Server Control を再起動します。

```
-Doracle.sysman.emSDK.eml.util.iAS.waitForCompletion=true
```

## ログ・ページからのデータのポスト

Application Server Control のセキュリティを構成した後、「ロギング」ページのフォーム・データの更新に関する問題が断続的に発生する場合があります。これらの問題は、Microsoft Internet Explorer ブラウザで、セキュリティ更新プログラム 832894 (MS04-004) または修正プログラム 821814 をインストールした後に発生することがあります。Microsoft Internet Explorer には、HTTPS Web ページでのフォームの使用に関する既知の問題があります。これらの更新に関する問題は、「ログ・リポジトリの検索」ページの「拡張検索」機能で確認されています。

この問題を回避するには、Microsoft Q831167.exe パッケージおよび Microsoft 社が推奨する他の関連パッチをダウンロードします。

### 関連項目：

<http://support.microsoft.com/default.aspx?kbid=831167>

## ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントおよびオンライン・ヘルプの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [setupinfo.txt ファイルの位置の誤り](#)
- [Oracle Application Server 10g でサポートされない手順](#)

### setupinfo.txt ファイルの位置の誤り

setupinfo.txt ファイルには、Application Server Control へのアクセスで使用できる URL およびポート番号に関する情報、および Oracle Application Server に関するその他の情報が格納されています。

オンライン・ヘルプ・トピック「Oracle Enterprise Manager Application Control の表示」では、Application Server をインストールした後のこのファイルの位置が誤って記述されています。このファイルの正しい位置は次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/setupinfo.txt
```

### Oracle Application Server 10g でサポートされない手順

『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の 4.1.2 項には、メモリー使用量を減らすために Oracle Enterprise Manager の複数のインスタンスを同じコンピュータ上に統合できると記述されています。この手順は、このリリースの Oracle Application Server 10g ではサポートされていません。

